

2 下伊良原庄屋敷跡

(1) はじめに

下伊良原庄屋敷跡は祓川を挟んで下伊良原高木神社の正面、東山麓に位置する。この度のダム建設によって退去するまで白川亘氏が居住されていた。江戸時代、この白川家は下伊良原村の庄屋を勤めていて、民俗調査の中で行われた家屋調査でも、

「(外観や内部構造が)伊良原の民家に見られない特色で、庄屋職を勤めたことを裏書きするとともに、建築年代の古さも示し、建築年代は18世紀後期に遡る可能性が高い。庄屋職を勤めた江戸期の上層民家の遺構として貴重な民家である」

と評価された。

さて、白川家の系譜について、『京都郡誌』から抜粋しておく。

伊良原村白川家は旧家なり、白川氏は佐藤継信より出づ、継信八世の孫左衛門秀久、元享三年（1323）豊前築城郡洲田（現豊前市角田か）に來り、子秀信白川氏を称し、宇都宮氏に仕へ、家老職となる、秀信十一世の孫信元、築城郡櫟原に住し後仲津郡伊良原に移る、天正十七年（1589）宇都宮氏滅び、信元流浪す、細川氏入国するに及び惣庄屋を命ず爾後小笠原氏の時にも子孫大庄屋たり、（以下略）

また、民俗調査の中で行われた「白川家文書」に関連して、以下のようにまとめられている。

白川家は藤原鎌足から数えて18代目の孫・頼郷を祖先としている。その頼郷は姓を佐藤と名乗っていたが、頼郷より10代目となる秀信の時、宇都宮の家臣となって白川姓に改め、宇佐郡雲水に居を構えた。秀信の父・秀久が北条高時に背いたために、豊前守護職となっていた宇都宮頼房に預けられたことが、白川家が宇都宮家に属することになった所以だという。宇都宮家は鎮房の時代、豊臣秀吉政権下で中津城主となった黒田如水・長政から討たれ、その勢力が消滅したことは周知のことであるが、白川家は重秀の時に宇都宮鎮房から所領を櫟原・本庄・伊良原に移され、居も伊良原に移ったのである。「城井宇都宮鎮房家中名附」は家老として白川三郎兵衛、明暦四年（万治元年=1658）の「宇都宮臣下之面々」では幕下として同じく白川三郎兵衛の名前を記しているが、白川家の系譜類から三郎兵衛の通称を確認できない。しかし白川家は、宇都宮家の重臣であったということなのであろう。

さて、白川重秀の子・信元は宇都宮家敗北によって、一時は妻子を伴い筑前に逃れていたが、のち帰村し、細川氏の時代になり惣庄屋に任命されて伊良原孫兵衛と称した。元和8年（1622）の『小倉藩人畜改帳』には、惣庄屋として伊良原次郎兵衛の名前が見えていて、信元の子・氏重は次郎兵衛を通称にしており、年代的にはこの氏重のことであろう。さらに『日帳』（財団法人永青文庫、熊本大学付属図書館保管）の寛永5年（1628）3月3日の記事には、「仲津郡御惣庄屋伊良原次郎兵衛子十左衛門今日初而御目見ニ仕候」とあり、白川家系譜の氏重（次郎兵衛）の子・重友が「十左衛門」を通称にしているのと符合する。また進家文書の中（No.11）に寛永13年、「伊良原十左衛門手永」の記載があり、十左衛門も惣庄屋を勤めていたことが知られる。しかし、元禄3年（1670）（No.12）では「節丸助右衛門手永」となっており、この頃までの間に、惣庄屋（大庄屋）職は白川家から他家へ引き継がれたものと思われる。以後同家は庄屋を勤めており、下伊良原村に宇都宮家の勢力が温存されたといえよう。

白川家略系譜

藤原鎌足から十八代の孫頼郷（佐藤将監）を祖先とする。以後は頼茂・継信・義信・清信・隆継・正信・秀脩・有信・秀久と続く。

秀久
佐藤又三郎・左衛門
北条高時に背き、豊前國主宇都宮
頼房に預けられる

秀清
又三郎・佐藤左衛門

秀衡
又七・兵右衛門・佐藤將監
秀久の三男、字都宮の家臣となり、姓を白川と改め字佐郡雲水に居住、八か村を領し、家臣の長となる

秀信
又三郎・左衛門

秀行
又三郎・左衛門

有衡
又三郎・左衛門

秀清
又三郎・佐藤左衛門

氏衡
又七・兵右衛門・佐藤將監
秀久の三男、字都宮の家臣となり、姓を白川と改め字佐郡雲水に居住、八か村を領し、家臣の長となる

房信
又三郎・白川左衛門尉
宇都宮より采地加増される

信繼
又三郎・左衛門

氏元
又七郎・又兵衛・孫兵衛、法名淨賀
寛永十九年没、八七才
主家宇都宮氏が黒田氏に敗れるや、妻子とも築前に逃れる。のち黒田氏に許されて帰村。
細川氏時代は惣庄屋となり伊良原孫兵衛と称す。

脩秀
又次郎・次郎兵衛

重秀
又三郎・又太夫、氏信の弟
宇都宮鎮房より樺原・本庄・伊良原に所替され、伊良原に住む

信繼
又三郎・左衛門

氏重
又三郎・次郎兵衛、法名良味
寛文十年没、八九才
助之丞・十左衛門・太郎
左衛門・法名良春

重友
左衛門・法名良春
寛文十三年没、六六才

信富
次郎兵衛
寛政五年没

信勝
只助・次郎兵衛
享保十七年没、六六才
次右衛門
寛保三年没

信相
次右衛門
寛保三年没

信富
次郎兵衛
寛政五年没

信親
次郎兵衛、法名淨賀
寛永四年没、六八才
父重友の惣庄屋職を継ぎ、節丸村に住む

信繼
八郎兵衛・十左衛門・太郎左衛門
宝永四年没、六八才
天和年中役儀・田地・屋敷没収され伊良原村に帰る。のち彦山の院内小貳川にて新田開作

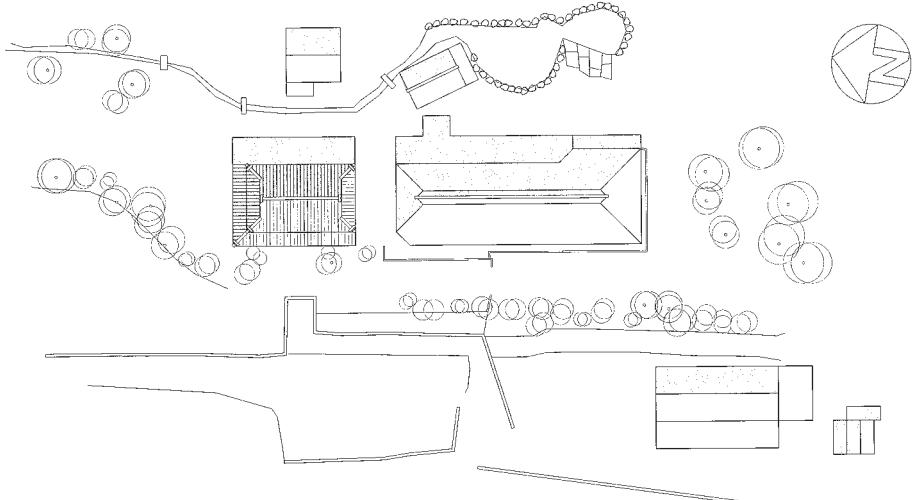
信芳
次右衛門

信祥

第 54 図 白川家系図

(2) 層序

調査着手前、屋敷地北辺の東西石垣には既に客土がなされて車両進入用のスロープが造られており、この部分は全く観察できていない。また、主屋部は母屋・納屋の布石や礎石の一部が残されていて、北半の畠地は表土（耕作土）を取り残された状態であった。発掘調査は巨大な石垣に囲まれた畠地・住宅を含む主屋部に6本のトレンチを設定、そして周辺の低地にも数個所のトレンチ等を設定したが、低地では顕著な遺構を確認していないので、ここでは巨大な石垣に囲まれた主屋部について説明を加える。



第55図 白川家住宅建物配置図 (1/500)

1 トレンチ (図版30、第56図) 母屋跡の南端付近に開けた東西トレンチである。母屋跡では3辺で基壇化粧に使用していたと思われる方柱状の布石がほぼ残存していたが、南辺は失われていた。このトレンチは西辺南端の布石を跨いで設定したものである。

布石の背面（東側）2.6mの付近から地山（花崗岩バイラン土）は下降し、布石の西4m付近では3m近く低くなっている。この間に客土された土砂はいずれも砂で、石材東の最上層に用いられた砂が粒度が大きい粗砂であるほかは、いずれもわずかな色相の違いがあるのみで分層は困難であった。この地山の落ちは2トレンチでは建物跡東辺付近まで延び、このラインから西側は全て造成されたものである。

また、布石から2.6mほど隔てた西側の地中で石組を検出した。基底部は地山に達していないようで、客土中に置かれたものと思われる。南（基底部）から北（頂部）へ傾斜していることから、北側の客土を保護するためのものであろう。ただ、基底部も東端も安定した地山に接しておらず、石組南側、上面に当たる部分にも客土がなされて石組自体を埋めて見えなくなるなどの点で不可解であり、意味を図りかねるところがある。東西長3m以上あったが、発掘した範囲で西端付近の一部が雨で崩落したこともあり、現石垣との接点がどのようになっていたか確認できていない。高さも2m強まで確認したが、危険を伴うためにそれ以上の掘削を諦めた。石材は長さ0.5mほどのものから小は拳程度のものまで様々であるが、ほとんどがごつごつとした山の礫という感じである。

出土遺物

土器等 (図版37、第57図) 1トレンチ内及び母屋内から出土した遺物をまとめて紹介する。

1～3は母屋南半（2トレンチ以南）表層出土の陶器。1は削出高台をもつ椀形の底部で、置付にわずかに回転糸切り痕が見え、体部下位には箆削り痕も残る。釉は緑味の薄い灰緑色に発色、特に内面では肌が荒れている。外面下位の露胎部は灰赤褐色に発色、胎土は緻密さを欠きザラザラとして割口が乱れる。2も低い高台を削り出し、体部が丸味をもつ椀形の底部。体部下位は丁寧に箆削りがなされ、造作も良好。釉は灰緑色に、体部下位の露胎部は灰茶褐色に発色する。胎土は青灰色緻密なものである。この2点は上野・高取系の陶器であろう。3は備前焼の摺鉢。口縁部を含め

第56図 1トレンチ土層図及び石組実測図 (1/40)



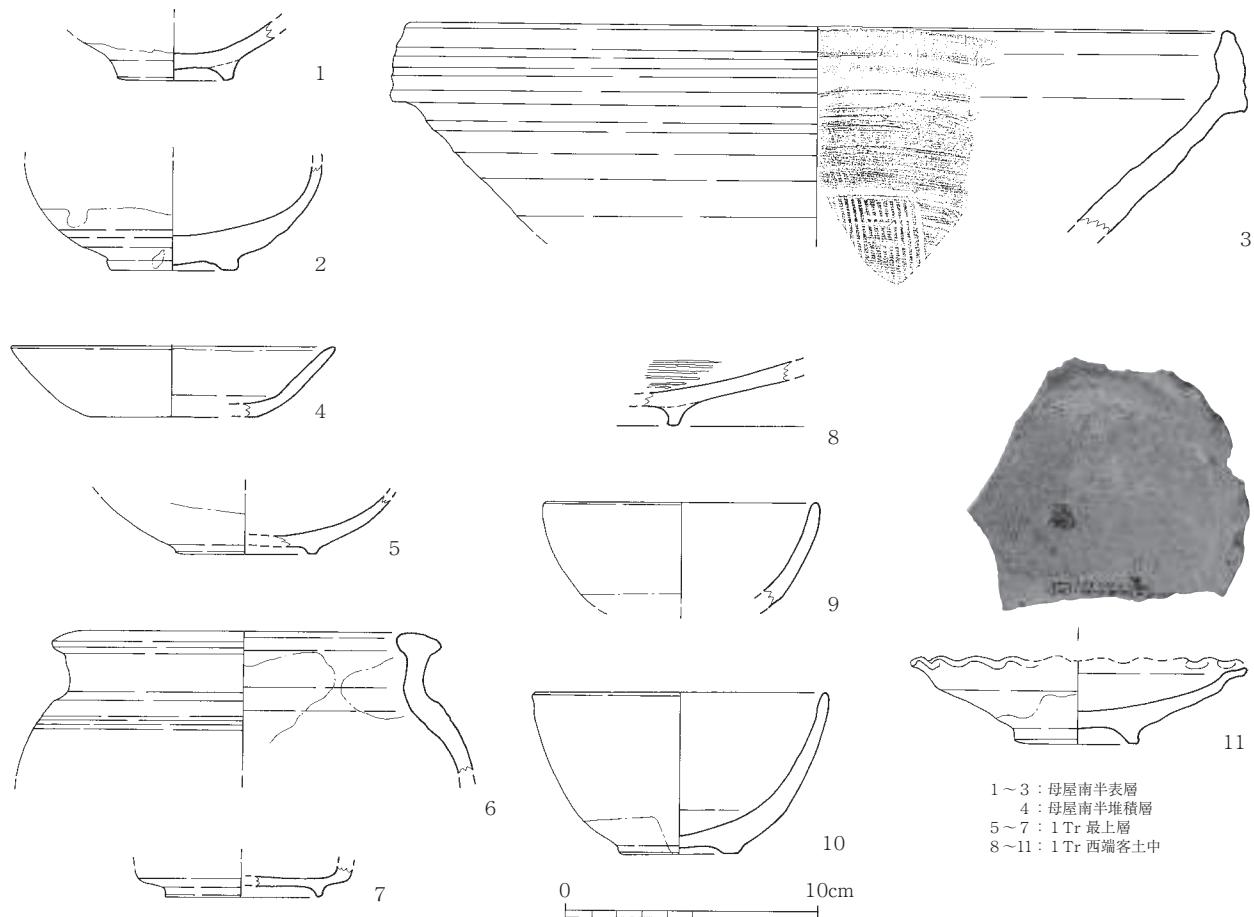
て外面に小さな凹凸が目立つが、使い込まれてスリ目的部分も滑らかな感触となっている。胎土は緻密といってよい。外面は概ね灰赤色となるが、その一部及び内面が灰黒色～暗褐色に変色、内外面ともに煤けた部分がある。

4は「茶褐色土」とあり、客土上層から出土したものである。白磁口禿皿で、小片であるが重要な資料といえる。

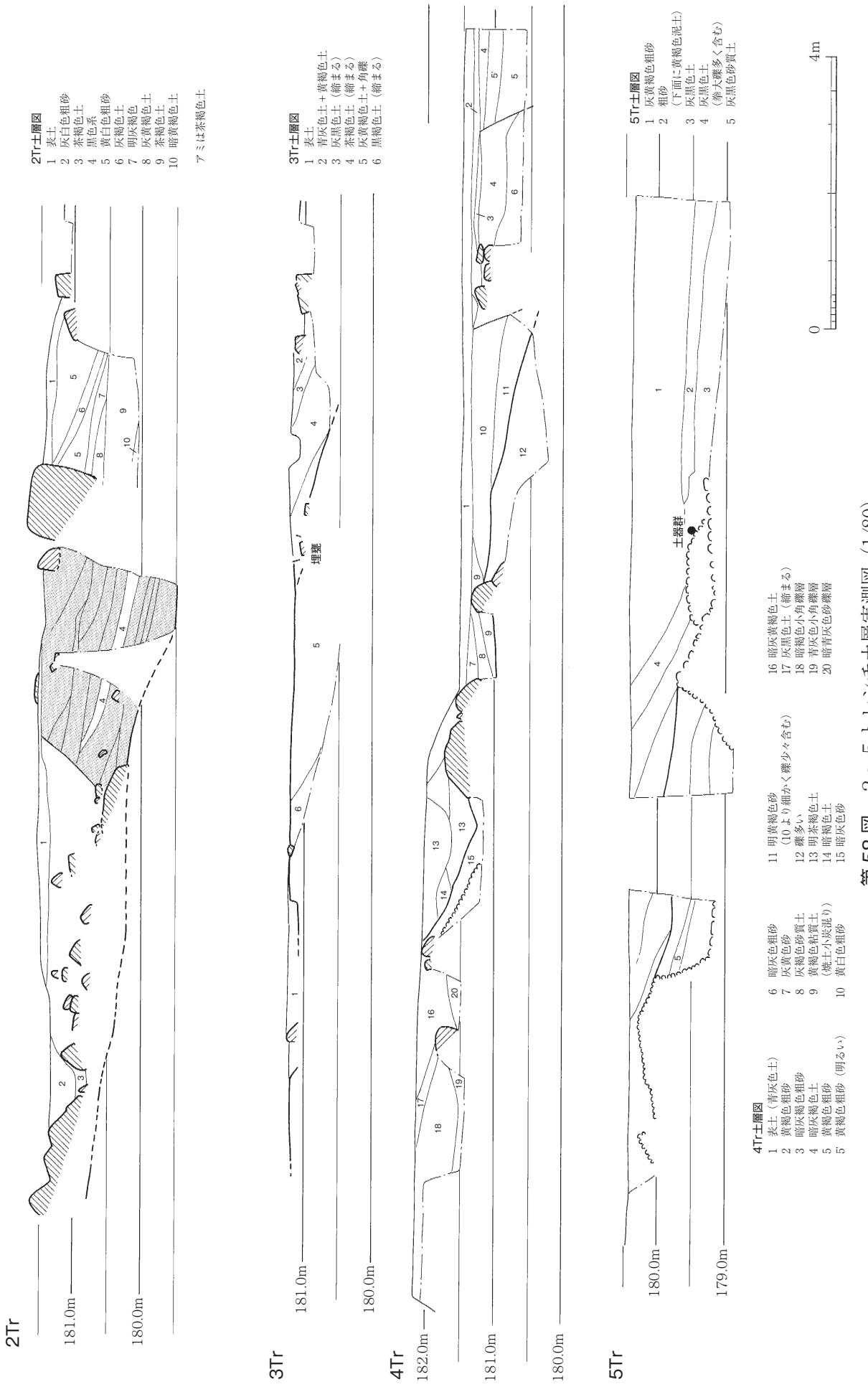
5～7は「1トレンチ最上層」出土。5は緩く内彎して立ち上がる椀であろうか。小さく低い高台を削り出す陶器で、釉は黄白色に発色する。釉は焼成時の高熱で発泡したようになり、滑らかさはない。籠削りされた露胎部は黄褐色となるが、釉に近い部分は赤味が強い。胎土は淡灰赤色でザラザラとして緻密さを欠く。6は口縁部を内外に肥厚させる陶器甕。胎土は暗赤紫色緻密なもので、釉は灰茶褐色～暗褐色に発色する。頸部以下は間隔の広いカキ目で処理するようで、図示した沈線が意図的なものか判断に苦しむ。残存する範囲では内面も施釉する。

7は文様が見えないが染付であろう。小さな高台を付し、短く水平に開いてから、ほぼ直立するようである。白濁する透明感のない釉が掛かり、高台疊付のみ露胎となるようである。

8～11は「1トレンチ西端客土中埋没石垣位」出土。土層観察で触れたように、ここで見られた客土は一気になされたものと考えられ、レベル的に深い位置から出土したこれらの遺物は客土に伴って混入したもので、その上限を示すといえる遺物である。8は大型瓦質土器の小片で、態度は暗灰色緻密、器表は内外面ともによく黒色化している。内面は籠磨きを施すようである。9～11は陶器。9は椀形で、緻密といってよい胎土は灰黄褐色～明灰赤色となる。焼成不良のようで釉は灰味の強い灰黄色に発色、内外に釉垂れが見られるとともに全体に皺が多く見られ、上品とは思えない。釉の発色はわずかに異なるが、全体的に1・2に近い。10は1/2が残存し、これも全体的に9などに近い陶器である。胎土は明灰赤色（肉厚）～灰黒色（肉薄）となり、これは火回りの関係で



第57図 1トレンチ及び母屋付近出土遺物実測図 (1/3)



第58図 2～5トレンチ土層実測図 (1/80)

あろう。釉の発色は青味帯びる灰白色で、露胎部は灰赤褐色である。ただ、外面は全体に煤けている。なお、これも体部下位は籠削りを施し、高台も内側を繰り込んで削り出し、平面不整である。摩滅のため糸切り痕は見えない。11は口縁部を花弁状に変化を加える陶器皿で、底部付近は完周、口縁部は1/4が残存する。胎土は暗灰色の比較的緻密なもので、釉は青味帯びる白色に発色するが、内面ではガラス質が飛んでザラザラとなり、外面も発泡したような状態となる。高台は内側を抉って作られ、平面不整な形となるなど上記の椀類に全体として共通する点が多い。

2 レンチ（図版31、第58図）母屋跡の北側に巨石が露出しており、それを挟んで東西方向に設定したレンチ。

西端に石矢の痕跡が残る花崗岩の巨石があって、そこから西へ5mほどの間は礫が多くあり、礫群の西には掘り込むようなラインが見えた。この中は分層困難な灰褐色土で、この付近は土石流の痕跡かと思われた。そこから西は客土がなされる。露出した巨石から東は下位に黒色系の層が入っているが概ね茶褐色土の堆積が見られ、細かく分層したが色相のわずかな差異である。巨石以西は浅い部分に黄白色粗砂が際立っていた。巨石の下は茶褐色土で、東からの一連の客土であろう。

3 レンチ（図版31、第58図）納屋跡の内部に設定したレンチ。

東端付近は花崗岩の巨岩が埋もれていて、その直ぐ西に灰黒色粗砂の落ち込みがあり、これは一部を掘り下げただけであるが、家屋配置図にある泉水に続く水路の痕跡であろう。その西側は締まった黒色土の上にやはり締まった小角礫の層がある。これが客土とも思ったが、自然堆積と考えた方が良さそうである。さらに西側に埋甕があつて、その西側で漸く客土を確認できた。

4 レンチ（図版31・32、第58図）屋敷地の北西半は一段低い畠地となっていたようであるが、そこに東西方向の大規模な石組の排水路が構築されている。4レンチはその南側に設定した。

ここは東端が一段高くなっているが、その高い部分の西端付近では地山と考えられる暗青灰色の礫を多く含む層の上に明らかに盛った層が看取できた。段落ちとなる部分でもやはり礫を多く含む層を客土時の地山と見てよいようである。なお、レンチの西端付近に礫群が見られるが、その直ぐ東側と2m弱西側に明らかな不整合面が見られた。東側のそれはこの礫群に伴うものでよいと考えている。しっかりと積み上げられたものではないが、石垣が築かれていたのであろう。西側のそれは現石垣から5mほどの距離をもつことから関連性は薄いと思われ、意味がわからない。

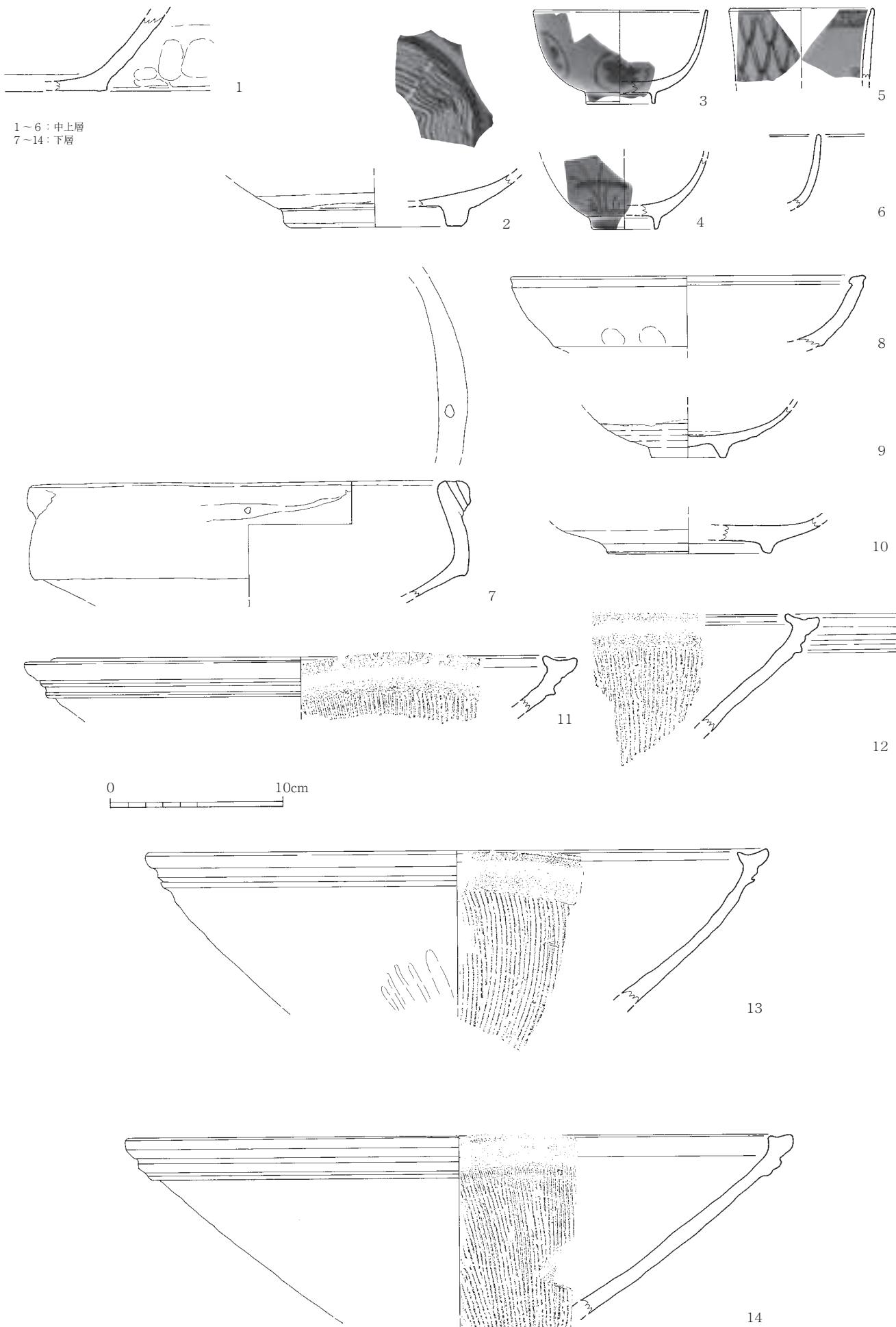
5 レンチ（図版32・33、第58図）屋敷地の北端付近に開けた東西レンチである。東端は現地表直下で小礫の堆積が現れ、これが基盤層と考えている。東端部を南に拡張したが、そこでは小礫の堆積と山に近い部分にはより大型の角礫が集積していた。これは土石流の痕跡と思われる。

畦を残して西に開けたレンチでは、小礫からなる東端とは様子が異なるが、レンチ底付近に大小の礫が堆積していて、これが客土前の地山に近いものであろうと思われる。このレンチ中央付近ではその礫層の直上で若干の陶磁器が出土した。

出土遺物

土器等（図版37、第59・60図）1～6が「上・中層」、7～14が「下層」とあり、「下層」は地山と考えている礫群の直上にあって、そうであればこの付近の造成の時期を示す重要な遺物群といえる。

1は瓦質土器の鉢でスリ目は残らない。器肉・器表ともに淡灰色を呈するが、内外面の一部が褐



第59図 5トレンチ出土遺物実測図 (1/3)

色化している。内面は弱い横位の刷毛目、外面下位は指撫で痕がよく残るが残存部上端付近では横撫でが施されている。2は明灰赤色の緻密な胎土をもつ陶器皿。残存する外面は全体が露胎、箆削りで、高台も抉って作り出している。内面は暗褐色の上を白濁した釉で刷毛目文様を施すが、刷毛目外周には暗褐色・白濁・暗褐色の幅広い圈線を描いている。内面に長さ3cm前後の大きな砂目が2個所残る。

3～5は染付。3は底部の1/2が残存。主文様は大振りの1枚の葉であるが、これはコンニャク印判であろうか、残る3単位もよく似ている。それを囲む円文は明らかに手書きである。体部下端付近に1条、高台付け根に2条の圈線を描き、高台内上縁にも圈線を1条付す。なお、高台内には「大明」と読める文字の一部が残存する。4は草を描くもので、これも体部下位に1条、高台付け根に2条の幅広い圈線を巡らせるが、高台のそれは途切れたり3条になったり乱れている。高台内にも1条ある。5は2条一組の線をV字形に近く連続して描いて網目文とするもので、内面上端には四方擗文を連続させる。

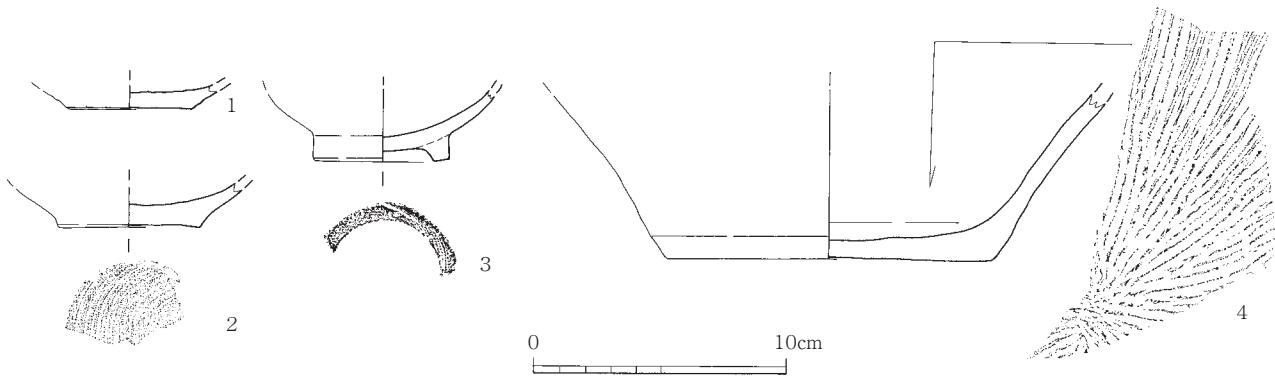
6は陶器というべきか。器肉は灰白色、黄味帯びる淡灰色透明釉が内外面に掛けられて、貫入が目立つものである。

7は土師器焙烙であろう。口縁部外側を肥厚させて孔を付している。胎土・調整ともに非常に良好。底部は型押しで作成したようで外底面と体部下端は不連続となり、外底面に調整痕は見えない。内外面ともに黒変しているが、変色と器表の状況から見てあまり使用されていないようである。8は瓦質の鍋であろうか。図下端で屈曲して底部となるようである。外面下端付近は指頭痕が残り、大部分を丁寧な箆削りで仕上げるもの、口縁部直下は横撫である。内面も丁寧に撫でて仕上げる。胎土に大粒の砂粒をいくつか含むが、それ以外の混入は少ない。器肉・内面は灰黄白色、外面は灰褐色となり、一部が煤けるがこれもあまり使用されていないように感じる。9は底部が完周する陶器で、胎土は緻密で黄白色、釉は灰味強い灰黄色に発色する。見込は蛇の目に釉剥ぎし、上に重ねられた高台の重ね焼き痕が残る。外面下位の露胎部は丁寧に箆削りされていて、それ以上は横撫でで終わる。10は磁器で、釉は灰味強く発色する。高台内のみ広く露胎となっていて所謂蛇の目凹形高台となる皿であろう。

11～14は内外面が暗茶褐色系となる陶器摺鉢で、口端部を肥厚させて内側へ摘み、外側では口縁部下に突帯を2条付す。高取系としてよいであろう。11・12は器表が灰味強く、胎土が暗褐色で多くの砂粒を含む点、上段の突帯が低い点、使用減りがあり見られないなどよく似ていて同一個体であるかも知れない。13は器肉・器表とともに赤味が強く、これもスリ目がほとんど減っていない。外面に指撫で痕が残る。14は使用によって図下端付近が随分すり減っている。

第60図は5トレンチ南東に設定したグリッドからの出土である。このグリッドは表土下というべき付近から大量の礫が現れ、薄く堆積層がのるだけのような状況であった（図版32参照）。

1・2は土師器皿底部片で、いずれも胎土・調整ともに良好である。2は内面が部分的に黒ずんでいる。3は陶器。胎土は灰黄色で、比較的緻密である。高台畳付に糸切り痕が残っていて、内側を割り抜いて高台を成形したようである。施釉は体部内外面に行い、高台外側縁では一部が垂れているだけであるが、なぜか高台内の外底面にはほぼ全面に釉が掛かる。釉は灰白色に発色し、外面は発泡が著しい。ただ、内面では発泡が微少で、平滑な光沢面を保つ。4は陶器摺鉢で、胎土に1mm内外の砂粒が見えるが、概ね良好といつてよい。外面は下端を箆削りで釉剥ぎし、それ以上は暗茶褐色に発色、内面は暗赤紫色となる。外面調整は丁寧な横撫で、底面は型押しによるものか調整痕が見えない。内面のスリ目は非常に深い。



第60図 5トレンチ東南グリッド出土遺物実測図 (1/3)

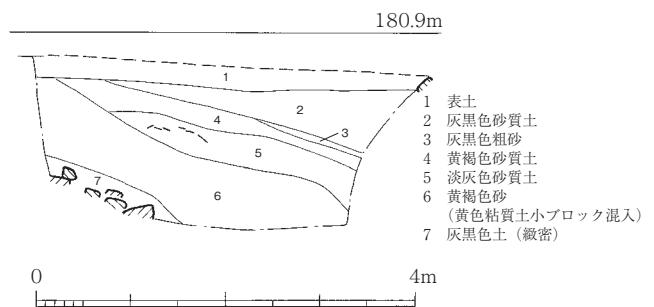
6トレンチ(図版34、第61図) 4トレンチに近い南側、長大な石垣の直ぐ背面に設定したトレンチ。南壁の土層を示したが、全体に砂・砂質土で客土されている。東端付近床面で礫を含む硬い灰黒色土が現れたが、石垣は4mほどの高さをもっていることから客土の地山とは考えられず、これも客土の一工程であろうと思われる。客土中、中位付近と掘削部床面付近からまとまって瓦質土器が出土し、両者は接合しなかつたが同一個体であろうと、図上復元して示した。

出土遺物

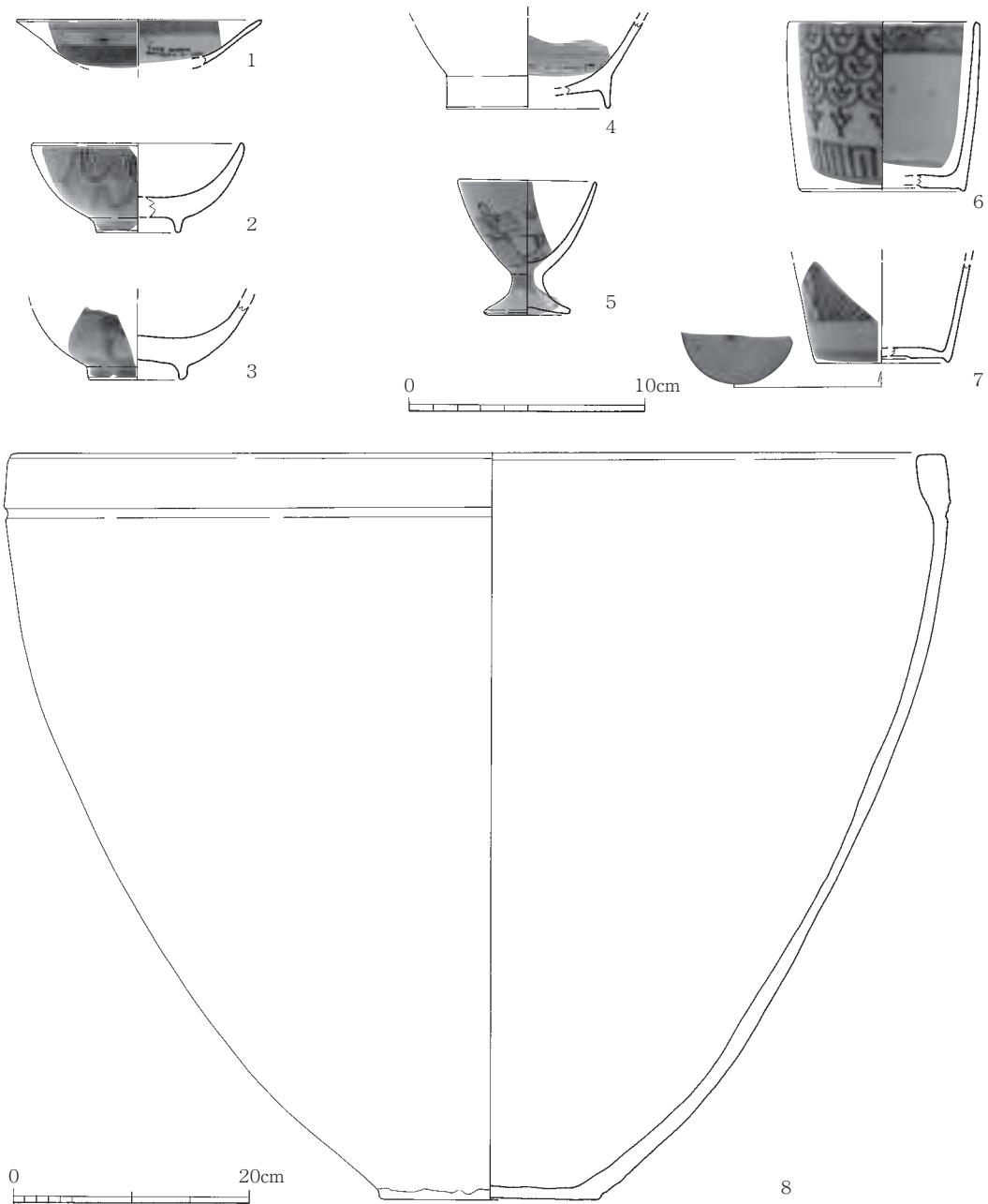
土器等(第62図) 1～7は染付。1は浅い皿として図示しているが、蓋とするのが妥当であるかも知れない。外面は3段に区画して桜かと思われる5弁の花文を上下2段に配し、中段と口縁部内面は地を塗りつぶして木目文を描く。第71図42と同文であるが、セットとするには法量が合わない。2は2本線でV字形を連続して網目文とする肉厚の小椀。3は2に似た器形であるが大振りとなる椀で、やはり肉厚となる。外面に施文する。4は外面上に圈線のみが見える広東椀で、2～4は畠付付近のみが露胎となる。5は仏飯で、わずかに上げ底となる脚底面が露胎となる。文様はくすんだ赤で人形を描く。6は外面上端に輪宝文、下端に蓮弁を、内面上端に四方櫛文を描く。直径8.2cmに復元できる大型品であるが、器形はソバ猪口と同じである。体部下端が小さな高台となり、底部は蛇の目凹形高台となる。7も6と同じ高台をもち、外面文様は粗密の斜格子、見込にも施文されるが欠損のため全体は不明。

8は図上復元した大型の瓦質土器で、復元口径は79cm、図のように復元できる場合の器高は63cmとなる。破面に見える砂粒は少なく、胎土精良といってよいであろう。口縁部は外折して肥厚させるようで、その下端に甘い沈線を刻んで体部と区別している。口縁部上面及び内面の2cmほど下位まではほぼ器表が剥落しているが、外面ではその上端がわずかに荒れるだけである。外面では斜位の刷毛目が全体で観察できるが、撫で消す部分も多い。内面では底部まで同心円文当て具痕が全面で観察できるがその上を刷毛目で覆い、下方ほど刷毛目が多用されている。

以上のトレンチ等の検討から、1～2トレンチ間の母屋跡の床下東側で弧状に示した段落ちが地山と客土の境で、以東は花崗岩バイラン土からなる地山が露出(平坦面を造成している)、以西が客土された部分であり、これが3トレンチの埋甕の付近まで大きく弧を描いて続くと思われる。5トレンチ南から南西に延びる現地形の段落ちは、ダム事務所の作成した地形図では納屋の北西隅をかすめて正面石段北に取り付くように示されている。この段上も4トレンチで見たように一部造成



第61図 6トレンチ土層実測図 (1/80)



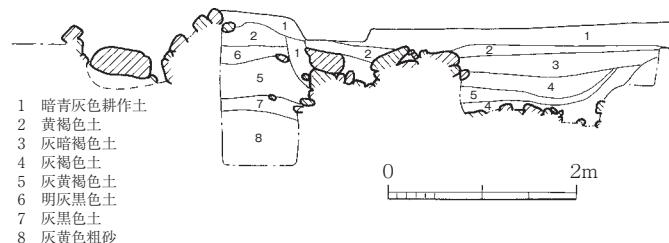
第62図 6トレンチ出土遺物実測図 (1/3・1/6)

されているとはいって、それほど厚いものではなく、かつ段下とは本来的に比高差をもっていることから、埋甕東の段落ちのラインは図示した現段落ちの南端付近に向かって延び、そこから再び北東へS字を描くように連続していたものと思われる。

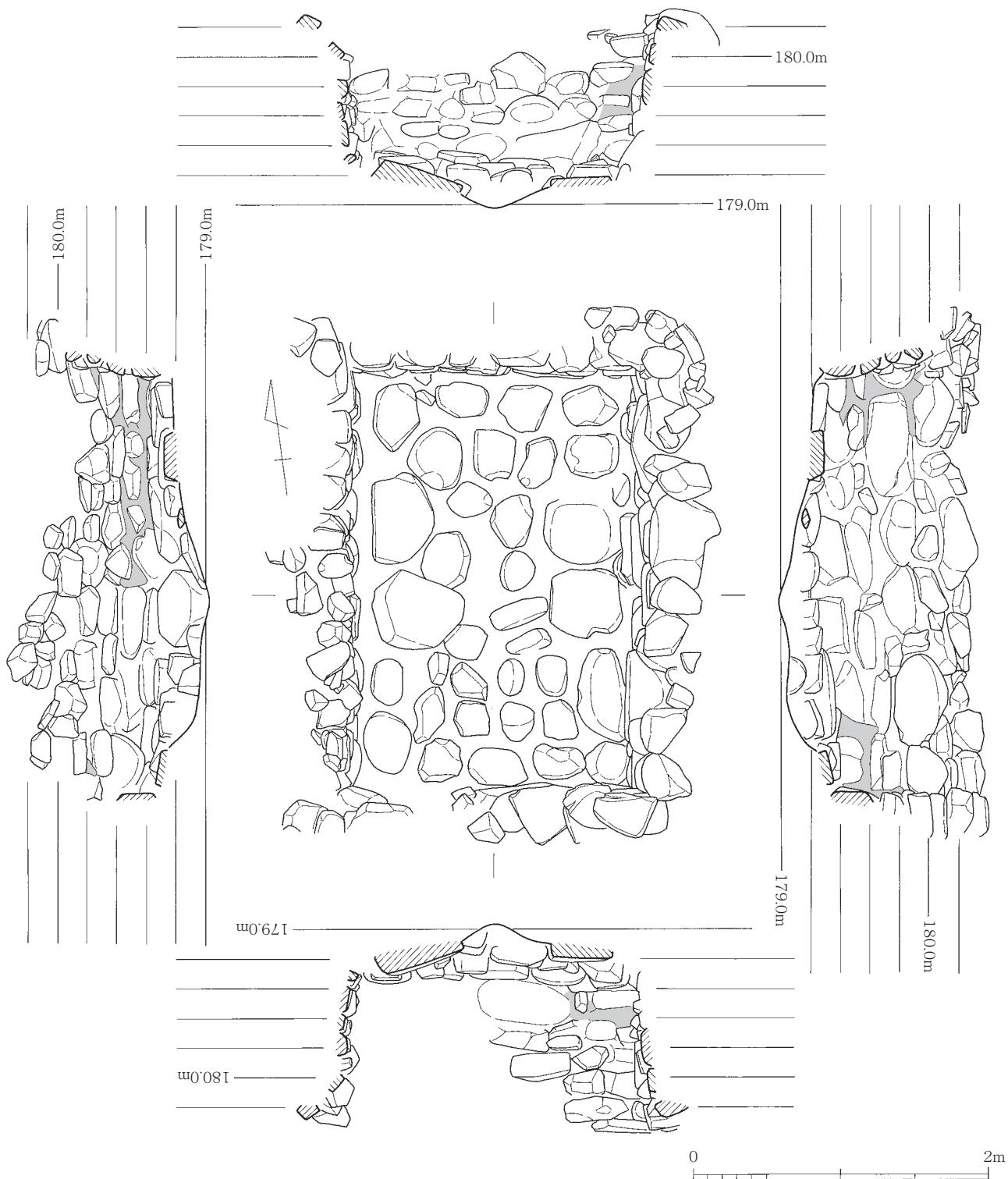
現況のような造成地（石垣の構築）が完成した時期は、5・6トレンチ出土の蛇の目凹形高台染付・広東椀などから18世紀後半～19世紀前半と考えられる。現住の家屋は「18世紀後期に遡る可能性が高い」と評価されていて、客土中からの出土遺物との年代的矛盾はない。ただ、建物は敷地の南に偏っていて、1トレンチ出土陶器や後述する柱穴その他の出土遺物から見て建物周辺の造成は17世紀代に遡ると考えられ、全体の造成を分けて考える必要があると思われる。今から思うと調査の不備を痛感する次第であるが、2トレンチでは巨石を境に客土が異なっており、1トレンチの石垣の北側の客土も精査していない。前者に関しては、この客土の違いが2時期の異なる造成の証であるのかも知れない。

(3) 遺構と遺物

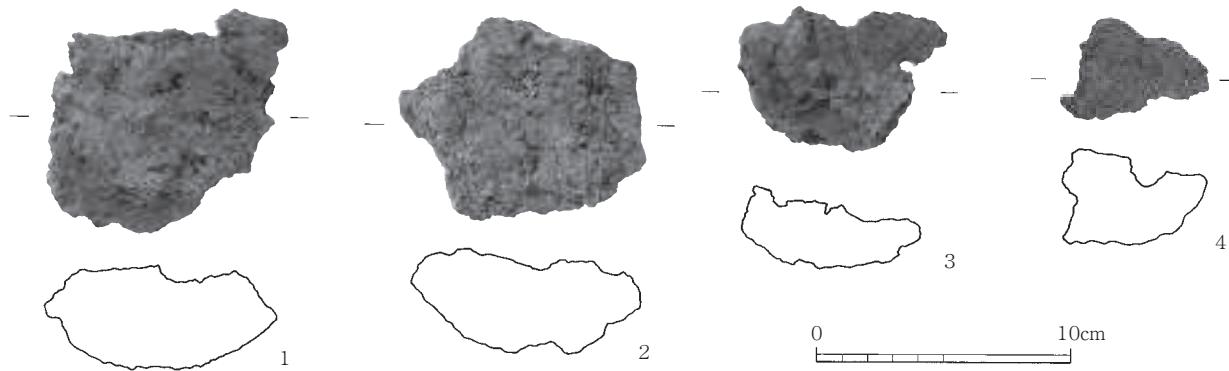
建物跡は上記したように18世紀後期に比定されていて、今まで200年以上同一場所で生活がなされてきたということで、表面に現れた構造物については評価が難しい。



第63図 石組土坑南北土層実測図（1/80）



第64図 石組土坑実測図（1/40）



第65図 石組土坑出土鉄滓 (1/3)

例えば、納屋の内部に石組の土坑があるが、内部にコンクリートで仕切りを作っていたため、図化していない。以下では、掘削後に検出した石組土坑・埋甕そして若干の柱穴について報告する。

石組土坑（図版34・35、第64図） 調査区北寄りに東西方向の石組水路があるが、その横断土層を見ようとして設定した南北トレンチ内で大量の礫に混ざって多くの陶磁器が現れたことからトレンチを拡張して検出したものである。

床面の平面規模は南北2.7m、東西1.8mほどの長方形となり、方位を意識したような配置となる。床面には最大長0.5~0.6mの川原石を平らな面を上にして隙間を置いて配置するが、中央付近が沈下して凹んでいる。四壁はやはり川原石を用いてほぼ垂直に積み上げられるが、石を組んだというよりは石の上に土を置いてさらに石を置くといったように土に接着剤のような役目を期待したようである。無論、地中の構造物であり、防水・防湿の効果も意図していたであろう。隅付近を中心に明らかに粘土を使用した部分もあるが、床に粘土は見られなかった。

南辺西半に石積みが見られないことから、ここに出入口を想定している。ただ、天井をどのように処理していたか、痕跡を確認できていない。

出土遺物

東側から投げ込まれたような状態で礫とともに大量の土器が出土しているが、取り上げ時に峻別せず、全て「石組土坑」としている。個体数が多いので、便宜上種類別に記述する。

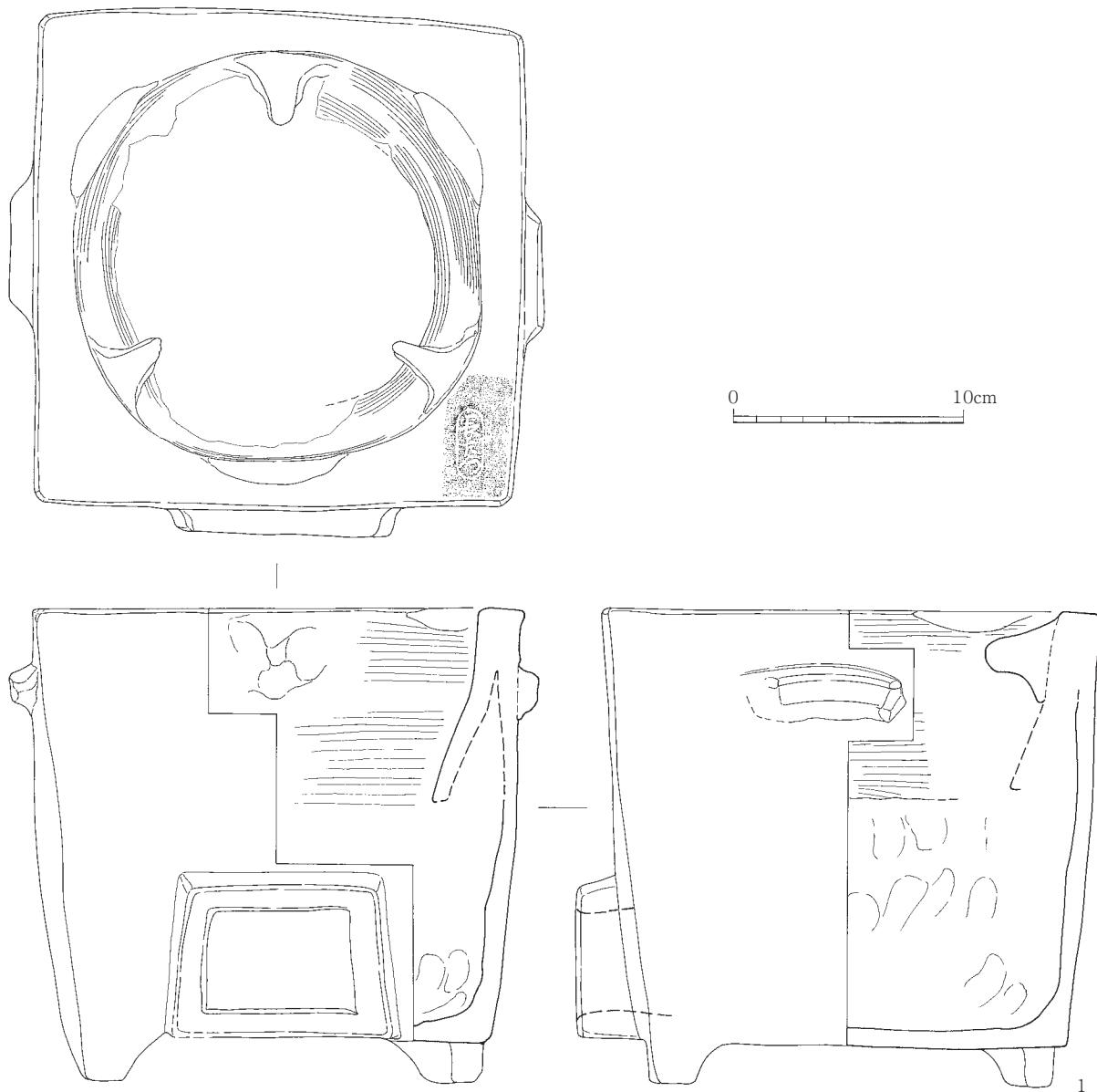
鉄滓（第65図） 総重量4.8kgほどの大小の鉄滓の出土を見たが、その中の概ね大小各2点を図示しているが、小型品についてはさらに小さいものもある。1は図下面が半球状となる典型的な椀形滓で、新しい欠損はなく重量は302g。下面是炉壁が熔着するようで、部分的に溶融・固結したようなところも見える。2は1ほどではないがやはり椀形となる滓で、表面に砂粒を噛み全体に赤錆が吹く。これも新しい欠損はなく、重量は301g。3は図左側が熔融固結、右側では発泡したような肌となる。重量は96g。4は全体が溶融固結した形状で、付着物や赤錆がほとんどない。73gを測る。これらはいずれも磁石には反応しない。

土師器（図版37・38、第66~68図） 1・2は移動式カマドあるいは七輪と呼ぶべきか。いずれもよく似たもので、胎土は微砂粒を含むとはいえ精良なものである。1は平面方形に近い形状で、上面は一辺21.5cm、底部は17cm、高さは20.7cmを測る。底部四隅に高さ1.8cmほどの小振りの脚が付く。下端の一方に縦4cm強、横6cm強の焚き口（通風口）があって、周縁が本体から2cmほど突出している。頂部は天井部を内側へ折り返して直径18cmほどの円形に開いていて、頂部から少し下がったところに3個の内傾する突起があり五徳としている。また、突起の間はそれぞれ小さく面取りが施される。内側に折り返した部分の下端は、明らかに端部と認められるところはない。あるいは、不

整のままで終わっている可能性も考えられる。体部・頂部外面はきわめて丁寧に調整されているが、積極的に籠磨きとはいはず撫であるかも知れない。外底面は粗い刷毛目で仕上げる。底部内面は撫でのようで、体部内面は上半に横刷毛が見えるが、下半は指撫で痕が顕著である。折り返し部外面は横刷毛である。頂部折り返しの下半がやや赤味を有しているが、内底面や焚き口などほとんど変色しておらず、未使用に近いものと思われる。なお、頂部に「長左衛門」のスタンプが押されている。

2は1によく似たカマドで、上面が21cmほどの方形、底部は18cmほどの方形で高さはほぼ20cm、底部の四隅に高さ1.5cmの小さな脚が付く。焚き口の形状・大きさも1に似るが、剥落した部分では器面に貼り付けを容易にするための刻みが入っている。1でははっきりしなかったが、この底部外面には回転糸切り痕が残り、その上を刷毛目で仕上げている。また、内面では底部・体部下半でも刷毛目が顕著である。これには脚端部・内面折り返し部・上面などで赤く変色した部分があり、上面では黒変したところもある。しかし、それでもあまり使い込まれたというものではなかろう。

3は筒型の形状となり、底部の1/2が残存、胎土が土師器のような灰黄褐色を呈する非常に精良な胎土の土器。陶器とすべきであるかも知れないが、破面は土師器としてよいような焼きである。

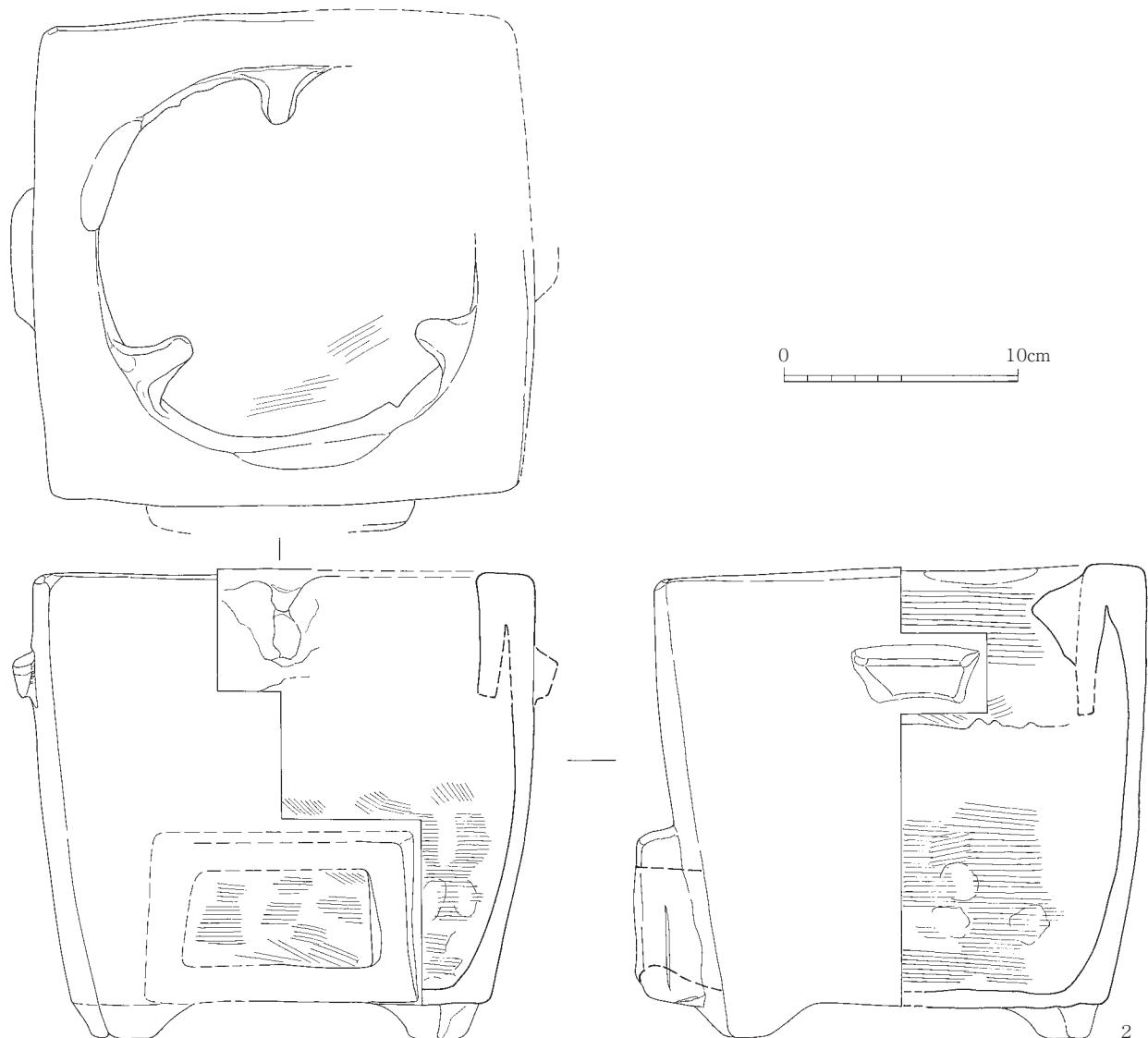


第66図 石組土坑出土遺物実測図1（土師器カマド1、1/3）

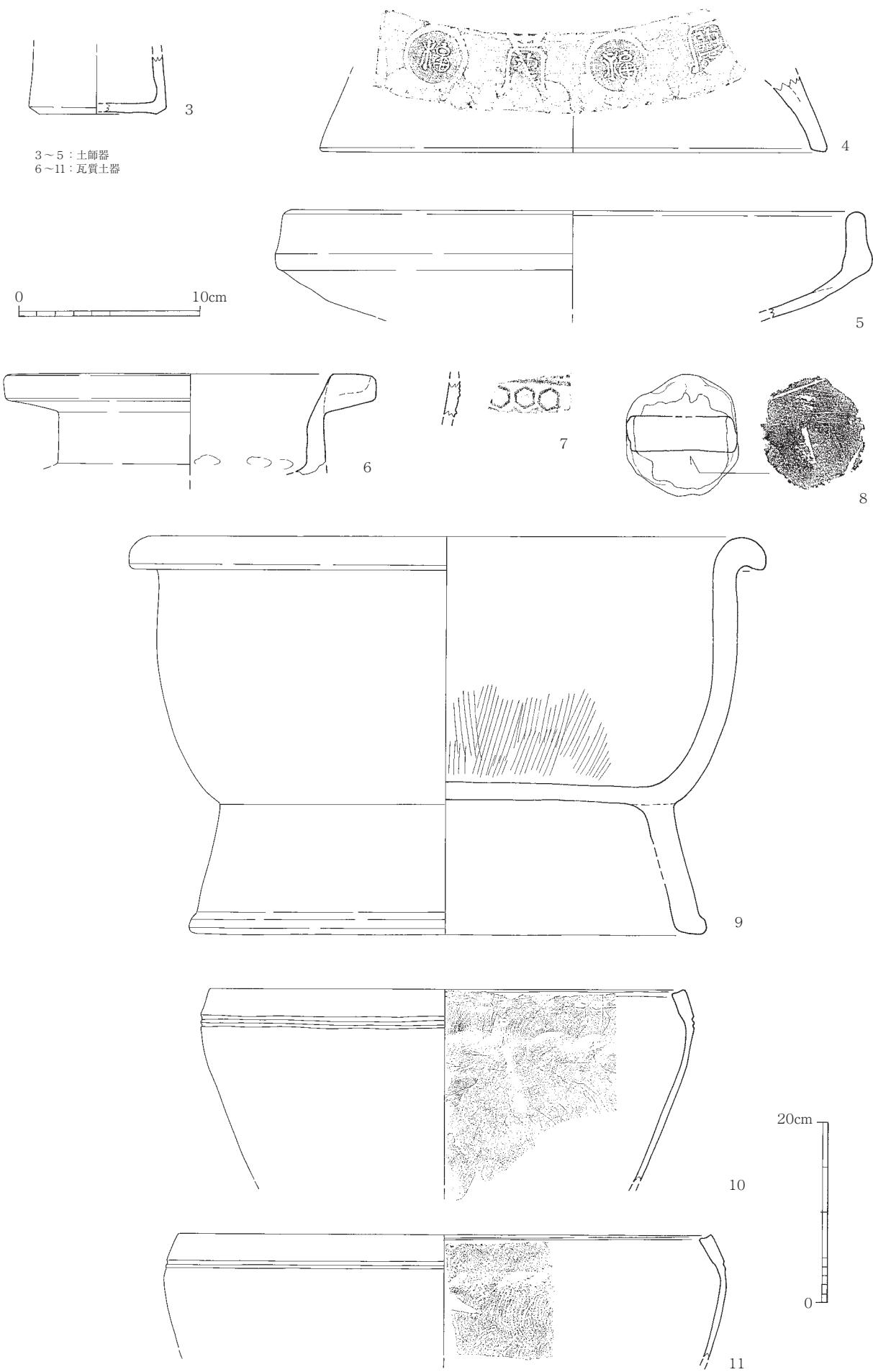
内面は施釉されて明黄褐色土に発色、内底面外縁の釉が溜まった部分は明黄色となる。外底面は回転糸切り痕が残り、茶味を帯びる黒色となる釉が掛かる。体部外面は面取りされた下端まで暗茶褐色となるが、これも外底面に施釉されたものと同じ釉であろう。その上にくすんでいるとはい赤色の漆と思われる塗料がよく残る。この塗料は外底面にも使用されて、そこでは体部外面の朱漆が剥落した部分と同様の暗茶褐色に発色している。

4は脚部。黄白色の非常に緻密な胎土で、やはりごく丁寧な横撫でで内外面を仕上げる。外面に「福」と今一つは読めないがデフォルメした二つの文字をスタンプしている。なお、残存部の上端では表層が薄く剥離した部分がかなり見られることから化粧掛けされているのかも知れない。また、脚端部では内面がほぼ無傷であるのに対し、外面だけがほぼ全面的に欠けていて、意図的に打ち欠いた可能性がある。5は焙烙片で、胎土は3・4に比べれば粗いものであるが、なお微砂粒を混入するだけで良好といえよう。調整も丁寧であるが、体部外面は調整痕が見えないので型押しであろうか。外面はいくらか煤け、荒れているようであるがはっきりしない。内面底部は明らかに暗褐色に変色している。

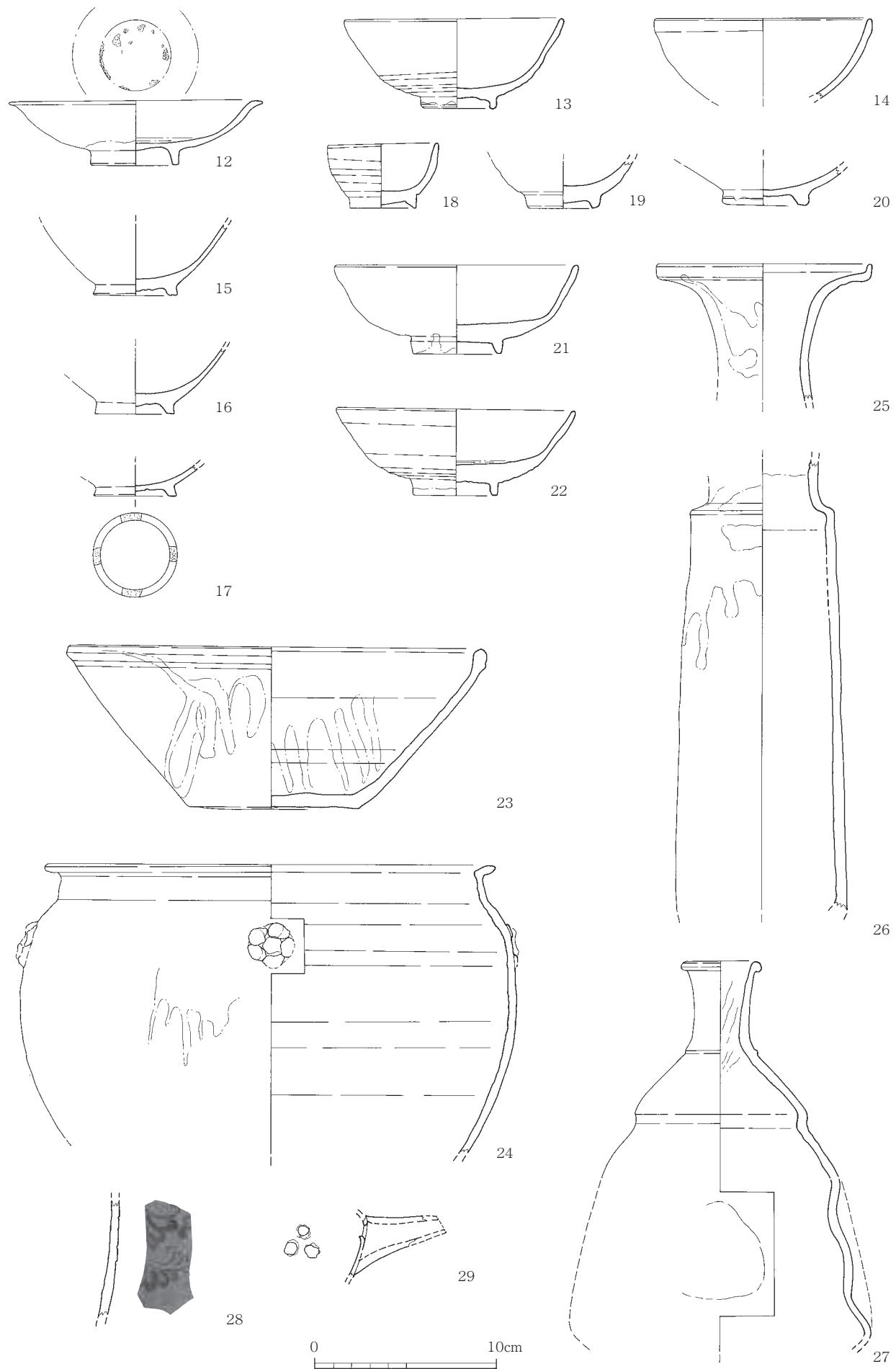
瓦質土器（図版38、第68図） 6は本来の形状がどのようになるものかわからないが、図示部は完周に近い。退色しているようであるが灰黄色～灰黒色を呈する。胎土は精良といってよく、全体



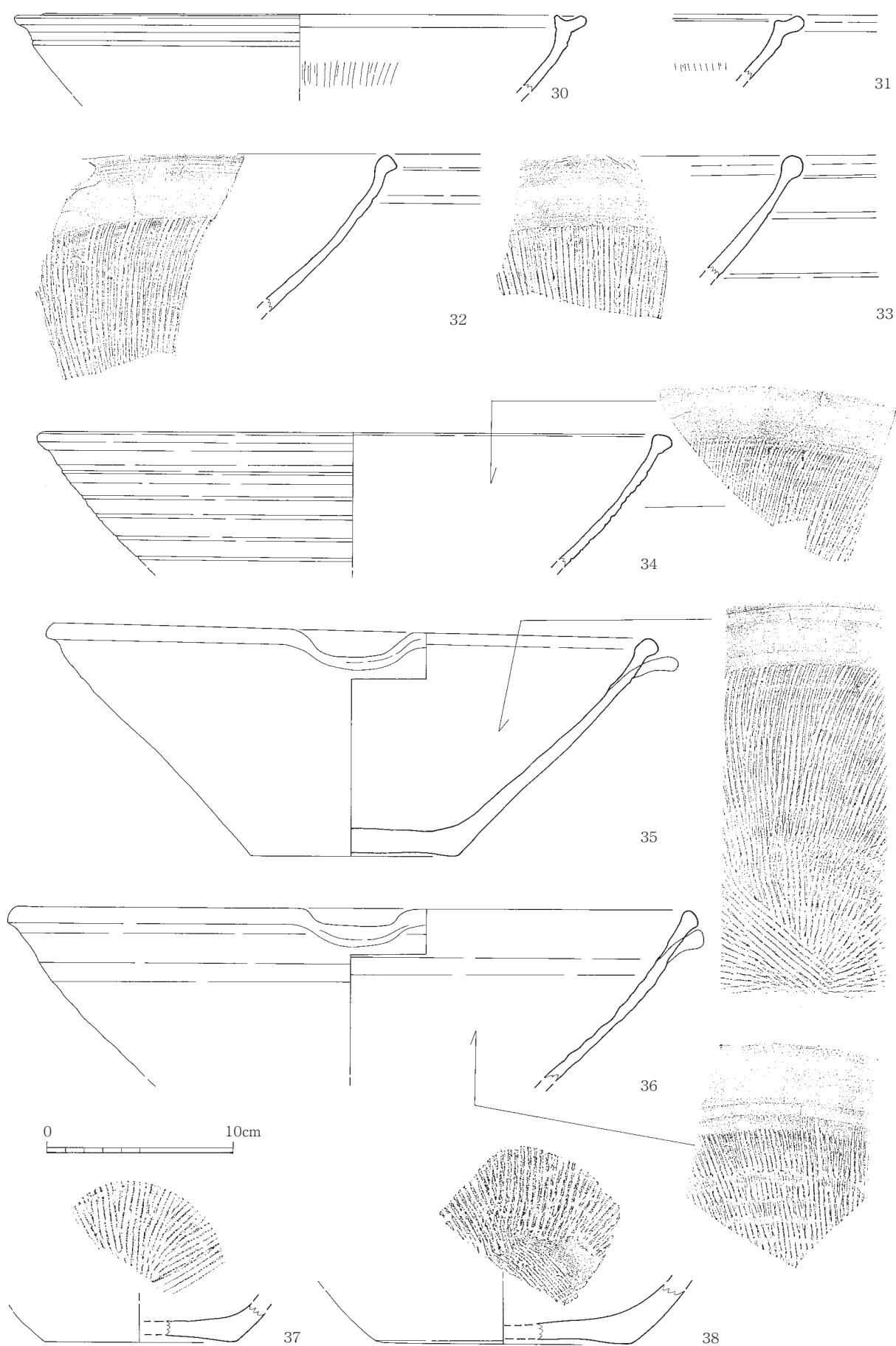
第67図 石組土坑出土遺物実測図2（土師器カマド2、1/3）



第68図 石組土坑出土遺物実測図3（土師器・瓦器、1/3・1/6）



第69図 石組土坑出土遺物実測図4 (陶器1、1/3)



第70図 石組土坑出土遺物実測図5 (陶器2、1/3)

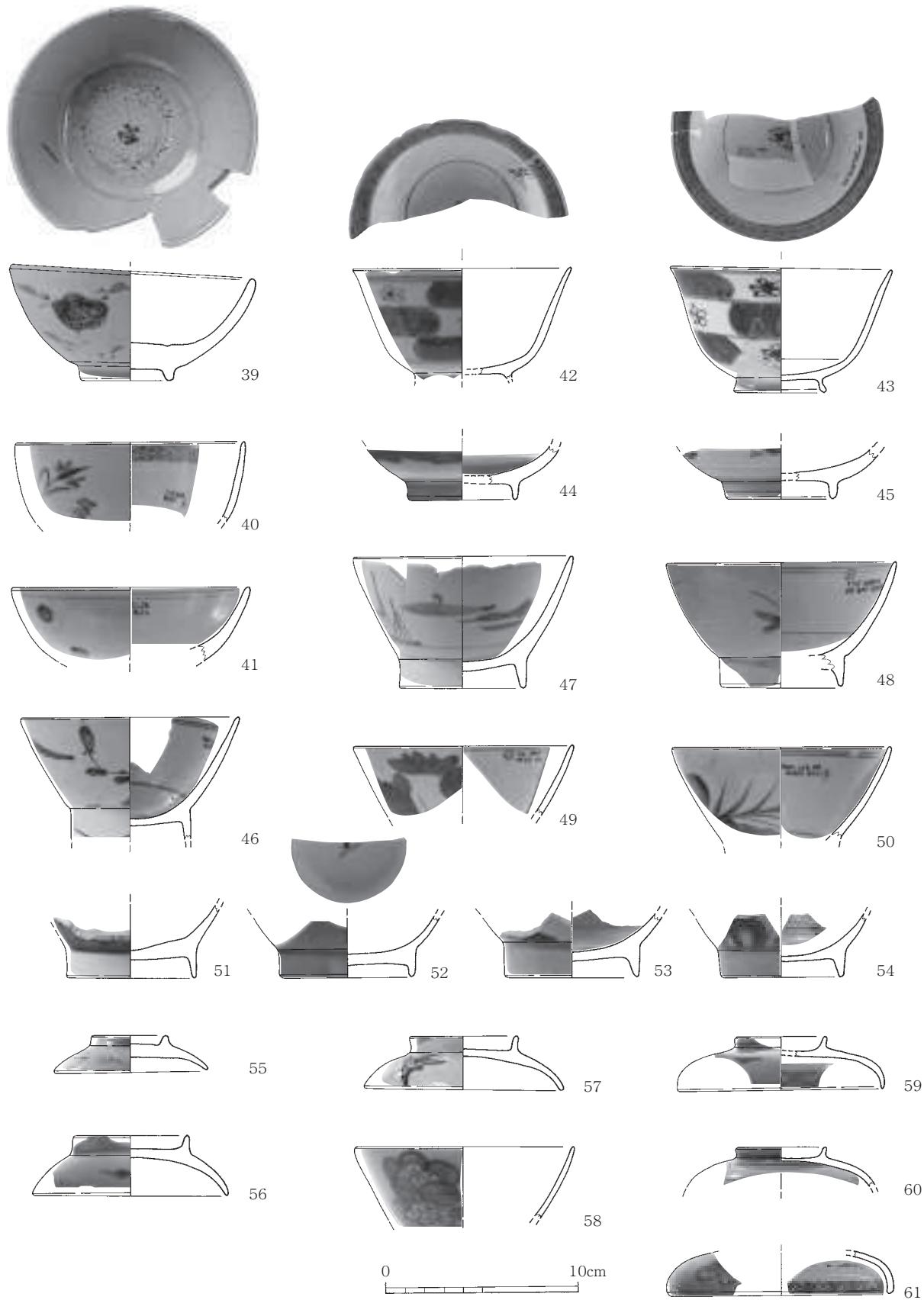
を丁寧に横撫で調整している。7は小片でこれも器形・天地がわからない。胎土は精良で灰褐色、内外面は暗灰色を呈し、図で突带上に珠点が、突帶下に亀甲文が2段連続している。8は暗灰色の緻密な胎土をもち、内外面が灰黒色光沢をもつ瓦を丸く成形している。側縁はよく研磨されていて、図背面となる面に比較的しっかりとした2本の線と擦痕が残る（拓影）。9は脚付盤とでも呼ぶべきか。脚部は小片であるが、上部はほぼ1/2が残存する。平底の底部から小さく膨らむ体部、そして口縁部は大きく折り曲げて端部は丸く終わる。胎土は微砂粒を混入するだけで概ね精良、外面は全体に灰黒色、内面は中位以下より上が灰白色～黄白色、下位が灰黒色となる。また、使用法によるのであろうが、口縁部上面から体部外面にかけて器表の弾けが多く、小片であるとはいえ脚部外面から体部下端付近が特に甚だしいことから、これは火熱によるものと思われる。また、体部内面下半、特に灰黒色となる部分には全体に縦位の条痕が全面に見られ、これは調整痕ではなく使用の結果と思われる。外底面に調整痕は見えず、型押しであろう。内面は刷毛目で仕上げる。

10はほぼ1/2が残存する瓦質の大型鉢。口縁部を内側へ緩く屈曲、端部を外側へ折り曲げて肥厚させて下端に沈線を2条刻む。胎土は緻密さを欠くが比較的良好で。器肉・器表ともに黄白色～灰黄色を呈する。頸部以下の内面は同心円文当て具痕が全体に残り、その上を刷毛目調整している。外面は明瞭な調整痕が見えないが、肩部付近では無文の叩き板の痕跡が微かに見える。11は小片で、10によく似ている。上方の沈線はしっかりとされているが、下方の沈線が非常に甘い点で10と違って見えるものの、10の下位の沈線も不整なものであり、本来両者は同一のものであると思われる。

陶器（図版38・39、第69・70図）12は底部が完周する形状が整った皿で、灰黄色～暗灰色の胎土はごく精良。調整もごく丁寧で、暗茶褐色に発色する釉の下位に数条の稜線が白く浮いているが、これが籠削りの痕跡であれば中位以下が籠削りであることになる。見込の釉を1.3cmの幅で搔き取っているが、見込中央の施釉部に砂目が付着する。13は暗灰色緻密な胎土の椀で、全体に灰緑色、口縁部付近は暗茶褐色に発色するが、欠損した口縁部の下位に黄褐色釉が垂れる部分がある。高台外側縁に釉が垂れているが、本来は高台外側縁から高台内にかけてが露胎であったようである。露胎部は暗褐色となる。内面見込付近にピンホールの目痕が3、4個所見えるが、この辺りはほかにも小さな熔着物があって器面が荒れた感じになっている。なお、口縁部下の一部が火膨れしていて、焼成時の高温によるものであろう。なお、体部外面は中位以下を丁寧に籠削りで仕上げている。14は小片。これも胎土は灰黄色～暗灰色緻密なもので、内面は緑味帯びる黄白色に、外面は暗褐色に、口縁部付近は暗茶褐色～灰緑色に発色する釉が掛かる。20は14と同一個体と思われる底部片で、高台外側縁と畳付が露胎、高台内は全面に施釉され、内側縁下端に目痕が一つ残る。15～17は灰黄色緻密な胎土や高台の形状、総釉後の畳付の釉剥ぎ、外底面中央に残る巴状の整形痕など非常によく似た陶器である。16・17は加えて畳付の4個所に白色化した重ね焼き時の窯道具跡が残る点まで共通し、黄白色・灰黄褐色といった発色の違いは焼成時に置かれた場所の違いによるものと思われる。ただ、15は残存する内面全体から同外面上端にかけて緑味帯びる青色に発色する緑青釉が掛かるが、光沢を失い特徴的である。18はほぼ完存する小椀で、胎土は暗灰色緻密、釉は透明のようである。高台外側縁から高台内にかけて露胎とし、体部中位付近以下を籠削りで丁寧に調整している。19は暗灰色緻密な胎土をもち、全体に暗茶褐色となるが部分的に黒色に発色する釉を全体に掛けた後に畳付付近だけ搔き取る。見込付近に光沢のない暗灰色となる釉を掛けている。21・22はセットになる椀。暗灰色緻密な胎土をもち、暗灰色に発色する釉を掛けた後に見込外縁を中心にして白濁・暗褐色に発色する釉をイッチン掛けする。見込を蛇の目に釉剥ぎ、体部外面下端付近から高台内にかけて露胎となる。高台の整形などは非常にシャープなものである。

23は底部が完周、口縁部の1/3ほどが残存する鉢。暗灰色～灰赤紫色の緻密な胎土をもち、暗緑

褐色といった鉄釉を薄く掛けるが、内底面、体部外面下端付近から外底面にかけては露胎とする。口縁部を小さく肥厚させ、一部に沈線を刻むが完周しない。体部は全体に横撫で仕上げるようで、外底面に調整痕は見えない。底部内外面の周縁に目痕が残るが非常に丁寧に作られた陶器である。24は図示部がほぼ完周する甕で、灰黄色の緻密な胎土をもち、透明な釉を内外全面に掛けた後に白

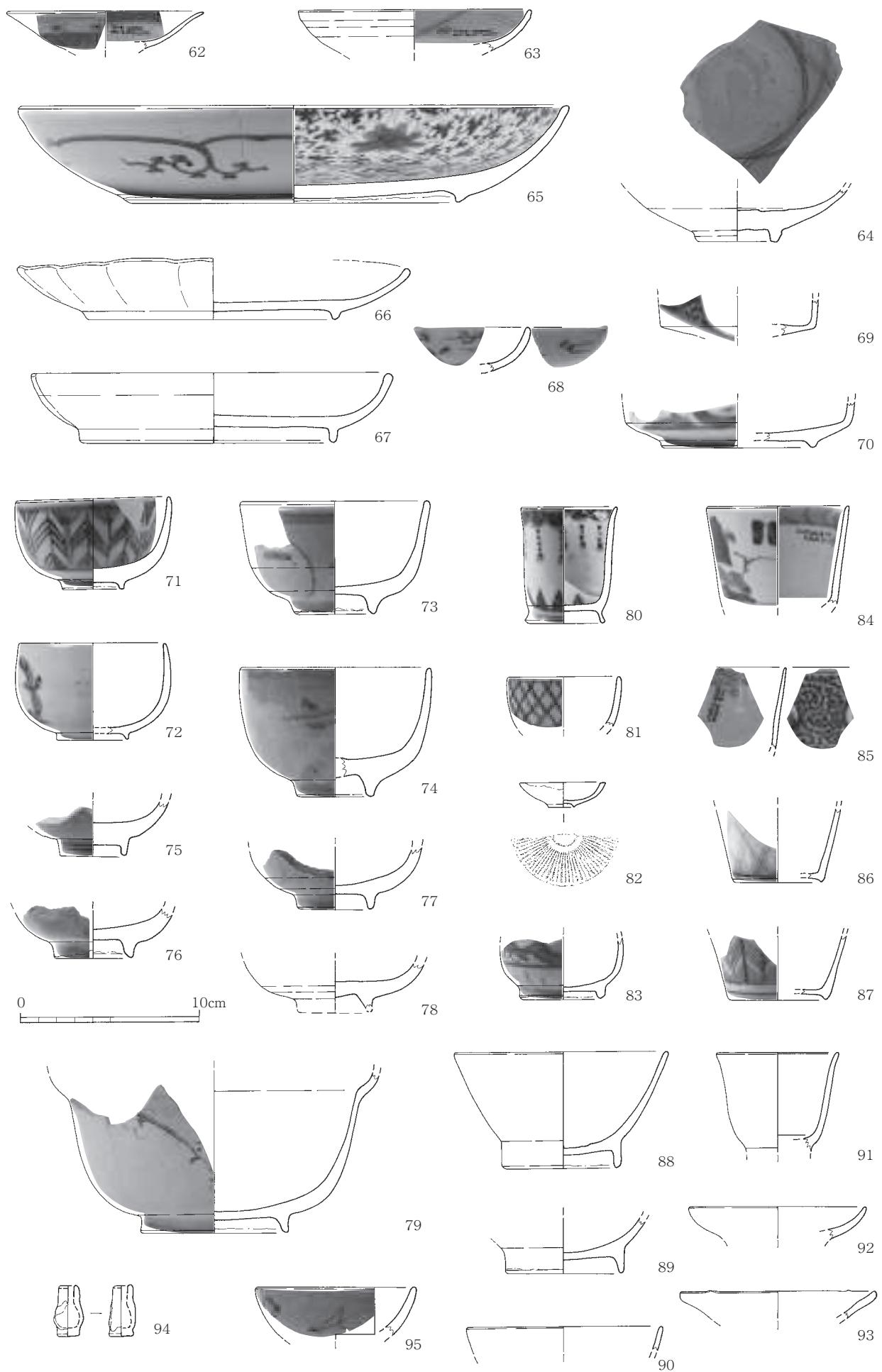


第71図 石組土坑出土遺物実測図6 (磁器1、1/3)

濁する釉を頸部以下に部分的に掛け流す。体部内外面ともに横撫で痕が甚だしく、造作の面では粗雑な感がある。肩部の花弁状に指で押された貼付文は相対する2個所に付されている。25は頸部が長く、口縁部が大きく開く壺で、明るい灰赤紫色の緻密な胎土をもつ。残存部全体に暗茶褐色となる鉄釉を薄く掛けるが意図したものか図下端付近の一部に露胎となる部分がある。受け口となる口端部全周と外面の一部に灰黄褐色の釉をかける。特に外面の釉は倒置して掛けたようで、図で下から上に向かって流れている。26は花生か。これも暗赤紫色～暗灰色の緻密な胎土である。外面は全体に「打ち刷毛」と呼ばれる、化粧土を掛け流したり浸けたりするのではなく、浸したシロの葉などで叩いて化粧掛けしたものである（東峰村日高正幸氏御教示）。その後に肩部直下に細かい波状文を、その下に大きな波状文を1単位刷毛で描き、肩部の1/2ほどに濃い灰緑色となる釉を垂らしている。残存状態が悪いが、頸部でも細かい波状文と灰緑褐色釉の流し掛けがなされるようである。残存部上端付近では内面にも釉が見られるが、全周するものではなく、以下は露胎となる。27は徳利か。これも灰白色～明灰色の緻密な胎土をもち残存部下端付近内面を除いて外面に暗茶褐色となる鉄釉を薄く掛け、頸部あるいは肩部の3個所に濃い灰茶褐色となる釉を垂らす。器形的には短く細い頸部から口縁部を外方に小さく折り返し、撫で肩の下位を一端細く絞って再び広がるのであるが、接合しえない個体に器面を大きく（橈）円状に凹ませるものがある。県内東峰村上の原古窯跡出土の徳利に同様に凹ませた内部に布袋像を貼り付けた例があり、参考になる。28は灰黄色緻密な胎土の小片。外面に白濁した化粧土をかけて唐草文状の沈線を刻み、いくつかの沈線を呉須でなぞる優美な陶器である。内面は露胎。29は急須注口部で、明灰色緻密な胎土に灰白色に発色する釉をかける。

30～38は陶器摺鉢。1は口縁部を内外につまみ出して断面Y字形とするもので、胎土に砂粒を多く混入、釉は暗茶褐色に発色する。31は内側へのつまみ出しがほとんどないもの。器肉中心付近が灰白色、内外の器表付近が黒褐色となる緻密な胎土で、釉は暗茶褐色に発色。32～36は口縁部が玉縁状の単純な形態となるもので、これらはいずれも暗灰色緻密な胎土をもち、内外面の釉は暗茶褐色となる。34では外面に横撫による凹凸が多いが、その他のものは造作も丁寧である。いずれもあまり使用されていないようで、35では内面底部外周に重ね焼きの痕跡が残る。37は胎土良好、丁寧に作られた底部片で、露胎の外底面は灰黄褐色、使用されて摩滅する内底面は灰赤紫色といった色となる。38は砂粒を多く含む粗い胎土の底部片で、これも内面は使用されて摩滅が進む。器肉・器表ともに灰赤色となる備前焼。

磁器（図版40・41、第71・72図）39は大橋康二氏が「靈芝」とした文様に似る（『文様別そば猪口図鑑』2011、青幻社）。体部外面はごく緩い曲線で3等分し、それぞれに文様を置くが、これは型紙刷りによるものので、塗りつぶしに失敗している。内面では二重の圈線の中にコンニャク印判で五弁花文を付すが、中心をずれて重ね焼きの高台の痕跡がはっきりと残る。なお、畳付のみが露胎で、若干の砂が付着している。焼成不良で、釉は青味あるいは黄味帯びる灰白色に、文様は灰緑色といったような発色となる。40はススキとキキョウを表したものであろう。41は外面に丸文を、口縁部内面には四方櫛文を置く。内面には口縁部下と見込外周に各2条の圈線を描いている。42は外面を3段に区画して、地を塗りつぶした木目文・桜花と思われる花文を交互に配し、口縁部内面にも同様の木目文を置く。見込にも花文の一部が残る。43は42とセットになるもので、これは見込に3輪の桜花が描かれ、畳付のみが露胎となる。44は人物の足のような絵柄が残るが大部分が失われている。非常に焼成良好なものである。45は見込二重圈線の内に宝文を描く。外面の文様は不明だが、高台内に所謂昆虫文が置かれる。焼成良好だが、文様は灰味が強く発色する。46～48は広東椀。46は外面にリンドウと思われる薔薇その他を描き、見込には鈴虫を置いている。これは貫入



第72図 石組土坑出土遺物実測図7 (磁器2、1/3)

が著しい。47の外面は州浜の光景であろうか。見込にもデフォルメしたような文字があるが、これも文様は灰味強く、青味が弱い。畳付だけが露胎となる。48は口縁部の1/3が残存するが、蝶々2羽が描かれる。よく似た絵であるが、各部の大きさが異なっていて手描きされたようである。これも畳付だけが露胎。49はヤツデのような葉などが描かれるがよくわからない。50も草花のようであるが不分明。51は帆船らしき絵が、52・54は意味不明の絵が、53は柳のような木がそれぞれ見込に描かれている。また、54では高台内に二重の方形枠の中に変形した文字らしきを置く。

55・56は浅い皿の可能性もあるが、ここでは蓋としておく。55は高台状のつまみ（以下、つまみとする。）頂部だけが露胎で、天井に簡略化した唐草文を3単位、天井内面に意味がよくわからない文様を描いている。56も同部が露胎。つまみ内に花文？、天井部上面に開花したバラのような花と蕾をあしらう。天井部内面にも花文らしきを置く。57・58は蓋と椀のセットとしてよからう。蓋はほぼ完存し、つまみの上端のみが露胎。つまみの中に梅とビワ（？）、天井部外面に梅・ビワ・鳥（ウグイス？）を配し、天井部内面にも梅花を1輪描く。これらを描いた線は非常にしっかりとしている。椀は破片だが、梅・ビワ・鳥の一部が見える。59～61はつまみが華奢で、口縁部が丸くなる蓋。59は天井部内面の2重圈線内及び天井部外面に風景画と思われる描画があり、口縁部内面には四方櫛文を置く。60は59に作りや文様の雰囲気が似ていて、セットとなるものかも知れない。ただ、残存部が小さい。61はやや肉厚であるが、口縁部内面に四方櫛文、天井部外面に花文を置くようである。

62は42と同じ文様をもつ浅いもので、蓋とするには復元口径が大きいために皿としておく。外面を3段に区画して中段の塗りつぶした地に木目文を描き、その上下に桜花を置く。内面では口縁部に接するようなところにやはり塗りつぶして木目文を置く。63・64は複線で斜格子を描く同巧の皿であるが、発色が異なり接合しえないので別個体であろう。64では見込の釉を蛇の目に搔き取っているが、その部分に接する付近の釉が白濁して他の部位と異なっている。畳付も露胎となる。65は内面を牡丹唐草文で埋める復元口径30.8cmの大皿で、体部外面にはシンプルな唐草文を描く。畳付だけが露胎となり、高台内に「渦福」を置き、その上と周辺に合わせて5個のハリ痕が見られる。66は輪花とし、見込に稲穂と刈り取られた後の株を描く。外面は無文で、畳付だけが露胎、高台内にハリ痕が3個残る。67は14.3×7.0cmほどが残存する長方形となる皿で、短辺長は今少し大きくなる。角は外側から押さえて内側に縦位の弱い稜を作り出す。内面の描画は物語風で、後に天秤棒を担ぐ男、前に釣り竿らしきものを担ぐ男を描いている。天秤棒に掛けているものは柴であろうか。68はやはり隅に稜を作り出した角皿の小片で、単純な文様を描く。

69は腰折れとなって体部が直立する小片で、外面に施文するが蛸唐草のほかは意匠がわからない。70はやはり腰折れとなる小片で、これも体部外面に施文の一部が残存、吳須のほかに朱線と薄緑の塗り潰しが見られる。高台畳付だけが露胎である。

71は小さな高台から丸く立ち上がり、口縁部がほぼ直立する椀で、底部が肉厚となる。体部外面に矢羽根文、見込に変形字が描かれ、高台外側縁・畳付が露胎。72も小さな高台をもち、口縁部はわずかに内傾する。外面に松葉文と思われる図柄を描くが滲んで不鮮明となる。全体に薄手となり、高台畳付のみが露胎である。73は復元口径10.6cmと先の2点に比べて大振りとなる椀で、胎土が暗灰色、露胎となる畳付が茶褐色になるなど焼成不良な染付である。文様の意匠はよくわからない。74も復元口径が10.8cmとなる肉厚の椀。これも胎土が暗灰色、釉が白濁、文様が灰褐色に発色するなど焼成不良となる。施文は口端部・体部下位・高台付け根の外面に圈線を各一条巡らせるが、主文様は「÷」のような太い線が見えるだけである。75～78は底部片で、77・78は73・74に似て焼成不良で胎土が暗灰色となる。77は外面に丸文が2単位見える。畳付が残存するものはそこだけが露

胎となる。

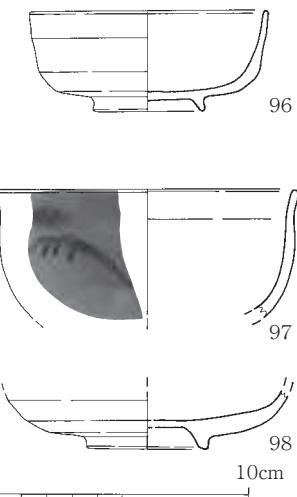
79は暗灰色緻密な胎土をもち、外面には全面に化粧土を掛けるようでその上に暗灰褐色～灰黒色といった発色をする柿の木のような樹木を枯山水風に描いている。ただし、化粧土は畳付とその周辺を小さく剥ぎ取っている。内面は残存部全てが露胎で灰褐色ないし赤味を帯びて発色し、底面には重ね焼きの高台の痕跡が残る。白磁あるいは染付の焼け損じと判断してここで紹介したものであるが、陶器とすべきであるかも知れない。

80は口径に比して長胴となる小椀で、外面は体部下端に塗りつぶした三角文を、上半に瓔珞文を描き、高台内に「成化年製」と達筆で描いている。また、内面では上半に外面と同じ瓔珞文を描き、見込には二重圈線の内にパオのような家屋と騎馬武者らしき人物などが見える。復元口径5.4cm、深さ5.5cmほどの狭く深い内底面の描画や口縁部の瓔珞など相当な技量といえる。81は外面に太い線で斜格子を描く小椀片。82は復元口径4.8cmとなる白磁紅皿。外面は型押しで施文する。

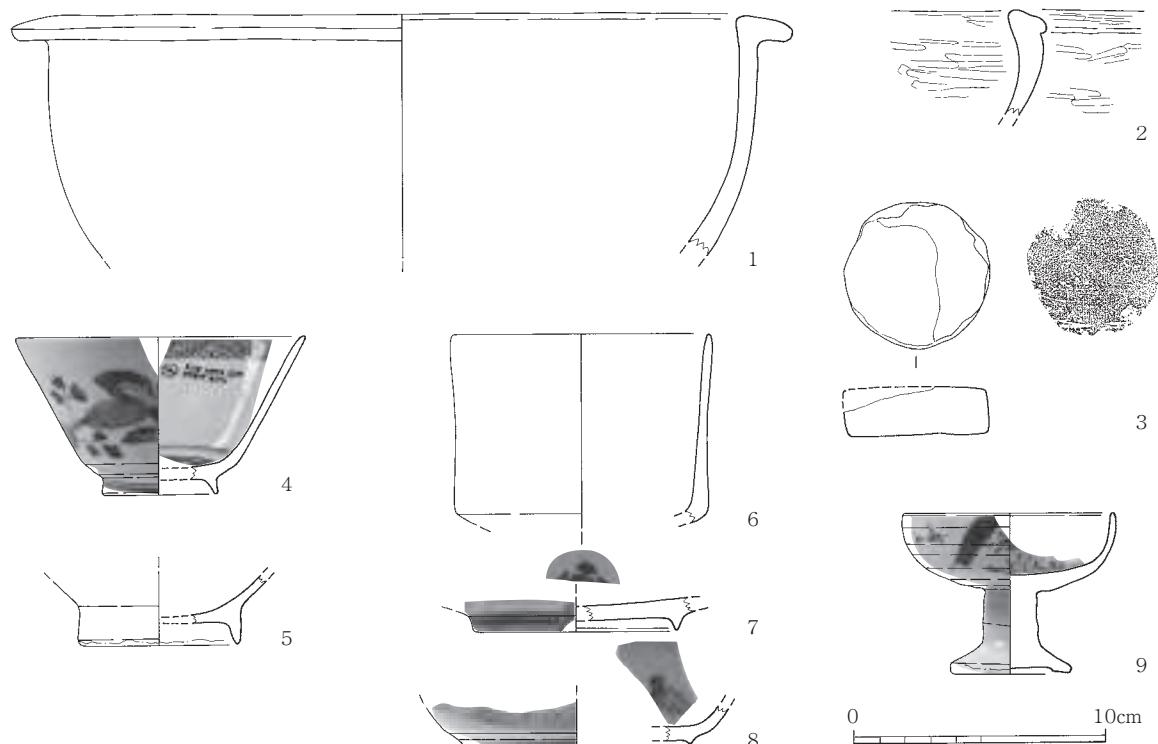
83は内面が露胎の小型の壺あるいは徳利か。体部下端に一見鋸歯文と見える連続文様を描くが、「人」字を直線で描いたという方が近い。その上の文様は細部が不明である。高台付近のみ釉を掻き取り、一部に砂目らしきが付着する

84～87はソバ猪口であろう。84は外面に風景画を描くようで、内面口縁部下には塗りつぶした地の上に木目文を置く。85は主文様のほとんどが失われるが、その間を蛸唐草文が埋め、内面上端に四方櫛文が配される小片。86は草文で飾られ、小さな高台の畠付だけが露胎となり、高台内は施釉されている。87は外面を矢羽根文で飾る。これは小さな高台の内側縁まで施釉されていて、外底面外周が露胎となる。蛇の目凹形高台となるのであろう。

88は廣東椀風の器形で、畠付のみが露胎となる青磁。灰味帯びる青色に発色、見込に2個の目痕



第73図 石組土坑出土遺物実測図8(1/3)



第74図 石組土坑周辺出土遺物実測図(1/3)

が残る。

89～93は真っ白い器肉に灰味帯びる濃青色の瑠璃釉を掛ける磁器でよく似る。89の底部は完周、畳付のみが露胎。92は蓋の可能性がある小片。93は口縁部の一部を小さく摘み上げる小片。

94は青磁の栓か。青味帯びる透明釉が掛かり、大部分が中空となる。図下端が露胎となり、右図で下端の一部を欠損するが、本来は円形を呈していたものと思われる。95は磁器であるが、器肉が灰色、内外面の釉が暗灰黄色といった色に発色する。文様は灰黒色となり、一般的な肥前系のものとは異質である。

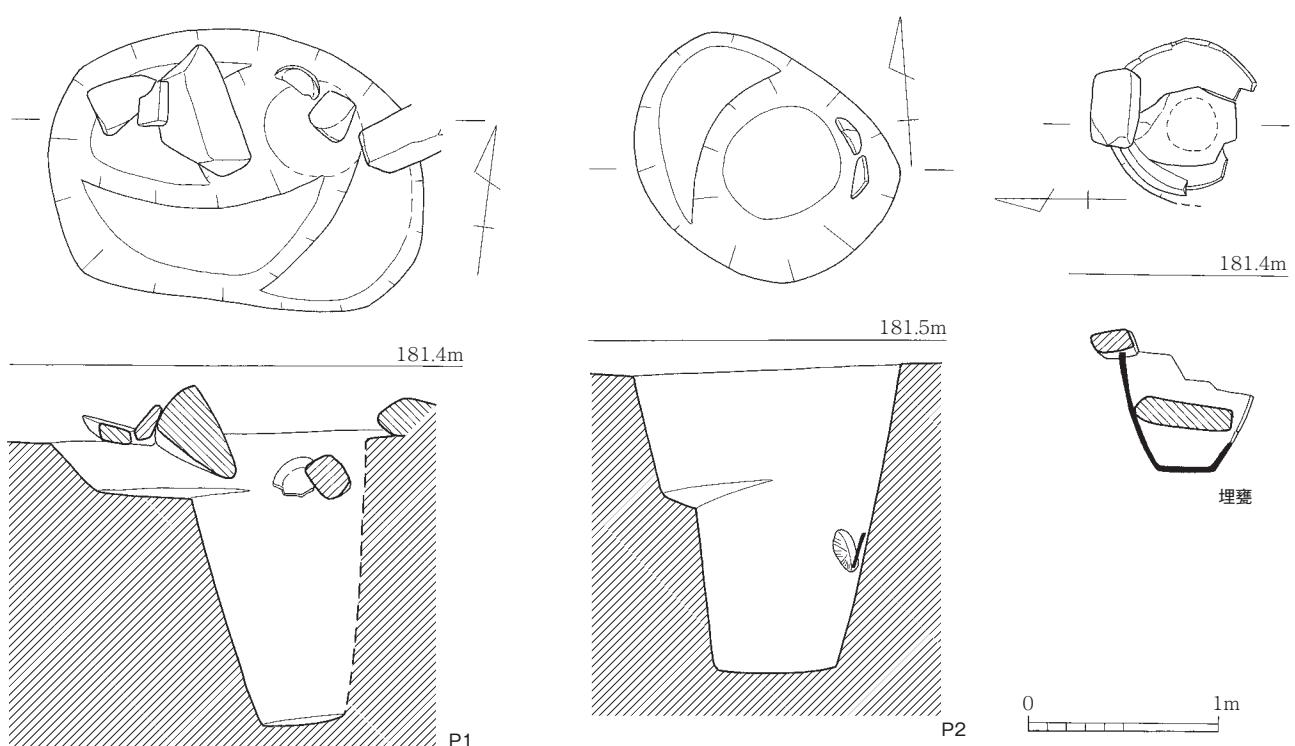
96は灰味帯びる白濁釉が掛かり、白磁であろうか。小振りの底部から一端水平に延びて、口縁部は直立に近く立ち上がる。口縁部下の外面に小さな段を付し、体部が彎曲する付近以下は箆削りで仕上げる。畳付だけが露胎となる。97・98は同一個体のようである。体部は丸味をもち、口縁部は緩く外彎する。口縁部下に黒褐色に発色する文様を付している。98は残存する外部は全て箆削りで仕上げ、高台畠付及び見込の釉は搔き取られる。高台内、底部の器壁が非常に薄くなる。胎土は明灰黄色の緻密なもので、陶器か磁器か判断に苦しむ。

石組土坑周辺出土遺物（図版41、第74図）1は土師器の鍋であろうか。口縁分の1/3が残存、弥生土器のような器形となる。胎土は良好、焼成もしっかりしていて、全体に丁寧に横撫でで仕上げている。2も土師器小片で、これは全体を箆磨きで仕上げる。胎土に微砂粒を含み、1に比すれば粗い。外面が灰黄褐色、内面はやや褐色化する。

3は燻し焼きされた瓦片を丸く加工した円盤。実測図の左半分ほどは剥離欠損、背面の下端に条線があるが、その意味は不明である。外周は丁寧に研磨している。

4は体部が直線的に開く椀で、外面に人参（？）・蕪（？）のような野菜が描かれるようである。内面では口縁部下に四方櫛文が置かれるが、二重写しの様にずれて不分明となっている。見込にも野菜の文様らしき図柄が描かれる。畠付も含めて総釉のようである。5は石組土坑内89～93と同様な瑠璃釉の椀で、89とセットになるものであろう。

6は外面が灰味帯びる青白色といった発色をする青磁釉を厚く掛けるが、内面は白磁釉が薄く掛



第75図 柱穴・埋甕実測図（1/20）

かる。口縁端部と内面上端が露胎となる。7は皿か。小片で、見込に五弁花文状のスタンプが残るが、弁が狭く五弁ではないようである。8も小片で、見込に植物文様が描かれる。畳付を含めて高台内まで施釉、外底面外周が露胎となることから蛇の目凹形高台となるものであろう。9は仏飯で、底部を小さく上げ底とする。接地部のみが露胎で、他は総釉。朱線で流水のような表現があり、黒線で輪郭を取り薄緑で塗りつぶした雁などが描かれている。

柱穴P 1 (図版36、第75図) 母屋跡の中、2トレンチに露出していた巨石の南付近で検出した遺構で、長軸1m、短軸0.75m、深さ0.75mと比較的大型の柱穴である。柱当たり埋土表層近くで図のような染付が出土した。出土状態から家屋廃棄時の祭祀行為の可能性が考えられる。

なお、ここは大規模な客土の中にあり、母屋付近の客土の下限を示すといえる。

出土遺物

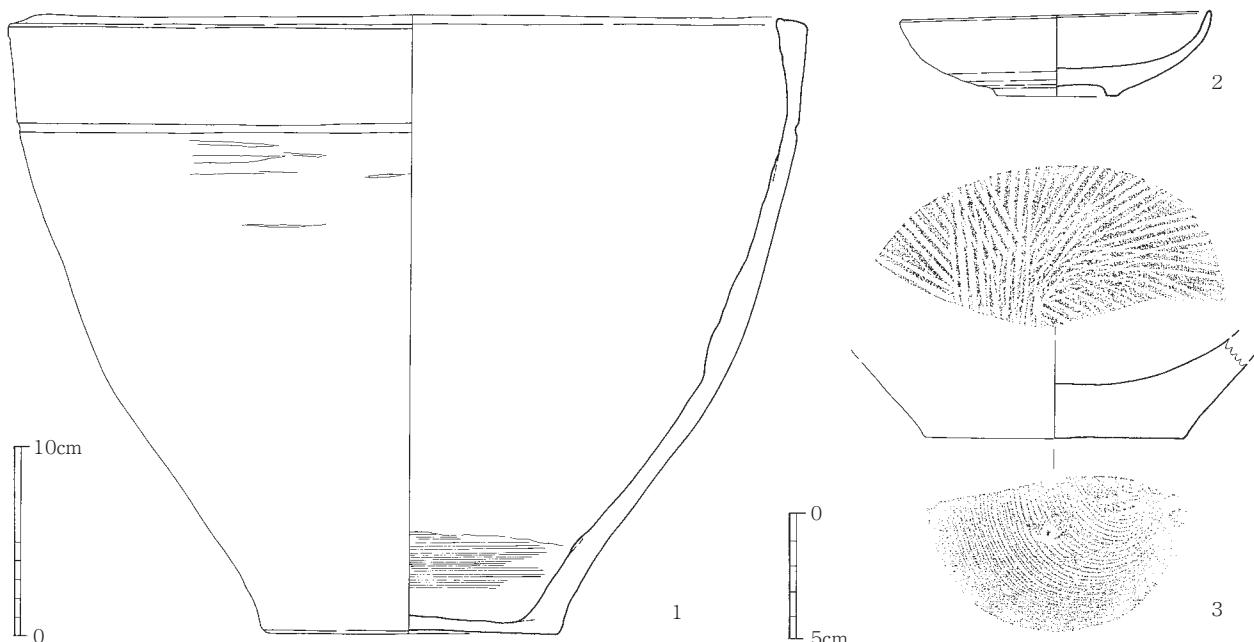
土器等 (図版42、第76図2) 口縁部を一部欠くほかは良好に残存する染付皿。焼成不良のようで、文様は青味帯びる暗灰色～灰黒色、釉も不透明な灰味の強いものとなる。特に外面では施釉にムラがあり、器表に小さな凹凸が多い。内面は二重の圈線を描き、その中にブドウかと思われる文様を描くが不鮮明である。低い高台は畳付の釉を搔き取るが、重ね焼き時の砂らしきが一部熔着する。伊万里焼の古い段階、17世紀のものであろう。

柱穴P 2 (図版36、第75図) 調査区南東隅付近、客土ではなく、花崗岩バイラン土に掘り込まれた柱穴である。これも径0.55～0.7m、深さ0.8mのしっかりとした柱穴である。図のように、柱の裏込めとしてよい位置から備前焼摺鉢片が出土している。

この柱穴の両側に1基ずつ、3基の柱穴が東西に0.75mほどの間隔を置いて並ぶように見えるが、それぞれ床面レベルは南から180.89m、180.61m、181.26mと深さが随分と異なっていることから、建物跡を構成するものとは考えられない。柱穴1も同様に対応する柱穴を確認できておらず、この地区で最初に築かれた建物跡はわからなかった。

出土遺物

土器等 (第76図3) 備前焼の摺鉢底部片である。器肉・器表ともに灰赤色となり、胎土は良好。



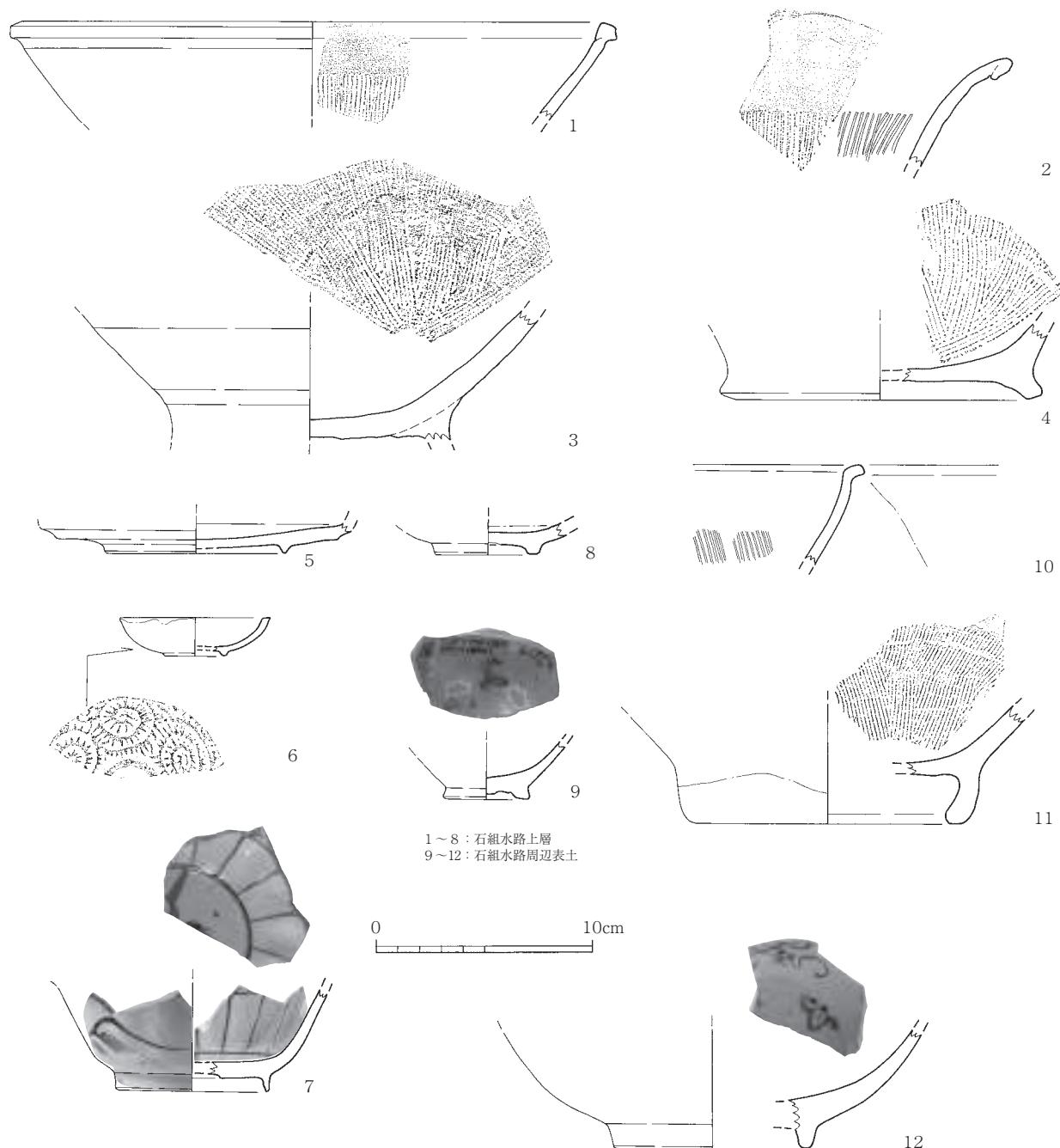
第76図 埋甕・柱穴出土遺物実測図 (1/4・1/3)

調整も丁寧に横撫でを施す。外底面は回転糸切り、内面はすり減っている。

埋甕（図版36、第75図） 3 トレンチ南壁に接して検出したもので、納屋の内部に当たる。納屋の北辺が残っていなかったが、北東部の石組遺構が納屋の内部であれば、この遺構はやや南側に位置することとなるが、東西辺から見ればほぼ中央付近となる。古い家屋では往々にして玄関脇に小便器を置くことがあるが、これは明らかに内部である。

トレンチの土層観察でも掘形は判然としなかったが、一部確認できた北西部では甕の径をわずかに上回る小さなものであった。甕の内部は底付近に薄く粘質土が溜まっていたが、ほかに顯著なものはなかった。底部のやや上方に扁平な礫がほぼ水平に置かれていて、これは意図的なものであろう。

なお、甕はほぼ水平に置かれていて、図示していないが小礫で調整したようである。



第77図 東西石組溝出土遺物実測図（土器、1/3）

出土遺物

土器等 (図版41、第76図) 中位以下が完存、口縁部付近の1/3ほどが残存する。胎土は精良といつてよく、陶器であろうが土師器としても違和感がないくらい焼成が甘い。口縁部界に浅く幅広い沈線を1条完周させるが、その下位にも数条の完周しない不整となる沈線様のものが入る。完周する沈線付近の上位は赤味が強く灰赤色となるが、それ以下は灰黄褐色で通常の土師器皿と同様の色となる。色の違いは漸移的で、釉を掛けたものではない。内面は底部から5cmほど上位までは器面がよく残るが、そこから上方20cmほどの間は黄白色の付着物が厚く残り、その表面は平滑でなく小さな凹凸が甚だしい。底部外面は器表が荒れて調整痕がわからない。小便器であろう。

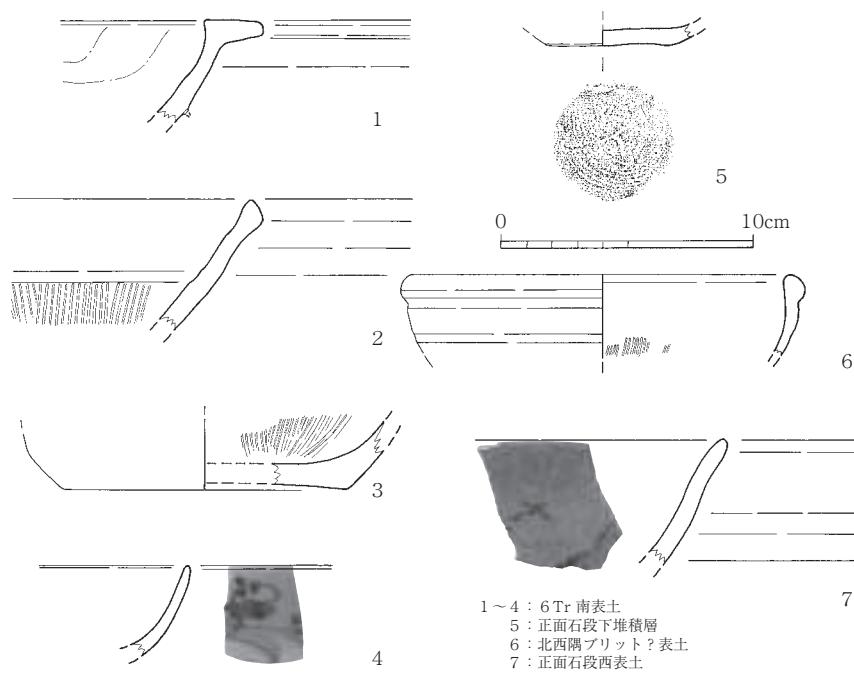
東西石組溝出土遺物 (図版42、第77図) 石組土坑の直ぐ南には東西方向に17mほどの長さの石組水路が置かれていた。調査時に露出していたもので、当然古い遺構ではなかろうと、精査を怠っている。長大な石垣と一連となっているとはいえ、その最上部に置かれた構造物であり、石垣構築との同時性は云々できないといえる。

第77図1～8はこの溝の「上層」と注記があるが溝内部の発掘を行っておらず、「溝内表採」というべきであろう。9～12は溝周辺で「表採」した遺物である。

1～4・8・9～11が陶器、5～7・12が磁器である。1は口縁部を断面方形に近くシャープに作り出す摺鉢で、内面に小さな段を付すなど、丁寧に造作されている。胎土は暗灰色緻密、器表には暗茶褐色に発色する釉を施す。2は摺鉢の片口部であるために本来の形状ではない。口縁部を外側に折り曲げて玉縁状とするもので、胎土は灰赤褐色の緻密なもの。器表には暗茶褐色に発色する釉を施し、調整は雑な感がある。3・4も摺鉢。3は赤味帯びる灰色緻密な胎土で、内面は本来無釉であるあるいはすり減って施釉部がとんだものか暗灰色を呈し、外面には底面まで含めて暗茶褐色に発色する釉が掛かる。ただ、体部下位には部分的に露胎となるところがわずかにある。4は胎土緻密で、器肉・内面が赤味の強い灰赤褐色となる。内面はあまりすり減っていないが無釉、外面は淡暗茶褐色に発色する釉が掛かるが、高台畳付から外底面にかけては露胎となる。外方に踏ん張るしっかりした高台をもち、3・4ともに内面に重ね焼きの痕跡がほぼ同じ位置に残る。

5は低く小振りの高台をもつ皿形の底部片。畠付を含めて総釉であるが、残存部外端の匙面状の凹部が露胎となる。釉は青味をもって発色し、透明感がある。6は外面に蛸唐草を陽刻する紅皿。7は染付鉢で、外面には山水と思われる描画があり、見込の文様は不明。見込圈線から放射状に描かれた線の部分は内側に凸となっている。底部は蛇の目凹形高台となる。

8は青緑釉陶器と呼ばれる唐津焼で、胎土は灰白色



第78図 その他の出土遺物実測図 (1/3)

緻密、見込を蛇の目に釉剥ぎしている。

9は暗灰色緻密な胎土をもつ陶器で、高台の形状がシャープでとても整美である。内外全面に薄い透明釉を施して後に畳付の釉を削り取ったようである。高台付け根など釉が溜まる部位では一部白濁する。内面には0.5~1cmほどの橢円形に近い形状の目痕が4個所に残り、その縁も黄白色化。茶黒色とでもいうような発色の意味不明の単純な施文が3単位残る。10・11は陶器摺鉢。10は口縁部をく字形に外折するもので、暗灰色緻密な胎土をもち、灰茶褐色に発色する釉を内面全体と外面の一部に施す。11はやや内傾する高い高台をもつ底部片で、胎土は灰茶褐色緻密なものである。高台外縁付近から底部に掛けては露胎で暗灰褐色に、以上の施釉部は暗褐色~茶黒色に発色する。スリ目はかなりすり減っているが、まだ目痕が残っている。

12は大型の椀であろうか。畳付のみ露胎のようで灰黒色となっている。見込外周に発色の薄い二重圈線を巡らせてその内側に橋のような花文を単独で置く。圈線上の文様は残存部が少なく、よくわからない。

表採等の出土遺物（図版42、第78図） その他表採に近い土器を紹介する。

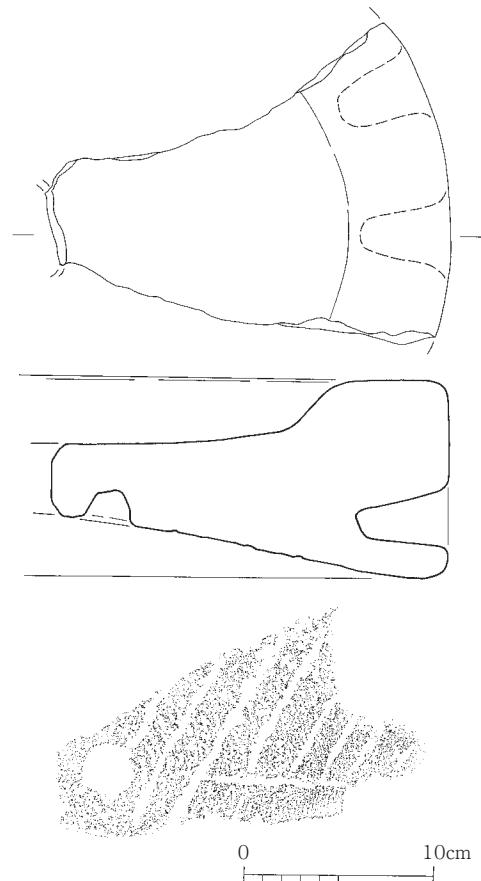
1~4は「6トレンチ南表土」採集で、1~3は陶器、5は土師器である。1は口縁部を外方へ水平に拡張するもので、胎土は暗灰色緻密、灰茶褐色釉の上に灰黄褐色となる釉を部分的に垂らす。外面下端付近に別個体の小片が熔着している。2は口縁部が小さな玉縁状となる摺鉢。胎土は暗灰色の非常に緻密なもので、暗茶褐色釉が全体に掛かり、部分的に灰赤色に発色する。スリ目は幅細く深い。3は摺鉢底部小片で、これも胎土は暗灰色緻密なものである。底部のスリ目の内、3~4本に赤色顔料が残る。4は染付小片である。小椀であろうか、草花文を描く。

5は「正面石段下堆積層」出土。底部がほぼ完存する土師器皿であるが、器表の摩滅が進んでいる。胎土・作りともに良好。

6は「北西隅G」出土とあるが場所がわからない。陶器小型摺鉢で、灰色の胎土は非常に緻密。玉縁状となる口縁部外上面が黄緑色に近いほかは暗茶褐色となる。調整も非常に丁寧である。

7は「正面石段西表土」とあり、主屋の西下から出土したもの。胎土は暗灰色緻密なもので、透明釉を薄く掛けるようである。文様は一部分だけであるが、左側は飛ぶ鳥であろう。右下は山水か。焼成不良の染付と思われる。

石製品（図版42、第79図） 注記ラベルが不明となっていて、出土地点がわからない安岩製の石臼片。上臼で、上面の外縁5cmほどを残して中央側が最大で3.5cmほど凹んでいて、下面の芯棒受けを基準とすれば、直径35cmほどに復元できる。厚さは最大で10.5cmである。図左端の直線部はものくぼりの一辺で、その付近の厚さは4cmほどである。下面の目はすり減り、芯棒受けの内部が黒色化する。側面に挽手孔が二つある。図で断面に示したものが当初の孔であろうが中心部から下位に位置していて、そのためか下端が欠損している。他方の孔は下面から彫り込んだような形となる。横正面から見ると、前者は円形、後者は長方形となる。



第79図 石製品実測図（1/4）

(4) 小 結

今回の調査で出土した最も古い遺物は、「母屋南半堆積層」出土の白磁口禿皿^{註1}で通常14世紀代とされるが、小片で、かつ堆積層からの出土であり位置づけは困難である。次いで、柱穴P 1出土の染付皿のように体部が直線的に開き、口縁部付近で小さく内彎する形態は17世紀中葉頃に比定できるもの^{註1}のようである。また、1トレンチで検出した石垣付近から出土した陶器についても、古拙の感があり、17世紀代に比定してよいものと思われる。冒頭に記したように、宇都宮氏の没落の後に筑前へ逃亡した白川信元は、黒田氏に許されて帰村、細川時代の元和8年（1622）の『小倉藩人畜改帳』に惣庄屋として記載されている。信元の父重秀の時代に宇都宮鎮房（1536－1588）から伊良原等の所領を与えられて伊良原に居住したとするならば、16世紀後半のこととなるが、その頃の出土遺物はわからないというのが実情である。あるいは、柱穴P 2出土の備前焼摺鉢を比定できるのかも知れないが、当該期の遺物があまりに少ない。ただ、元和以降はこの地に居住した可能性が高いであろう。

1トレンチで検出した地中の石組が17世紀に構築されたものとしても、その意味は不明といわざるを得ない。先述したように、1トレンチ付近は北東から南西に向かって地山が迫り出していて、この石組が造成のための擁壁であれば西あるいは南西に面を向けて積み上げるべきであるが、本来地形が低くなる北側に向かって積み上げられている。このことから、この地に居住するに当たって、母屋・納屋のあった付近の造成を最優先したものと思われる。現状でこの庄屋敷跡は下伊良原の産土社である高木神社のほぼ真東に位置している。惣庄屋の屋敷地を決定する上で神社の存在が大きく影響したことは十分予想しうるであろう。

5トレンチの下層から出土した土器群はほぼ地山直上であると認識している。それらの年代は蛇の目凹形高台をもつ染付からおおよそ18世紀後半以降の年代が与えられる。口縁部断面がY字状となる高取系摺鉢は18世紀後葉をもって終焉を迎えるという編年案が出されている。^{註2}福岡市内の調査成果であるが、同じ高取系雜器ということで援用できるのであれば、この屋敷地北端付近の造成は18世紀後葉に絞ってよいことになる。

また、巨大な南北石垣の直ぐ背面に設定した6トレンチでは、トレンチ中層と下層出土の瓦質土器が同一個体であると判断している。表層はともかく、客土は一気に埋めたということであろう。ここでも、蛇の目凹形高台のソバ猪口や広東椀の出土から18世紀後半～19世紀前半に造成されたといえる。したがって、現状で見える巨大な石垣は、少なくとも6トレンチ付近から北は18世紀後半以降に追加されたものであるといえる。4トレンチ東の高まりは納屋の北西をかすめて正面石段に取り付いていたようであるが、その南はまた谷が入り込んでいたようで、この南側の谷の造成が17世紀の最初の土木工事であったのだろう。そして、江戸後期に大きく拡大したものと思われる。1・2トレンチの中間付近で南北石垣の石材が異なっていて、北側は正面石段まで割った巨石を多用、以南は小振りの自然石を積み上げている。この割った巨石も江戸後期というより、それ以降の構造物である可能性も考えられるが、矢穴は古風であり、検討を有する。

註

- 1 野上建紀「磁器の編年（色絵以外）」（『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』、2000）
- 2 秦憲二「第2章 近世・近代篇」（『福岡県文化財調査報告書』第221集 西神町遺跡Ⅸ、2009）
- 3 当館岡寺良氏の教示による。



3 下伊良原宮園遺跡

(1) はじめに

下伊良原庄屋屋敷跡の南約200m余の山麓に位置し、その南には小川を挟んで地区唯一の寺院明秀寺があった。平成7年にダム建設に関連して作成された地形図では、調査対象地は自然地形が残る山林として記されているが、現状は25×20mほどの開墾された平地で、西端は南北方向に石垣が築かれて杉・桧が植林されていた。東端は掘削されたまま石垣などの養生がされず、崖となっていた。既に試掘調査を行って柱穴等を確認して発掘調査対象地としていたが、ダム湖東側に計画された町道建設工事のための仮設道路用地として急ぎ使用する工事工程であったために、工事を優先して発掘調査を保留していた。

仮設道路のための厚い客土を除去したとの連絡を受けて、平成27年1月13日から重機を入れて表土掘削を行った。その後、2月3日から人力を投入したが、年度末のことでもあり、26年度の作業としては試掘トレーニングの再掘削、新たに設定した3本のトレーニングの掘削及び伐根などで終了した。

同年4月21日に調査を再開、7月7日に機材を撤収して調査を終了した。調査の過程で石垣・石列が複数現れるに至ったが、調査期間の関係で全てを人力で図化できず、一部は航空写真を使用して図化を行った部分がある。調査面積は約500m²。

因みに、下伊良原高木神社の由来に記された旧社地「宮園」はこの付近を指すものと考えているが、それに相応しい古い時期の遺構・遺物はまったく確認できなかった。

(2) 層序

調査区北東部には一部自然地形を思わせる斜面が残り、その裾に平坦地が形成されていた。斜面・平坦地北東部は表土直下で花崗岩バイラン土が現れたことから、ここもある程度の掘削を受けているものと思われる。斜面の南には南北方向に幅2mほどの狭い平坦部があって一部をグリッド状に発掘したが、礫が散乱した状態であったのでそれ以上拡張していない。その東は地山が露出する崖面となっていた。調査対象地中央付近に北東-南西方向の幅3.5~4mほどの試掘トレーニングがあり、その北東隅付近から東側にも幅1m強の試掘溝が入れられていた。この幅の狭い試掘溝を西へ延長して1トレーニングを設定し、その西側で多くの礫が現れたことから2・3トレーニングを設定した。

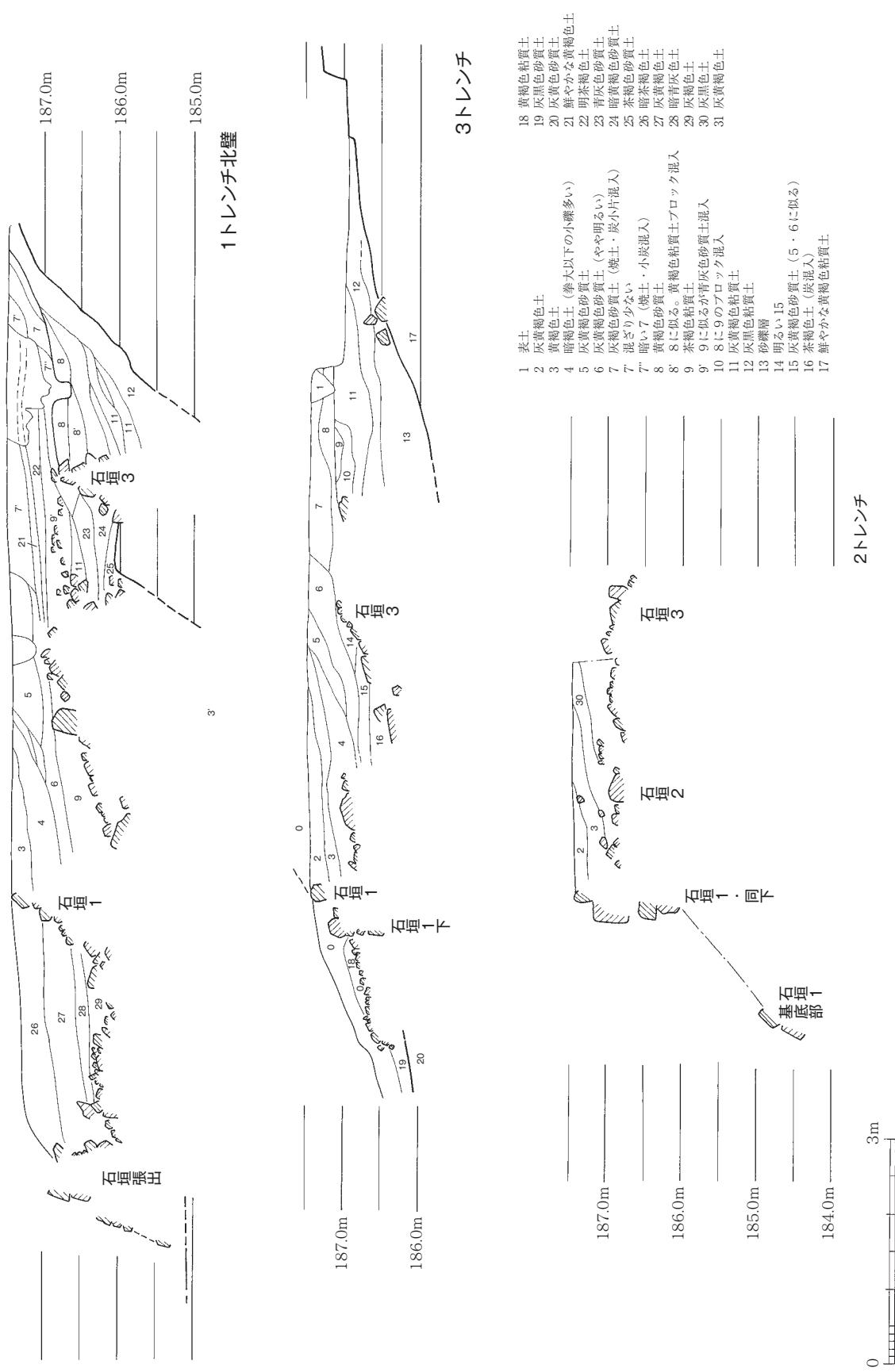


調査前遠景（西から）



表土掘削作業の様子

第81図 東西土層実測図 (1/80)



1 トレンチ（図版45・47、第81図） 試掘トレンチの西端付近から地山は急落し、1.6mほどの深さまで掘削したところで湧水のために掘削を断念した。この段落ちの肩から3mほど西で石積みが現れ、これは後述する石垣3の延長で、その前面（西側）では明らかに地山と思われる鮮やかな層を確認していることから、東側の湧水部分は石垣3の基底部を安定させるために前面よりわずかに掘り込んでいるものと思われる。この石垣3は高さ0.8mほどであるが、現状で背面（東側）の土層ラインに水平となるものがないことから平坦面造成のために築いた構造物である確証はない。

石垣3の前面は0.6mほど西でさらに落ちていく。この段落ちまで石垣3の西側は1m余りの範囲に土が堆積するが、さらに西側は大量の礫で覆われていて発掘を断念した。1トレンチの北側は、巨大な礫を含む大小の礫が乱雑に堆積していて遺跡北東部の谷からの土石流によるものであると考えている。石垣3の礫群も同じものであろう。

花崗岩バイラン土が露出している部分から9mほどの位置に、土石流を覆う堆積の最上層に石垣1が築かれるが、この石垣はダム建設に伴う地形改変以前は露出していたと考えられるものである。調査区南端まで連続し、1トレンチ北の畦以北ははっきりしない。この土層図作成部分でも石を組み上げたというよりは単に石を置いたという程度のものである。石垣1の西5mの付近にも石垣があるが、これは1トレンチの南2m余りのところで石垣1から分岐するもので石垣1張出と呼んでおく。土層図作成部分ではこの石垣1張出の上2段とそれ以下では明らかに石材・積み方が異なっている（図版43・44参照）。

さて、この1トレンチ北壁の堆積層であるが、石垣1と同張出の間は水平に近い単純な堆積が見られ、平坦面を拡張したものと思われる。最下層に散乱する礫は石垣1張出の石積みの不整合面とレベルが揃い、土石流に関連して形成された礫層を埋めたということであろう。

石垣3の背面（東側）では地山に張り付くように0.2～0.5mの厚さで灰褐色～灰黒色土が見られる。これは古墳の盛土下で「旧地表」と呼ぶものに似ており、造成時の表層を剥がすと埋め込んだものと思われる。また、石垣3の上端付近の土層ラインを境に上層が茶褐色系、下層が黄褐色系と上下で明らかに堆積層の様子が異なっている。このラインが一つの鍵層となるのである。また、石垣3東側の最上層に幅1.6m、最大の深さ0.6m近い不整形の落ち込みがあるが、これは下層に粗砂と小礫が顕著な溝状の遺構で、5mほどの長さを確認しただけである。遺物はないが、比較的新しいものと判断している。

なお、この土層には下伊良原高木神社跡や下伊良原庄屋敷跡で見られた大量の砂を使用した痕跡が全く見られない。

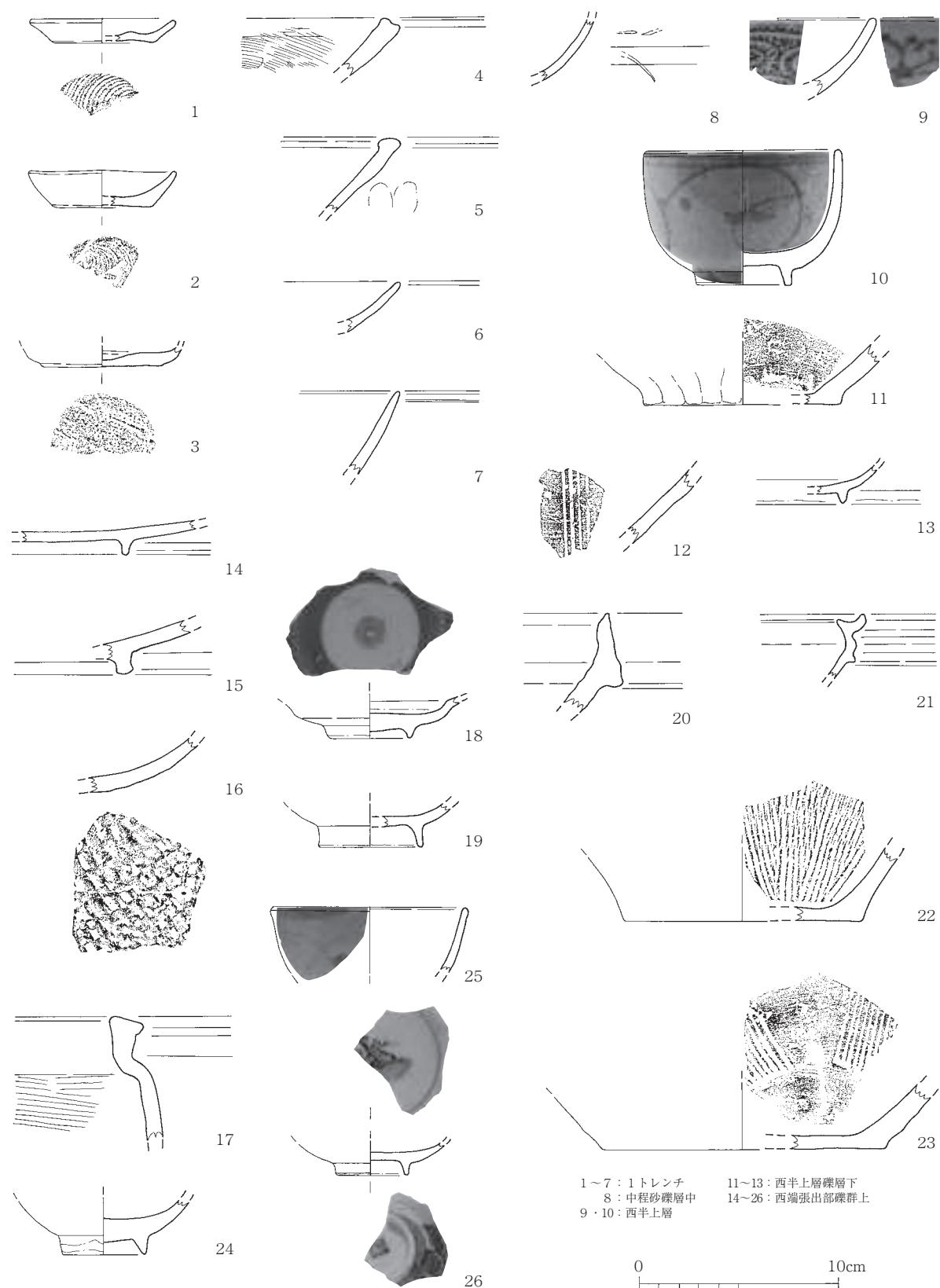
出土遺物

土器等（図版54、第82図） 1～7は「1トレンチ」、8は「中程砂礫層中」、9・10は「西半上層」、11～13は「西半上層礫層下」、14～26は「西端張出部礫群上」の注記がある。

1～7は最も日付が遡ることから、このトレンチ掘削当初のもので、上層出土である。1～3は土師器皿。1は復元口径7.1cm、器高1.2cmを測り。器壁が薄く、体部が直線的に開く。2は同7.2cm、1.8cmで、底部が肉厚となり、体部が内彎しつつ立ち上がって深くなる。3点はいずれも胎土・作りとともに良好で、底部外面を回転糸切りで処理している。4は土師質、5は瓦質の摺鉢であろう。4は口縁部に大きな変化を加えず、わずかに肥厚する。器肉が灰赤色、器表は黒色化、胎土は良好といつてよい。5は口縁部を小さく内側へ折り曲げるもので、器肉の芯が灰白色、内外の器表近くが黒色となる。外面に指撫で痕が見える。

6は暗灰色緻密な胎土をもつ陶器で、器表に暗灰色に発色する釉が掛かる小片。唐津焼であろうか。7は龍泉窯系青磁碗で、釉は淡灰緑色といった発色をする。残存部は無文。

8も青磁碗小片で、外面に雷文・片切り彫りの蓮弁文がわずかに見える。釉は青味強く発色。
9は肉厚となる染付で、内面に蛸唐草が、外面にも唐草文が描かれる。10は胎土が暗灰色となる焼成不良の染付碗。これも肉厚で外面にはシンプルな唐草文が描かれ、内面は無文。見込に窯土が付着し、目痕のようなものも2個所見える。置付だけが露胎となる。



第82図 1トレンチ出土遺物器実測図 (1/3)

11は器肉が灰赤色となる土師質の摺鉢で、外面は黒色化する。内面は使用によってすり減り、底部外周にわずかにスリ目が残る。12は瓦質摺鉢の小片で、器表は暗灰色となる。13は高台が断面三角形、その先端が露胎となる白磁で、所謂白磁E類小片である。

14・15は肉厚が異なるが高台付の浅い盤形の器形となるもの。14は胎土精良で灰黄褐色、器表内外が灰黒色となる。瓦質土器を意図したものが酸化炎焼成となったものか。15は器肉の芯が黒色、器表近くが黄白色となるもので、外面は灰褐色、内面は黄白色となる。いずれも内面は籠磨きで仕上げるようである。16は瓦質鍋の底部で、灰白色緻密な胎土をもち、外面に格子叩きが残り煤が付着する。17は本来瓦質土器であろうが、非常に硬く須恵器のように焼き上がる甕。口縁部を肥厚させて外傾する面を付し、その先端をさらに小さく突出させる。体部内面に刷毛目が残る。

18～22は陶器。18は体部下端が内彎、上半が屈曲外反して直線的に延びる器形。見込を蛇の目に釉剥ぎし、疊付とともに露胎とする。灰黄褐色の緻密な胎土をもち、釉は暗茶褐色に発色する。19は灰黄色の緻密な胎土をもつ碗で、釉は緑味帯びる灰青色透明に発色する。20は備前焼摺鉢の小片。胎土良好で、器肉は暗赤紫色となるが、内外器表近くだけが黒紫色といったような色となる。21は口縁部を拡張し、内側上方及び外側上方へつまみ出して断面Y字形とする摺鉢。灰黒色緻密な胎土で、内外面ともに暗茶褐色に発色する釉が掛かる。22はいかにも新しそうな摺鉢底部片。23は全面が灰赤色となる備前焼摺鉢。2mmほどの砂粒をいくつか交えるが、それを除けばなお良好といつよい胎土である。内面は使用によってすり減る。体部の外面は雑な感のある横撫で、外底面は無調整のようである。

24～26は磁器。24は青味の強い白濁釉が掛かり、高台側縁から高台内にかけて露胎である。残存部に圈線など全くないことから白磁の可能性が高いものと思われる。25は焼成の関係で文様が淡い灰青色、地が青味のある白濁したものとなる。26は小碗あるいは蓋か。

2トレンチ（図版48、第81図） 調査区南西付近に設定した。これは土層確認のためでなく、測量杭を保存するために畦を設定、その南壁の土層を図化したものである。この辺りはほぼ全面に礫が現れていて、その上位の堆積層である。

出土遺物

土器等（第83図1～3） いずれも「石垣2上」の注記がある。1は青磁碗で、釉は灰味強い明青色に発色する。外面口縁部下に雷文が刻まれ、内面にも意匠不明の文様がスタンプされるようである。2は唐津焼青緑釉陶器片。胎土精良で、内面に灰味の強い灰青色、淡い外面に灰緑色釉が掛かる。3は染付。外面口縁部下に幅広の圈線1条と細い圈線5条を、体部下位にも細線6条を入れてその間に主文様を置くが、主文は丸文を組み合わせたもので詳細不明である。

3トレンチ（図版46、第81図） 1トレンチの南西3mほどの位置に開けた小トレンチである。1トレンチほどの急落ではないが、掘削した範囲で1.6mの深さまでの地山の落ちを確認している。緩やかに下降するバイラン土の直上はわずかな小児頭大の角礫や多くの小礫を含む灰褐色の締まった層、その上は灰黒色のやはり締まった層がほぼ水平に堆積していて、この黒色系の土層が石垣3の地山である可能性があるが、掘削が及ばず確認していない。

1トレンチの石垣3背面の黄褐色土系埋土に相当する層は試掘トレンチ西壁の床上のラインであろう。1トレンチより0.2mほど高くなっているが、連続する石垣3の高さにほぼ揃うという点で共通する。

1トレンチで石垣3の西側1m強で最上層から掘り込まれた深さ0.4mほどの深い落ち込みは、

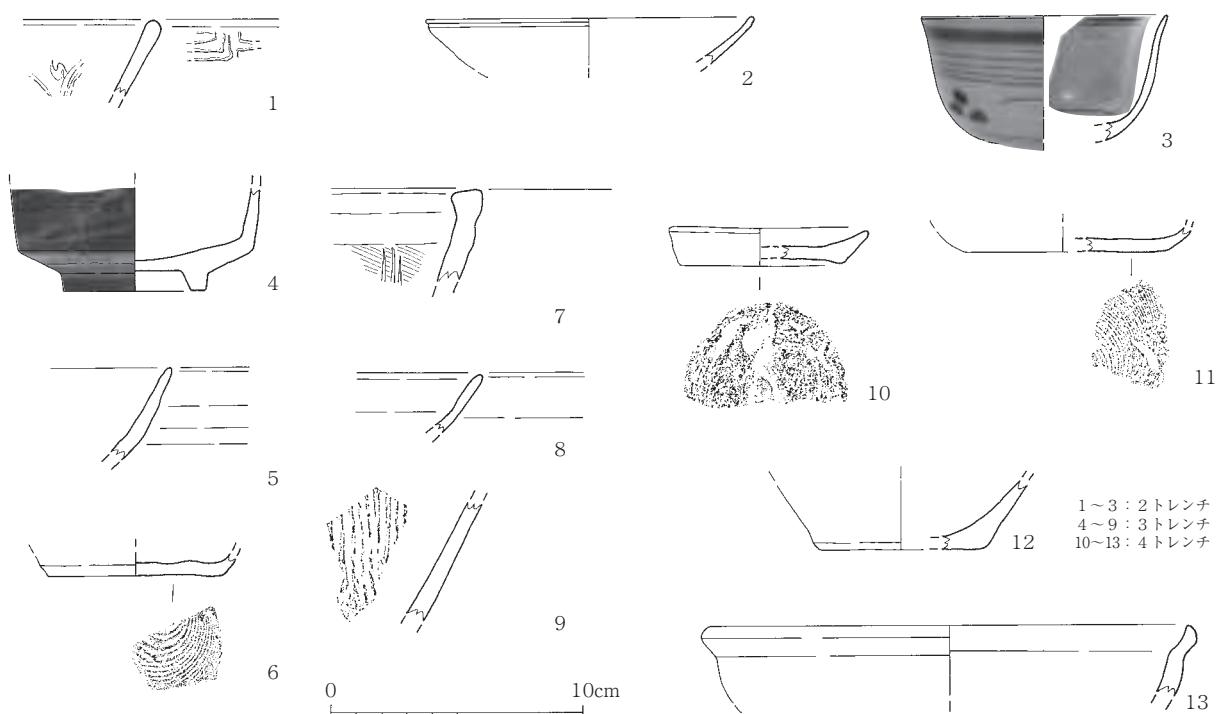
この3トレンチでは石垣3の西0.6mほどの掘り込みに繋がるようであるが、両トレンチとともにその掘り込みが石垣1の東4mほどに位置することから、それらは石垣1に伴うものであろうと思われる。

出土遺物

土器等（第83図4～9）4は「上層」出土の陶器碗で1/3が残存する。胎土は暗灰色～暗灰赤色の緻密なもので、体部は下位で強く屈曲する。屈曲部下半から高台内にかけて露胎で灰赤褐色に、露胎部直上から屈曲部までは暗灰緑色といった発色となる。屈曲部以上は所謂刷毛目で、灰白色釉・灰茶褐色釉が横位に小さく波打って描かれる。内面は屈曲部以上に暗茶褐色の釉が掛かり、底面は基本的に露胎で、屈曲部に熔着痕がある。

5～9は「下層」出土。5は土師器碗あるいは杯の小片で、全体に暗灰色となる。胎土は良好。6は土師器皿で、これも胎土良好。7は土師質の摺鉢小片。口縁部を内側へ肥厚させて断面三角形とし、外面は多くが剥離する。赤変していて、火熱に掛かったようである。8は朝鮮製陶器小片。残存部下端付近で屈曲し、口縁部内面に面を作る。青味を帯びる灰色に発色する釉を掛け、胎土は緻密であるが造作が雑な感となる。9は粗いスリ目を刻む陶器摺鉢で、暗灰茶褐色となる釉を掛けた。

4トレンチ（図版46）1トレンチの北約5mに設定した略東西方向のトレンチ。花崗岩バイラン土の段落ちを確認したが、西側は大小の大量の礫があったために掘削を止めたている。図示していないが、段落ち付近は暗黄褐色系の土が水平に近い状態で堆積、その上方に黄褐色系、さらに礫に近い付近で最上層に茶褐色系の層が見え、茶褐色系の土が土石流に伴うものであろう。1トレンチで見えたバイラン土を被覆するような旧地表と思われる土層はなく、ここは明らかに掘削された地形といえよう。花崗岩バイラン土の段落ちは1.1mを測る。

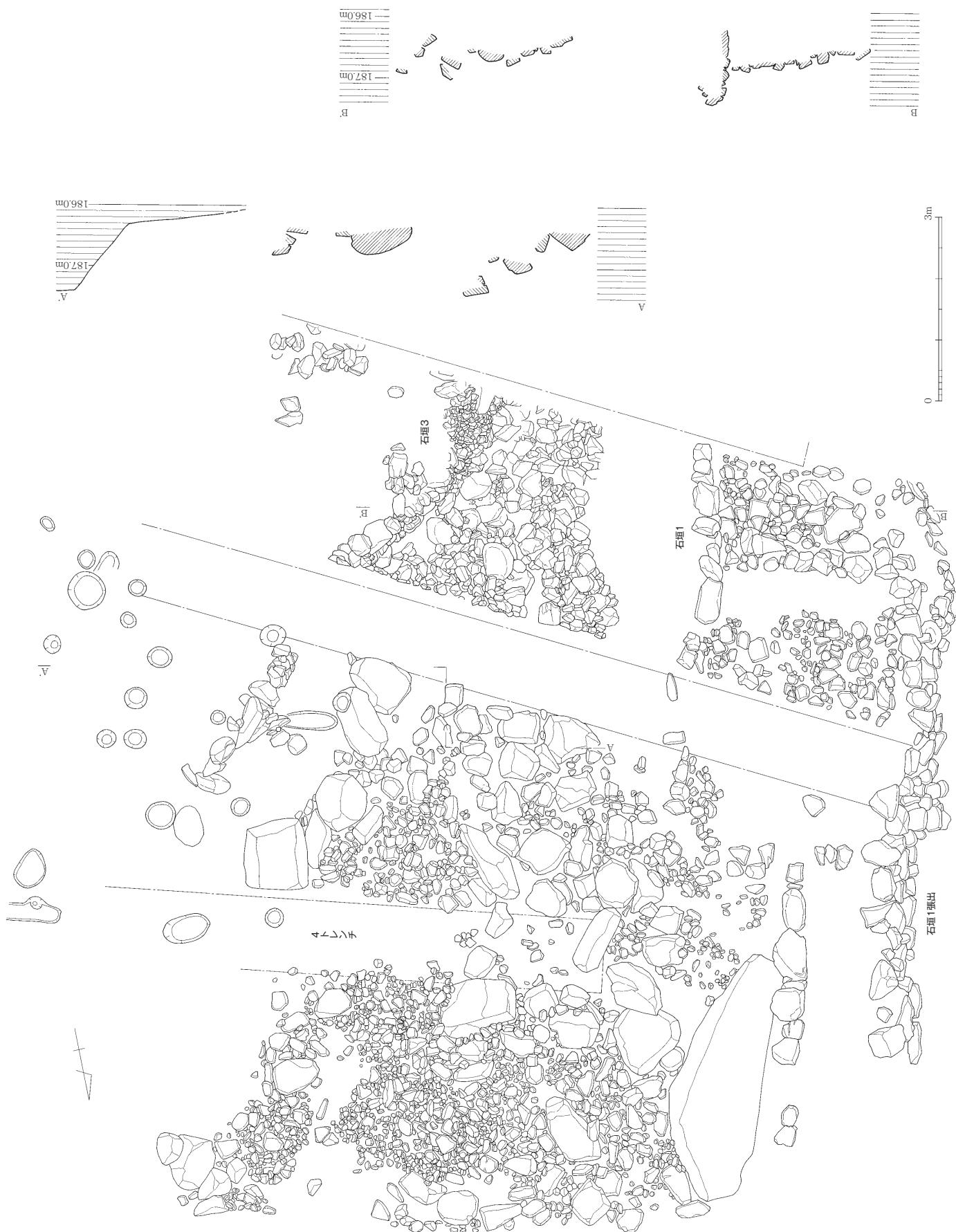


第83図 2～4トレンチ出土遺物実測図 (1/3)

第 84 図 石垣 1 ~ 3 南半実測図 (1/40)



第85図 石垣1～3北半実測図 (1/40)



出土遺物

土器等（第83図10～13） 10～12は土師器。10は胎土良好であるが作りは雑な感がある皿の1/2の残片。11も胎土は良好といってよい皿底部片。12は器表が荒れる底部片で、復元径に不安がある。13は本来瓦質土器を意図したものが須恵質に焼き上がった鍋。

（3）遺構と遺物

検出した遺構は複数の石垣、土坑1基、若干の柱穴である。

1) 石垣・石列

石垣1（図版43・44、第84・85図） 表土掘削時に平坦となる調査対象地の西端に覗いていた石垣で、ダム関係の工事が及ぶ以前は露出していたと思われる構造物である。ただ、幾度かの積み直しがなされていて、最上段を石垣1、そのやや下位にあって部分的に大きく孕んだものを石垣1下、そこから大きく西へ外れて弧を描く最下段を石垣1基底部、1トレンチ付近で西へ直角に張り出した部分を石垣1張出としてそれぞれ説明を加える。石垣1・同下・同基底部は写真で見るように調査区南端付近では連続している。

最上段を構成する石垣1としたものは、一部では石垣というよりは石列と呼ぶほうが相応しい部分がある。石垣1下のやや東にずれて低い部分では1段、高いところでも2段程度の大小の礫を直線的に配している。南端から5m付近まではやや東にずれながらも石垣1下の上に置かれるが、そこから北は石垣1下が大きく膨らんでいるものの石垣1はそれに関わらず直線的に置かれる。石垣1張出が取り付く付近では、石垣1・石垣1下は再びしっかりと積み上げられているが、同張出の内部は再び一段の石を置く形だけのものとなり、南端から17mの長さで終わる。北端の石材の北西2mほどのところに土石流によるものと思われる巨大な花崗岩が立てられたようにあることから、巨石へ向けて屈曲していたのかも知れないが、東西方向の石列が不明瞭となっていて、判然としない。

石垣1下（図版43・44・46、第84・85図） 上記したように南端付近では石垣1・同基底部と一連のものとなっているが、3トレンチ南付近で大きく膨らんで西に傾いている。これは調査区北端にみられる土石流によって変形したものであろうか。3トレンチ北の石垣1張出が取り付く付近では再び整った石垣となっていて、この部分は再構築したものである可能性が高いと考えている。

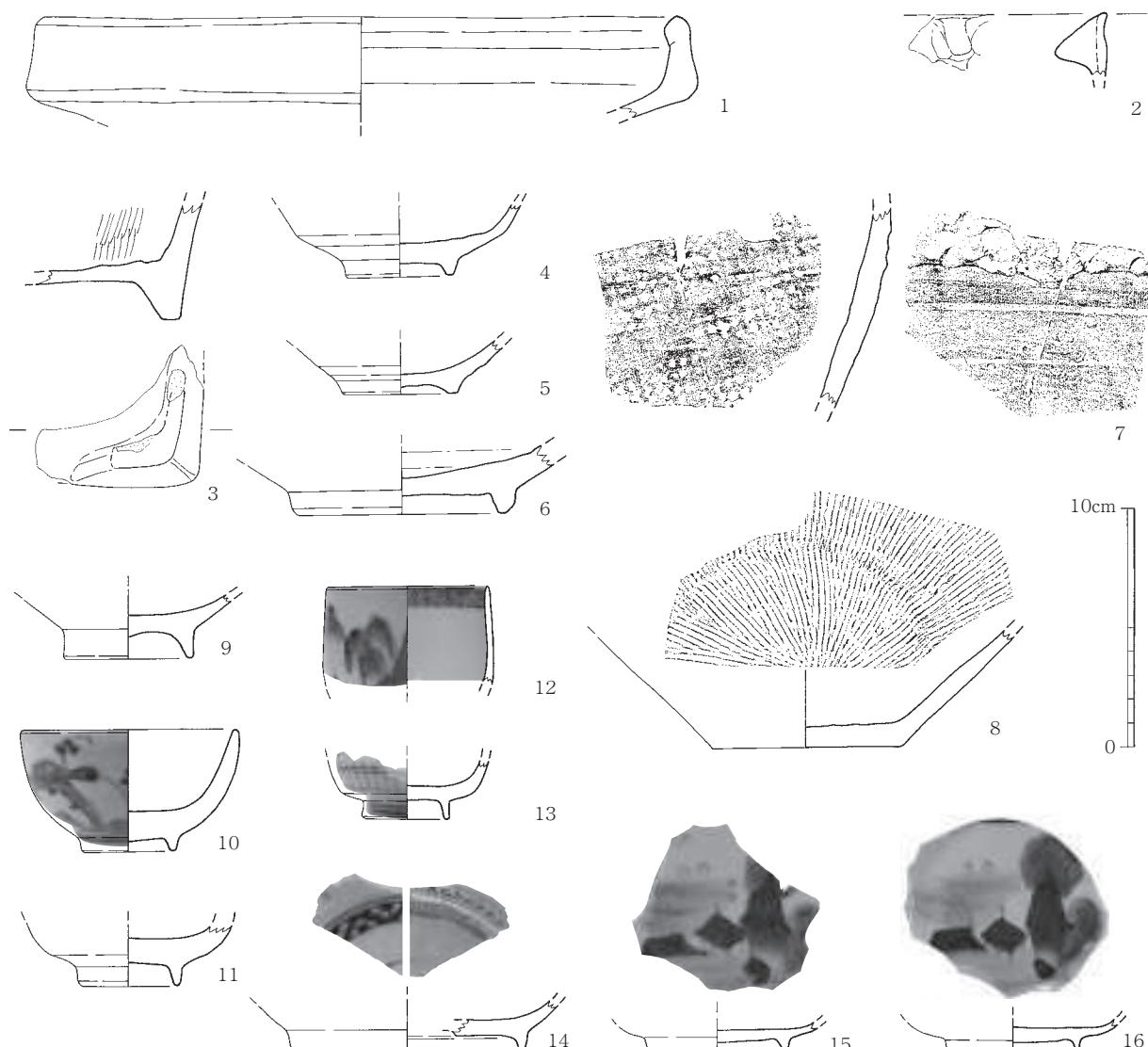
その北側－張出内部に当たる部分ではしっかりとした石垣を確認できていない。

石垣1基底部（図版43・44・46、第84・85図） 南端付近で石垣1・同下と一連となっているが、石垣1とは最大で5mほど隔たるもの、石垣1張出の南北辺と見かけ上は再び一連の石組となる。図版43・44で見るように、石垣1下が大きく膨らむ付近から南側は基底部の石材を立てて使用する整った形状を残していて、直線的に配するなど本来の姿を留めているものと思われるが、そこから石垣1張出に至る間、特にその南半では積み上げたと言い難い状況である。張出の南付近から張出中程にかけては石材を立てずに平積みするなど明らかに異なった工法で積み上げている。3トレンチ西付近や1トレンチ付近以北は積み上げた状況ではなく、土石流のままあるいはその上に張出の石垣を積み上げている。従って、本来の石垣1基底部と呼ぶべき部分は、同下が大きく膨らむ部分より南側を指すべきであろう。2トレンチ土層観察部分では石垣1頂部と同基底部下端の比高差は約3mを測り、石垣1下端と同基底部頂部との間に比高1mの自然堆積が露出する部分がある。

石垣1張出（図版43・44・46、第85図） 1 トレンチ南付近から石垣1に対して直角に近く西側へ3mほど張出し、やはりほぼ直角に屈曲して北へ8m近く延びる石垣。検出時は特に南辺南側に小礫が多く捨てられたような状態であった。内部は1トレンチで見るよう、下位は大小の礫が散乱して土石流の痕跡を思わせるが、それ以上では客土がなされていた。南北辺の南半は先述したように石材を平積みにするが、最上段の1～2段は石材の大きさが明らかに異なり、調査地北端では石垣全体が南半上段と一連のもののようにある。この大振りの石材を積み上げた部分は後補したと見てよいであろう。先述したように、南半下位の石積みは小振りで乱雑な感があり、北半下位は人工的なものとは思えない。1トレンチでは、張出頂部から基底部までの高さは1.6mを測るが、張出西側を重機で掘削してさらに0.2m下位で花崗岩バイラン土を確認していて、最大で1.8mほどの高さに復元できる。

なお、この北端付近ではやや東に南北5mほどの石列があるが、これは土石流で運ばれた巨石の裾に置いて区画したもの思われ、積み上げたものではない。

1トレンチではこの張出部の上端付近にあった多くの礫を除去したが、その際の出土遺物を第82図14～26に図示している。



第86図 南端石垣1・2間出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物

土器（第86・87図） 調査区南端付近、2トレンチ以南の石垣1・2の間から出土したもの。この付近の石垣1は基底部から頂部まで一連で残っていて、その東の深い位置に石垣2が置かれる。したがって石垣2を廃し、石垣1を構築した際に埋められた遺物といえる。

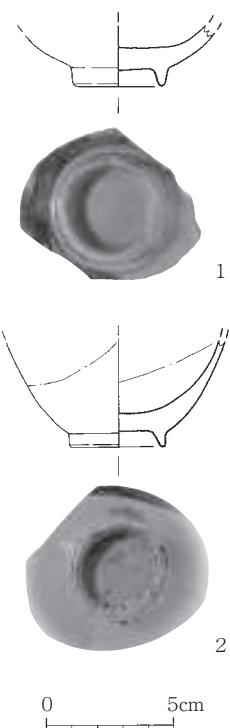
第86図1は土師器焙烙小片で、復元口径に不安がある。白色微砂粒を交えるが胎土・造作は良好。明黄褐色を呈するが、内底面は黒変、外面も煤けていて外底面は器表が荒れる。

2は瓦質のカマドあるいは七輪。口縁部外面を凹ませているが、調整痕は見えず、内面は横刷毛である。胎土は精良で灰黄色に近い。平面は円形になるよう、口縁部に接して五徳があり、口縁部内面に煤が付着する。3は平面矩形の瓦質土器で、脚付の隅部。外面は現在の燻し瓦のように銀沢をもち、器肉も精良で灰白色に近い。内面は刷毛目で仕上げ、赤変や煤などは全く見られない。

4～8は陶器。4は灰赤色緻密な胎土をもち、釉は焼成不良で灰黄色～黄白色に発色する。体部下端付近から高台内にかけては露胎、見込も蛇の目に釉剥ぎするが、これは形状が乱れる。なお、体部下端は籠削りを行い、高台は貼付のようである。5も灰黄褐色緻密な胎土をもち、内面の釉は灰白色に発色する。外面では残存部上端に釉が見えるが以下は露胎となる。なお、畳付に回転糸切り痕がわずかに残り、高台は削り出している。6も灰黄色の緻密な胎土となり、釉は暗茶褐色～黒色に発色する。総釉の後に見込は蛇の目に釉剥ぎ、畳付とその外側を面取りしてここも釉を剥ぐが、畠付の一部に砂が付着する。7は唐津焼甕の体部片で、外面には指押さえで変化を加える非常に低い突帯を2条巡らせ、内面には随所に格子文当て具痕が残る。なお、突帯下に甘い沈線が2条あるが、意図的なものか判断できない。外面は暗茶褐色に発色する釉が掛けられ、内面は露胎で器肉と同様灰赤色となる。8は摺鉢で、暗赤紫色の非常に緻密な胎土をもち、調整もごく丁寧に横撫でで仕上げる。施釉は見られないが、見込外周及び底部外面には重ね焼きの痕跡が残る。あまり使用されていないようである。

9は黄白色の緻密な胎土をもつ碗で、畠付だけが露胎となる。釉は焼成不良のため黄白色、白濁している。磁器であろうと考えているが確信がない。10も畠付だけが露胎となる染付小碗。外面は秋草を描き、高台内にも呉須が見える。内面は無文。11は肉厚で胎土が暗灰色となる焼成不良の染付碗。体部下位に1条の圈線が巡るが、これも褐色に発色する。内面は無文で、畠付だけが露胎となる。12は鮮やかなコバルトブルーに発色する染付で、山と寺院の屋根かと思われる文様を、内面口縁部下には連続する複線の三角文を描く。13は焼成は普通であるが、2条1単位の横線と1条の縦線を組み合わせて格子あるいは竹垣を表す。体部下端近くの屈曲部下位には珠点を間隔を置いて配する。これらの施文は全て灰緑色あるいは緑褐色といった発色をする。高台内や内面は無文で、畠付だけが露胎となる。14は見込外周に花をあしらった連続文を帶状に配し、中心にも松葉のような意味不明の文様がある。外面は下端に○・×を交互に連続している。底部は蛇の目凹形高台となる。15・16は同文のセット皿で、畠付だけが露胎。見込に家屋などの風景を描き、釉は青味をもって透明となる。

第87図は張出南で検出した礫群中出土の磁器で、張出部構築後に遺棄された遺物である。1は染付で、高台だけが露胎となる。内面は無文。2は胎土が白色、白濁する釉を全体に掛けた後に畠付だけ搔き取ったようであるが、畠付付近の一部が剥離していて熔着したものであろう。残存部上位

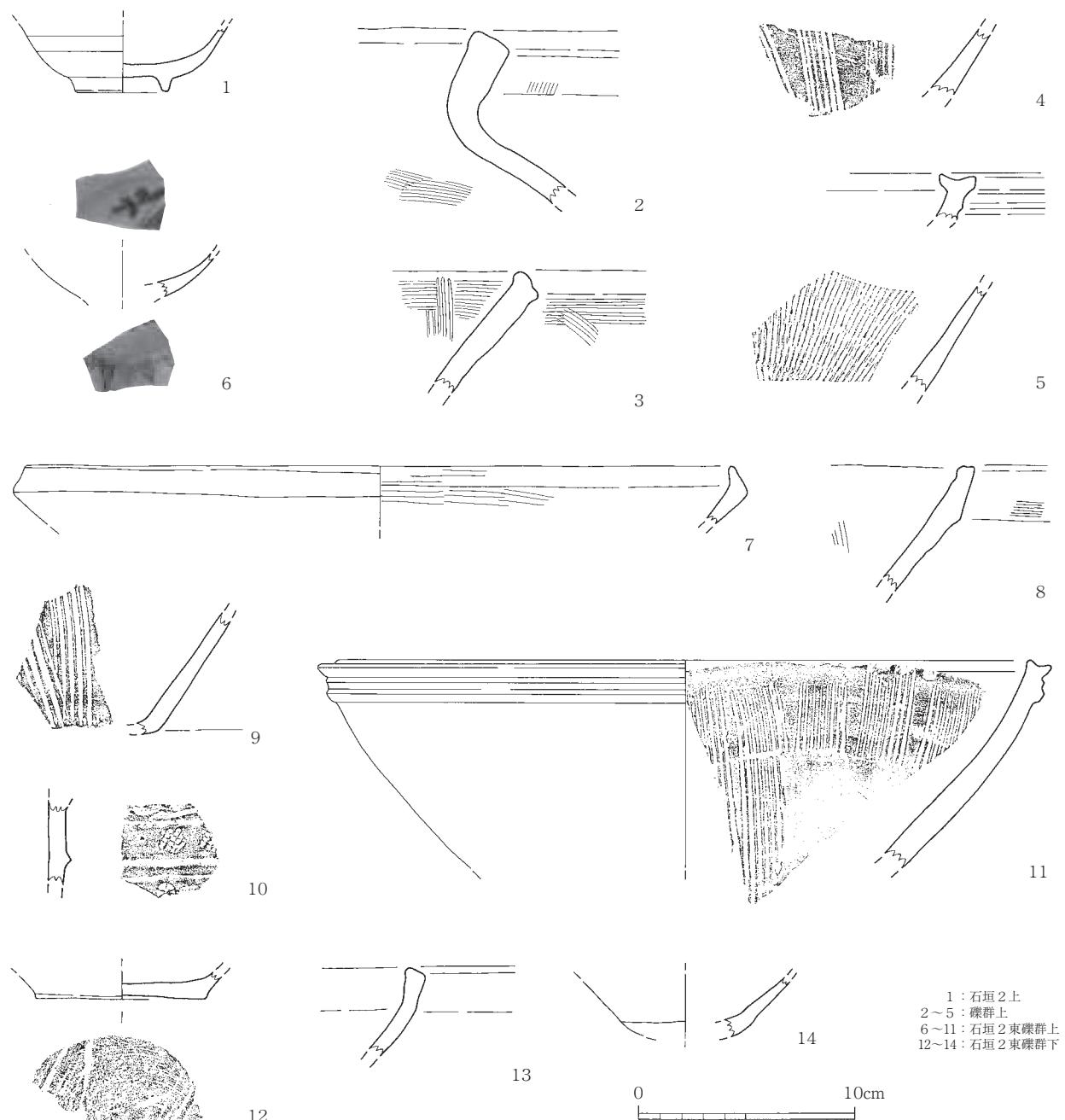


第87図
石垣1張出部南礫群中出土遺物実測図（1/3）

に暗茶褐色のペンキのような釉が掛けられた部位があって、それを縁取るように淡い灰緑色に発色する釉が掛かる部分がある。内面にも灰緑色釉が掛かる部分が残る。高台は貼付で、全体から見ていかにも新しそうな印象を受ける。

石垣2（図版43・44・47・48、第84・85図） 石垣1の東、前（西）面から1.25mを隔てて、ほぼ平行に置かれた石垣である。ただ、南側は西へ向かって緩く曲線を描いていて石垣1と接するような形となるが、交点は確認していない。また、7m近い長さまで延びるが、北端は3点の比較的大型の石材を配してそれ以上は延びずに終わる。高さは0.5mほどであるが、断面に示した位置でさらに0.1mほど下位に安定した灰黄褐色土があり、これが石垣2の地山であろうと推測している。その場合、高さは最大で0.6mほどになる。

全体を露出したものではないが、石積みは2～3段で基底部の石材は立て据え、その上は平積みにする。西側に面を揃えていてそこには中小の礫が、背面となる東側では後述する石垣3の西側に



第88図 南端出土遺物実測図 (1/3)

特に小礫を主体とする礫が埋め込まれたような状態で検出されたが、若干の「間隙」を置いたような状況で石垣2背面にも小礫が検出された。この「間隙」から茶臼片が落ち込んだような状態で出土した。

出土遺物

土器等（第88図） 1は「石垣2上」とあり、出土状態を確認できる（図版48-2参照）。実際は石垣2の上にのる礫中にあり、石垣2が本来この高さで終わるものであれば石垣が埋没した後に混入したといえる。本来、より高い構造物であった場合はまさに裏込めに混入したということもできよう。焼成の甘い陶器で、胎土は灰白色に近く、釉の発色は灰黄色～黄白色といったものである。体部下端付近から高台内外にかけてが露胎、高台は貼付のようである。

2～5は「南端礫群上」、6～11は「石垣2東礫群上」。2～5には石垣3東の礫群上から出土したものも混ざっている。2は瓦質土器甕で、口縁部を肥厚させて断面方形とする。胎土に砂粒はほとんど見えないが、緻密さを欠く。調整は雑で、器肉・器表ともに灰白色。3も瓦質の摺鉢で、これは胎土に砂粒を混入するが、やはり概ね良好といえる。器表が荒れ、全体に黄白色となる。4は灰白色となる瓦質の摺鉢で、器表に砂粒が多く浮いている。5は口縁部断面がY字形となる陶器摺鉢で、胎土は暗灰色緻密、全体に暗茶褐色となる釉が掛かる。

6はいわゆる碁笥底をもつタイプの染付小片で、小野正敏氏のいう「染付皿C群I」で、15世紀後半～16世紀に編年されている。7は土師器鉢か。胎土は良好といってよく、作りも丁寧のようであるが、二次的火熱を受けて一部が赤変、外面が大きく剥離する。小片のため復元口径に不安がある。8は器肉が灰赤色、器表内外は暗灰色～灰黒色となる。スリ目がわずかに残る土師質の摺鉢片で、胎土は良好であるが緻密さを欠き、特に外面の口縁部内面付近の一部に漆黒色の付着がある。調整は雑である。9は瓦質摺鉢の小片。胎土精良で灰白色となり、器表は全体に黒色となる。体部外面は丁寧に籠削りで仕上げ、内面にはしっかりとスリ目を刻む。10も瓦質土器で火鉢類か。胎土は灰白色で比較的良好、口縁部から内面に欠けては剥落する。黒色となる外面に斜格子と花弁のスタンプが付される。11は黄褐色の比較的良好な胎土をもつ陶器摺鉢。口縁部は内側へのつまみ出しがなく、外面に高・低・高と強弱の異なる3条の突帯を付す。内外面に掛けられた釉は暗灰赤色に発色するが、光沢はない。

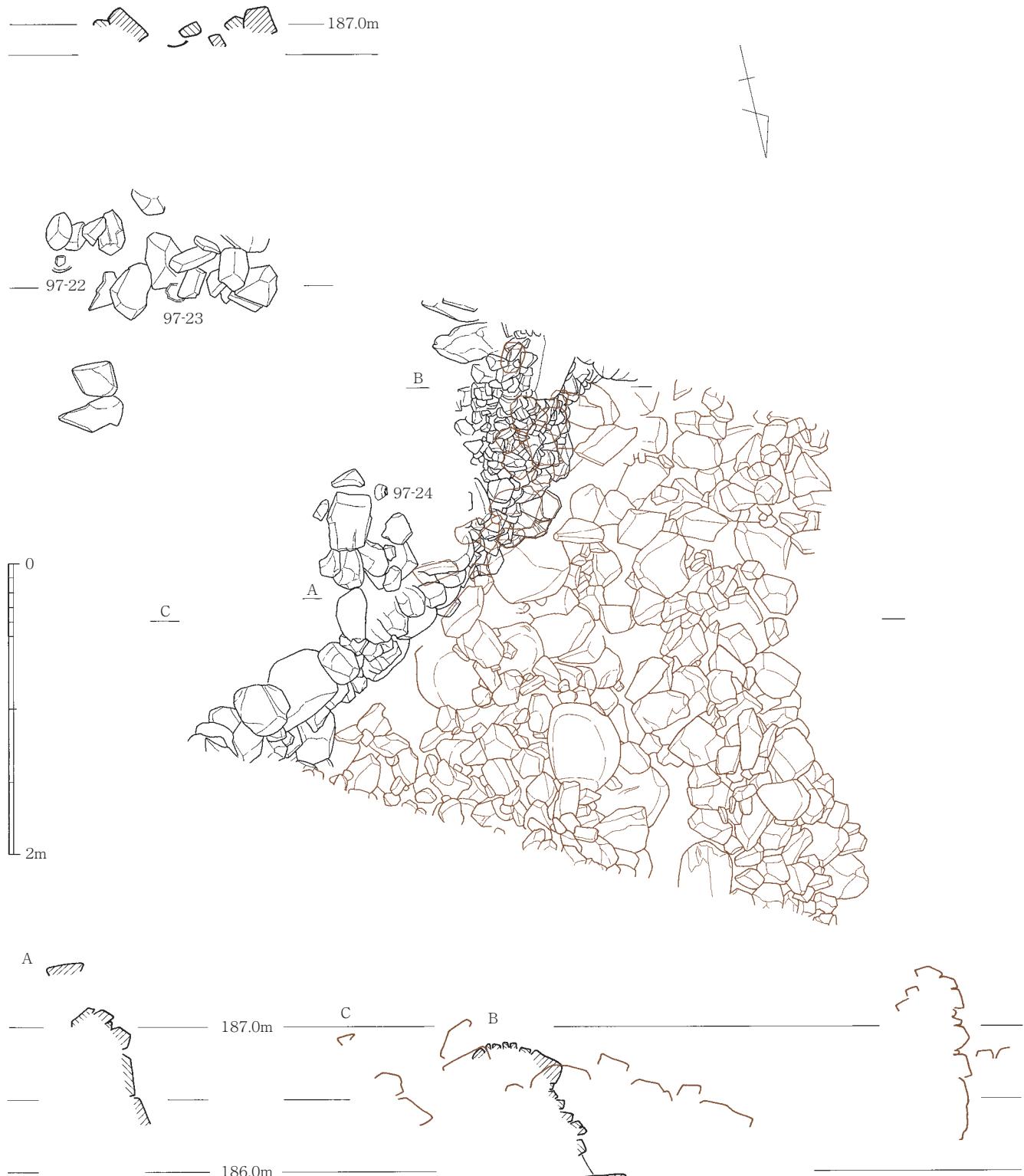
12～14は「石垣2東礫下」とあり、石垣2・3の間から出土したもので石垣2の構築に最も近い時期に混入した遺物といえよう。12は土師器皿底部片で、1/2が残存。胎土は粗い目であるが、調整は丁寧になされるようである。外底面に回転糸切り痕とスダレ状の圧痕が残る。遺存状態は良好。13は瓦質摺鉢の小片。内面は丁寧に横撫で、外面は弱い稜線以下を籠削りするようである。スリ目は残らないが、片口への移行部が残る。胎土は比較的良好で灰黄褐色となり、内外面を灰黒色とする。14は朝鮮製陶器で、胎土は暗灰色～灰赤色で良好、内外面に灰緑色といった釉が掛かり、またに灰赤色の斑点が見られる。外面下位は籠削りのようである。

石垣3（図版49～51・53、第84・85・89図） 調査地の西半を覆う堆積あるいは整地層を少しづつ下げる過程で列をなすように礫が現れ、同時に南端付近の礫の堆積を清掃する過程でやや大振りの礫が略南北方向に直線的に覗き、両者が同一線上に並ぶことから埋もれた石垣の存在を確信した（図版49-1参照）。南端は仮設道路の側溝により壊されていると思われるが、側溝の南は一段高くなっていて、掘削して確認したものではないが側溝付近で完結していたと思われる。

石垣は略南北方向に15mほど直線的に延び、東へ屈曲してさらに6mほど延びて終わる。直線部の南側9mほどの間は比較的大型の石材を用いるが、その北は石材が小振りとなり、西側にも一段

低く石材を並べて両者の間を小礫で充填したように見える。さらに階段状となる部分もある。ただ、その西面は積み上げたように見える部分もあるとはいえ、全体には積み上げたとは言い難いものであった（図版49-2・3）。この階段状の構造は2トレンチの北では見られないので、あるいは石垣の上部が崩落したものへの可能性も考えられるが偶然にしては整然としている。

1・3トレンチの間は土石流による大小の礫が西側に堆積してにわかに判別しがたい状況であったが、それを除去して石垣を確認できた（図版50-1）。ここでは小礫といってよい石材を積み上げるが、これもはなはだ乱雑なもので、石材も選択した様子は見えない。ここで石垣3は大きく屈



第89図 石垣3屈曲部付近実測図 (1/40)

曲し、1トレンチの直ぐ南付近から再び石材が大振りとなって北東へ続く。北端付近では積み上げた様子を確認していないが、列状をなす礫を認めたことから本来的にこの辺りまで連続していたと考えている。ただ、それでも花崗岩バイラン土の段落ちの中ほどで終わることの意味はわからない。

南端付近では石垣の東西両側ともに大量の小礫でほぼ頂部まで埋まっていた。西側を意識した石積みと思われるが、西側に堆積した礫群を一部除去したところ、地山と思われる灰黄色砂から測って石垣の高さは1.1mほどで、5段前後の積み石を行っている。しかし、ここも通常思い描く「石垣・石積み」と異なって、面が揃わず、石材の置き方も規則性が認められず、乱雑といってよい。

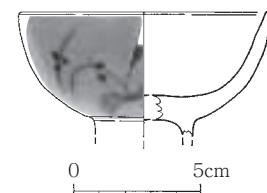
この石垣3の頂部は南端から1トレンチ付近まではほぼ187.0mで、1・4トレンチ間の断面を図示したところでも0.2m低いだけで、ほぼ上端は揃っている。本来の地形が南から北に向かって徐々に高くなっていることから、石垣東の平坦面と比べて北端付近で0.6m、3トレンチで0.4m低い位置に石垣頂部が位置することとなるが、南端付近ではほぼ同レベルとなる。本来、花崗岩バイラン土からなるこの丘陵で、調査地南端のような状況で大小の礫が集中することは奇異である。調査区北端のような巨石を含む大小の礫があれば土石流の可能性も考えられるが、小礫が主体となる調査区南端付近の礫群の由来については判断しがたい。また、石垣構築の目的もわからない。

石垣4（図版52、第90図） 調査対象地北東隅に一部斜面が残るが、その裾に置かれた石垣である。立て据えた基底部の上に1段の石材が残るだけであり、本来にどの程度のものであったかわからない。全長11mを確認し、北半は西側へ緩く曲線を描いているが、北端付近は既に石材が抜かれて抜き跡が残るのみである。南端は試掘トレンチの位置と重なり、それ以南には認められなかった。この石垣の南端南側でも東側が一段高くなっていて、本来はその裾にも置かれていたかも知れないが、そこでは抜き取り跡も確認できていない。

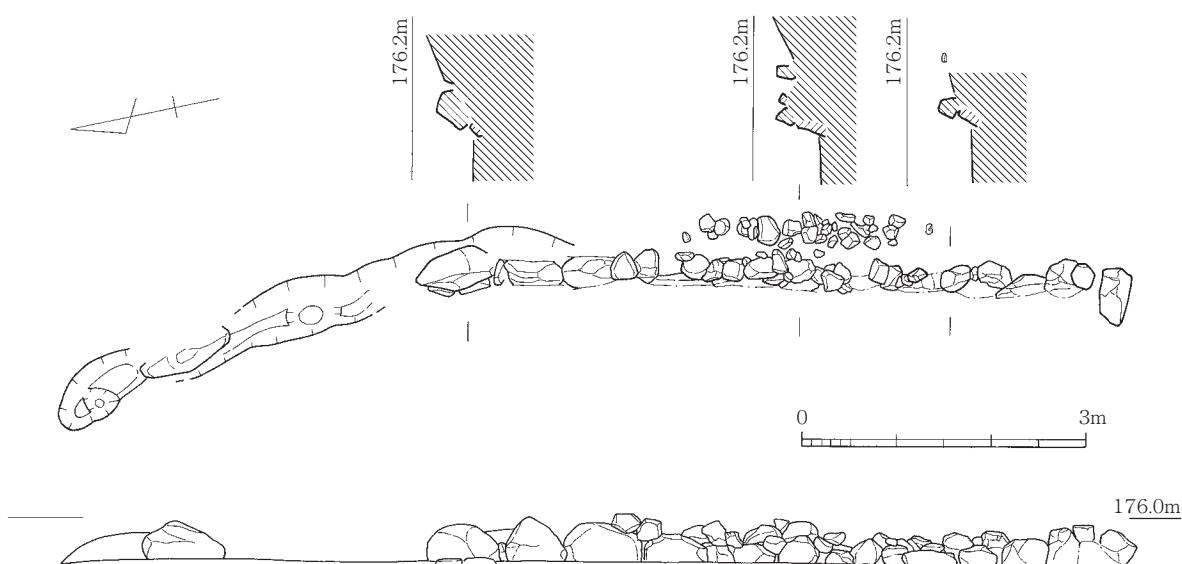
ちなみに、この一段高い部分でも一部発掘したが、礫が散乱するものの遺構といえるものは認められなかった。

出土遺物

土器等（第91図） 石列南端近くの東側、背面に位置する付近から出土した復元口径10cmの染付小碗。外面に秋草を描く。



第91図
石垣4東側出土遺物実測図（1/3）



第90図 石垣4実測図（1/80）

2) 土坑・その他

土坑1 (図版52、第92図) 調査区東端付近、石垣4の南に位置する。巨石に接していて、長軸3m弱、短軸2mの不整となる平面形をもち、深さは1.2mほどであった。最上層は青灰色土がレンズ状に厚く堆積していて、新しい遺構との感触を得ている。

出土遺物

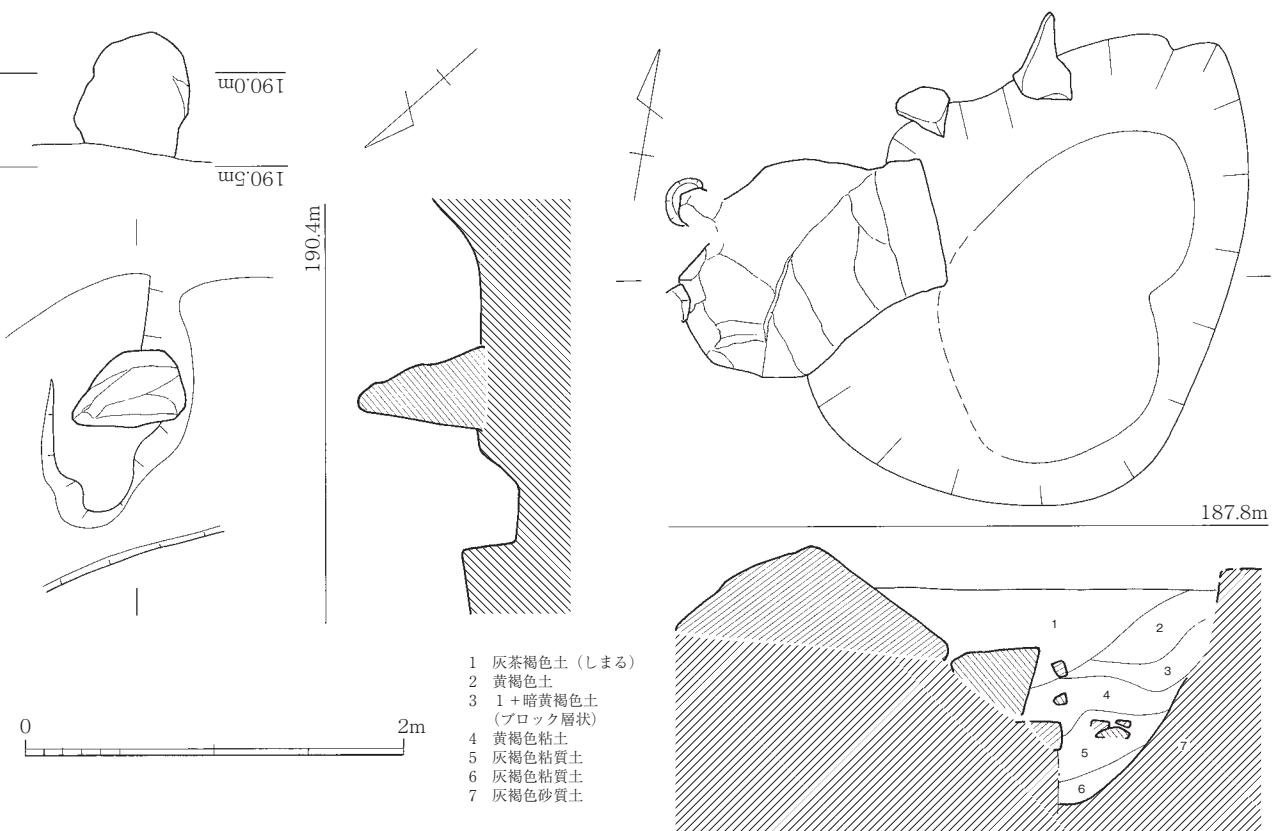
土器等 (第93図1・2) 1は内面が露胎となる陶器壺の類小片。胎土は灰白色緻密なもので、釉は灰白色に発色する。総釉にした後に畳付とその内外を小さく面取して釉を掻き取っている。2は龍泉窯系青磁盤小片。淡い灰青色の釉が厚く掛けられている。青磁盤は白磁口禿皿と共に存する例があって、14世紀前半まで遡るものであるが、1の陶器は詳細は不明であるが近世に属するものである。

立石 (図版53、第92図) 調査区の北東隅、斜面の最上部を平坦化したところに位置する。当然ながら調査前から露出して判明していたものである。

最大幅約0.6m、同厚さ0.4m、高さ約0.6mの花崗岩の自然石で、加工痕などは全く見えない。裾周辺を掘削したが、遺構といえるものは認められなかった。周辺の地形の乱れはもっぱら雨水によるものとの感触を得ている。

出土遺物

土器等 (第93図8) 内彎する口縁部外面に大きく突出する断面方形となる箍状の突帯を付す陶器鉢。暗灰色の胎土は非常に精緻で、成形もとても丁寧、細部までシャープに造作されている。内面全面にスリ目が刻まれ、内外面ともに暗茶褐色の釉が掛かる。なお、拓影右端の乱れは片口部である。これは立石裾の竹などが詰まった搅乱からの出土で、当然伴うとは考えられない。



第92図 土坑・立石実測図 (1/40)

P 4 土坑1の北西に近接する直径0.5m、深さ0.5mの比較的しっかりとした柱穴であるが、建物を構成するものではない。

出土遺物

土器等（第93図3・7） 3は土師器小皿で、1/4が残存。胎土精良で、調整も丁寧である。内面に水挽き痕が残る近世的な皿で、復元口径7.2cm、器高は1.7cmを測る。7は瓦質土器摺鉢片。口縁端部に内傾する面をもち、その中央付近を突出させてアクセントを付ける。大粒のクサリ礫を混入するが、破面にその他の砂粒がほとんど見えない。外面に灰黒色となる部分が残るが、ほとんどが灰黄褐色あるいは赤変していて、火熱に掛かったようである。口縁部付近を除く外面のほとんどが器表剥離し、内面にも無数の小さな弾けがある。

P 9 P 4の北西2mに位置する直径0.3m、深さ0.3mの小規模な柱穴である。

出土遺物

土器（第93図5） 復元口径14.0cm、器高3.2cmを測る土師器皿で1/4が残存。体部は内彎しつつ立ち上がり、口縁部は小さく外反する。胎土は比較的良好といえるが、仕上げは雑な感がある。なお、底部外面には回転糸切り痕が残る。

P 10 土坑1の西側には花崗岩の巨石が露出しているが、その西裾に接するように位置する柱穴で、直径0.3m弱、深さ0.15m程度の規模である。

出土遺物

土器等（第93図6） 龍泉窯系青磁碗の底部片で、1/4が残存。高台外側縁の一部、畳付、高台内が露胎となり、他の部位には明灰青色の釉が掛かる。文様は見えない。

P 15 P 10の南西2mほどに位置する、直径0.3m、深さ0.3mほどの小柱穴である。

出土遺物

土器等（第93図4） 1/2ほどが残存する土師器皿で、器表の荒れが進行する。体部が内彎して口縁部にはさほど変化を加えない。胎土は粗い方で、内底面中央に水挽き状の痕跡が残る。復元口径13.2cm、器高3.0cmである。

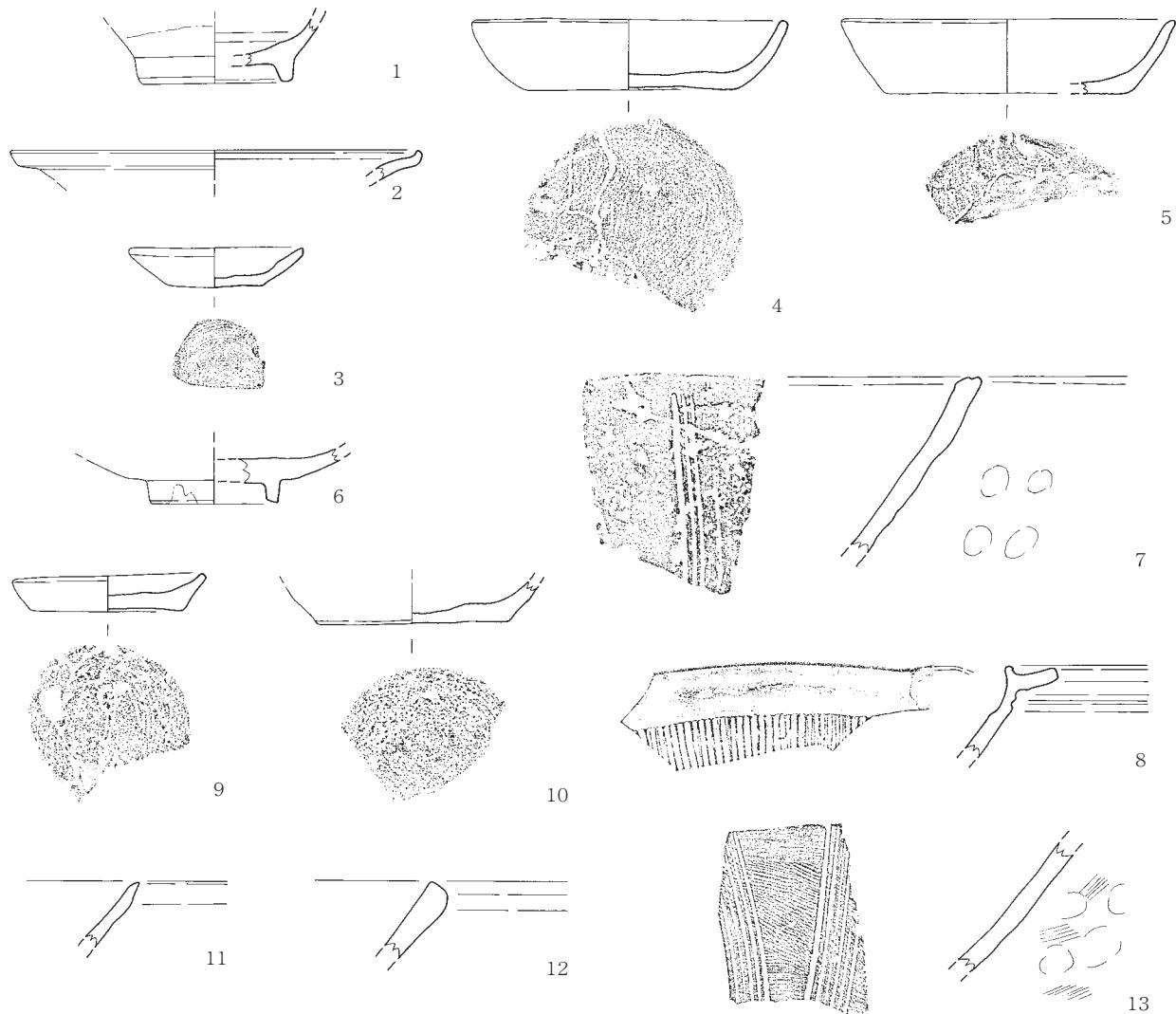
土器1（第93図9） P 15の南2.5m付近の包含層中から出土した土師器皿。この辺りにはやや大型の遺構があるが、それらは青灰色土を埋土とするいかにも新しそうなものであり、この土師器とは関連がないと思われる。

土器は1/2強が残存し、外面のほぼ全体と内面の一部が煤け、器表が荒れている。器形の特徴としては底部・体部界がしっかりと稜をもつ。

土器2（第93図10・11） 北東端付近の石垣3は高さがやや低くなっているが、その中位付近、地山から浮いた位置（標高186.61m）で出土した土器である。10は1/3ほどが残存する土師器皿底部で、器表の残りは良好であるが内面が黒変し、破面付近で内面が剥離する部分がある。火熱を受けたものであろう。11も器表の残りがよい土師器皿小片。

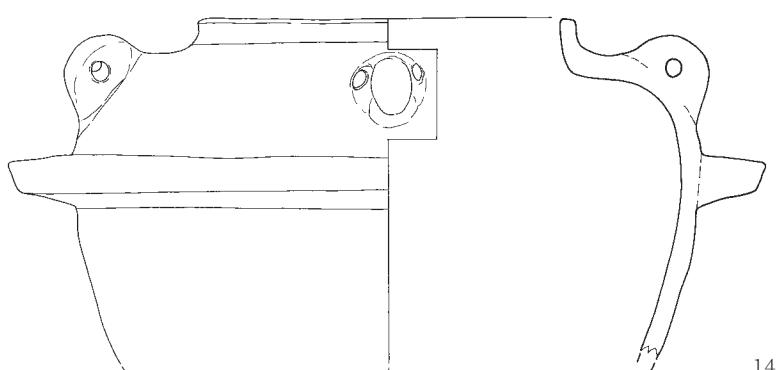
土器3（第93図12～14） 調査区北西隅付近に花崗岩の巨石があり、その南端東に接するように位置した土器群で、標高は186.91mであった。

12は土師質の摺鉢小片で、全体に赤変、器表がとても荒れている。13は瓦質摺鉢片。内面は細かい刷毛目の上にスリ目を刻むが、残存部上端付近には刷毛目がなく、丁寧に撫であるようである。外面はやはり細かい刷毛目が処々に見えるが、指押さえ、撫でが主体となる。なお、外面に煤が付着する。14は大きな鍔の1/4、大きな釣手の一つが残存する茶釜。胎土は赤味を帯びる黄褐色で良好といつてよいが、緻密さを欠くようである。内外面ともに全体に暗灰褐色で、鍔以下には煤が付着する。外面は鍔以上は籠磨きで仕上げ、その下位は籠削りが一部に見える。内面は撫でのようで、丁寧に作られている。



1・2：土坑1
 3・7：P4
 4：P15
 5：P9
 6：P10
 8：立石付近
 9：土器1
 10・11：土器2
 12～14：土器3

0 10cm



第93図 土坑・柱穴等出土遺物実測図 (1/3)

3) 包含層等出土遺物

試掘トレンチ周辺出土遺物 今回設定した1トレンチは試掘トレンチを西側に延長したものである。試掘時は略東西トレンチを入れた後にそれと直交するように幅広い略南北トレンチも掘削していて、この中には竹・木材や細石などが入れられて非常に締まり、除去は困難な作業であった。この1トレンチの周辺での遺構検出作業に伴って出土した遺物をここで紹介する。

出土遺物

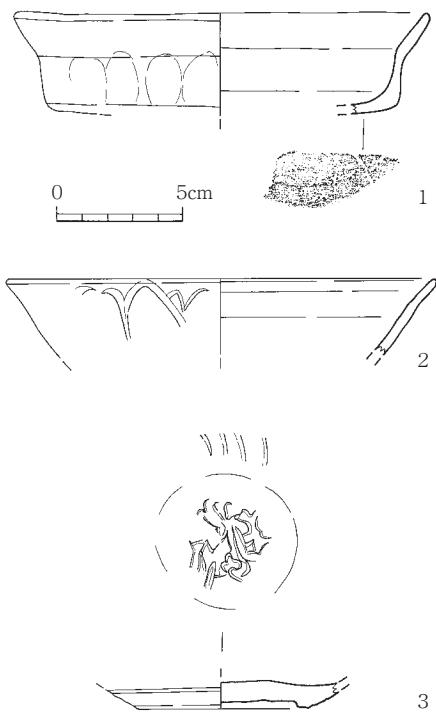
土器等 (図版54、第94図) 1は1/4が残存する土師器皿。立ち上がりが急で、体部下半は指押さえで強く押さえ、上半が外反、口端部に面をもつ個性的な器形となる。外底面に糸切り痕がなく、箆削りの痕跡も見えない。復元口径16.4cm、器高4cmほどとなる。2は龍泉窯系青磁碗で、片切彫りで蓮弁文を描く。釉は濃い灰緑色に発色する。3は龍泉窯系青磁皿か、釉は灰黄緑色に発色する。見込に花文と思われるスタンプを付し、外周にも花弁を型押しする。製作時に余分な土が4個所に付着するが、いずれも釉に覆われる。底部外面は中央部を大きく割り抜いて碁笥底状とし、そこも一部無釉の部分があるが大部分に施釉、中央部に目痕が付着する。割り抜く形状は正円でなく若干歪んでいて、その外周も平坦部の有無、平坦面の狭小など不整といってよい。なお、体部下位に沈線を1条刻んでいる。

1・2トレンチ間出土遺物 2トレンチは石垣2北端付近に東西方向に設定したものである。その後に1・2トレンチ間に3トレンチを設定した。ここで紹介する遺物は1~6が「表層」、7~9が「下層礫層東側上層」とあり、石垣3の前面（西側）から出土したものである。

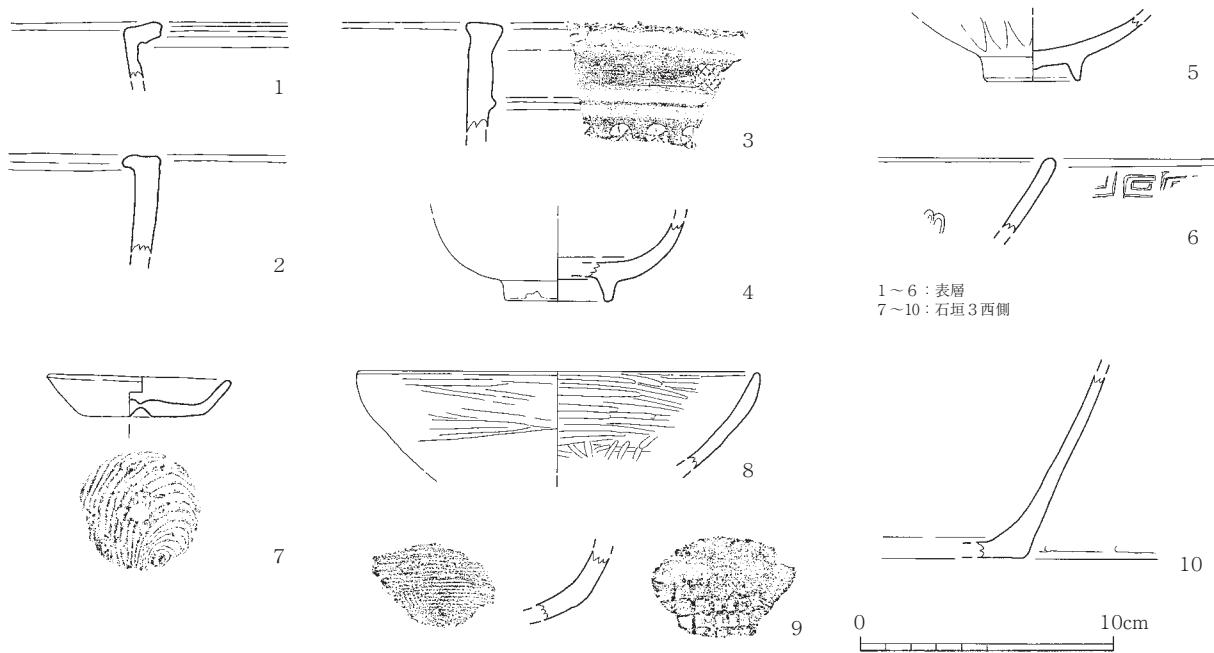
出土遺物

土器等 (第95図) 1・2は土師器小片。1は胎土精良、内面は特に丁寧に調整され、焼成も良好である。口縁部を直角に近く外折させる。2は口縁端部を内側へ引き出すもので、全体に赤変し、特に内面が荒れている。3は「南端石垣2東礫群」から出土した小片と同一個体であろう。口縁部平坦面は半分以上、内面はほぼ全面が剥離し、遺存状態の良好な外面とは好対照をなす。4は残存部上端に暗灰青色が一部残存することから焼成不良の染付であろう。体部は丸味が強く、胎土が暗灰色となる。畳付だけが露胎で、釉は暗灰白色に発色する。5は龍泉窯系青磁碗片で、高台は小振りで畳付周辺のみが露胎となる。外面に蓮弁が描かれていたようであるが、細身のものであろう。6は外面口縁部下に雷文を刻み、内面にも施文が見える。いずれも釉は灰青色といってよいが、6がより明るく発色する。

7は土師器皿。底部は完周し、胎土は大小の砂粒を多く含み粗い。外面中央付近に直径6mm、深さ5mmの凹みがあり、対応する内面にも直径3mmの浅い凹みがある。貫通しておらず、意図はわからない。外面が灰黄褐色、内面は赤味をもつ。8は瓦器碗で、残存部外面中位から口端部にかけてが灰黒色、その他の部位は灰色となる。胎土は非常に精良で、内面はほぼ全面を箆磨き、外面は上半のほぼ全面を箆磨きするようであるが、灰色となる部分は調整も雑で磨きも疎となるようである。



第94図 試掘トレンチ周辺出土遺物
実測図 (1/3)



第95図 1・2トレンチ間出土遺物実測図 (1/3)

9は外底面に煤が付着する鍋片。胎土は灰赤色で、内外面が黒色化する。10は瓦質鉢であるが、スリ目が見えない。胎土は精良といってよく、調整が雑であるが器壁が薄い。

1・3トレンチ間出土遺物 両トレンチの間から出土した遺物で、1は「上層礫層の上」、2～4は「上層礫層中」とある。「上層礫層」は石垣3の西3.5m付近から始まる土層である。5～7は「東半上層」であるが、これは先の「上層礫層」よりは下位となる土層である。8～15は「上下礫層間」出土で、文字通り上層礫層の下位、土石流によると思われる下層礫層の上位から出土したもの。16～22は「下層礫層中」とあって、土石流の中、あるいは石垣3直下（西側裾）などから出土した遺物を含む。

出土遺物

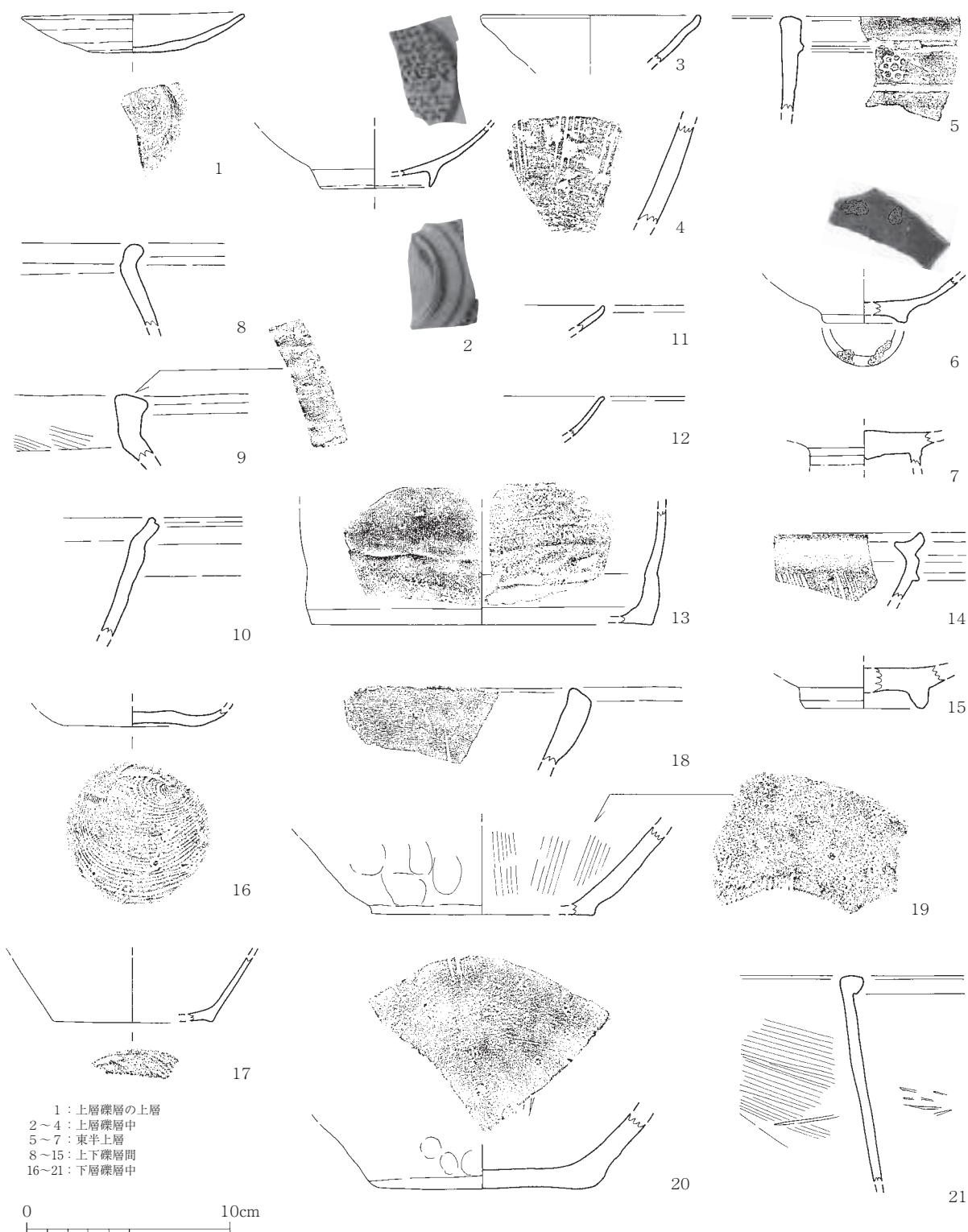
土器等 (図版54、第96図) 1は胎土精良で調整も丁寧な土師器皿。口縁部内面が2cmほどの幅で全体に赤変し、その下位及び外底面が灰褐色となる。ただ、煤けたというものではないようである。口縁部外面は灰黄褐色。体部外面に水挽き痕が残る。

2は華奢な高台をもつ染付。内外面の文様帯を片仮名の「ム」をアレンジしたような文様で埋める。3は朝鮮製陶器であろう。胎土に白色粒が目立ち、青味帯びる暗灰色釉が全体に掛かる。4は器肉中心部が黒色、内外の器表付近が薄く灰黄色となる瓦質の摺鉢片。

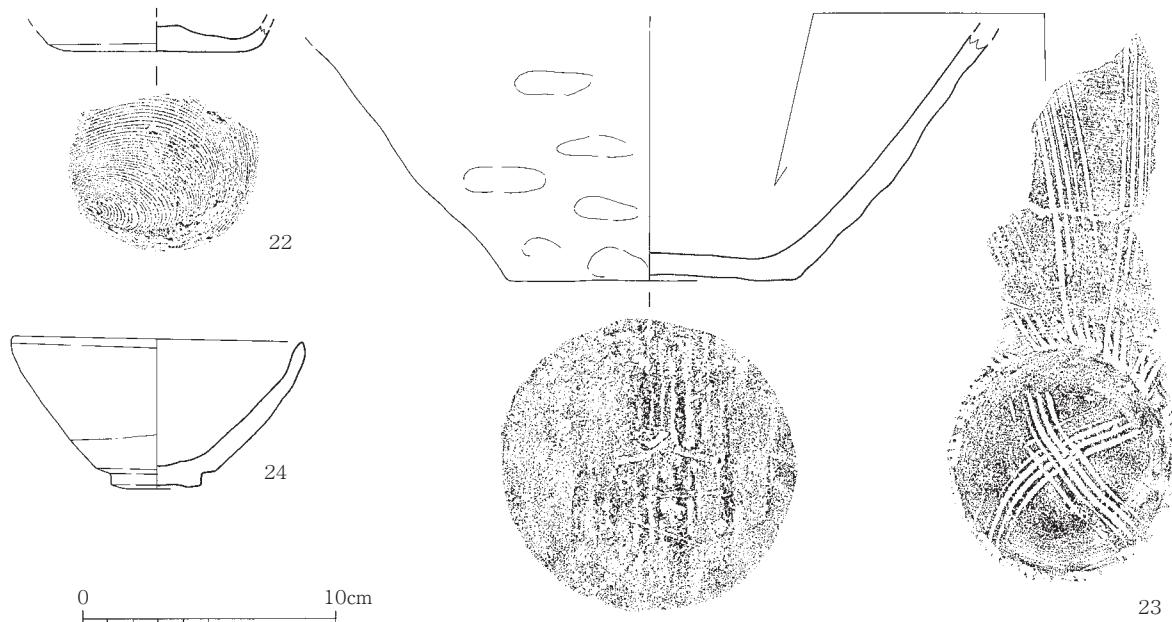
5は瓦質の火舎で、器肉が灰白色、器表が黒色となる。口縁部下位に断面方形となる突帯を巡らせ、その下位に八曜文をスタンプ、さらに下位に幅広い沈線を刻む。6は朝鮮製陶器で、見込・高台疊付に2個所ずつ目痕が残る。胎土は精良、灰味の強い灰青色釉を全体に掛けている。7は龍泉窯系青磁碗か。焼成不良のようで、釉は灰青色に発色する。疊付は残らないが、高台内を露胎とし、外底面に籠削りの痕跡が残る。

8は土師質の土器で、口縁部を短く外反させる。器肉中心部が赤褐色、内外面表層が灰黄色となる。内面のほとんどが剥離、外面も荒れている。9は瓦質の甕で、頸部が短く直立、口縁部を断面三角形とする。口縁部上面から内面にかけて灰黄白色、外面が黒色となる。丁寧に調整されるが、口縁部上面に棒で押圧したような弱い圧痕が残る。10は口縁部が短く外反、口縁部を小さく外折さ

せて口端部内側をわずかにつまむ。瓦質の鍋であろうが、須恵質に焼き上がる。4トレンチ出土(第83図13)と同一個体であろう。11は暗灰色緻密な胎土にやはり暗灰色となる釉を掛け、内面口縁部下に細い圈線を描き、さらに太い線(?)で縦方向にも描き込む小片。施文部は灰黒色に発色していて、唐津焼であろう。12も唐津焼青緑釉陶器小片。13も暗灰色緻密な胎土をもつ陶器で、水指か。外面には灰緑褐色の釉が掛かる。工具痕が残り、下端は箆削りで仕上げるようである。内面には一部に同心円文当て具痕が残るが、その上を横撫でしている。体部内面には薄く、内底面には厚く釉



第96図 1・3トレンチ間出土遺物実測図1 (1/3)



第97図 1・3トレンチ間出土遺物実測図2 (1/3)

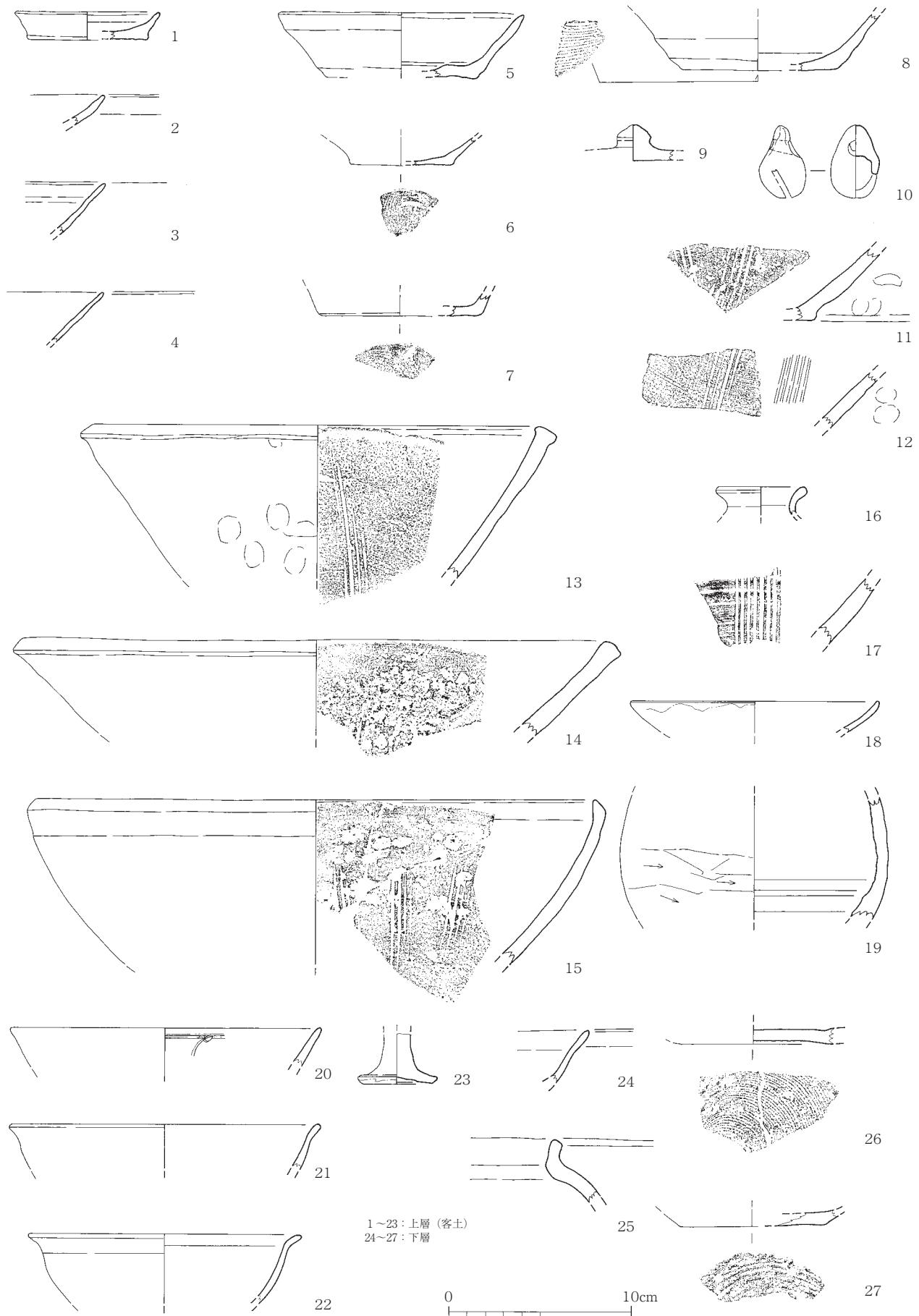
が掛かる。14は口縁部が断面Y字形となる陶器摺鉢。15は肉厚の底部をもつ龍泉窯系青磁碗で、畠付と高台内外底面の釉を剥ぎ取る。高台の内外側面に厚く釉が掛かり、畠付の一部が欠けることからここに釉が付着して熔着剥離したものであろう。釉は灰味の強い淡青色で、施文は残らない。

16は土師器皿で、外面が赤味強く焼き上がる。17は器表が荒れるが丁寧に作られた土師器皿。19は瓦質摺鉢で、器肉の中心が黒色、内外面器表近くが灰白色となっている。さらに外面は黒色、内面は使用によりすり減って灰白色となるが、底面周縁は黒色部が残る。胎土は精良。20も瓦質摺鉢で、胎土に大粒の砂粒が数点入るが概ね良好といってよい。底部は内面が暗褐色、外面が暗灰色、体部内面は灰白色、外面が灰黒色となる。使用によって内面が滑らかとなっている。21も瓦質土器で、胎土は明灰色精良で器表内外が燻し瓦のように銀沢をもつ。内面は通常の刷毛目のようななしきりとした条痕が入らないが同様な技法で、外面はより微細な縦方向の撫でで調整するが、中位に撫でと連続しない工具痕が残る。

22~23は石垣3が屈曲する付近の東側、裏込めの礫群に混ざって出土したものであるが、礫群は並べたというような状況ではなく、意味がわからない。22は肉厚の土師器皿底部で、器表は良好に遺存する。胎土は良好といってよく、体部下端を強く横撫でしている。内外面ともに黒ずむ。23は瓦質の摺鉢で、明灰色の胎土に砂粒の混入は少ないが、緻密なものではない。器表は全面が黒色化するが、体部内面は使用によって黒色化した表面がすり減っている。スリ目は体部下端から上方に向かって刻み、内面底部にも×状に刻む。外部底面にはスダレ状の圧痕が目立つが、それ以外の切り離し痕・調整痕が見えない。

24は完形に近い陶器天目碗。体部は直線的に開き、口縁部が弱く屈曲直立する。体部下端は籠削りで小さな段を付け、高台内の抉りは浅い。胎土は暗灰色緻密で、体部下位の露胎部は灰黄色となる。釉は灰茶褐色に発色するが、口縁部付近は濃く発色、釉が溜まる部分などは黒色となる。露胎部は非常に丁寧な籠削りで仕上げている。

1・4 トレンチ間出土遺物 1・4トレンチの間は礫がある部分はそれを露出させ、礫のない部分は花崗岩バイラン土まで埋土を掘り下げた。その際に出土した土器である。明確な基準をもって分層したわけではないが、便宜的に上層（1~23）・下層（24~27）として取り扱う。



第98図 1・4トレンチ間出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物

土器等 (第98図) 1は土師器小皿で、1/3が残存。立ち上がりが外反し、外底面に回転糸切り痕が残る。復元口径7.8cm、器高1.6cmを測る。2～4は土師器口縁部小片で、いずれも胎土良好。3は口縁部が大きく開き、水挽き痕が見える。赤く焼き上がるが、一部灰褐色に変色する。4は薄手で、やはり直線的に大きく開く。5は部分的に内面が黒色化、外面が赤色化する。胎土粗く、作りも雑である。外底面には回転糸切り痕が残る。6は胎土良好、器壁が薄い土師器底部片。7・8は復元底径に不安がある土師器。

9は胎土良好で灰赤色に焼き上がる宝珠形のつまみであるが、陶器とすべきであるかも知れない。10は胎土良好な土師質の鈴。全高4.0cm。

11・12は瓦質の摺鉢小片。13～15も瓦質摺鉢。13は口縁部をわずかに肥厚させて頂部に面を作り、その端部を内外両方に小さく突出させる。口縁部周辺の内外を横撫で、内面は以下を弱い刷毛目で調整してスリ目を刻む。外面には指頭痕と撫で痕が見える。器肉中心部が黒色、その内外が暗灰色となる。14は二次的に火熱を受けて赤変あるいは煤けるようである。一部でスリ目が見えるが、内面口縁部下のほとんどが弾けたように剥離している。15は器肉のほとんどが黒色、器表に近い内外面が薄く暗褐色にコーティングしたようになる。内外面ともに丁寧に横撫で調整を行うようであるが、両面とも弾け、剥離した部分が多い。

11は陶器小片。古墳～古代の遺物が出土する遺跡であれば躊躇なく須恵器と表現したいところであるが、この下伊良原宮園遺跡だけでなく、伊良原ダム建設予定内を見渡しても通常の須恵器の出土はほとんどないことから、この陶器について困惑している。胎土精良で、全体が暗青灰色となる。17は備前焼摺鉢の小片。胎土・作りともに良好で、全体に灰赤色となるが、内面器表近くの器肉部分だけが薄く暗灰色になっている。18は唐津焼青緑釉陶器片で、口縁部外面から内面にかけて灰味濃い青色、外面は黄緑色に近く発色する。19は赤味帯びる灰黄褐色となる無釉の陶器片で、同色の胎土は非常に精良緻密なもので、内面は全体に横撫でを行うが凹凸が目立つ。外面は全体をごく丁寧に籠削りで仕上げるが、残存部上端にわずかに横撫で痕が見える。

20は龍泉窯系青磁碗小片で、内面に片切り彫りで劃花文を描く。釉は灰緑色となる。21・22は口縁部が小さく外反する龍泉窯系青磁碗片。21は灰味強い青色、22はさらに黄味帯びて発色する。両者ともに残存部は無文。

23は染付仏飯か。残存高2.8cm、底径4.4cmを測る。脚端部は斜めに面取り、底部中央側の1/2ほどをさらに一段浅く削り込んでいる。白濁した不透明釉を掛けるが、脚裾上面の一部に施釉が及ばない部分があり、脚端の面取りした部位から脚裏は露胎となる。

24は土師器皿の小片。25も土師器小片で、「土器3」として取り上げた茶釜と同一個体のようである。26・27は土師器皿である。

2・3 トレンチ間出土遺物 ここに図示したもののほとんどは「上下礫層間」、「下層礫群上」などの注記があって、石垣3の西側に連続する礫群（下層礫群）と石垣1の東側で標高的には石垣3に揃うものの、層位的には間層を挟んで上層となる礫群の間から出土したものである。ただし、1～3は「礫層上」とあって帰属が不明瞭、4には「上層礫中」とあってほかの多くの遺物より新しい層からの出土である。15は「石臼1の下」とあって下層礫群上から出土したものである。

出土遺物

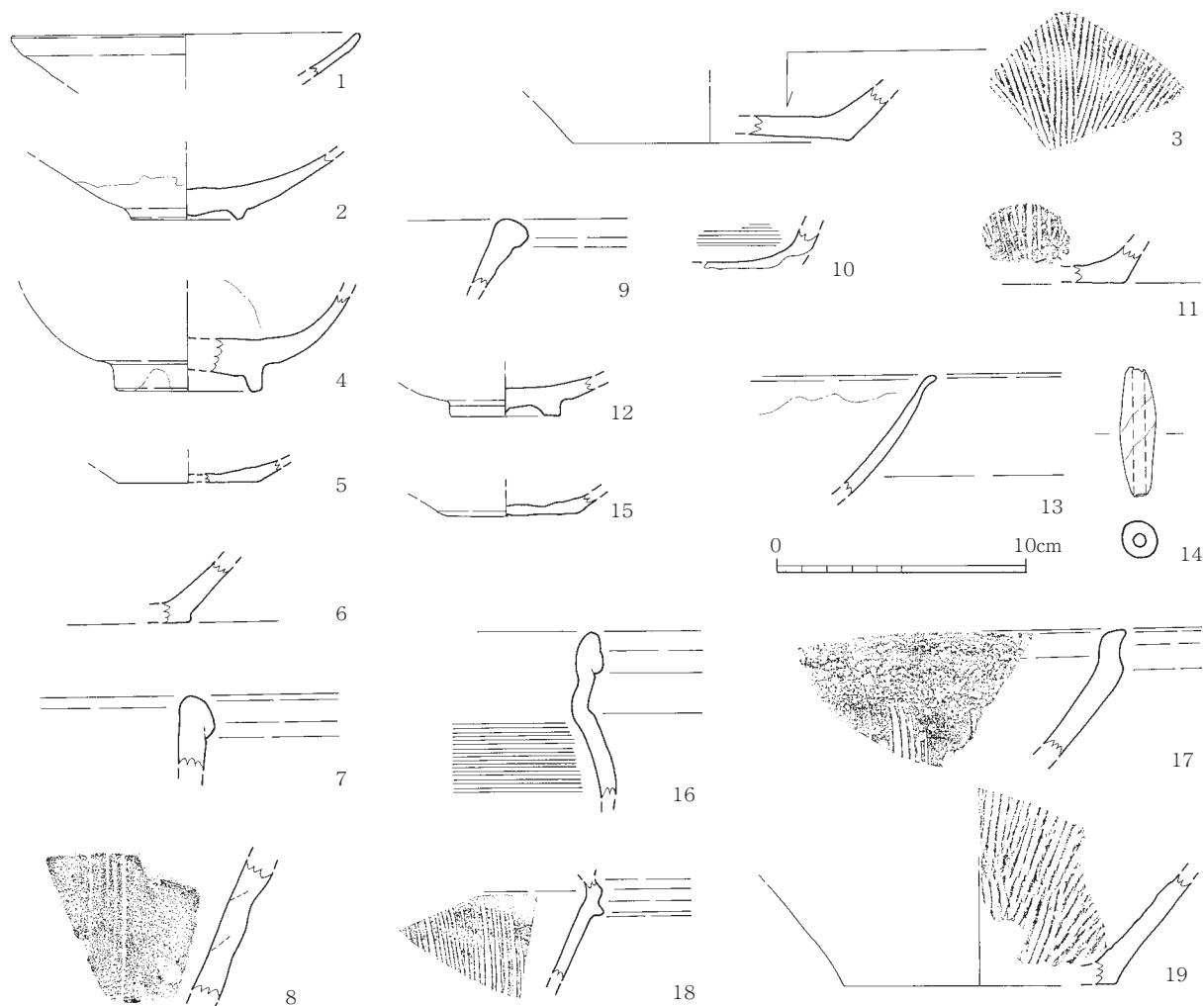
土器等 (第99図) 1・2は焼成不良の陶器で、同一個体。胎土は灰赤色緻密なもので、灰白色に発色する釉が掛かる。体部下半から高台内にかけてと見込を蛇の目に釉剥ぎした部分が露胎で、

黒ずむ灰赤色となる。3は陶器摺鉢で、胎土は赤味を帯びる暗灰色、内外面は赤味を帯びる暗茶褐色に発色する釉が掛かる。4は一見、龍泉窯系青磁碗のようであるが、見込の釉を蛇の目に搔き取っている。また、高台外側縁から垂れた釉の内、畳付及び高台内もやはり搔き取る。内外面ともに装飾はなく、釉は暗灰緑色の不透明なものとなる。焼成不良の青磁であろう。

5は土師器皿。胎土良好であるが器表が荒れている。6も土師器で、この2点は赤味を帯びる。7は瓦質の甕か。口縁部は玉縁状となって直立する。胎土・造作ともに良好で、器表は暗灰色、器肉は灰白色となる。内面には小さな弾けが多い。8も瓦質の摺鉢片。灰白色で胎土良好。9も瓦質の鉢小片。これも内面の多くが弾けて剥離する。10は外面に格子叩きを残す瓦質の鍋。外面の剥離面にも煤が付着。11は陶器摺鉢小片で、胎土は比較的良好。無釉で、内面は灰赤色、外面は暗灰色となる。12は唐津焼青緑釉陶器で、見込を蛇の目に釉剥ぎする。13は高高台の白磁で、陶磁器の中では最も年代が遡るものである。14は土師質の土錘で、長さ5.2cm、最大径1.5cmほどである。重量は9.64g。

15は土師器皿の底部。胎土精良、赤変して器表が荒れる。

16は瓦質の甕で、口縁部を外側へ折り返して扁平な玉縁状とする。胎土は粗く、調整も雑であるが、須恵質に近く硬質に焼き上がる。17は口縁部を小さく内側へ屈曲させる瓦質摺鉢。これも内面に小さな弾けが多い。18は口縁部断面をY字形とする陶器摺鉢で、内外面は暗茶褐色に発色する釉



第99図 2・3トレンチ間出土遺物実測図 (1/3)

が掛かる。19も陶器摺鉢。暗灰色緻密な胎土をもち、やはり内外面が暗茶褐色となる釉が掛かる。

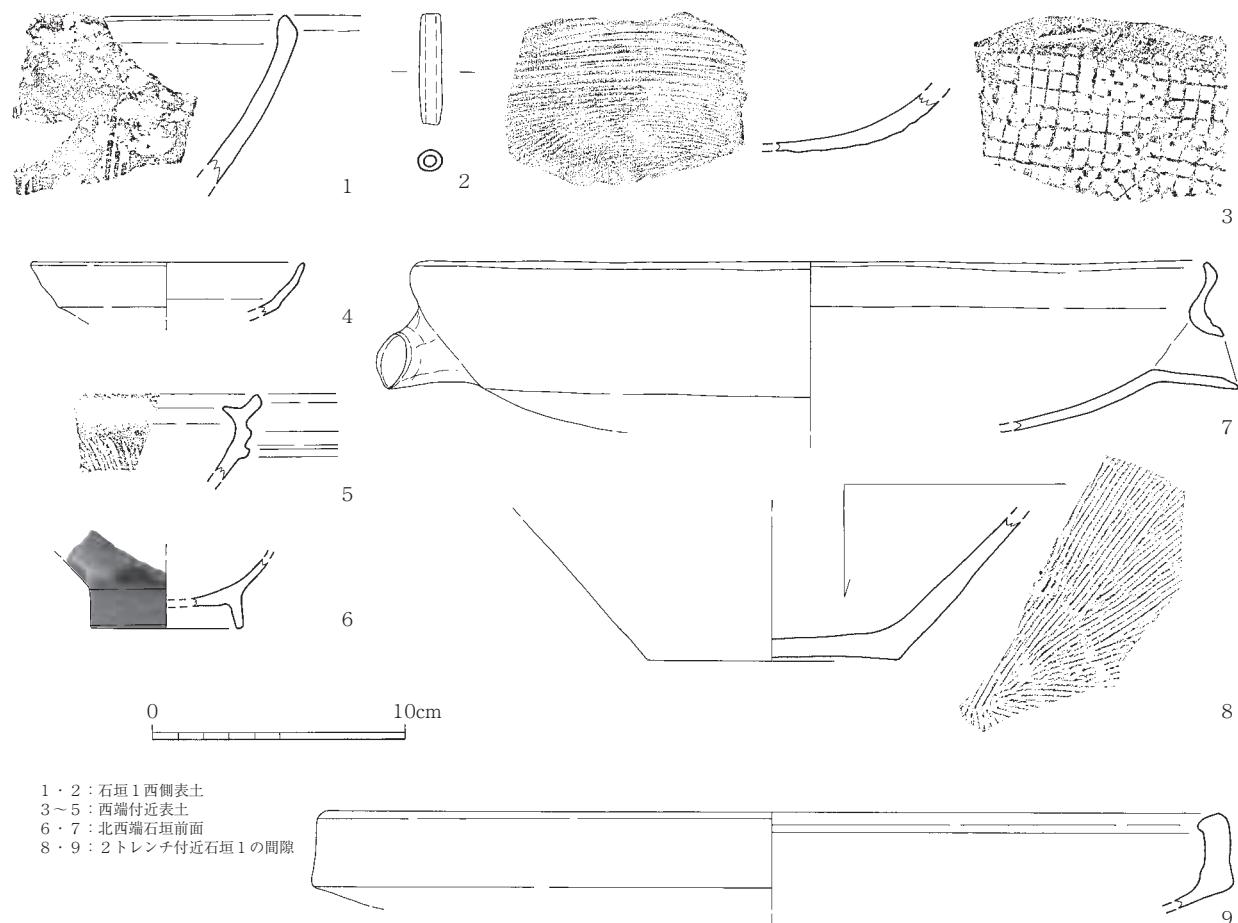
その他表土等出土遺物（第100図） 1・2は「石垣1西側表土」で採集した土器。1は瓦質の摺鉢で、口縁部を内側へ屈曲させて外面に稜を作る。大粒の石英の混入が見られるほかは概ね胎土良好といつてよい。器肉中心が黒色、器表に近い部分が暗灰色となっている。2は胎土良好、灰褐色～灰黑色となる土錐で、長さ4.3cm、最大直径1.0cmで、重量は4.83g。

3～5は「西端付近表土」とある。3は胎土良好な瓦質の鍋で、外面底部は格子叩きを施す。外面に煤、内面に焦げ跡が残る。4は朝鮮製陶器であろう。残存部下位で緩く屈曲し、緑味帯びる明灰色の釉が掛かる。5は口縁部が断面Y字形となる陶器摺鉢片。3条の突帯を付すが、上段は頂部が丸くなる。暗茶褐色となる釉が掛かる。

6・7は「北西端石垣前面」採集。6は染付広東椀で、畳付のみが露胎となる。7は土師質の注口付焰烙。残存する注口は1個所で、形状は不整といつてもよい。胎土はごく精良で灰黄褐色となる。注口部付近から内面にかけての横撫ではとても丁寧で、注口付近以下・注口部の下半は丁寧に削る。外面はほぼ全面に煤が付着、注口部以下の内面には焦げ付きが見える。

8・9は「2トレンチ付近石垣1の間隙」とあり、石垣1の石の間にあったもの。8は陶器摺鉢で、丁寧に作られたものであるがいかにも新しそうな感がある。101は土師器焰烙で、胎土・造作ともに良好である。外底面に煤が見られる。

石製品（図版54、第101～103図） 各所から出土した石製品をまとめて紹介する。



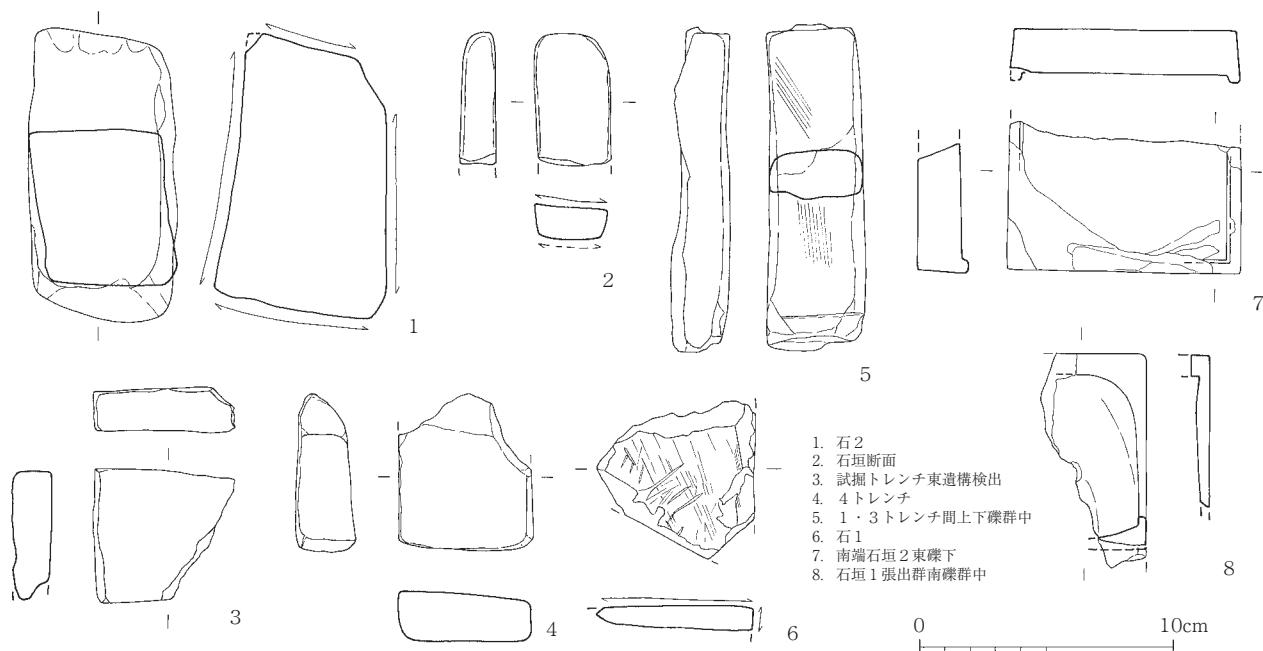
第100図 その他表土等出土遺物実測図（1/3）

第101図は砥石・硯である。1は試掘トレンチ東、P15との間付近から遺構検出時に出土したもの。黄白色～灰白色の中に灰赤色の石目が縦方向に入る。3面を使用する。2は「石垣4前面」(西側)から出土したが、石垣との関係は不明。全体に灰黄褐色であるが、より濃い石目が長軸方向に走る。よく使用された面は1面であるが、背面も若干使用するようである。図下端で折損、表面に微少な凹みが沢山ある。3も「試掘トレンチ東側遺構検出」時に出土したもので、全体に黄白色に近く、縦位に茶褐色の石目が走る図示した面と上下両側面がよく使用、背面は使用が少ない。図左右が折損。4は「4トレンチ」出土。黄白色・黄褐色・茶褐色といった石目が入り、図示した面と背面だけを使用、図下位・左右の側面は使用していない。図上方左右は新しい欠損だが、中央付近の古い欠損面も使用していない。表面に微少な凹みが無数にある。この4点は石英斑岩製で、いずれも石目が縦位に表れるように砥面を設ける。

5は「1・3トレンチ間上下礫群中」出土の砥石。図背面は明らかに剥離した状態を残し、図上面及び左右両側面はよく使用されている。図上面の上半も薄く剥離していて、ここは再び使用しているもののさほど使い込まれていない。なお、図上下の小口部は切り取っていて、下端ではなお切り取りを意図したようなすり切り痕がある。6は背面が大きく剥離する砥石で、残存する側面も全て使用している。この2点は泥岩製。

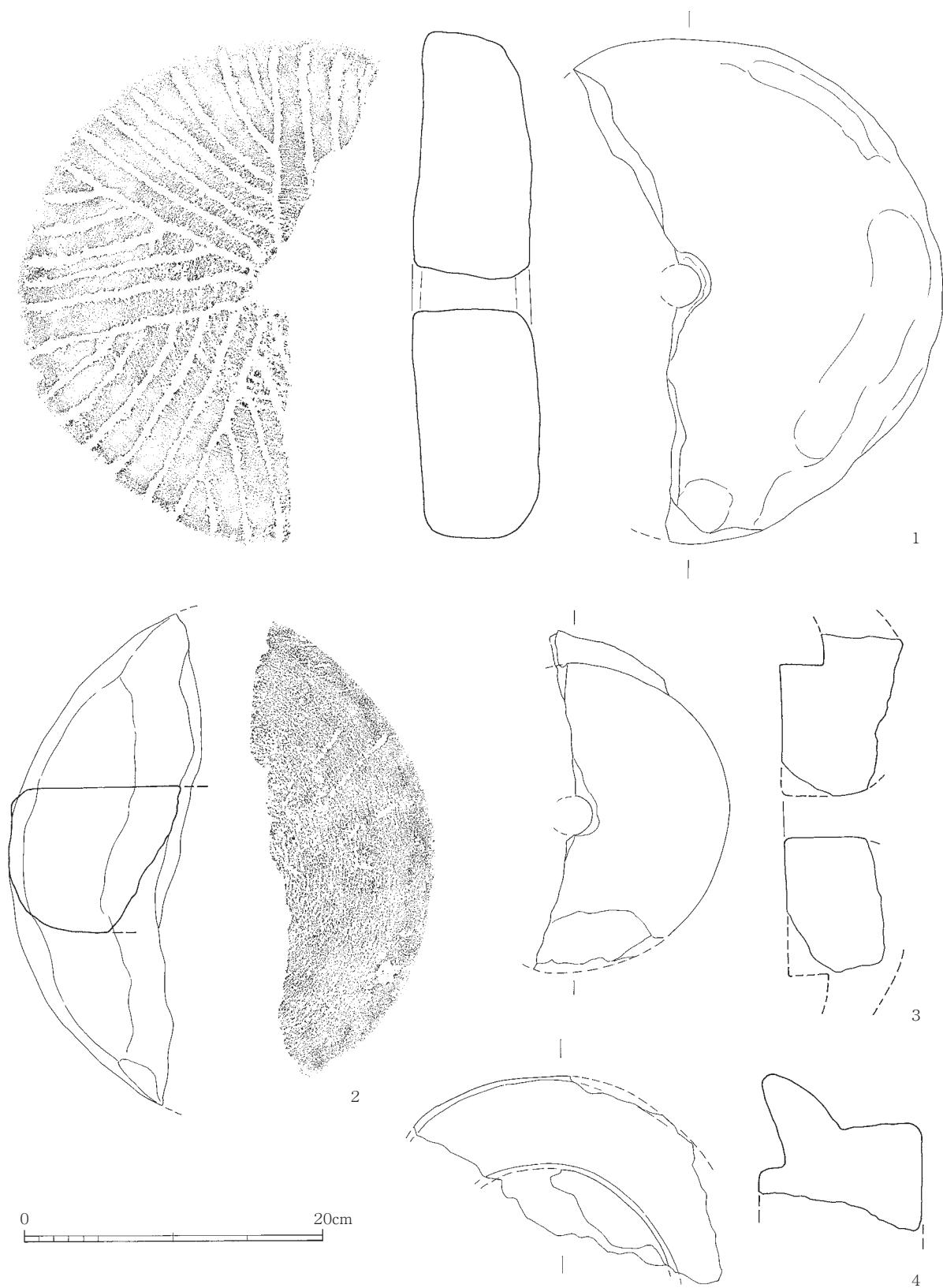
7は非常に緻密な粘板岩製硯で、灰味の強い小豆色を呈する。残存する面は非常に研がれていて、背面も同様によく研磨されているが、ここは粗成形時の痕跡か、幅4mmほどの鑿痕と思われる傷が数箇所に残る。「南端石垣2東礫下」出土。8は海が残る黒色に近い粘板岩製硯片。本来の海は小さく、陸が使用により非常に薄くなる。「石垣1張出部南礫群中」からの出土。

第102図は石臼である。1・2は安山岩を使用した下臼。目は断面U字形で、非常にしっかりと残る。全体に研磨するようであるが、側面・下面はよく整形されているといつてよいのであろう。臼面の大部分が煤けたものか、黒色化する。2も下臼であろう。これは肉眼では目に気付かないほど使い込まれている。3は凝灰岩製の茶臼で、これも目は全く残らない。側縁とごく一部が残る受皿底面は非常に丁寧に研磨されているが、大きく剥離する。これも煤ける。1は2トレンチのやや北、階段状となる石垣3の西側から出土した。2は2トレンチのやや北で石垣3に乗りかかるよう



第101図 石製品実測図1 (1/3)

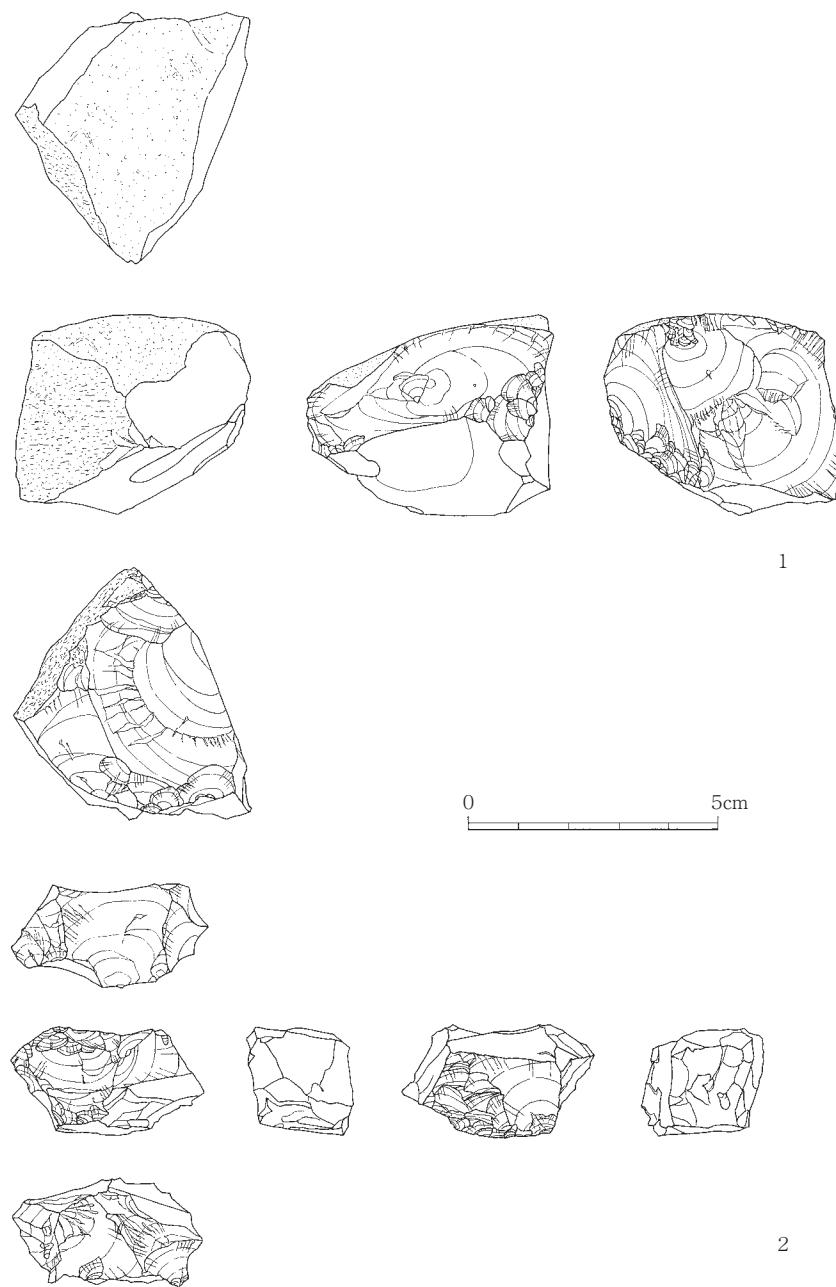
に、3は2トレンチ内の石垣2・3の間から、いずれも石垣3西側を埋めた埋土の最上層付近から出土したものである。4は2トレンチの南、石垣2・3の間に埋められた土の中から出土した茶臼で、表面が荒れていて3と随分違つて見えるが、やはり凝灰岩である。臼面はごく一部しか残らないが、これも目は残らない。側面、外底面は大きく見ればよく整形されているとはいえ、細かく見



第102図 石製品実測図2 (1/4)

れば凹凸が甚だしい。焼けて赤変する

第103図は縄文時代以前の石核である。1は姫島産黒曜石の分割礫を使用しているが、確実に剥片剥離が行われている作業面は1面である（図右端）。幅広剥片を剥離しており、その後、作業面と打面交互に二次調整を行っている。また、意図的な分割面と打点が明瞭でない破碎面がある。重さ84.56g。2は珪質岩製の多面体で3面に作業面を展開している。剥片剥離を行った作業面に打面を設定し、続けて剥離を行っている。得られているのは、いずれも小型不定形剥片である。左側面にも作業面を設定しているが、ステップフレイキングを起こし、充分な剥片は得られていない。重さ19.00g。



第103図 石製品実測図3 (2/3)

(4) 小 結

今回の調査では土坑などといった出土遺物の一括性の高い遺構が乏しく、かつ出土遺物も同様であった。全体的には近世以降の遺物がほとんどである。当地に限らないことと思うが、土師器皿が単独で出土しても時期比定が困難であり、いきおい、瓦器や陶磁器などに依拠せざるを得ない。

今回の調査で出土した遺物の中で年代的に最も遡るのは、2・3トレンチ間出土の白磁片（第99図13）、1・4トレンチ間出土の龍泉窯系劃花文青磁碗片（第98図20）などで、通常12世紀後半～13世紀前半に位置付けられている。そして、外面口縁部下に雷文を連続させる青磁碗（第82図8、第83図1、第95図6）などが1400年を中心とする頃に、碁笥底となる染付皿（第88図6）が1500年を中心とする頃に比定されている。外面に叩き痕を残す鍋やスリ目が疎である摺鉢などの瓦質土器も15～16世紀の磁器に伴うものであろう。1・3トレンチ間の石垣3東の裏込めから出土した土師器皿・瓦質摺鉢・天目茶碗はこの石垣の築造に近い時期の遺物である可能性が高いと考えている。筆者には陶器天目碗を評価できないが、瓦質摺鉢は時間幅があるが上記の範疇でよいのであろう。しかし、石垣3の北端が不自然に終わる理由やその構築目的はわからない。

調査区南端の石垣1・2間から出土した遺物の中に、蛇の目凹形高台をもつ染付があり、石垣1の構築は18世紀後半以降ということになる。

石垣1基底部は3トレンチ南の付近を境に南北で様相が異なっている。南側では整然と大小の礫を立てて直線的に配列するが、北側では張出部の南半まではなお基底部から積み上げているものの張出部南は非常に乱雑で石材の大きさも揃わず、「石積み」とは呼びがたい様相を見せる。張出部南半は比較的揃った石材で基底部から積み上げるが、やはり積み方は雑というべきであろう。また、最上部の2段は石材・積み方が異なっていて後補であることが窺える。さらに1トレンチ北の畦以北では、上半は先の「最上部2段」と連続的であるが、それ以下はもはや積んだものではなく、バラスの堆積である。これは土石流の一部であろう。石垣1は土石流によって大破した後に東へ後退して石垣1下を再構築し、張出部も同時に付したようである。張出部の内側には石垣1下がなく、最終段階で置かれたと思われる石垣1の最上段だけであることから推測できる。さらに石垣1の中央付近、3トレンチ付近で石垣1下が積み方の不具合から孕んで崩落したことから、ここも最上段のみ直線的に石列を配したものであろう。石垣1南端付近は残存状態がよいことから、そこから出土した18世紀後半以降の出土遺物は構築時期を示すと考えてよいと思われる。とすれば、土石流はほぼ19世紀以降のことと推測される。

2トレンチ付近で終わる石垣2については、基底部から上端まで連続的に残存する石垣1南端付近で確認しただけである。表現を変えれば、石垣1が本来の姿を留めているところだけに存在し、石垣1が破壊された範囲には連続していないことから、これも石垣1同様に土石流によって破壊されたものであろう。そのときには石垣2本来の役割を近接する石垣1に譲っているはずで、そのため壊されたままの姿で現れたのであろう。ただ、上記のように推測しても、石垣1・2を大きく破壊したと思われる土石流が、石垣3に及ばなかったことは偶然に頼るほかに考えが及ばない。

4 上伊良原高木神社跡

(1) はじめに

伊良原ダム建設予定地内には祓川に向かって両岸から山が迫る隘路が何箇所かある。この上伊良原高木神社が位置する場所もその一つで、加えて眼前の祓川には「おとなし淵」という深みがある。今風にいえば「パワースポット」に所在する神社である。日本武尊に仮託してこの社を別名「藤の宮」と呼ぶようになったという経緯は「II 位置と環境」に引用した記録による。「伊良原一民俗文化財の調査一」では「藤は淵の転訛」であろうという見解が示されている。

明治時代の『福岡県名所図録図絵』（第4図）には、鳥居の前面（西側）の道（現国道486号の前身）を横切って川に下りる石段が図示されている。また、この絵には拝殿北側の石垣に敷設された切石の石段が示されていて、これについては後述することとなる。

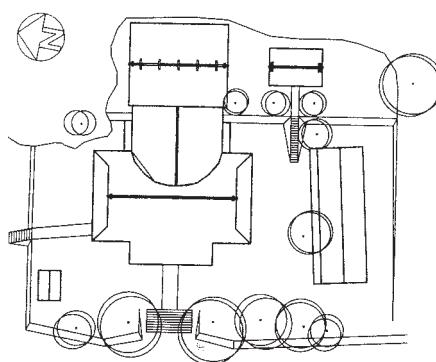
この神社では花崗岩を用いた間知石積みで囲んだ内部に土盛りをして境内（拝殿・御輿庫等）を造成し、本殿・末社は拝殿よりさらに2.5mほど高い位置に置いて、西側を間知石積みで塗していく。調査前、一段高く位置する本殿・末社の基礎は露出していたが中に土砂や大小の礫が散乱し、拝殿が置かれた低い位置では御輿庫兼社務所の土間コンクリートが露出していたものの、拝殿の礎石など全体が客土で覆われていた。この客土は神社の移設先の造成残土ということであった。調査は本殿基礎の中心と国道に面していた取り除かれた石段跡の中心を結ぶラインに沿って設定した東西方向のトレーニングの掘削から開始した。その後、客土された土砂を重機を用いて撤去、引き続いで境内各所にトレーニングを設定するなどして進めた。



おとなし淵から見た上伊良原高木神社



在りし日の上伊良原高木神社拝殿



第104図 社殿配置図 (1/500)



同上本殿・末社

拝殿跡北辺の間知石積みには移設・解体時の作業路として盛土での斜路が被せられ、部分的に壊れていたとはいえ間知石はそのままで、抜き取られたのは鳥井脇の正面石段及び末社正面の石段だけであった。

また、この社地は當時水没範囲から外れているため境内の西辺近くに楠・公孫樹・榧などの大木がそのまま残されていて、発掘が不十分に終わつたところもある。

調査面積は約3,000m²。発掘調査は平成26年4月14日に着手、埋め戻し・撤収が終了したのは同年11月26日であった。

(2) 層序

ここでは最初に設定した本殿・鳥居を結ぶラインに設定した1トレンチ及び拝殿西側で1トレンチから北へ延ばした2トレンチの説明を行う。他のトレンチについては、必要とあればそれぞれの遺構にともなって説明を加える。なお、本殿・末社の基礎はそのままで、基礎の下部は未調査で終わっている。拝殿の軒下にもコンクリートを貼った犬走りがあったが、それはすべ人力で除去した。ただし、コンクリート下に並べられた川原石及びその間に詰められた角礫はそのままにしたため、隔靴搔痒の感があることは否めない。

1トレンチ（図版57～60、第106図） 石垣・石列の説明は後述する。石垣1の裾は1トレンチでは確認していないが、1トレンチ南で間知石積みの最下段を確認していて、それは土層図の最下段に示した石材と同レベルである。石垣2との間はほぼ表土といってよい。

石垣2・3間は小礫混じりのよく似た土層が堆積し、下層がより明るく発色する。この付近から西側はほぼ全面に神社移転後に客土がなされ、厚いところは0.5mに及んでいた。なお、石垣3の背面で石垣を据えるためと思われる落ち込みを確認している。この付近のいわゆる地山は黄褐色砂質土、所謂真砂土である。

石垣3・4間は、幅1mに満たない狭い範囲で1.5mほどの深さを掘削した。標高206.8m付近で地山と考える層が現れたが、確認した石積みはその上0.5m前後で終わつて不安がある。標高207.6m付近に厚さ0.1mほどの赤味を帯びる層が入るが、ここでも全体に中小の礫が多く、炭や焼土、土器などが入った層は見られない。

石垣4と拝殿西側・向拝下のコンクリートの間は礫が少ない堆積層が見られ、発掘当初は川原石を交えた青味帯びる灰白色砂層を地山と考えていた。巨石（自然石）の裾のこの砂層上で焼土・炭を交えた落ち込みを認めたことにもよる。しかし、炭の入った落ち込みを掘削して、さらに炭層を追いかけていくと炭層が自然礫と思われる巨岩の表面に添つて地山と考えていた砂層の下位に潜り込んでしまったことから、あるいはこの砂層も後世の洪水による堆積層であろうかとも考えた。し



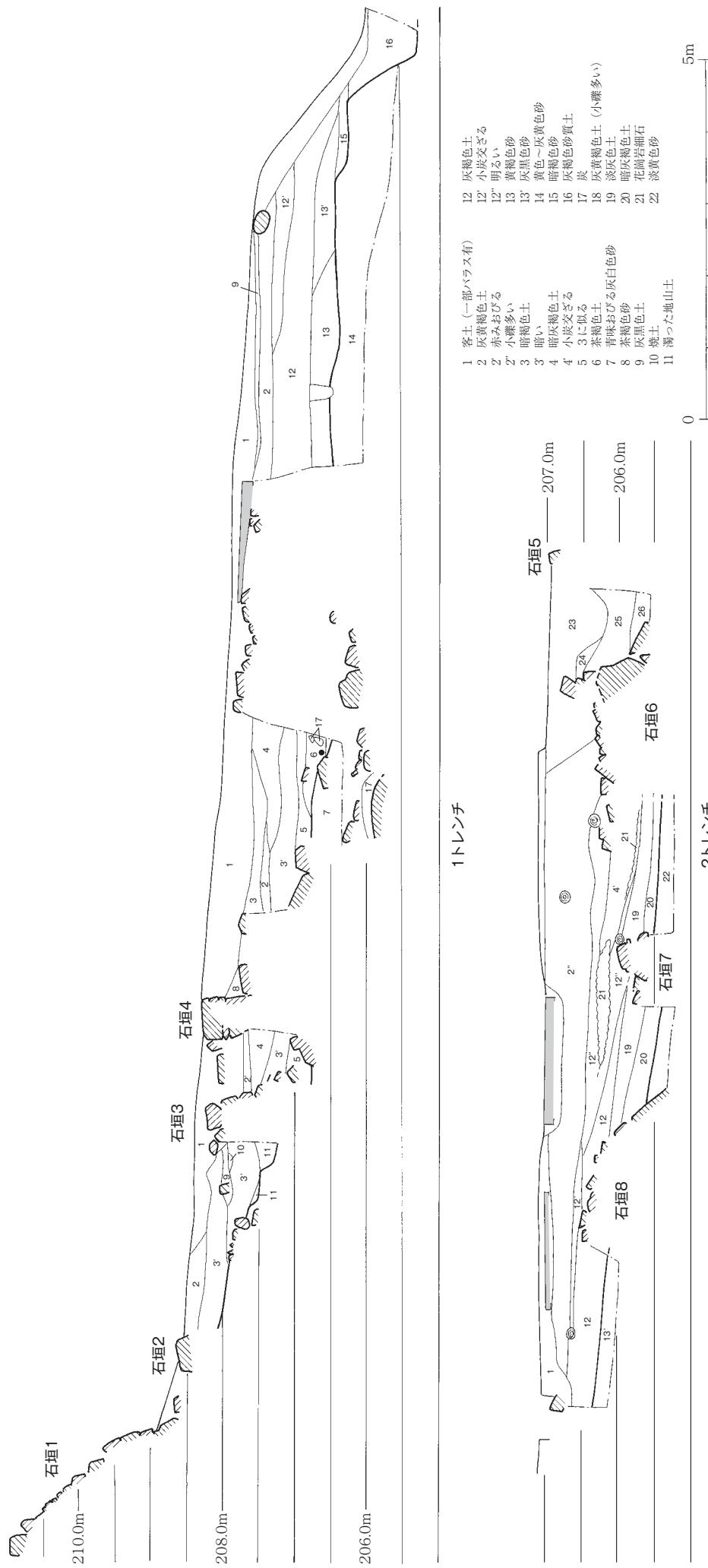
調査前の状況



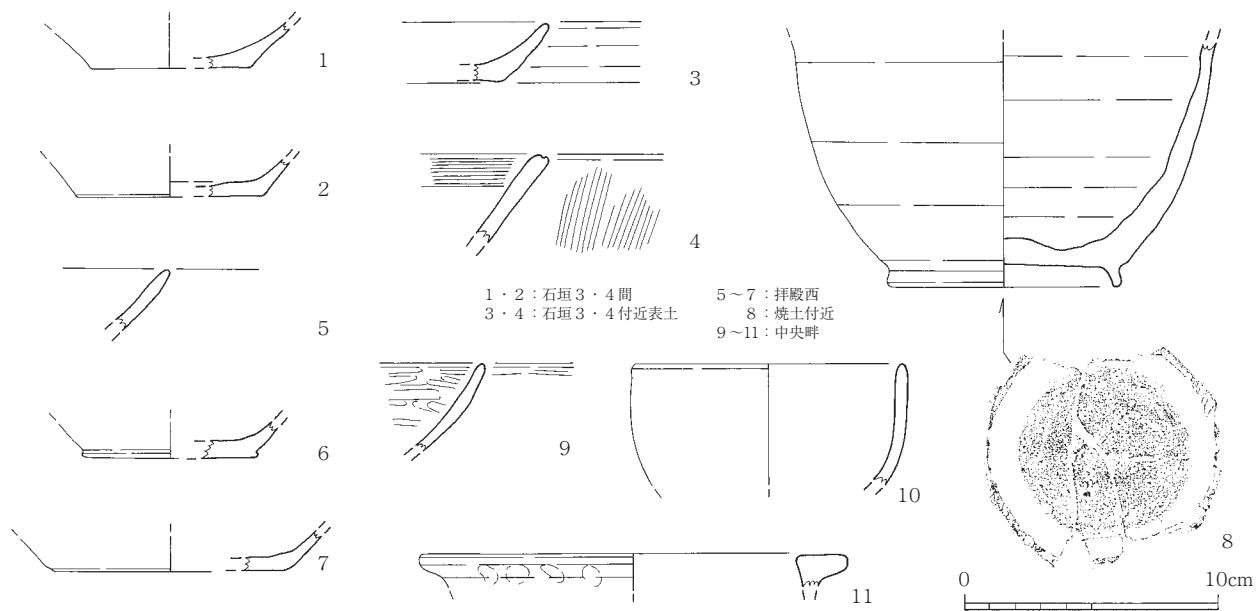
石垣3と拝殿基礎



第105図 遺構配置図 (1/200)



第106図 1・2トレンチ土層実測図(1/80)



第107図 1トレンチ出土遺物実測図 (1/3)

かし、これだけの堆積をもたらす大水ならば炭層などは洗い流すであろうし、逆に砂層上で火を使つた後に水を使えば、砂層の中に炭層が潜り込むことはありそうである。従つて、当初の見通しの通り、この砂層が神社祭祀開始時の地山と考えるのが妥当であろうと考えるに至つた。

なお、トレンチ掘削時に拝殿を巡っていたコンクリート製犬走りの直ぐ東付近から須恵器壺底部が出土した。当時は中位付近の暗褐色土からの出土と考えていたが、炭塊があって小炭が多く混ざる砂層直上の茶褐色土からの出土とする方が妥当であるかも知れない。

向拝から旧石段にかけては単純な堆積である。地山と考えている川原石を含む砂層は拝殿下部に比べて0.4m高くなっているが、先の焼土・炭の出土などを考えると多少の地形改変が行われたことも考えられよう。

出土遺物

土器等 (図版74、第107図) それぞれ出土位置の詳細を記録していない。ただ、8に示した須恵器壺は土層図にドットを落とした付近からの出土である。

1・2は体部下端が内彎し、胎土・作りともに精良といってよい土師器皿片。内面に凹凸の小さな水挽き痕が見える。3は胎土は良好であるが外面に凹凸が目立ち、作りが雑な土師器皿。4は瓦質の鉢形土器小片で、胎土は良好。器肉の芯が黒色、内外の器表近くが灰黄褐色となり、器表は再び黒色となる。外面には粗い刷毛目が見えるが、口縁部内面はカキ目状の細かい刷毛目で仕上げられる。5～7も土師器で、6は体部下端、底部外縁に粘土がはみ出していて形状が乱れる。いずれも胎土は良好。

8は須恵器壺の体部片で、小振りで、わずかに外方へ踏ん張る華奢な感のある高台を付す底部は完周。体部外面下端付近は籠削りの後に横撫でを施すが、籠削りの範囲はよくわからず、底部外面の切り離し痕も残らない。外面の大部分が灰を被って黒色化する。大粒の砂粒が数点見えるが、概ね胎土良好といってよい。

9は胎土良好な瓦器碗。口縁部付近の内外面と器肉が黄白色～灰白色で、以下の内外面が黒色となる。内面は全体に籠磨きで仕上げ、外面も丁寧に仕上げられるが、籠磨きを確認できない。

10は胎土が黄白色～灰白色、内外面に掛けられた釉が灰黄色に発色する陶器碗。11は一見弥生中期土器を思わせる器形であり、胎土・色調を見ても違和感はない。ただ、ほかに弥生土器は皆無で

あり、断定を控えておく。頸部外面に真っ黒に煤が付着、口縁部外面は灰褐色に変色する。

2 トレンチ（図版60、第106図） 拝殿西側に南北方向に設定したトレンチで、図左端は1トレンチとなる。1トレンチ付近では、灰黒色砂層が地山となり、その上に灰褐色土が0.4mの厚さで堆積、その上を小礫を多く交える灰黄褐色土が覆うが、これはある時期の客土であろう。中間の灰褐色土は混ざりの無い砂質土であった。この上面に小炭を交えた灰褐色土が薄く覆い、それに連続して上面に緩い勾配をもつラインがほぼ207m前後で続くことからある時期の地表となっていたのかも知れない。この土層で特徴的なものは石垣7の上を覆い、北へ広がる花崗岩細石の単純層である。土層図作成位置から数m東側では石垣7の前面（北側）まで広がっていた。下伊良原高木神社でも見られたが、間知石を作成した際の石屑であろう。

石垣6の上面に光沢をもつほどにきれいに加工した花崗岩製石材（東石か）が投げ込まれていて、石垣6裏込め付近にその掘り込みがありそうであるが、これは判然としなかった。石垣5構築時に不要になった廃材を埋め込んだものであろう。後述するビール瓶もこの掘り込みに対応する位置にあったと思われる。

なお、石垣8の北側に積み上げたように石材が連続するが、最下段の大型石材は地山中のものであろうと判断している。

（3）遺構と遺物

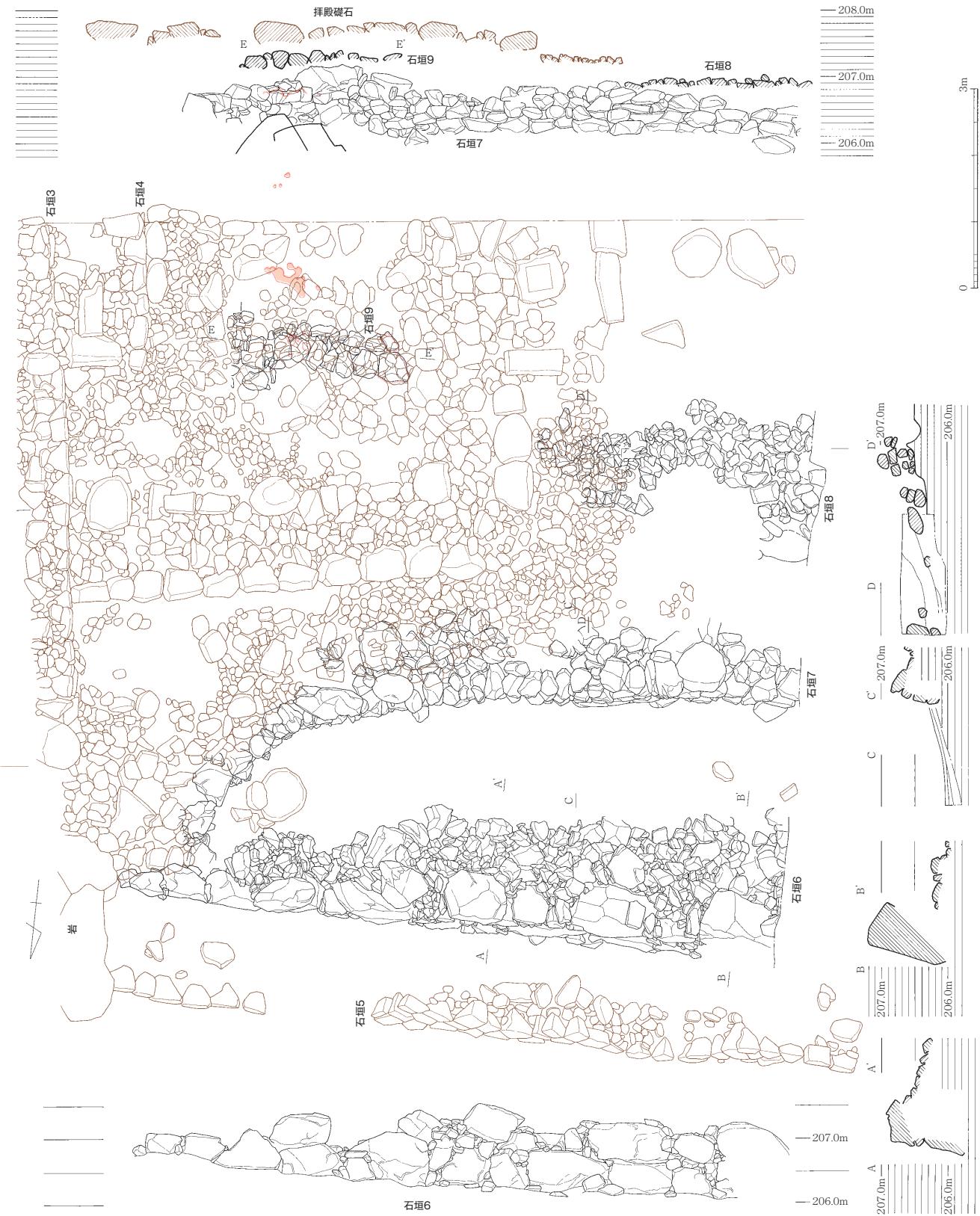
今回の調査で検出した主要な遺構は拜殿下などで検出した複数の石垣・石列である。厳密に呼び分けるのが煩雑であるため、「石垣」として遺構の連続番号を付した。ほかにも末社前の客土（造成土）中で石組を新たに確認している。

本殿及び南に近接する末社は江戸期の建造物で、民俗調査で報告されている。幣殿・拜殿は昭和に改築されたという。現地では、コンクリートで固められた各社殿跡を見て、基礎部分の調査は必要ないと判断した。以下、主要遺構の石垣から説明を加える。

1) 石垣・石列

石垣1（図版61、第105図） 現況で本殿前の花崗岩製間知石積みは略南北方向に直線的に築かれているが、本殿正面に当たる部分は幅3.5mにわたって間知石が見られず、自然石の角礫などが積み上げられていた。初めて目にしたときは奇異な感を受けたが、その両端付近の裾にコンクリート板が水平に置かれていることから幣殿の東柱をこの上に置いたものと考えている。この部分だけ石積みを替えた理由は、本殿・拜殿の比高差が2.5mと大きく、間知石積みの勾配のままでは幣殿を架構できないので勾配を緩くするための工夫であろう。角礫は下位の0.8mほどが急勾配で、その上方は勾配を緩やかに変えている。第4図にはこの勾配に対する工夫が描かれていない。現状の石垣1の間知石積みに組み替えた様子も窺えなかった。同図では幣殿が本殿に達していないことから、これは絵図が不正確であったものと思われる。

石垣2（図版61、第122図） 石垣1の角礫の前面（西側）0.6mの位置にやや大型の石材を2つ横置きし、その北側にもやや小型の礫を2段ほど雜に積む。南側は一部欠けているが、石垣1の裾に揃えた石列が置かれていた。また、これは先のコンクリート製の東柱礎石に繋がり、コ字形の区



第108図 拝殿及び下層実測図 (1/60)

画をなしていたものと思われる。これを石垣2としたが、本来石列と呼ぶべきである。

南辺では直線的に西側へ延びる石列の痕跡があり、さらに延長すると後述する石垣4南辺まで同一線上にのる。北辺では、束石としたコンクリートのやや南にやはり西へ続く石列の一部が残り、この南北の石列は平行に置かれていることから、幣殿に関わるものであろう。

石垣3（図版61、第105図） 石垣2の西側3m付近に石垣3とした構造物がある。これは本殿北に露出する巨岩の西端裾付近から石垣1に並行に南北方向に構築されたもので、幣殿を区画し、社殿が存した頃は拝殿後ろに露出していたものである（131頁スナップ参照）。

この石垣の中央付近、南北5mほどの部分には西側へ張出（石垣4）が付き、張出を挟んで南北の石垣3は同一直線上にのっていない。

さて、張出内にある石垣3であるが、土層図に見るよう自然石を4段、高さ0.8mまでは確実に積み上げているが、その下位は石材が接しておらず積み石ではないようである。土層図に示した石垣3の下端は標高207.4m付近である。石垣3の間知石の基底部を拝殿犬走り北辺で観察していく、そこでの標高は207.3mであり基底部の深さはほぼ揃う。

この石垣3は張出部が付く部分を除く南北では長方形の間知石を整然と平積みしているのに対し、張出が付く南北5mにわたる部分では自然石を使用している。これが古い形-古い時期の構造物であることが推測されるが、この部分だけが自然石で残された理由はわからない。第4図には石垣3の位置に石組が描かれていて、既に明治末に存在していたことがわかるのであるが、石材の詳細は不明である。

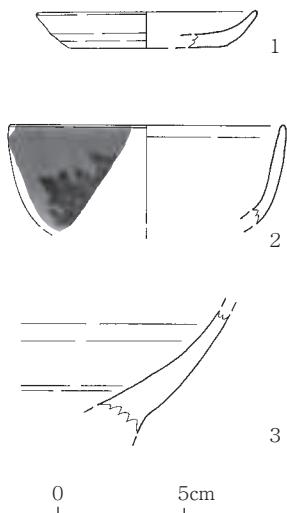
出土遺物

土器等（第109図） 石垣2・3の間から出土したもの。1は土師器皿で、復元口径9.6cm、器高1.6cmを測る。2は染付碗の小片。文様の意味はわからない。3は白磁小片で、内面が露胎であることから瓶のような器形となろう。外面器表が白磁玉縁椀に似ることから、中世に遡るものであるかも知れない。

石垣4（図版61、第105・108図） 石垣3から張り出す部分を当初こう称した。南北5mほどの長さで西側へ張り出し、かつその北辺（約1.2m）と南辺（約2m）は長さが異なっている。西辺を正面と見なしていたと思われるが、西辺は石垣や礎石等から推測される社殿の方位ともわずかに異なっていて、何を基準に設定したものか不明である。

この石垣は高さ0.7mほどに積み上げられていて、石垣1の間知石でない部分の石積みに比べれば比較的丁寧な造作といってよいかも知れない。直ぐ前面裾に水平な面を上にした扁平な川原石3個を並べ置いて、石垣3から1.2m西側にも川原石とほぼ同レベルで並べられた石があり、両者の間は0.2mほど低く小礎を敷き詰めたようになっている。この状況は北辺まで連続していたようであるが、そこでは張出は1m弱と規模を減じる。また、この石垣4西側の基壇状の礎群は中央畦上にある大きな礎石（束柱に伴うものであろう）に重なる位置にあり、畦の南側では確認できていない。

拝殿は梁行2間、桁行は中央間が広くなる3間の規模であった。東辺の礎石は石垣3に接するよ

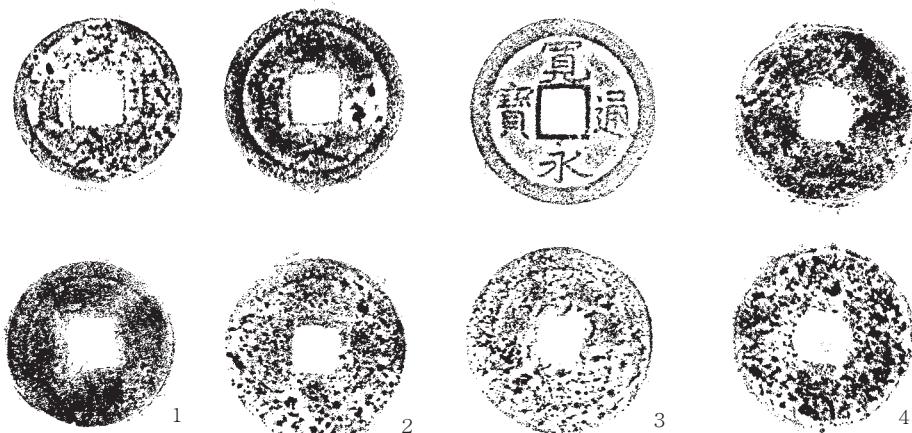


第109図
石垣2・3間出土遺物
実測図（1/3）

うな位置にある川原石である。つまり、この石垣4が構成する略長方形の張り出しあは拝殿の床下となり、見ることができない構造物である。本来の意味はこれも不明と言わざるをえない。

出土遺物

銅銭(第110図) 「石



第110図 石垣3・4間出土銅銭拓影

垣3・4間表土」からの出土であるがここで紹介しておく。

1～3は寛永通寶銅銭。1は直径2.2cm、2・3は同2.4cmを測る。3では「通」が乱れているが、これは范傷によるものであろう。4も直径2.4cmの銅銭であるが、文字が見えない。表裏ともに輪郭も非常に甘い。

石垣5 (図版62・72、第105図) 現在の境内主要部を囲繞する花崗岩間知石積みの石垣で、北辺は約13mの長さで東端は巨岩に接する。西辺は約40mほどの長さをもち、北に偏して鳥居があるためにそこは開いているが、正面に置かれていた石段は撤去されていた。また、鳥居の両側3mほどで緩く屈曲している。南辺は5mまでを確認したのみであるが、直ぐ南に里道が付されていた。西辺南端付近で1.5m、同北端付近で1.7mの高さを有する。

出土遺物

瓶 (図版76、第111図) 石垣6を埋めて石垣5を築いている。したがって石垣5・6の間の埋土に石垣5を築いた時期の遺物が入っている可能性があるのであるが、ここでは石垣6を初めて発見した北参道に沿うトレンチ内で絶好の資料である「サクラビール」瓶を4本検出した。

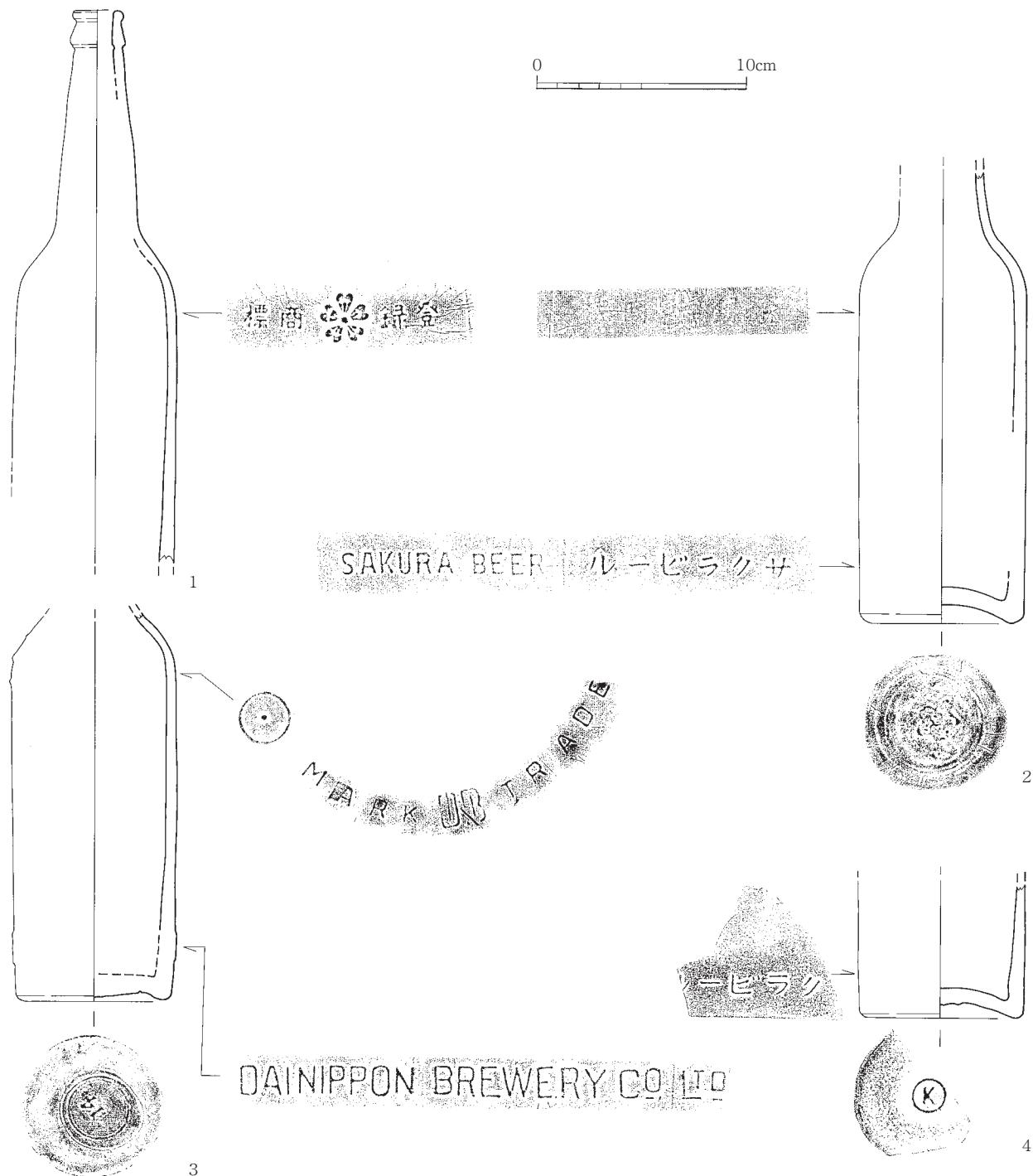
第111図1は最大径7.9cmを測る、大きな気泡が数箇所に入る茶褐色のガラス瓶。肩部に「標商(桜花図柄) 錄登」と陽刻する。2は1に比べて濃い茶褐色瓶である。肩部の「標商(桜花図柄) 錄登」陽刻は非常に薄く、漸くそれとわかる程度である。下端にローマ字と片仮名で「サクラビール」と陽刻、さらに瓶底にも桜花を陽刻している。これは最大径8.1cmを測る。3は1に似る茶褐色瓶で、肩部の「MARK (DBのロゴ) TRADE」の「MARK」の「A」の左側及び「TRADE」の「R」の右側にしっかりと型の継ぎ目が残る。底に「14」と陽刻があり、ここを見ると瓶の厚みが一様でないことがわかる。大正元年(1912)、九州初の本格的なビール製造会社として「帝国麦酒」が門司に開設、「サクラビール」を製造・販売した。昭和18年(1943)に「大日本麦酒」と合併したが、昭和24年(1949)年に解体された。瓶の種類はそれぞれ異なるようだが、「大日本麦酒」があることから、この瓶の上限は合併後の昭和18年ということになろう。拝殿・幣殿を改築したという昭和27年(1952)に石垣5を構築、その際に混入した可能性が高い。状況を見ると、当時の関係者が意図的に入れたものようである。

土器等 (第112図) 北辺の石垣5・6間から出土したもので、5～18は「東端」、19～27は「下層」、28～31は「東端最下層」からの出土である。

5～14は土師器。5は肉厚の底部をもつもので、体部下端が不整となる。後述する「北区」からこの種の土師器が多く出土していて、関連するものであろう。6は胎土・作りとともに粗い小皿で、

赤味をもって焼き上がる。7・8は体部が内彎気味に急角度で立ち上がるもので、8は胎土・作りともに粗い。9・10に示した体部下端が丸味をもつ底部が伴うのであろう。11～13は体部下端が強く横撫でされて内彎し、体部・口縁部が大きく浅く開くものであろう。これらは胎土・作りとともに良好。14も器形が似るが、これは雑な作りである。

15は底部が箍状に突出する瓦質土器で、胎土が灰白色、器表が灰黒色となる。残存部上端に透孔が見え、16と同様の器形になるようである。16は器肉中心部が暗褐色、内外の器表近くが灰赤色となり、器表は底部外面も含めて全体に暗褐色となる瓦質土器で胎土は良好。外底面に微妙に板状というよりスダレ状、あるいは布状の圧痕が見える。箍状に大きく突出する底部のすぐ上に低い断面三角突帯を巡らせ、その上に長方形の透孔を開ける。透孔は幅約2cmで2cm間隔で開けられている。

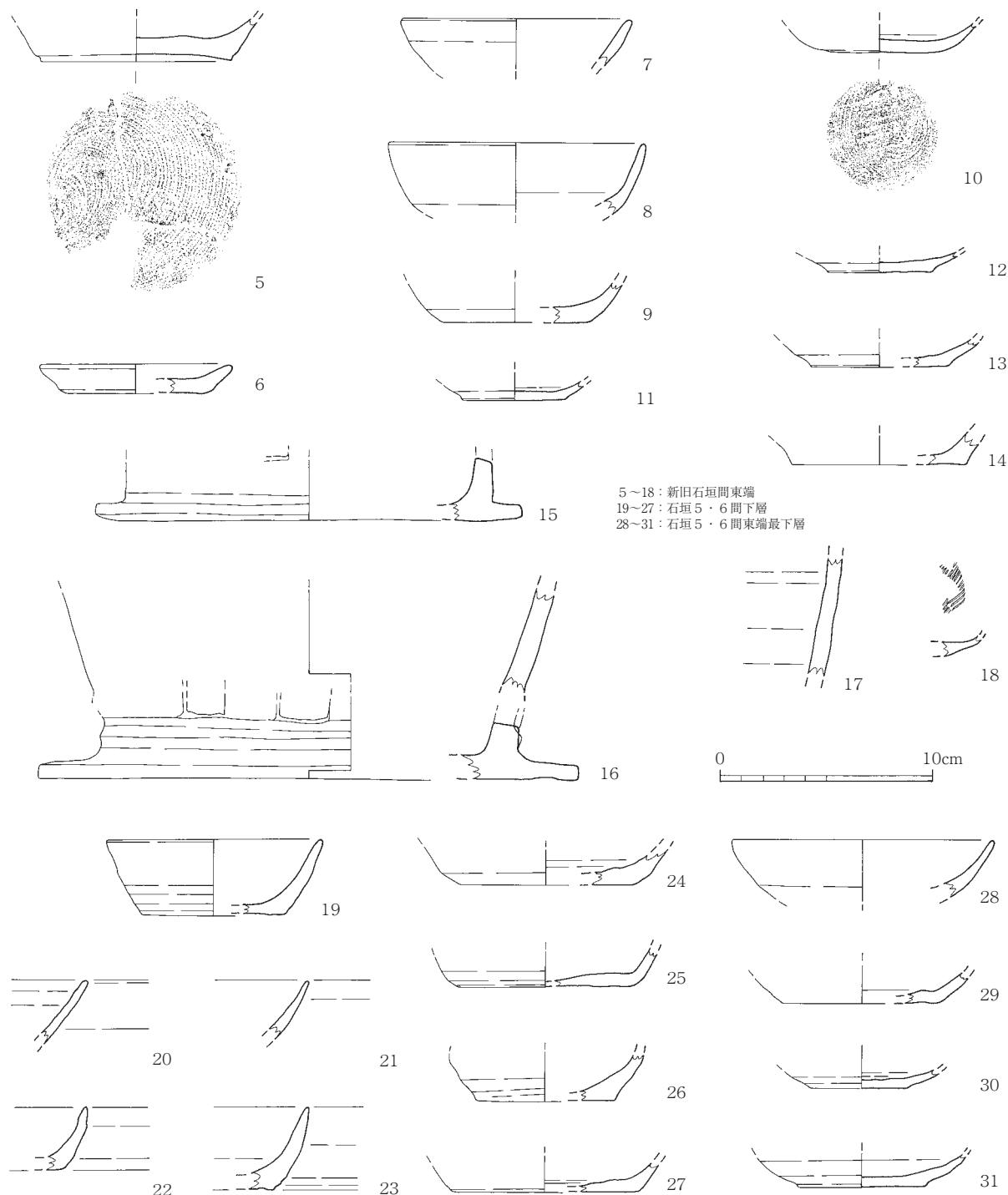


第111図 石垣5・6間出土遺物実測図1（ガラス瓶、1/3）

内外面ともに残存範囲では特に器表が荒れた部位はない。所謂瓦灯であろうか。

17は須恵器壺の体部片で、内面の横撫で調整は丁寧になされ、外面は灰被りで黒色となる。1トレンチ出土の壺と同一であるかも知れない。古代に属するものであろう。18は同安窯系青磁皿の小片。釉は緑味強く発色する。

19~31は土師器。19は復元口径11.2cm、器高4.9cmで杯というべき形状となる。図では古代の土器のように見えるが、体部外面下半の水挽き痕は明らかに古代の技法ではない雑な感の作りである。20・21は口縁部小片であるが、これらにも細かな水挽き痕が残る。22・23は体部が急角度で立ち上がる皿で、口縁部にかけて肉厚の変化が著しい。23は19と同様に外面に水挽き痕が顕著で、体部下端が不整となる。24・25は体部下端が丸味をもつ底部片、26・27は同部が内弯あるいは直線的とな



第112図 石垣5・6間出土遺物実測図2 (1/3)

る底部片。

28は体部から口縁部にかけて内彎する皿で、胎土・作りともに良好。29・30では内底面に水挽き痕が残り、体部下端が内彎する。30・31は胎土・作りともに良好。

石垣6 拝殿北側にコンクリート舗装した参道があり、調査の早い段階でその参道の東側にトレーナーを設定して見つかったものである。石垣5の直ぐ南で検出した自然石の石垣で、ほぼ並走する。そして、この内側の自然石の石垣は西辺、南辺で立木の間に開けたトレーナーでも確認でき、石垣5はこの石垣6を拡張したものであると判断している。北辺から西辺北半にかけては連続すると思われるが、石垣5が途切れる正面石段の部分の処理は立木のために確認できなかった。

石垣6 北辺（図版61～63、第108・113図） 本殿北に露出する巨岩の裾から西に約11.5mまで確認した。西端の石材は錯綜する立木の根のために十分検出することができなかつたが、石垣6は石垣5頂部から1m程の位置にあり、西端の石材は繁茂する根で精査できなかつたが、北辺西端に該当すると思われる。隅の処理は確認できなかつた。

基底部のレベルが東高西低であり、使用する石材は西側が大きくなる傾向がある。残存する範囲で、3点の石材の頂部が207.4～207.5mほどでほぼ揃っていることから、その辺りで頂部をほぼ水平に積み上げていたのであろう。東端は0.3mほどの高さの石材を横置きして終わる。

北辺の石材は裏込めも含めて大部分が角張った自然礫で、川原石は殆んど使われていない。また、加工痕はなく、最大の石材は高さ1.2m、幅1.1m以上の大きさである。裏込めにも多くの石材を使用するが、当然ながら高く積み上げる西側が手厚くなる。

石垣6 西辺北（図版63・64、第113図） 北西隅と鳥居の間に開けたトレーナー。最大で幅1.3m、高さ0.85m以上、厚さ0.6mほどの角礫などが面を西に揃えて積み上げられている状況を確認した。西側、石垣5との間には石垣6を構成していたと思われる比較的大型の石材が落ちていた。残存する頂部は石垣5西辺の頂部に比べてわずか5cm低いだけである。ここにも角礫を使用する。

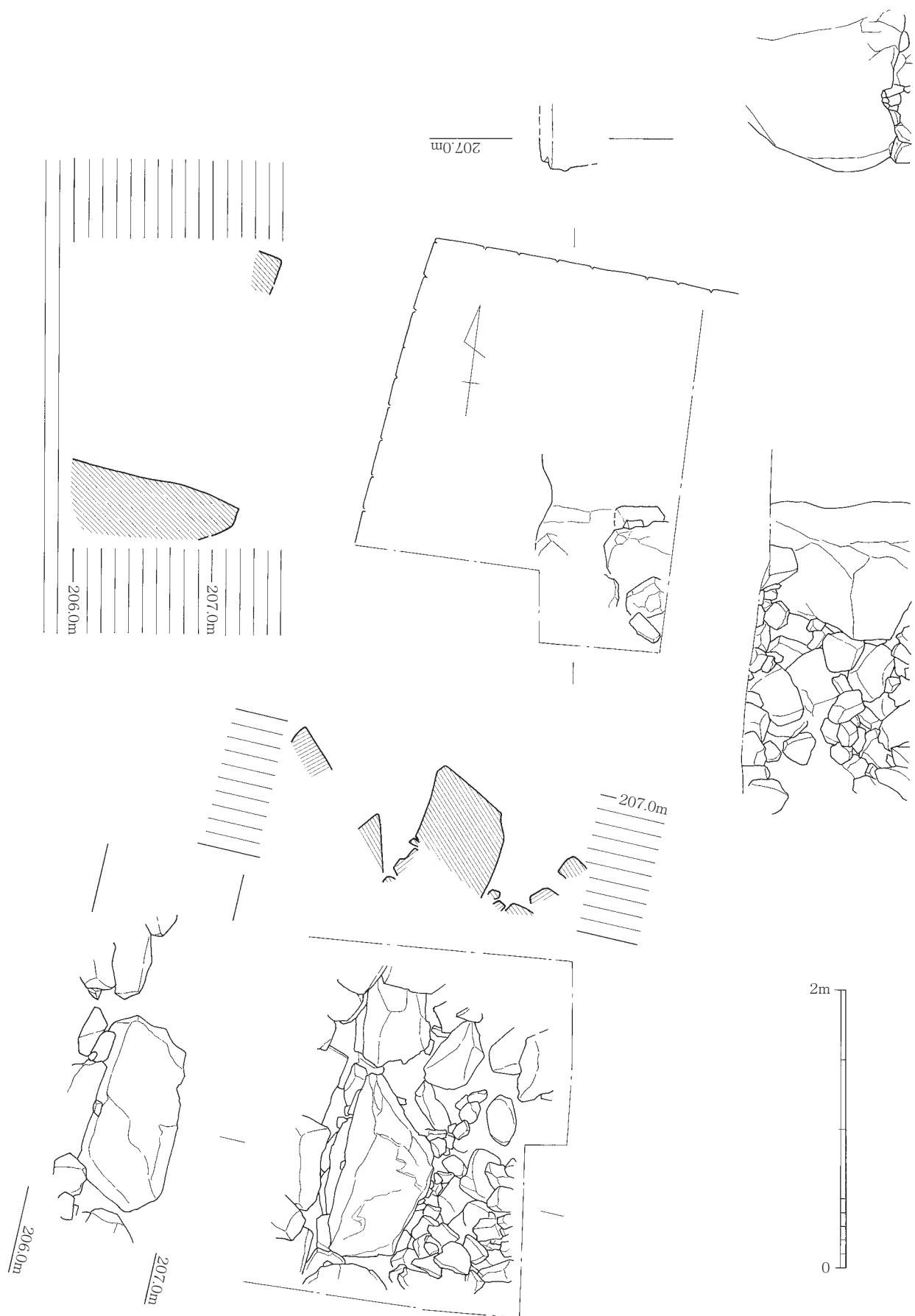
石垣6 西辺中（図版64、第114図） 鳥居と南西隅の間、北寄りに開けたトレーナーである。ここでは石垣5頂部から1.2mほど西で面を揃えた石積みを検出し、両石垣の間には石垣6に用いられたと思われる石材が多く落ち込んでいた。石材は西辺北や北辺で検出したものに比べて小振りとなり、角礫だけでなく川原石が多く使用されている。

石垣6 西辺南（図版64～66、第114図） この付近で最初に着手したのは御輿庫の土間コンクリートの西辺中央付近で略東西に開けたトレーナーである。西端で多くの川原石が現れたものの石垣6を認識しておらず中途で止めていた。石垣6を確認した後にトレーナーを西へ延ばし、さらに南北方向にも拡張、御輿庫に近い部分にも略南北方向のトレーナーを新たに設定した。

当初のトレーナーを延伸した部分で、幅1.2m、高さ・厚さともに0.6m程の川原石が重なった状況を確認したが、上方の石材は東側へずれていて、下方の石材も南北方向で直線的になっていない。これは基底となる不整形の自然石巨岩の上に組み上げて置かれたものが、安定感を失ってずれたのであろう。また、基部と思われる石材を3個認めたが、さらに南側では基部といえるような石材ではなく、中小の川原石が山積した状態であった。また、この辺りで石垣6に伴うと思われる石材はほぼ全てが川原石で、北側とは全く異なる。

石垣6 南辺西（図版66、第115図） 御輿庫土間コンクリートの西辺に添って、略南北方向で南に向かって設定したトレーナーで石積みを確認したことから、その部分を拡張し、さらに境内地南に南北方向のトレーナーを2本設定した（末社南のトレーナーを除く）。

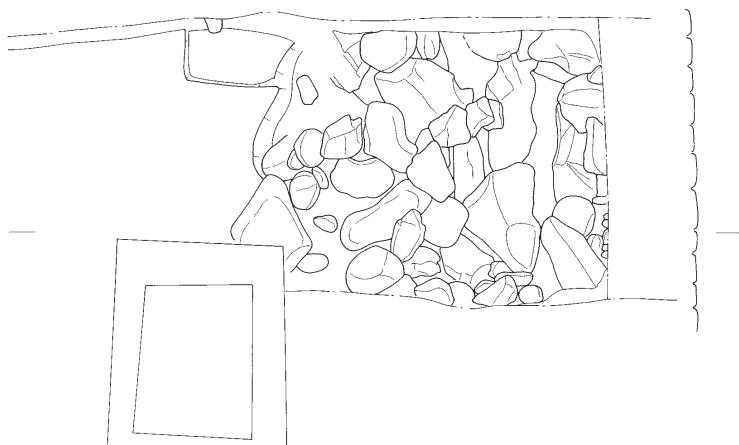
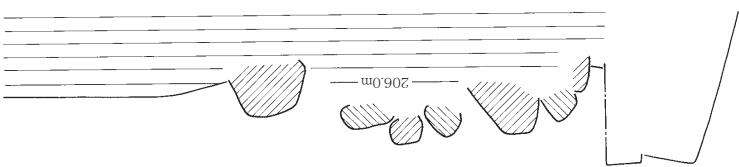
ここで略東西方向の石垣を2m強の長さで検出した。検出した西端は0.8mほどの高さで小振り



第113図 石垣6北西隅付近実測図 (1/40)



第114圖 石垣6西邊南実測図 (1/40)





第115圖 石垣6南西隅付近実測図 (1/40)

の川原石を4～5段積み上げているが、背面の控え積みは見られず、堆積層（客土か）の上に置かれていた。また、この石積みは東へ向かって徐々に低くなり、図示した東端の小礫は石垣とは呼びがたく、その手前、2段積みまでで2.4m強の長さとなる。さらに東側は立木などではっきりしないが、2段に積まれた石積みの東3m付近に開けたトレンチでは石積みはなく、しっかりとした地山が現れた。図示した辺りで一端石積みは終わるようである。

なお、石積みが終わる辺りの南側で埋甕を検出した。甕の回りはモルタルを貼って浅い摺鉢状となっていて、ある時期の小便器であろう。

また、石垣6の南4mほどのところで略東西方向の石列を認めたが、ここは境内地南の里道下に当たる。角礫を使用していて、神社に無関係の新しい時期の石積みであろうと判断して詳細を記録していない。

石垣7（図版66・67、第108図） 石垣6の南で検出した。西端では石垣6・7のそれぞれ正面となる北面は西端で3.8mの距離をもつが、石垣7は北東方向に曲線を描き、北東端は石垣6の下になる。

確認した西端から6m強の間は直線的に延びて川原石を多用、平積みにしているが、以東は曲線を描いて、ほとんどが角礫を使用している。平面弧状に積み上げるために滑りやすい川原石よりも角礫が都合がよかつたのであろうか。高さは最大で0.9mほどが残存、標高では207.0～207.2m辺りが最高所となる。東側で床面に多くの礫が露出しているが、これは掘り過ぎて地山中の礫が露出したものである。出土した唐津焼からみて18世紀に機能していたことが窺われ、寛延元年（1748）の拝殿建設に伴って構築されたものと思われる。

この石列を覆って、さらに北側に至るまで大量の花崗岩細石が層となって堆積していた。花崗岩細石は間知石を加工する際に生じたものと思われる。間知石は石垣1・3・5に使用されているが、石垣5は昭和27年頃に築かれたものである。境内西北寄りに設定した2トレンチの土層観察では、この花崗岩細石層は石垣6構築時に置かれたものであり、石垣5に伴うものではない。一つの考え方として、石垣1・3・5は構築年代が異なり、石垣1・3はより古く築かれたと考えることもできる。「伊良原一民俗文化財の調査」では当社の本殿について、

村社高木神社由緒記載願」に天保11年（1840）7月24日の「当社建替上棟」を記した棟板写が収録されるが、これは「柱替」のみで、幕股や彫刻は旧神殿のものを用いたとも記される。軸組は天保の建築と見られるが、彩色を施した中備や妻飾幕股は17世紀前期の様式を残すので前身神殿の装飾を一部に利用したと考えられる

と記され、17世紀前半には同規模の本殿が置かれたと想定している。現境内を見ると、本殿の位置する高い部分がなくしては同規模の拝殿・幣殿・本殿を直線的に配置することは無理である。であれば、17世紀の社殿配置は現在と同様であったと思われ、石垣1あるいはその前身は当時から存在したことが考えられる。寛延元年以降の記録では天保11年（1840）の本殿改築が大きな事業であり、その際に石垣1の間知石積みおよび石垣6が構築された可能性も考えられる。

出土遺物

石垣6・7間では先の花崗岩細石層と、その下方の炭を多く交える灰黒色土層が鍵となる。灰黒色土層以上は石垣6構築時の遺物ということができるが、峻別できないのでここで紹介する。

銅鏡（図版76、第116図） 直径15cmほどに復元できる銅鏡片で、「石垣7北裾」からの出土があるが、出土時の記録がない。幅広い凸線で浮き出させた組み合わせ枠の内部に木瓜文を描くようである。通常の組み合わせ枠は枠の重なる部分で上下を表現するのであるが、これは表現していない。

方形の外側は珠文を散らす霰地とし、「天下一因幡守」と鋳出す。文様は非常に鮮明であるが、文字は稚拙といえる。

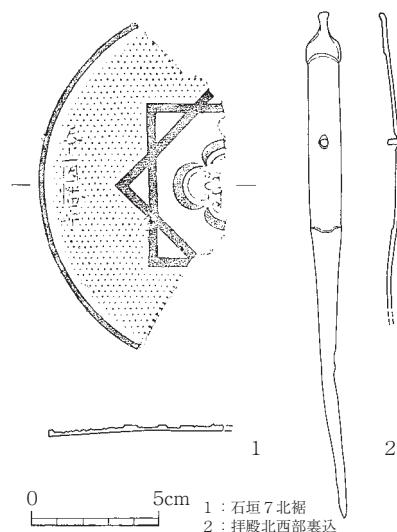
銅銭（第117図） いずれも「黒色土上」から出土した8枚の銅銭で、そのうちの6枚は重なって鋳着していたが整理中に3枚ずつに分かれた。2は馬頭通と呼ばれるもので、元禄10年（1697）以降の鋳造という。3・4は同一個体の表裏でなく、重なった3枚の表裏である。文字が判読できるものはいずれも寛永通寶で、中に背面に「文」が鋳出されたものがあり、寛文8年（1668）の初鋳という。

石製品（第118図） いずれも灰味帯びる淡小豆色の泥岩製砥石で、1は「花崗岩細石層下」、その他は「灰黑色土上」からの出土とあって、ほぼ同じ層からの出土である。1は団上端小口が折損するが、それを除く全面が使用されている。団背面右側は剥離面で未使用であるが、使用後に剥離したものかどうかはわからない。なお、使用面のほとんどは仕上げ砥と思われるが、団背面だけはさらに粗い条線が縦方向に無数に入る。2もほぼ全面を仕上げ砥として使用するようであるが、団背面が薄く大きく剥離している。

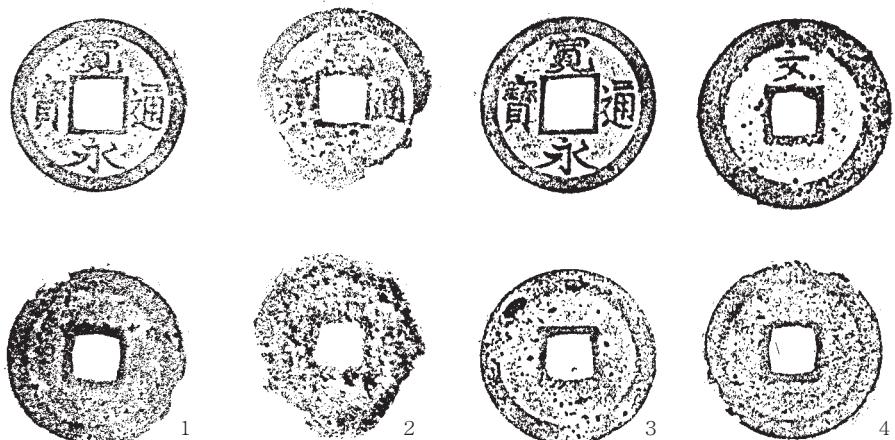
これは廃棄後の剥離のようである。また、団左側面だけ使用が少ないようである。これも非常によく使用されたようであるが、団上端は折損のままで終わっている。また、背面が大きく剥離する。4も団上端で折損するが、それ以外のほぼ全面が使用される。ただ、ほかに比して使用が少ないようである。また、団背面では幅広の浅い条痕があるが、肌がやや粗くなる部分が残る。これらの砥石は社殿改築や境内整美に使用したものを見棄したということであろう。

土器等（図版74、第119図） 比較的多くの土器が出土している。1は「東半」、2～17は「東半下層」とあるが、これは便宜的に分けただけで以下の「花崗岩細石層」「灰黑色土」などとの対応は確認していない。

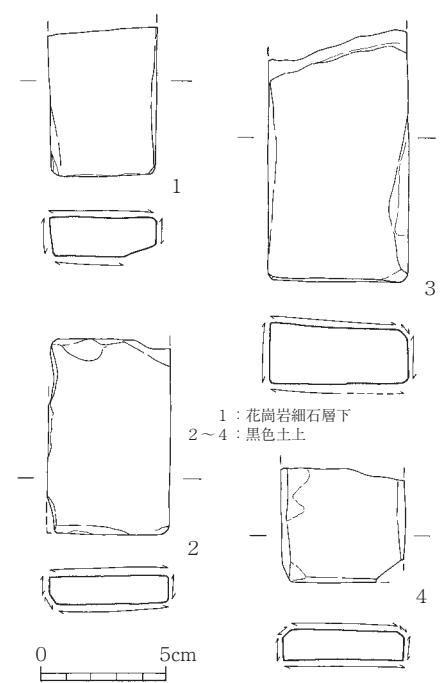
1は陶器火入れ。暗灰色緻密な胎土をもち、内側へ折り返した口縁部から体部下位の屈曲部やや上方に掛けて緑味帯びる灰色に発色する釉を施す。露胎部は灰赤褐色となる。作りは精緻といってよく、高台は内側を削り込んで作る。17世紀後半に比定できるものであろうか。2～16は土師器皿。2・



第116図 出土金属製品実測図(1/3)



第117図 石垣6・7間出土銅銭拓影 (1/1)



第118図 石垣6・7間出土遺物実測図 (石製品、1/3)

3は体部下位が肉厚となるもの、4は肉厚が変わらない。2は復元口径13.0cm、器高2.9cm、3・4は復元口径12.0cmで、4は器高3.2cmである。5は体部が急角度で直線的に立ち上がる。6・7は体部下端が丸味をもつもの、8はわずかに内彎する。10～13は器肉が薄く、大きく開く口縁部片。14～16のような底部とセットになるものであろう。この3点の底部片は胎土・作りともに良好である。17は浅く大きく開く皿状の陶器。灰黄色の緻密な胎土をもち、全体に掛かる釉は緑味帯びる暗灰色となる。

18は「花崗岩礫層上」出土の壁土。棒状の圧痕が残り、断面図の左側及び下位が原状を保つようである。胎土には1mm前後の砂粒を交えるが、スサといったものは見えない。

19は「花崗岩礫層中」出土の轆羽口。外径8cm、内径2.5cmほどである。これも砥石と同様、花崗岩の成形や建築に用いる金具等の作成・加工に供したものであろう。

20～22は「花崗岩礫層下」出土。これは後述する「灰黒色土上」と同じと見なしてよいと考えている。20は陶器碗。体部下位が丸味をもち、上半は直線的に小さく開く。体部下半には小さな凹凸が多く、籠削りの結果であろう。華奢な高台は直立し、総釉の後に畳付だけ釉を搔き取っている。胎土は灰白色緻密なもので、釉は灰味帯びる黄白色に発色する。21も緻密な胎土の陶器片で、これは残存部が露胎となるが、その上端が赤変することから施釉部に近いことを窺わせる。外面が灰黄褐色、内面は明黄褐色となる。これも高台は削り出している。22は染付小片。器肉が薄く、文様の一部が残存する。

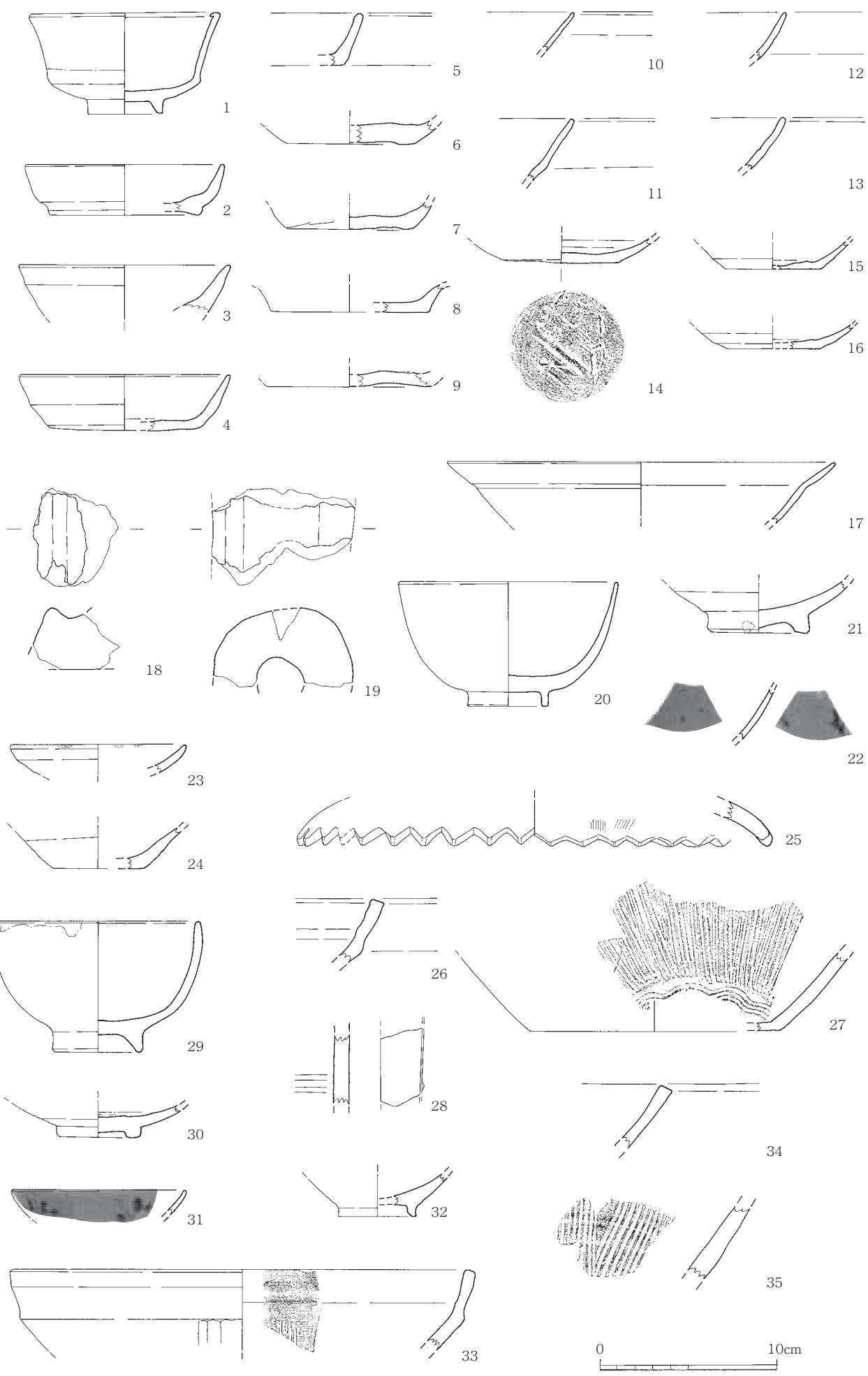
28～30は「灰黒色土上」出土。28は25の一部か、残存部両側に透孔が入る。29は陶器碗で、胎土は灰黄色となり緻密さを欠く。釉は透明釉か、器肉とほぼ同じ色であるが、口縁部の一部に灰緑色となる釉を掛けている。体部内面及び外面上半部、そして高台内は光沢をもつが、体部外面下半から高台外側に掛けては光沢がない。また、高台畳付も上手に釉を搔き取っておらず、焼成時に熔着して畳付の一部が欠けている。30は灰白色に近い非常に精良緻密な胎土をもつ唐津焼で、内面に濃灰青色に発色する釉を掛けるが、見込は蛇の目に搔き取っている。外面は基本的に露胎となり、体部下端では籠削りの痕跡か、縦方向に筋が入る。高台畳付に糸切り痕が残り、高台内の削り込みが中心から偏して、高台の幅が異なっている。この種の陶器は大橋康二氏が青緑釉陶器と呼称し、1690年代～1780年代に生産されたとされる（大橋康二「肥前陶磁」（『考古学ライブラリー』55、1993）。

23～27・31・32は「灰黒色土下」出土。23は体部が丸味をもつ浅い土師器皿で、口端部の一部が黒変する。灯明皿か。24は平底から大きく広がる体部をもつ土師器片。胎土・作りは良好である。25～28は瓦質土器。25は接地部が鋸歯状となるもので、器肉中心が黒色、内外の器表に近い部分が灰黄褐色、そして内外面が灰黒色となる。これも瓦灯か。26は鉢形で、口端部を断面方形として緩く屈曲させて変化を加える。27は摺鉢で、外面は丁寧な籠削りで仕上げる。26と同一か。31は染付小碗あるいは蓋で、梅を描くようである。32は白磁。高台畳付だけ釉を搔き取っている。

33はこれのみ「灰黒色土」となっていて、注記ミスか。瓦質の摺鉢片で、形状は26に似て27とともに同一個体である可能性が高い。

34も瓦質の鉢で、口縁部を断面方形にするほかは変化を加えない。器肉が灰黄色、器表が灰黒色となる。35は備前焼摺鉢片で、器肉中心が赤味帯びる灰黒色、器表近くが灰白色～明灰色となり、器表は暗赤紫色といったように発色する。

石垣8（図版67・68、第108図） 石垣7の南に近接する略東西方向の構造物で、検出時に連続する遺構番号を付したもの、これは石垣と呼ぶよりは石積みと呼ぶほうがより相応しい。



第119図 石垣6・7間、石垣7上出土遺物実測図（1/3）

拝殿北西隅付近では、犬走りのコンクリートに覆われた石列の下位では大小の礫が敷き詰められたような状態で検出された。この石垣8はさらにその下位に潜り込むように置かれた石積みで、石垣7とほぼ並走するように4m強の長さを検出したが東西両端は未確認で終わった。

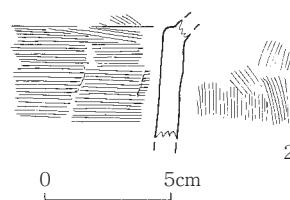
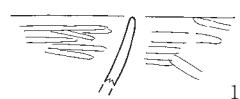
川原石よりも角礫を多用するよう、幅が一定しないが最大幅は1.2mほどとなり、0.6mほどの高さで礫を無秩序に積み上げている。

出土遺物

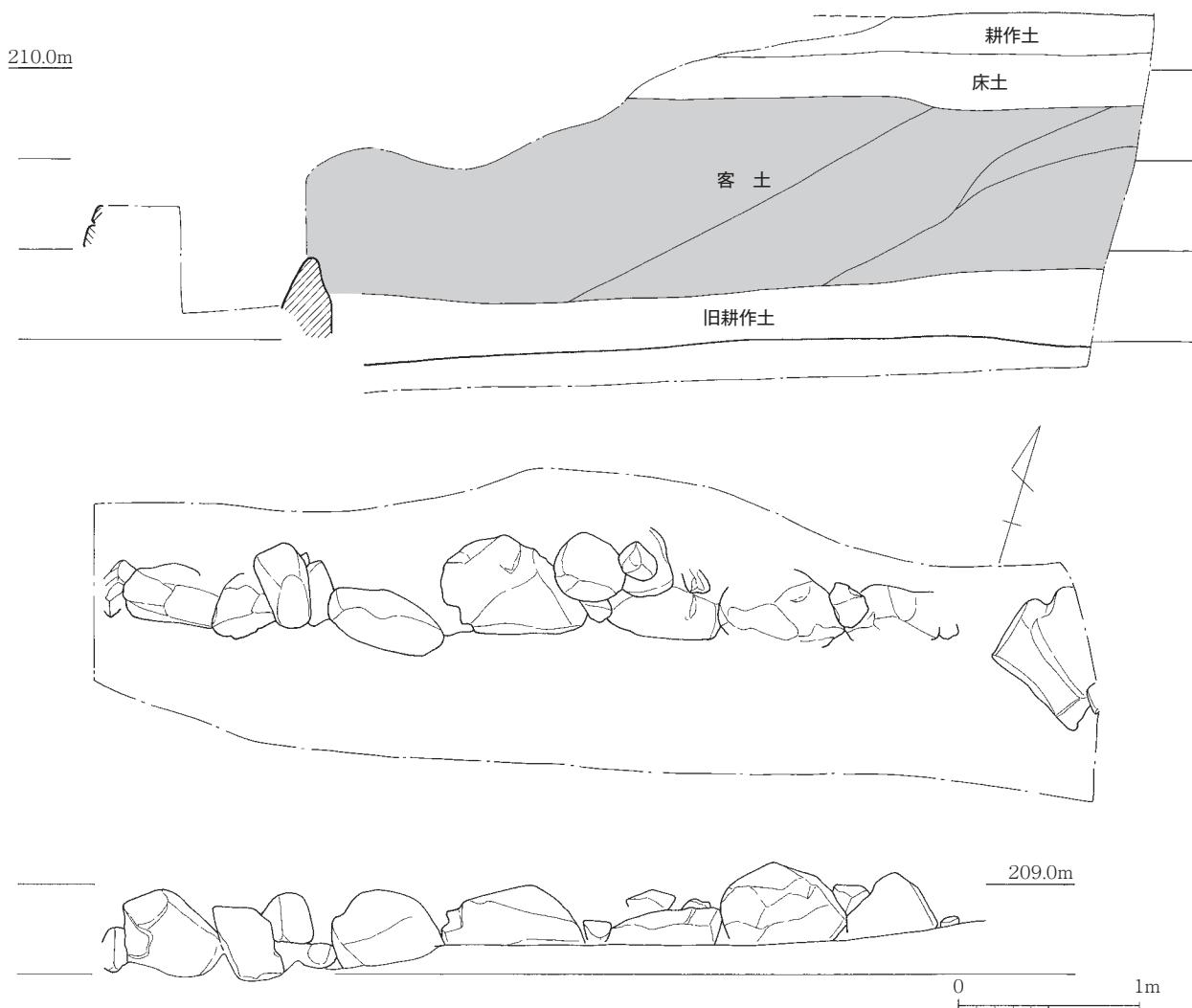
「石垣8下」とあるが、この石積みは全てを除去していない。検出した東端を断ち割ったのみで、その際に出土した土器であろう。

土器等（第121図） 1は瓦器椀小片。口縁部は内彎気味に立ち上がり、変化を加えない。内外面に籠磨きが見える。胎土精良といってよく、口縁部内外面が灰白色、それ以下の体部内外面が灰黒色～暗灰色となる。

2は土師質の鍋で、胎土は良好。器表は黄白色だが、外面は煤けて黒変する。



第120図 石垣8下出土
遺物実測図
(1/3)



第121図 石垣10実測図 (1/40)

石垣9 (図版68、第108図) 拝殿下は犬走り及びほとんどの礎石をそのままに残して掘り下げた。この石垣も石列と呼ぶべきであり、1トレンチ南に残した東西畦と拜殿北辺の犬走りの中間付近で略東西方向に2m余りの長さで検出した。比較的大きさが揃った角礫を7個並べ、その南に小礫を添わせるように置いている。小礫を挟んで東端の8個目の礫は南に小礫を伴わず、他の礫と形状が異なっていて、一連の構造物であるか判断に苦しむ。さらに東は石垣4の基壇状の張り出しと重なるが、小礫が見えるだけなので続かないであろう。石垣4の張出部外周の礫との比高差は0.1~0.3mほどで、同張出内に詰められたような礫とほぼ同レベルである。犬走りに並べられた列石の下位に相当する。

石垣10 (図版68・69、第121図) 御輿庫基礎の南東隅付近の南に設定したトレンチで発見した遺構である。御輿庫東には石垣1とした花崗岩間知石を用いた石垣が延び、南は川原石を積み上げて目地をコンクリートで塞いだ簡略な擁壁があった。石垣10西端付近に開けた南北トレンチの土層を示したが、現地表下1.8mほどで地山の黄褐色土が現れるが、その直上に厚さ0.3~0.4mの灰褐色土が覆う。これは客土を行う前の耕作土であろう。その上は一気に1.4mほどの厚さで客土を行う。その北端に石列があり、4.6mほどの長さを検出した。旧耕作土の中に置かれ、北に向かって面を揃える角礫で、基部の一段が残るのみであった。セメント瓦などを含む表層の搅乱が石列の前面に及んでいて、かなり新しい時期まで露出していたのかも知れない。

この石列は南辺西端の石積みとほぼ整合するような位置にあり、いずれも南に面を揃えている。間に途切れる部分があるが、本来、一連の計画の下で造られた可能性が考えられる。

2) 本殿・末社跡

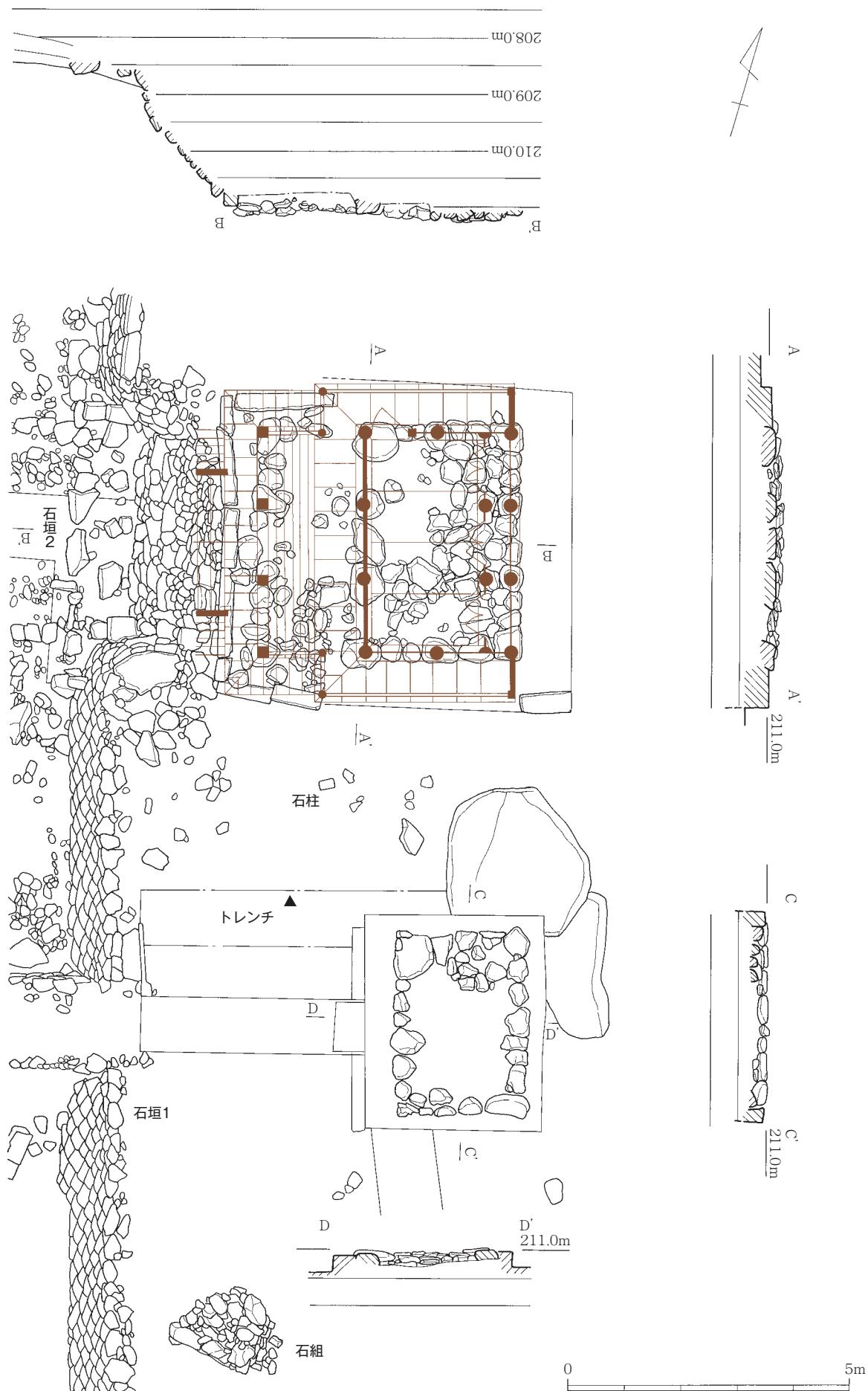
本殿・末社の基礎については、一部あるいは全体がコンクリートで固められた状態にあり、かつ基本的に水没しないということで図化を行ったのみである。これらの社殿は現状で山裾に接するような位置にある。本殿・末社の間にトレンチを設定した(第123図)。地山は風化花崗岩に由来する黄褐色系の砂質土、所謂真砂土で、造成もその土を多用していて特異な土層はみられない。西側の間知石積みは2.5mほどの高さでなされていて、頂部から下がった付近から裏込めに角礫が多く使用されていた。

本殿跡 (図版56、第122図) 西辺及び北辺・南辺の西端に花崗岩製布石を並べるが、調査時には乱れていて、東半ではコンクリートに変わっていた。布石・コンクリートに囲まれた区画内に比較的大型の川原石が敷かれていたが、空隙が多い状況であった。ここに示した写真は建物が存在していた頃の床下の写真であるが、発掘調査時に比べれば間隙が少ないよう見える。民俗調査報告書の説明によれば、

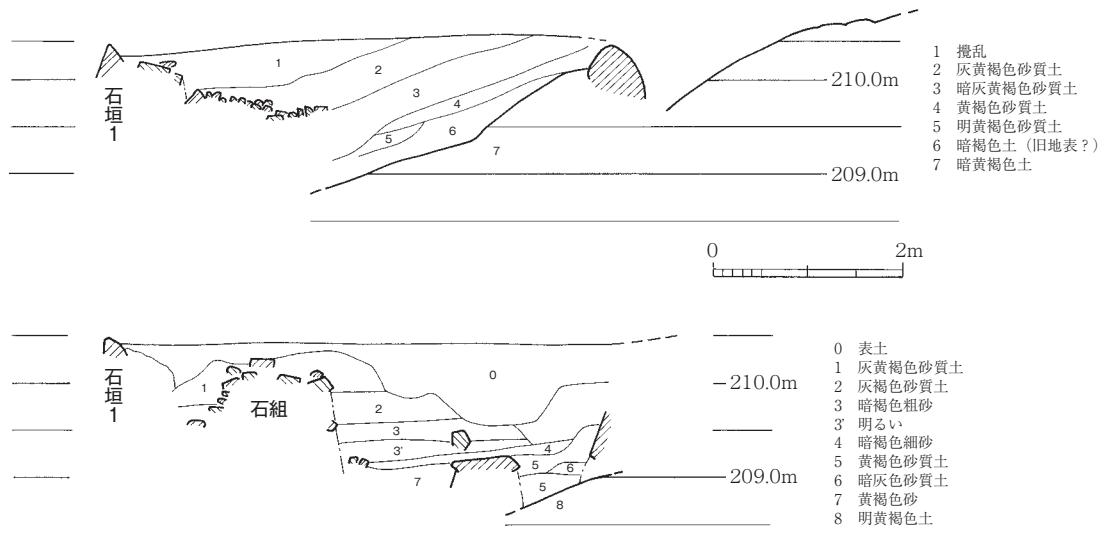
神殿は三間社流造銅板葺で、正面3間、側面2間、向拝3間を付す。雨葛布石を巡らし、自然石階礎石上に円柱を建て、繩型木鼻付き頭貫、飛貫を通して切目・腰・内法長押で固める。(上部構造等略) 向拝は自然石礎石上に切面取り角柱を建て、(以下略)



本殿内部床下の様子
(みやこ町教委木村達夫氏提供)



第122図 本殿跡・末社跡実測図 (1/100)



第123図 末社跡付近土層実測図 (1/80)

とある。

遺構実測図に民俗調査で報告された本殿の平面図を重ねてみた。図のように、本殿の礎石は残されていた石敷きの東半分に收まり、向拝の礎石も布石の東に残っている。この布石は本殿の基壇化粧のような役割を果たしていたようである。

なお、本殿は天保11年（1840）に墓股や彫刻は旧神殿のものを使用して「柱替」したという記録があり、民俗調査時の所見では「軸組は天保期の建築と見られるが、彩色を施した中備や妻飾墓股は17世紀前期の様式を示すので、前身神殿の装飾を一部に利用したと考えられる。木鼻付き二手先腰組と彩色妻飾りが目を惹く華麗な社殿である。」と評価された。

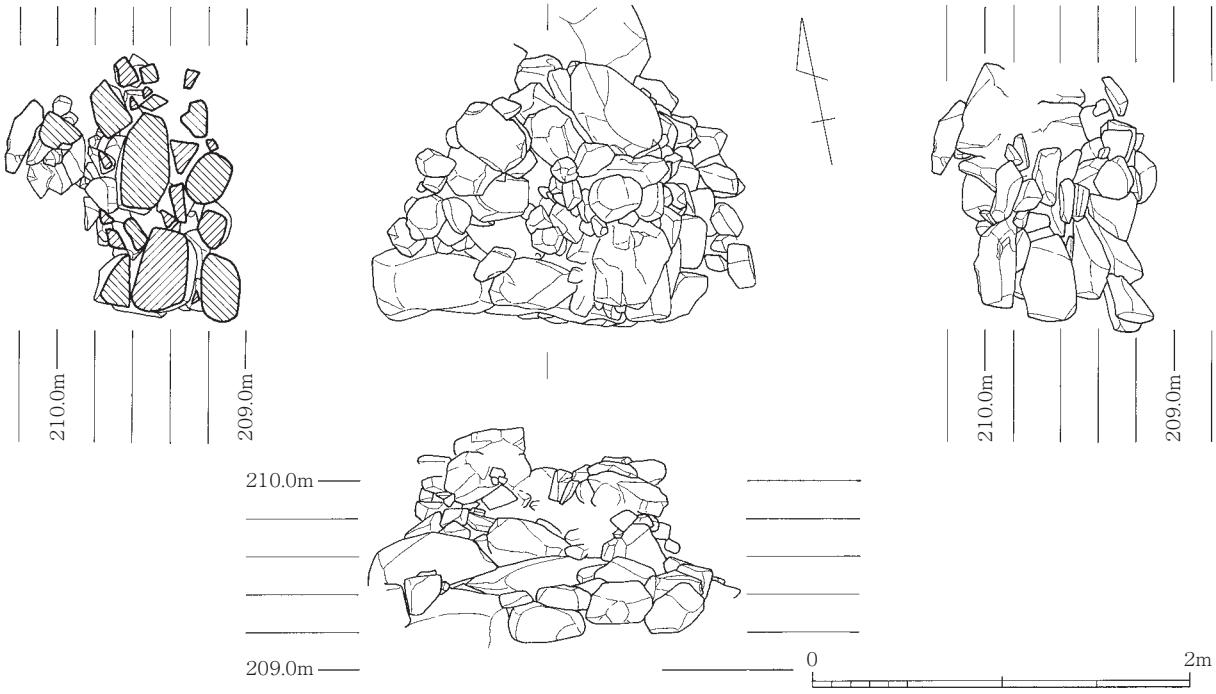
末社跡（図版56、第122図） コンクリート製基壇で固められた石敷きが残されていて、建物実測図を重ねてみたが、柱と礎石が合致しない。民俗調査報告書に掲載された写真を見ると、コンクリート基壇の上に井桁に組んだ土台を置き、その上に柱となる円柱を乗せるようで、内部に置かれた石の意味はわからない。コンクリート基礎を打つ前は本殿のように礎石を置いていたものであろうか。

3) 石組（図版69・70、第123・124図）

末社跡の南に東西方向のトレンチを設定したところ、組んだような石材が現れたことから面的に広げて検出した遺構である。

この石組は客土中に位置していて、確認した範囲では客土は石組に関係なくほぼ水平になされている。狭いトレンチ内で掘形のようなラインを認めたが、面的にははっきりと確認できなかった。ただ、石組南東隅付近から南西にかけて「掘形内埋土」といえそうな黄褐色砂が平面的にも狭い範囲で現れていて、この石組に伴う埋土である可能性が考えられる。

石組は概ね方位に揃えるように方形に積み上げられていて、特に南辺下位は比較的大型の石材を横位に使用していて、さらに下位に並べられた石材とともに明らかに人為的な構造物だと判断された。また、東辺も比較的整っている。ただ、北辺・西辺は株があるにしても形状が整わず、礫の間に土が入る部分もあってしっかりとした石組とはなっていない。確実に人為的な部分は下位、標高209.8m以下で、それ以上は極論すれば客土の際の偶然の結果であるかも知れない。



第124図 方形石組実測図（1/40）

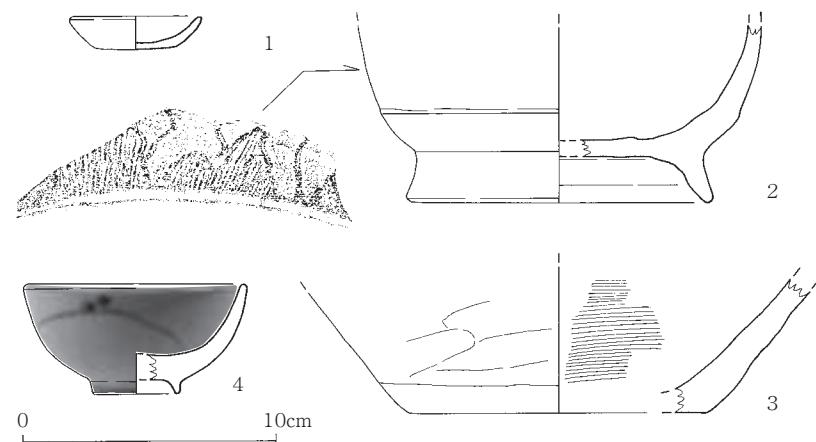
出土遺物

直接、本殿・末社・石組に伴うものではないが、それらが置かれた上段から出土した遺物をここで紹介する。

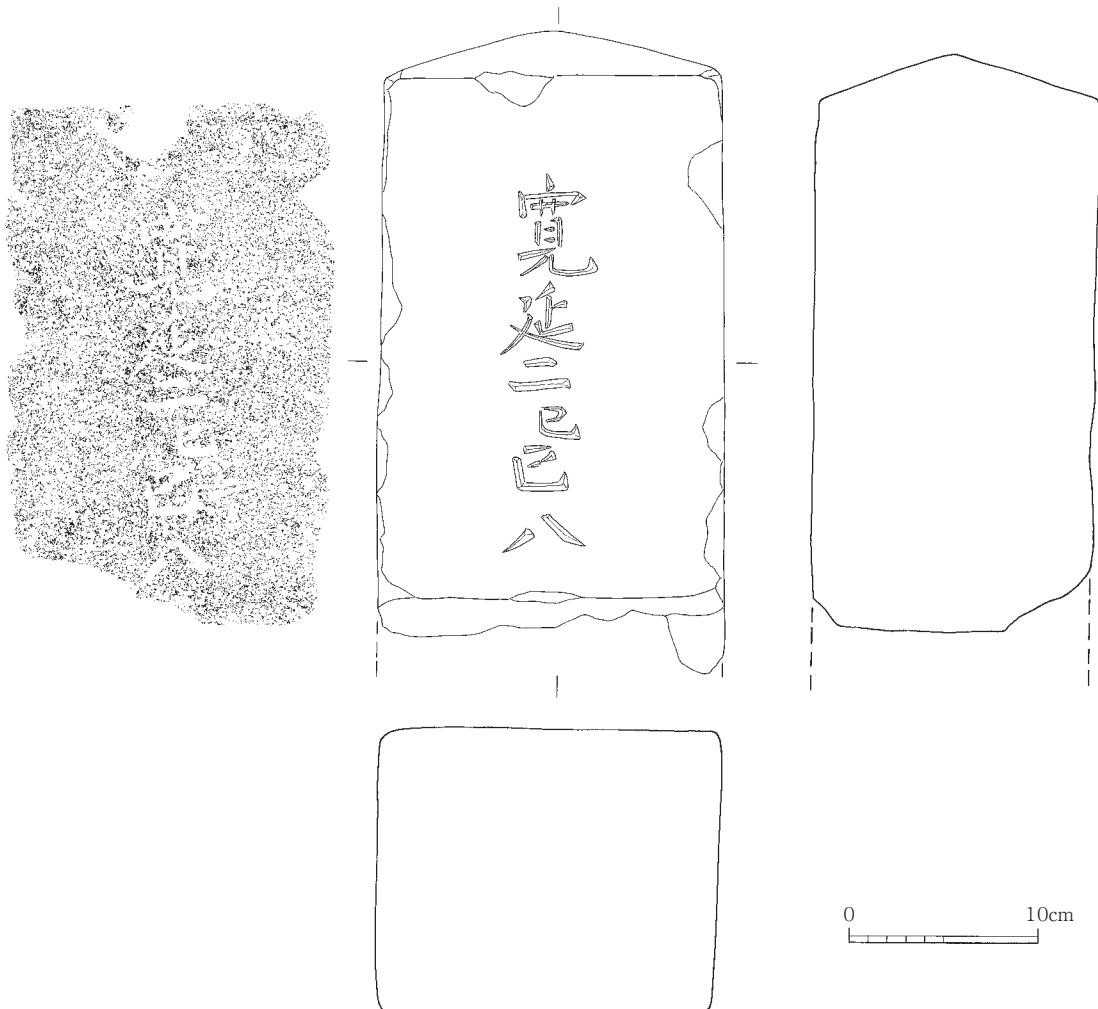
土器等（図版74、第125図） 1・2は方形石組近くの搅乱坑から出土したもので、1はほぼ完存する土師器皿。口径5.2cm、器高1.3cmの小型品で、胎土は精良といってよい。手捏ねで作ったものか、器肉の厚みが異なる。2は瓦質の高台付土器。体部が丸く、平底となる底部の外縁に大振りの高台が付く。内面は丁寧な横撫で仕上げ、外面は主文様の太い線を陽刻でスタンプした後に内部を埋めるように描線を加える。モチーフは不明。装飾部は器面がわずかに低くなり、文様以下はやや雑な横撫で仕上げる。胎土は精良で、最も肉厚となる高台基部付近のみ中心部が黒色、その内外及びその他の部位では器壁が灰白色となる。3は末社南に開けたトレーナー—大部分が樹木を抜き取った跡であった—出土の瓦質の鉢。胎土は粗く、器肉・器表ともに黒色となる。外面は体部下端を籠削りで仕上げ。以上には指撫で痕が見える。4は染付碗。底部が厚くなり、畳付のみが露胎となっている。内面は無文。

「寛延2年」銘石柱（図版76、第126図） 本殿・末社の間に開けたトレーナーと本殿跡の間で文字を上面にして埋没していたので気付いたものである。

頂部を傘形にした幅18.2cm、厚さ15.1cm、長さ30.8cm以上の凝灰岩製石柱。図示した面に、「寛延二巳巳八（月）」と刻んだ部分が残存するが、正



第125図 本殿周辺出土遺物実測図（1/3）



第126図 「寛延」石柱実測図（1/4）

しくは「己巳」、西暦1749年である。「伊良原—民俗文化財の調査—」に引用された『藤の宮高木神社由緒』（明治44年）では、

寛延元年 惣氏子中より拝殿建立

寛延2年 惣氏子中より石段建立

の記事があり、それを記念したものであろう。

4) 拝殿跡（図版57、第105・108図）

拝殿跡は当神社の平坦地として最も広い面積を有するが、南端には社務所・御輿庫を兼ねた南北6m、東西16mほどの厚いコンクリート基礎が残っていたため、この部分は掘削を行っていない。また、この基礎と直ぐ北の東西畦の間は樹木を移植するための大きな穴が掘られて、東端付近を除くほぼ全体が搅乱を受けていた。また、先述したが、この神社地は常時満水線より高い位置にあるため、境内の周縁に植えられた樹木はそのままに残されることになっていて、発掘の制約を受けることとなった。

解体後に客土されてほとんど全て埋もれていた拝殿跡は礎石等がよく残されていた。正面3間、側面2間の規模で西に向拝を付した拝殿は、礎石の外周に幅1mほどのコンクリートを打って犬走りとしていた。コンクリートの下は内外に比較的大きな石材を並べ、その間にはグリ石を乱雜に詰めて割栗地業をしていた。礎石や犬走りも通常は水没しないということで、極力壊さずにそれらの

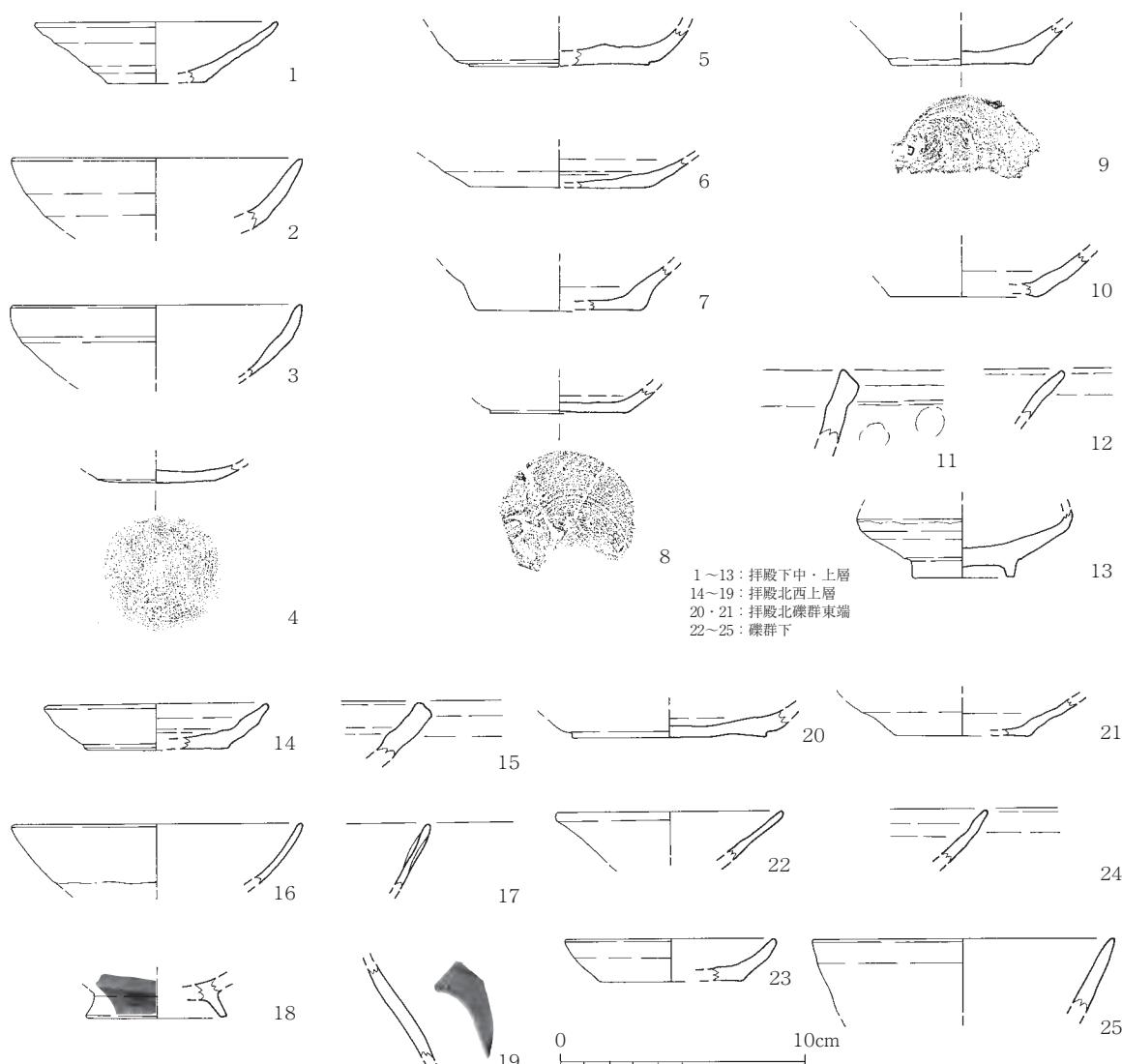
間を掘り下げる。したがって、石列等は全て露出をさせることができなかつた。

拝殿中心部辺りで、最初に掘削した1トレンチ内で地山の砂層上で焼土や炭を確認したことも先述した。面的に広げると、直ぐ東に自然石が立っていて、その立石の前面で火を用いた行為がなされていたようである。炭は立石西側の岩盤あるいは巨石の表面を伝って、西側へ流れている。焼土のブロックはかなり大きく、また炭も1度や2度使用した量ではない。想像を逞しくすれば、巨石の前で護摩焚きのような「行」が繰り返され、それがこの社の起源となつたものであらう。前にも記したが、この神社の位置するところは東西から山が迫る狭隘の地で、なおかつ祓川は渕となり、聖なる地と考えられていたとしても首肯できる地形的条件にある。

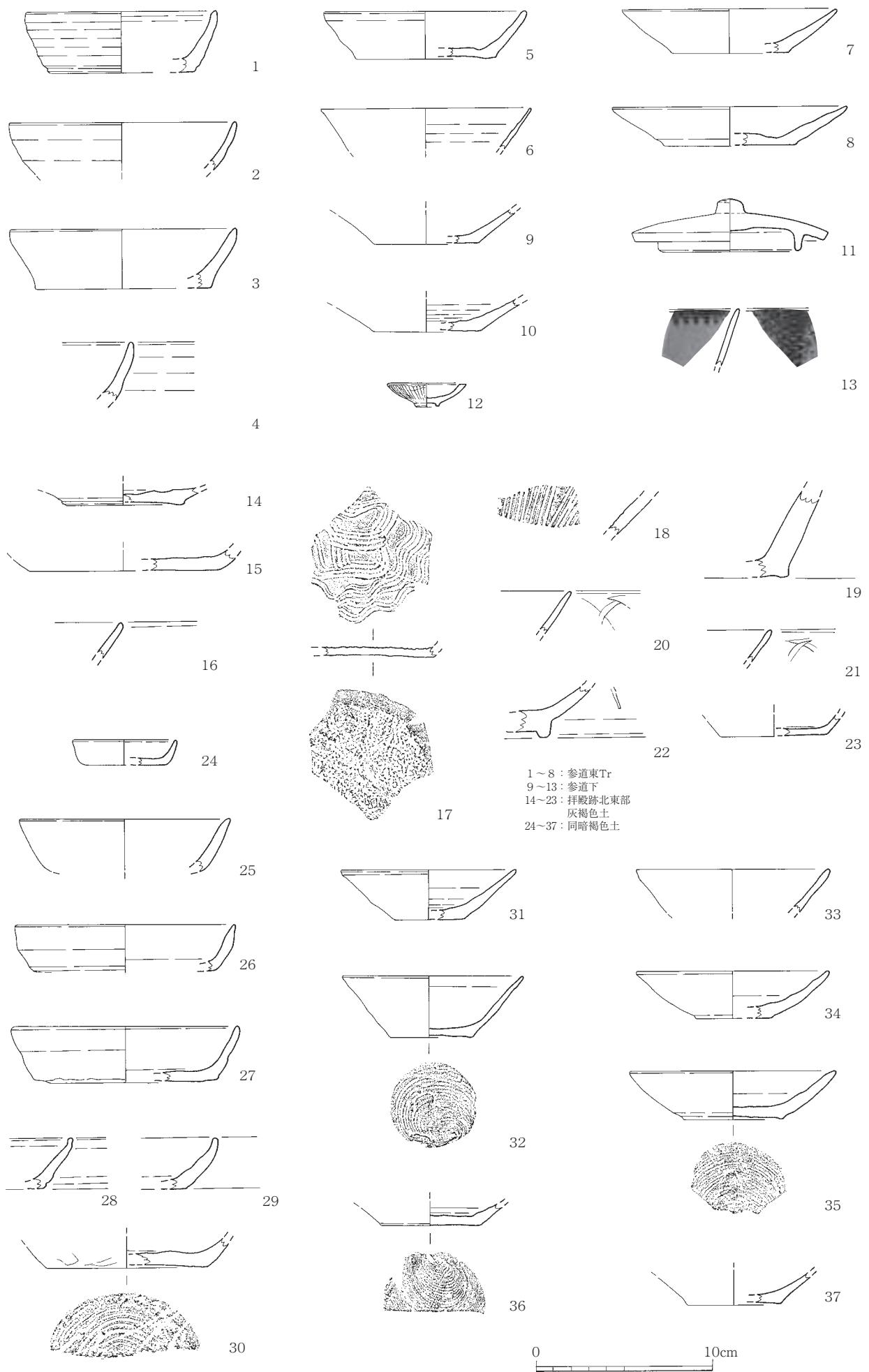
出土遺物

青銅製笄（図版76、第116図） 全長20.0cm、最大幅1.4cmを測る。一端を耳搔き状に加工し、他方は尖って終わる。幅広の部分に別の材質のものを貼り付けていたようで、両端に段をもつて7cmの幅で薄くなり、留めていた青銅の鉢が残る。「拝殿北西部」とあるが、詳細な出土地点は不明。

土器等（図版74・75、第127～132図） 「拝殿跡下北半」・「拝殿跡北東部」・「拝殿跡南西部」・「御輿庫西」に分けて説明を加える。なお、1トレンチから出土した須恵器瓶（第107図8）は先の立石の前面（西側）から出土していて、「行」の行われた時期の一端を示すものと考えている。



第127図 拝殿下北半出土遺物実測図（1/3）



第128図 拝殿跡北東部出土遺物実測図1 (1/3)

第127図は「拝殿跡下北半」出土。1～13は注記にミスがあるが「中・上層」の出土である。1～11は土師器、12は白磁、13が陶器である。1は底部が小さく、体部が直線的に大きく開く皿あるいは杯。胎土精良、造作も丁寧で形状が整い、水挽き痕が著しい。2は体部が内彎する皿小片。水挽き痕はない。3は口縁部が屈曲内折するもの。4～10は底部片。4・5は丸味をもち、6も体部界がやや不明瞭となるもの。この3点は内底面に水挽き痕が見える。7は体部下位が内彎する。8～10は小さな底部から体部が大きく直線的に開くものであろう。この3点も胎土良好で、内面に水挽き痕が残る。11は口縁部が小さく外折し、口縁部を断面三角形とする瓦質鍋で、器肉・器表ともに灰黄色となる。外面、突出部以下に煤が付着する。12は白磁口禿皿小片。13は図示部の内外面ともにほぼ露胎であるが、残存部上端に黒色となる釉がわずかに残る。胎土は灰黄色緻密なもので、高台は削り出されている。

14～19は「北西上層」出土。拝殿北西部は広く礫層が広がっていた。意味はわからないが、犬走りの縁石直下にあって、あるいは沈下防止のための地業のような意味があるのかも知れないが、北辺でも東部ではなく、南半にも見られない。その礫群上層から出土したものである。14は土師器皿で、復元口径9.2cm、器高1.9cmを測る。胎土・作りは良好で、全体に摩滅する。15は口縁部を小さく屈曲させる瓦質の鍋片。胎土は暗灰色、内外の器表は黒色で、丁寧に作られる。16・17は陶器。16は薄手で、胎土は灰黄色緻密、釉は暗茶褐色に発色するが、口縁部外面の垂れた部分は灰茶褐色となる。17は明灰色緻密な胎土で、釉は赤味帯びる暗褐色となるが、口縁部付近には白濁する釉を上掛けする。また、口縁部直下を外方から押さえて変化を加える小片。18・19は染付。18は強く踏ん張る形のしっかりとした高台を付し、高台畳付だけ釉を搔き取るが、なお一部が熔着して剥がれている。19は内面が露胎となっていて瓶形となる小片。文様は灰味が強く発色し、青とは呼べないものである。

20・21は先の礫群を清掃する過程で、その東端付近から出土した土師器。20は底部が大きく、体部が残らないが急角度で短く立ち上がるものであろう。21は小さな底部に大きく開く体部が付き、胎土・作りとともに精良である。

22～25は「礫群下」出土。礫を除去していないので、やはり清掃の過程で下層に相当する周辺部分から出土したものであろう。いずれも土師器で、22は形状や内容が1によく似る。23は11に似る。25は大粒の石を噛んでいて、作りも雑である。

第128・129図は「拝殿跡北東部」出土である。この部分は拝殿跡周辺で最初に掘削した部分で、大まかではあるが「灰褐色土」＝上層、「暗褐色土」＝下層として取り上げている。この2層は拝殿犬走り北辺の壁面での観察では東西方向ではほぼ水平に堆積していた。

1～8は「参道東トレーニチ」出土で、これは分層していない。1～5は胎土・作りともに粗いもので、6～8は精良なもの。前者は底径が大きく、体部が急角度で短く立ち上がり、水挽き痕が顕著に残る。後者は底径が小さく、体部は大きく浅く立ち上がり、非常に滑らかな器表となる。

9～12は拝殿北に付されていたコンクリート舗装の参道を除去する際に出土したもので、ここも分層していない。9・10は精良な作りの土師器皿。11は瓦質のつまみ付き蓋で、器肉が灰白色、器表は全面が黒色となる。形状は整うが、作り・調整は雑な感がある。12は白磁紅皿で、口径4.5cm、器高1.4cmの小型品である。13は染付片で、内面口縁部下に小振りの宝珠文、外面は全面をやはり小さな青海波文で埋めるが、外面は乱れている。文様は暗いコバルトブルーに発色、明治以降のものと思われる。

14～23は上層「灰褐色土」出土。14・15は土師器皿片で、15は底部・体部界が不明瞭なので復元底径に問題があるかも知れない。16は口縁部内面上端から残存する外面下端付近までが黒色、その

他の部位が灰白色となる瓦器椀小片で、胎土精良だが器表が荒れる。17は瓦質の摺鉢底部。内面に花びら状にシャープなスリ目を入れる。外底面ははっきりしないが布目状の痕跡があり、型押しで成形したようである。18も瓦質摺鉢小片。これも丁寧に作られた土器である。19は備前焼であろう。内面はすれておらず、甕であろうか。調整は雑である。20~22は龍泉窯系蓮弁文椀。22は高台畳付付近から高台内にかけて露胎となる。23は白磁口禿皿である。

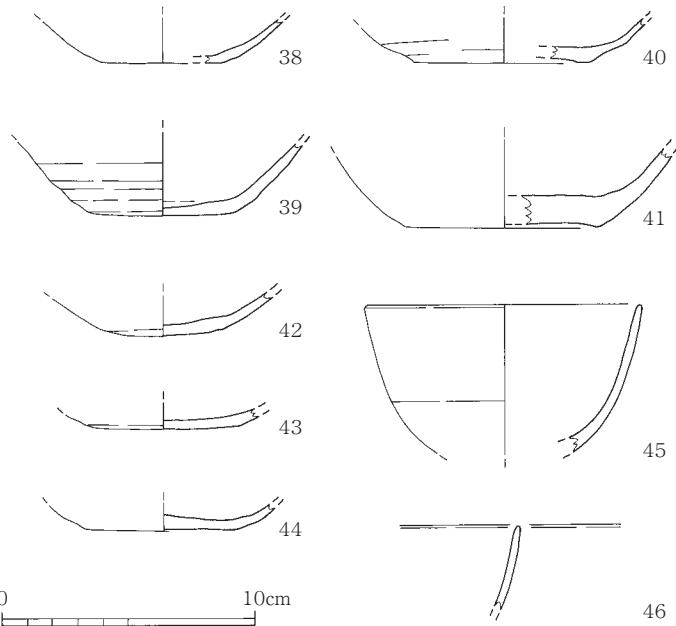
24は復元口径6.0cm、器高1.5cmの小型皿で、胎土・作りともに良好である。25~29は底径が大きく、体部が急角度

で短く立ち上がるタイプの皿。体部外面下端が不整あるいは雑に仕上げるものが多い。復元口径は12.0~13.0cm、器高は2.7~3.2cmほどである。30も同種の底部であろう。31~35は底部が小さく、体部が大きく浅く開くもので、胎土は精良といってよく、作りも丁寧である。特に内面で水挽き痕が目立つ。36・37は同種の底部。

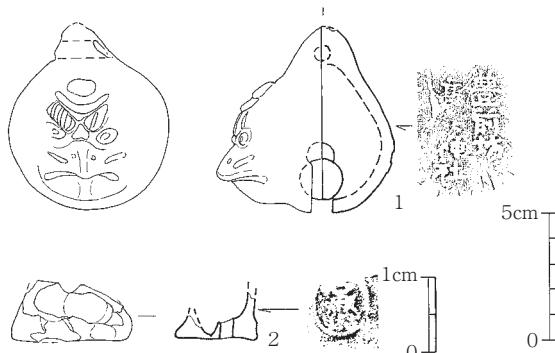
第129図は下層「暗褐色土」出土。45・46が陶器であるほかは土師器である。38・39は非常に薄手となる底部で、体部は膨らみをもって浅く立ち上がり、水挽き痕が顕著である。40も薄手の底部で、形状が先の2点と異なるもののその他の点でよく似ている。41は肉厚となり、大型の皿であろうか。これも胎土は良好。42~44は薄手丸底傾向の底部片で、これらも38・39に似る。

45は体部が直線的に伸びて小さく開く陶器椀で、体部下位に弱い稜線を巡らせる。灰色緻密な胎土をもち、残存部全面に施釉されて暗灰色に発色する。46も灰白色ザラザラとする感の胎土をもち、全面に施された釉は明黄褐色に発色する。

第130・131図は「拝殿跡南西部」等の出土遺物。第130図は鳥居南近く、石垣6東近くの表層からの出土である。1は鳥天狗の頭部を象った土鈴。肉眼で見る限りは砂粒を含まず、非常に精緻な胎土である。鈴口は鳥天狗の頸下にあって、製作時は前後を型押しで作って、鈴口の一辺でそれらを接合している。顔の背面となる部分の下位に「豊前坊高□神社」(高住神社)のスタンプが押される。出土時は当然割っていたが、土製の丸も含めて全体が窺える。本来は黄白色を呈したようであるが、これは火にかけられたようで一部が煤けまた赤変する。2も非常に精良な胎土で作られた座像の下部。底部に円孔が貫通していて、断面図でその直ぐ前面が非常に薄くなっている。そこが接合部である。外面は指撫で痕が顕著で、一見手捏ねのように見えるが、やはり前後を型押しで作って接合、最後に指撫で仕上げる。また、黒色顔料が底面を除いて掛けられている。これも背面にシャープなスタンプがあるが、小さくて読めない。「・・・権現」か。ただ、「英彦山」の3文



第129図 拝殿跡北東部出土遺物実測図2 (1/3)



第130図 拝殿跡南西部等出土遺物実測図1
(1/3, 1/1)

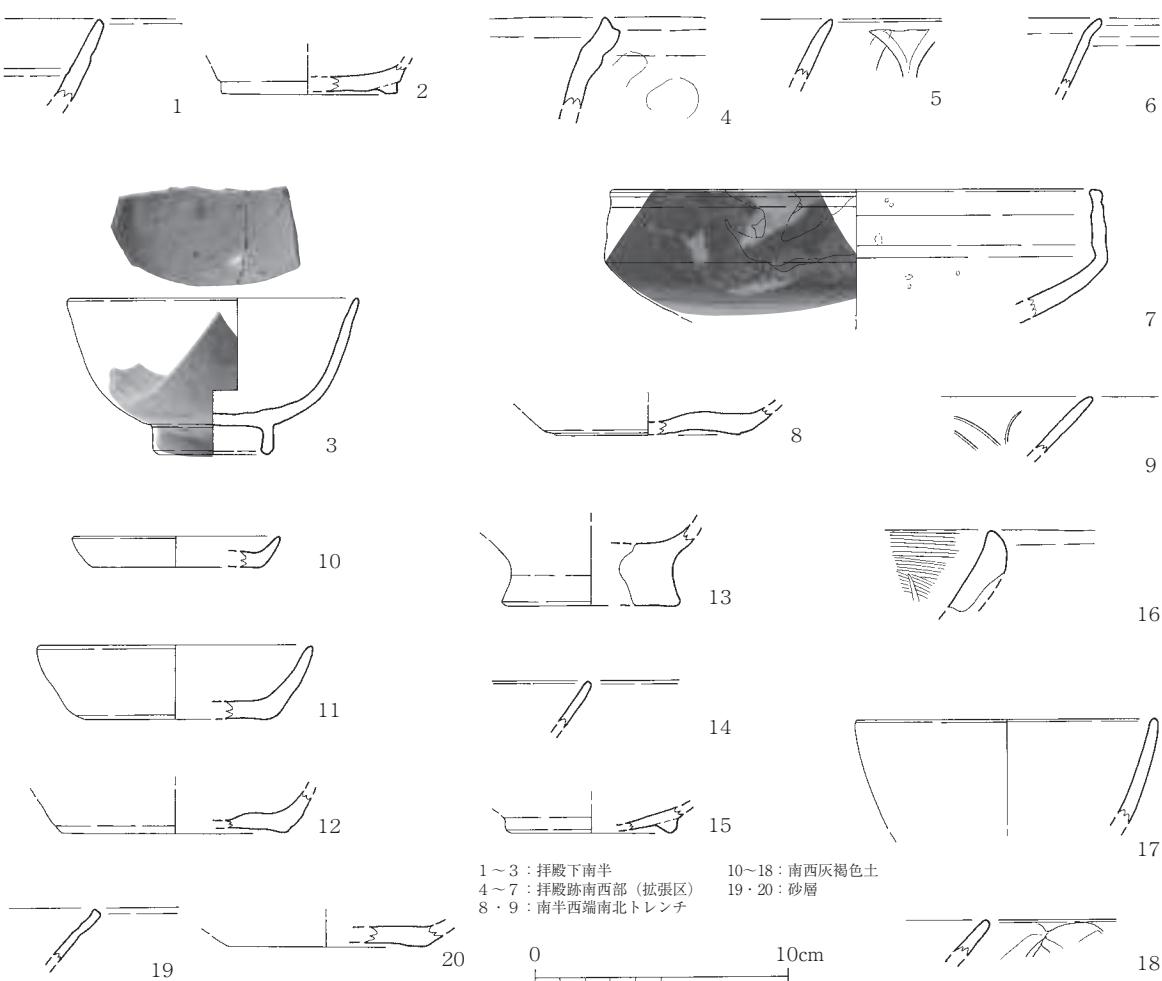
字は楕円の囲みに入りそうにない。

第131図は1トレンチ南の畦から約10m南までの範囲からの出土。1～3は「拝殿下南半」出土で、層位は記録していない。1は直線的に開く土師器皿の口縁部小片で、傾きに不安がある。胎土・作りとも良好で、水挽き痕が目立つ。2は低い高台が付く土師器碗。これは器表が荒れている。3は体部が直線的に小さく開き、華奢な高台を付す染付碗で、高台疊付のみ露胎で灰褐色となる。内面見込に明らかな目痕が2個所、そして器表が小さく剥離する部分も目痕であろう。内面は無文。

4～7は鳥天狗が出土した付近の堆積層からの出土。4は口縁部をわずかに外折させる土師質の鍋で、器肉は灰黄色、器表が暗灰色となる。外面は口端面を除いて煤が付着。5は蓮弁文をもつ、6は口縁部を小さく外反させる龍泉窯系青磁碗。いずれも灰味が強い青色に発色する。7は暗褐色の緻密な胎土をもつ陶器。内外面に暗灰茶褐色に発色する鉄釉を掛けた後、口端部から外面にかけての一部に白濁釉、さらに暗灰綠褐色とでもいう色に発色する釉を垂らしている。

8・9は「南半西端南北トレンチ」とあり、これは拝殿南西側の南北トレンチから出土したもの。8は盛り上がる土師器皿底部。9は内面に劃花文を描く龍泉窯系青磁碗。

10～18は堆積層からの出土。10～13は土師器、14～16は瓦器、17は陶器、18は龍泉窯系青磁碗である。10・11は小片であり復元口径に不安があるが、これら「拝殿下跡北東部」でほとんどを占めていた2種類の土師器とは明らかに異なっていて、古相を示すものであろう。13は厚い円盤を貼り付けて高台とする。これら4点はいずれも回転糸切り痕を残す。14は口縁部内面から外面にかけて黒色、それ以外の内面が灰色となり、胎土精良で内外面に篦磨きを施す。15は断面三角形に近い低い



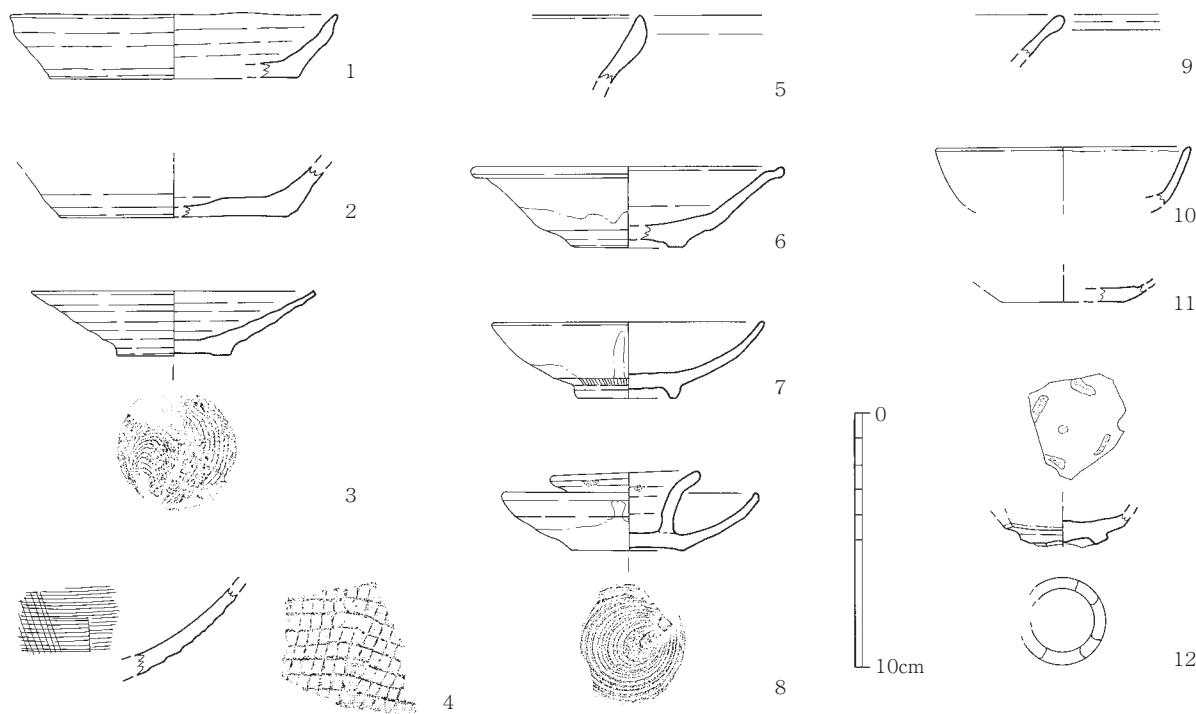
第131図 拝殿下跡等出土遺物実測図2 (1/3)

高台であるが、形状はまだしっかりとしている。これは器表が荒れる。16は摺鉢小片。17は灰黒色の緻密な胎土をもち、濃い灰緑色となる釉を全面に施す。18は蓮弁文が見える。

19・20は「砂層」とあり、ほぼ地山直上からの出土としてよい。いずれも土師器皿で、19は胎土・作りが良好で、口端部に面を付す。20は回転糸切り痕を残す小片。

「御輿庫西」では、最初に御輿庫基礎南西端から東西方向・南北方向にトレンチを設定したが、この段階では石垣6に気付いておらず、東西トレンチはその東側で止めていた。その後、石垣6が西辺にも続くことを確認してから西へ延長、また石垣5内側に沿って南へも拡張した。さらにコンクリート基礎に沿って北側にも新設し、石垣6の裏込めを確認している。

ここでの最初の南北トレンチでは小規模な石垣を確認したことからそれを追って東へ拡張、あるいは御輿庫南の擁壁南に南北小トレンチを追加するなどした。図示した遺物はこれらから出土したもので、トレンチの配置が複雑なためにまとめて説明を加える。1～3は土師器である。1・2は底径が大きく、内外面に水挽き痕が顕著な皿で、1は復元口径13.0cm、器高2.5cmを測る。いずれも体部下端が乱れる。3は底部が小さく、体部が大きく浅く開く皿で、これも水挽き痕が著しい。胎土・作りとも精良で1・2とは明らかに違う。4は底部外面に格子叩きをもつ瓦質の鍋。胎土精良で器肉は灰白色、内外の器表は灰黒色となる。5は東播製の須恵器摺鉢片で、断面三角形に肥厚した口縁部の外側上部のみ黒変する。6は低く幅広の高台、屈曲する体部そして端反りとなる口縁部をもつ唐津焼。灰赤色緻密な胎土をもち、露胎部も灰赤色となる。釉は暗灰色に発色する。見込に幅1.1cm、長さ2.8cm以上の砂目痕が残り、高台疊付にも2個所に砂目痕が付着する。7はしっかりした高台に皿形の浅い体部がのる。見込を蛇の目に釉剥ぎし、外面では体部下端付近から高台内にかけて露胎となる。さらに、露胎部の高台に近い1cmほどの間は箆削りによると思われる縦位の小さな凹凸が連続している。胎土は灰黄色～暗灰色の非常に緻密なもので、釉は灰緑色に発色、溜まった部分は灰青色となる。8は陶器製灯明皿。器高3.2cmであるが受け皿の高さが2.3cmを占める。胎土は赤味帯びる灰黄色～灰褐色で非常に緻密なものである。上皿の底面は受け皿底面と同じであるがその部分及び上皿の外面下半から受け皿内面、そして受け皿の外面上半にかけて灰黄緑色の釉が



第132図 御輿庫西出土遺物実測図（1/3）

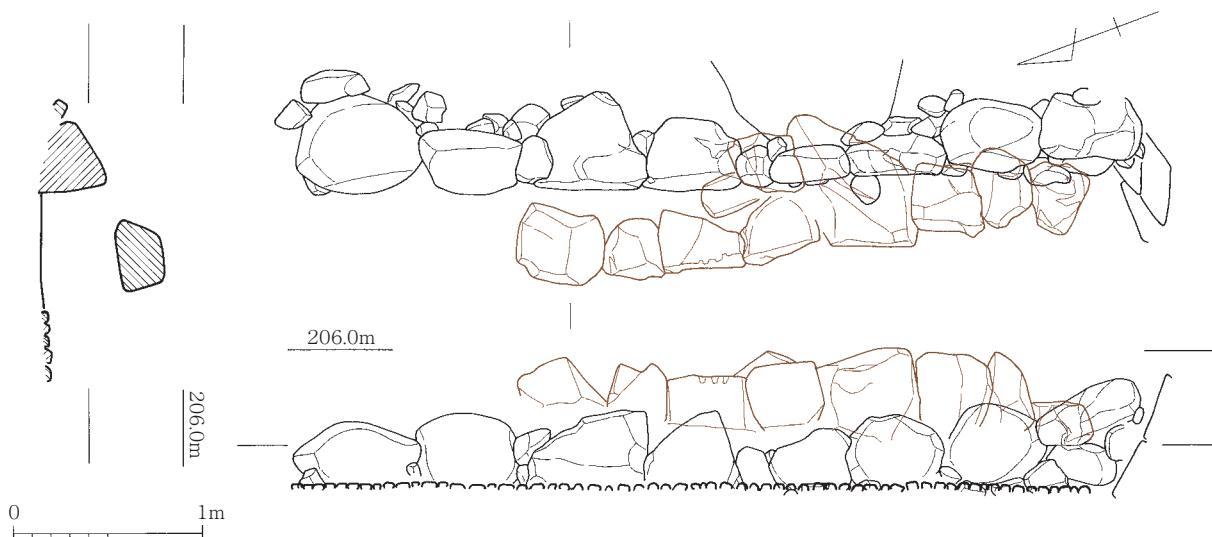
薄く掛けられる。上皿口縁部の数箇所が狭い範囲で黒変する。9は小さく玉縁状に膨らむ青磁口縁部で、釉は灰緑色となる。龍泉窯系か。10・11は白磁口禿皿。12も小型の白磁。底部周辺の残片であるが、体部下端に丁寧な籠削りを行っていて、その上端に1個所のみ縦位に稜線が残ることから森田勉氏が「多角坏」と呼んだものであるとわかる。施釉はその籠削りで搔き取られた部位もあるが、籠削りの上位で終わった部位もある。見込に4箇所の目痕があって、細長い長方形に釉が剥がれている。見込中央は削り残しか、へそ状に小さく突出する。また、高台も4箇所が浅くU字形に抉られていて、ここは削り残した部位にも施釉されていることから抉る際に釉も削ったことがわかる。なお、高台内は基本的に露胎であるが、中央に施釉された状態が削り残されている。

5) 北区

持殿を囲む間知石積みの北側に平地があり、その東端には建物基礎のコンクリートが残されていた。この地区の調査は（石垣5）北西隅付近から北へ、そして石垣5北辺に添って東へ延ばしたL字形のトレンチの掘削から開始した。この南北トレンチでは地表下0.6~0.7m下位で小礫を敷き詰めたような硬化面が現れ、東西トレンチでは多くの土師器皿が出土したことから、表土掘削の範囲を拡張した。結局、今回の調査の中で最も多くの土器類の出土を見たが、出土状態は整然としたものではなく、一括投棄したような集中も見られない。ただ、出土した土師器は長期にわたるとは思えないよく似た内容のものが多いことから、なにかの特別な、異例な神事に供したものを見出されたのである。また、調査範囲内で巨大な花崗岩や中小の角礫が多く現れた。巨岩は地山中のもので、中小の角礫は意図を持って配置されたとは思えない雑然とした状況であった。

道路状遺構（図版71~73、第105図） 北区西端で検出した硬化面である。硬く締まった目地の土を除去すると大小の川原石や角礫を敷き詰めた様子が窺えた。幅は最大2mほどを、長さは7mまで確認したが当然調査区外へ続く。路面の断割りを行っていないが、礫が敷き詰められた面は堆積層の中である。

0.6mほど礫のない部分を置いて東に石列が平行するので、両者はある時期に並存したのである。この路面の東側は復元される石垣6の北西隅に接近するが交錯はしないよう、石列は石垣6北西に取り付いて終わるものと思われる。



第133図 石垣11実測図 (1/40)

石垣11（図版71～73、第133図） 道路状遺構の東側に平行する石列である。新旧があり、上層石列は2.8mの長さに角礫を並べているが面が揃わず、かつ路面から0.4mほど浮いている。地山は堆積層で、下層の石列に乗せず据えられていることからこの高さまで路面も含めて埋まった後に据えられたものであろう。この石列の下位に銅線が数本埋設されていた。

下層の石列は川原石や角礫を面を揃えて立て据えていて、4.3mの長さを検出した。この石列の基底部も明確な掘り込みを確認できていないが、石敷きの路面に平行する位置にあり、かつ基底部がほぼ路面と同レベルにあることから、道路状遺構に伴う構築物としてよいと思われる。

北端は石が途絶えるが、屈曲していないので破壊された可能性も考えられる。南端の石垣5と接する部分ではこの石列が石垣5の上にのっているように見えるが、この石列は全て石材を立て据えて使用しているのに対し、石垣5にのる石材は面を揃えて立て据えられたものではない。その下の小礫も同様であることから、この南端の礫は石垣5に破壊された後に置かれたものと考えてよいであろう。この下層石列を延長すると想定される石垣6の北西隅に近づくことから、これもその付近に取り付いていたものと推測される。

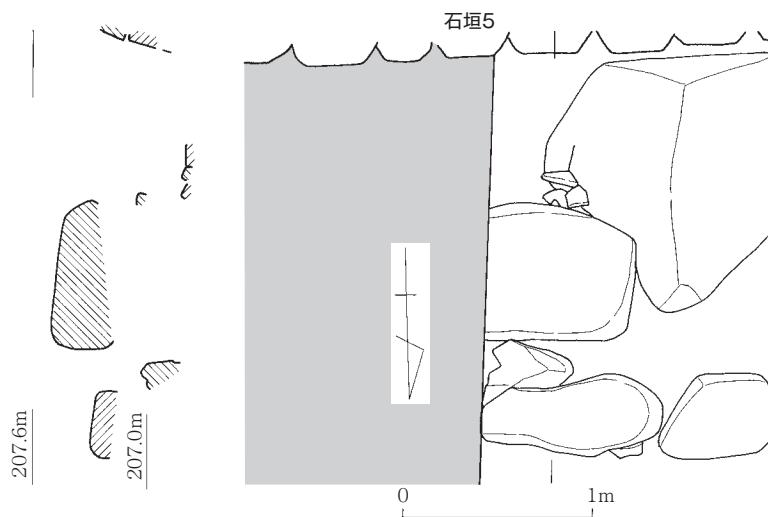
北区石段（図版71・72、第134図） 東端のコンクリートの基礎に接してあるいは覆われて位置する。コンクリート基礎と並存した石段は図版73に見るようくコンクリート（あるいは切石か？）であり、この川原石を使った石段は基礎に覆われていることからもわかるように古い時期のもので、かつこの上部はコンクリート基礎打設時に破壊されたものと思われる。

2段が残存。上段は奥行き0.7

m、幅0.8m以上、厚さ0.3m以上の大型の川原石を使う。約0.2mの距離を置いて、やはり0.2m低く下の石材を置く。これは奥行き0.4m、幅1m、厚さ0.2mほどのやや小振りの角礫であった。さらにこの石段の西側にも併設されたような位置に礫があるが、上面が丸味をもつていて、かつ東の石材よりやや低くなっているので石段の石材には相応しくない。

出土遺物 最も多く土器が雑然と出土したが、ほとんどは土師器皿である。また、番号を付して取り上げたものもあるが、層位的に分けられるものではない。古い時期のものが混入するとはいえ、明らかに異なる時期の土師器がそれぞれ一定程度存するというわけでもなく、ほとんど同様な形態の土器である。ある一時期に大量に使用・投棄されたものであろう。以下では、トレンチ出土遺物と拡張した部分から出土した遺物を分けて記述するが、便宜上のもので意味はない。

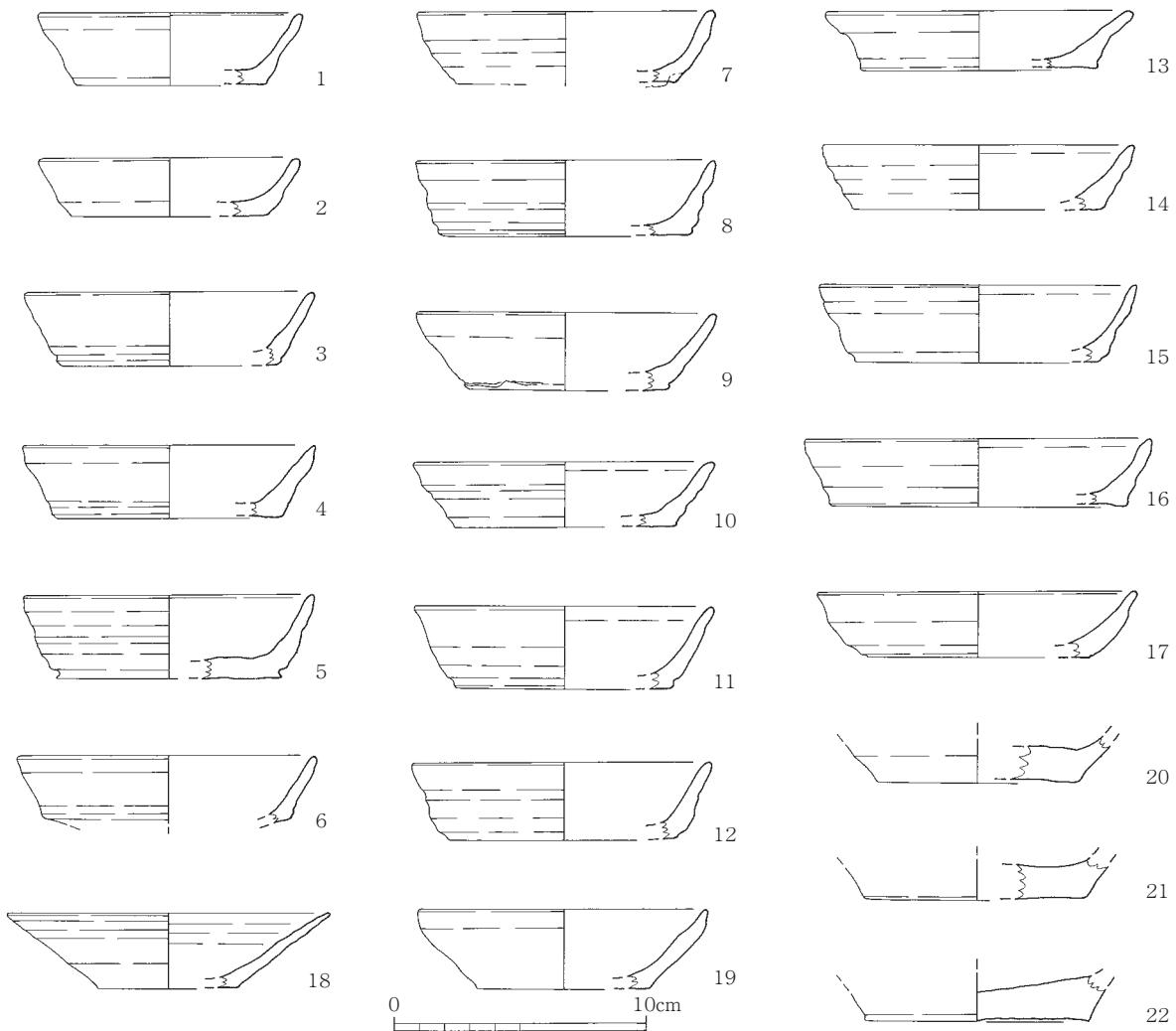
北区東西トレンチ出土銅錢（図版76、第135図） 直径2.0cmの「洪武通寶」（1368年明初鑄）。背面右側に文字があり、「一錢」と読みそうである。



第134図 北区石段実測図（1/40）



第135図 北区東西トレンチ出土銅錢拓影（1/1）



第136図 北区東西トレンチ出土遺物実測図 (1/3)

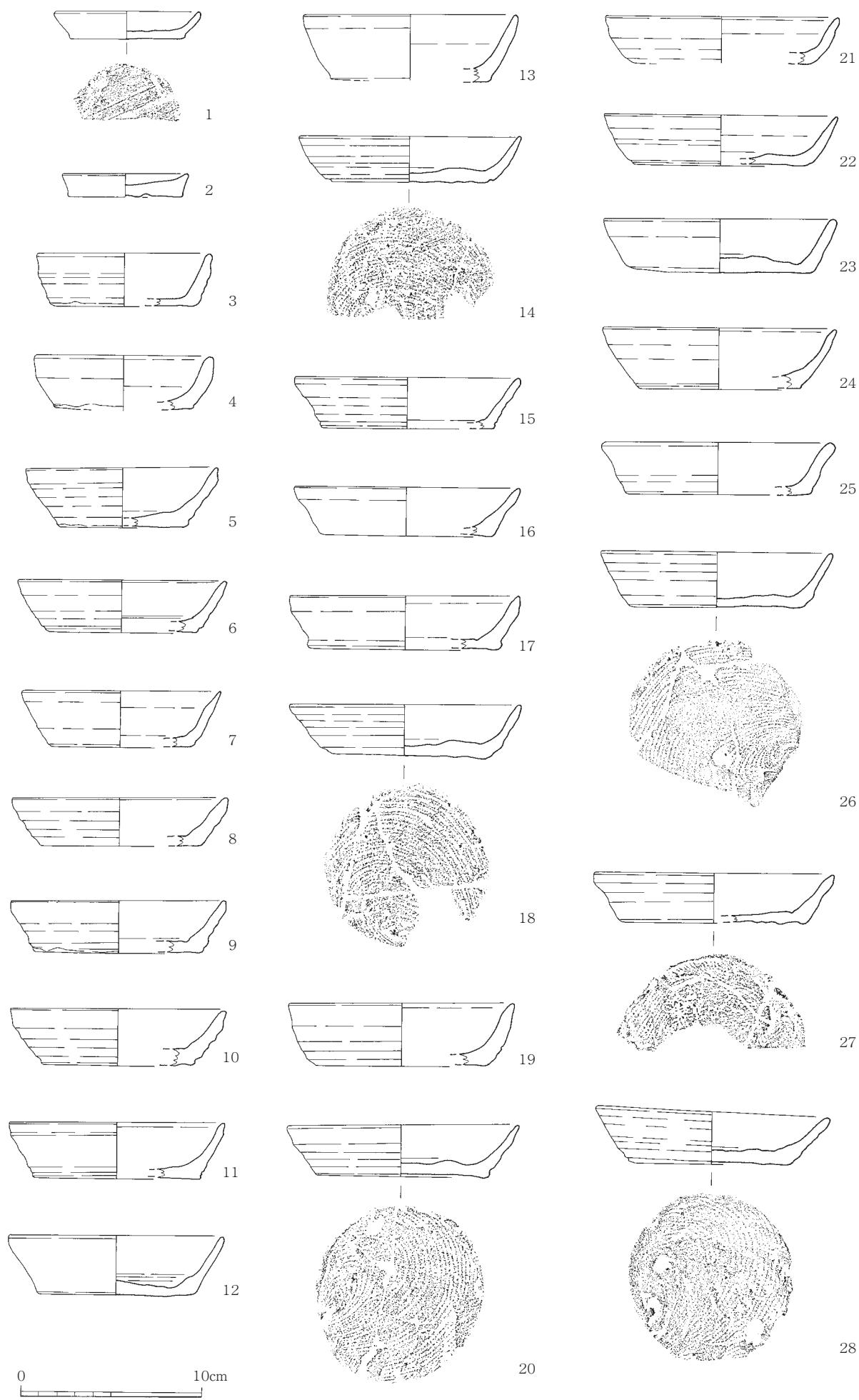
北区東西トレンチ出土土器（第136図） 石垣5に沿って設定したトレンチである。

1～16は復元口径10.6～14.0cm、器高2.3～3.4cmとなる土師器皿であるが、6～12の7点が復元口径12.0cm、器高2.6～3.3cmとなる。口径復元には焼け歪みや残存部の大きさなどにも影響を受けるけれども、全体に上記の法量が平均的なものと見てよいであろう。器形的には底部外面に粗い回転糸切り痕を残し、体部は急角度で直線的に立ち上がる傾向を見て取れる。また、体部、特に外面下半に水挽き痕が顕著に残り、体部下端つまり底部外縁が大きく凹んだりして形状が乱れるものが多い。これは成形・切り離しに関わる現象と思われるが、詳細は明らかにしえない。胎土・色調などに関して特記するようなすることはない。

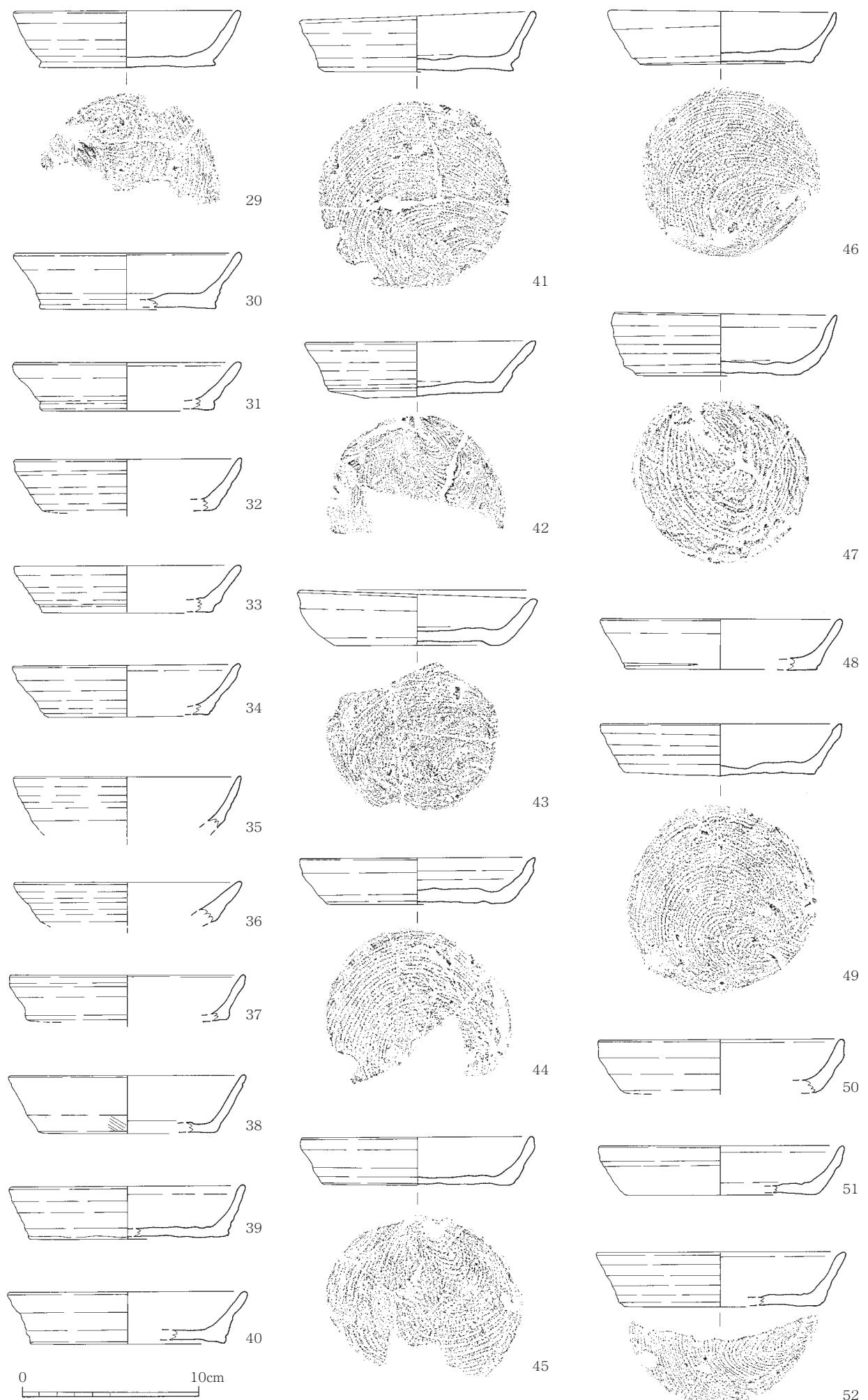
17は器形的には上記の水挽き痕著しい一群とは異なっているが、沈線を入れたようになる体部下端の乱れが共通する。復元口径12.8cm、器高2.6cmを測る。

18は小さな底部、内弯しつつ大きく開く体部など明らかに器形が異なる。また、この種の土師器は胎土精良、調整も非常に丁寧であるなど、小片であっても上記土器群とは明瞭に区別がつく。

19はまた異なる形態、技法で作られているようであるが、これは小片のため詳細がわからない。20～22はごく肉厚となる底部片を図示した。

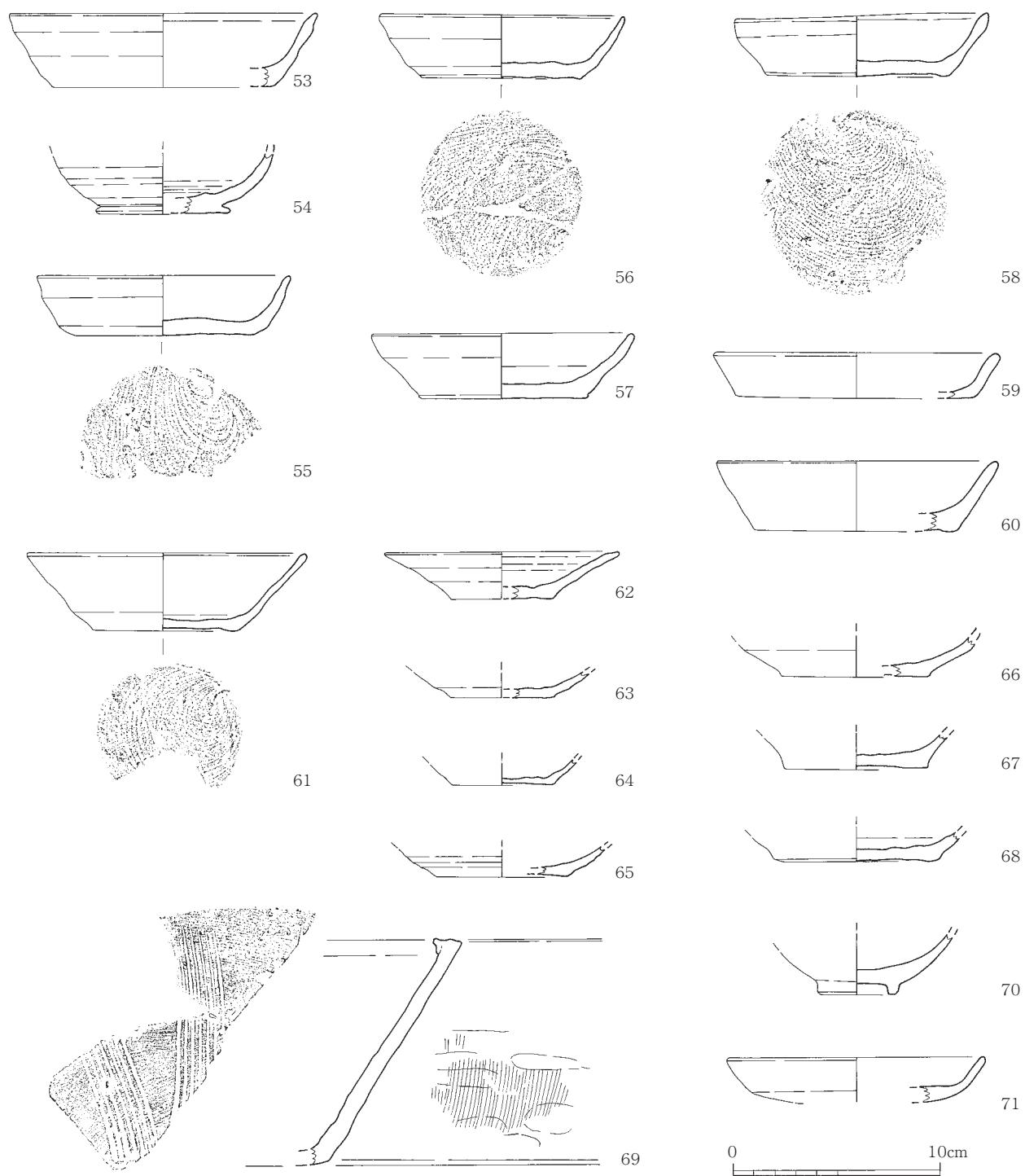


第137図 北区出土遺物実測図1 (1/3)



第138図 北区出土遺物実測図2 (1/3)

北区出土土器（図版75・76、第137～139図） 第137図1～第139図68はいずれも土師器である。1は復元口径8.2cm、器高1.5cmの小皿で、胎土は良好であるが器面が平滑化しないなど作りは雑である。外底面に板状圧痕が顕著に残る。2は底部が肉厚で現状では非常に浅い皿となるが、図で口縁部とした部分が本来の形状を保っているか、確信が持てない。3～53は底径が大きく、体部が急角度で短く立ち上がり、体部外面や底部内面に水挽き痕を残すなどの点で共通する。沈線が入ったように体部下端の形状が乱れ、また図に表現していないものもあるが見込み外周に沈線が入ったようになるものもかなり見受けられる（9・10・15・17など）。復元口径をみると12cm未満5点、12cm以上～13cm未満12点、13cm以上～14cm未満30点、14cm以上4点で、器高は2.5～3.5cmほどで、3cmが多い。54は体部が楕形となり、一見高台を付すように見えるが、これは切り離しのミスである。



第139図 北区出土遺物実測図3 (1/3)

そのほかは上記の土器群に似る。

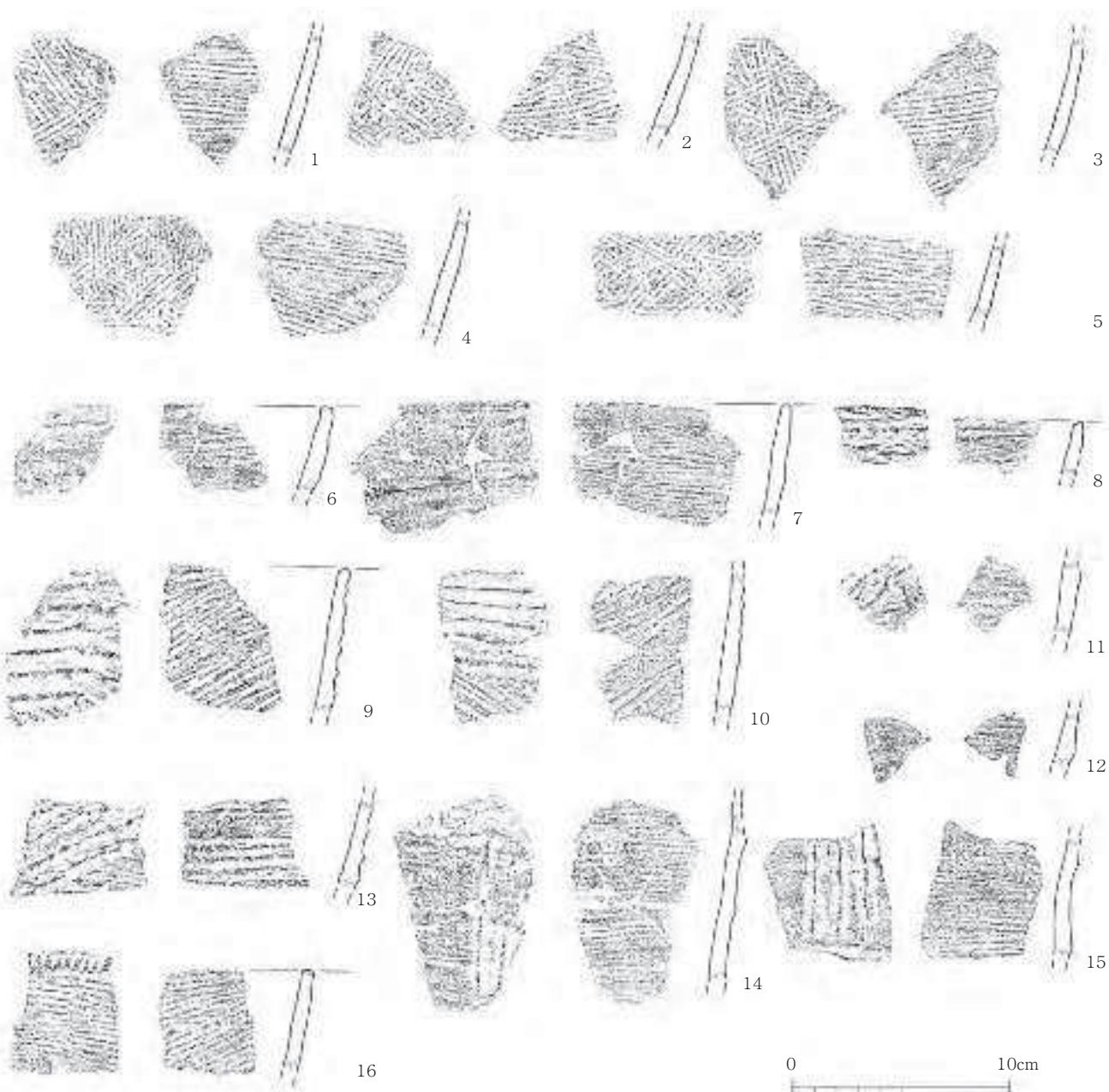
55~60は上記の皿と後述する皿の中間形態と呼ぶべき形をしている。これらの土器群には水挽き痕が見えず、体部下端の乱れもない。水挽き痕は後述する土器群には認められることから、系譜あるいは時期が違うと考えるべきであろうか。

61は小さな底部、大きく浅く開く体部をもち、胎土良好で丁寧に作られる。ただ、これには水挽き痕が見えない。62は体部が極度に浅く開くもので、これだけが黄白色となる色相も含めて特異な形態となる。胎土・造作も良好である。63~68は小振りの底部をもち、体部下端が一端内彎して浅く立ち上がるものであろう。これらは胎土・造作ともに良好。

69は口縁部を内側へ肥厚させて断面三角形とする瓦質摺鉢。胎土は良好といってよく、丁寧に作られる。体部外面上半は横撫で、下半は指撫での後に刷毛目で仕上げる。全体に暗灰色となる。

70は黄白色の緻密な胎土をもつ陶器碗で、畳付を除いて総釉となる。釉は灰茶褐色に発色するが垂れる部分は黒色となり、内面に金色のような発色をする釉をイッチン掛けしている。

71は龍泉窯系青磁皿で、無文。釉は灰青色に発色する。



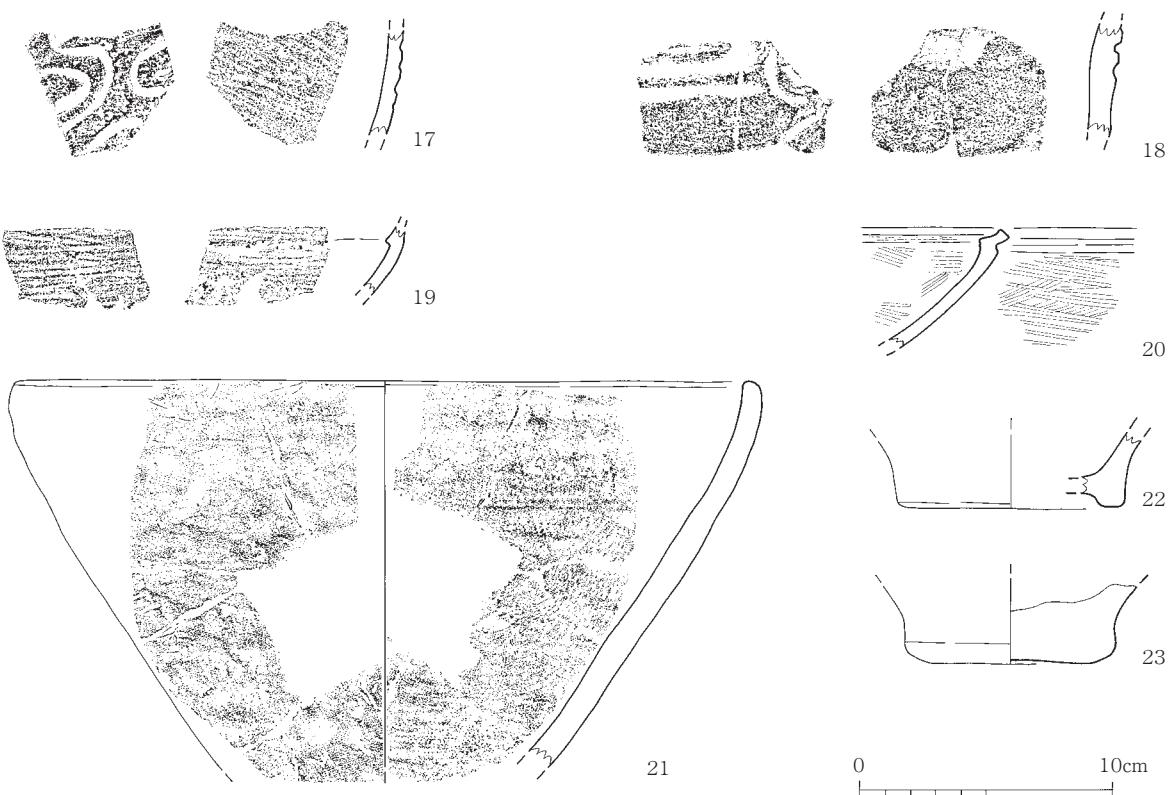
第140図 繩文土器実測図1（早期、1/3）

6) 繩文時代の遺物

調査区内の各所から縄文土器が出土している。もちろん原位置を思わせたり、まとまって出土したものではなく、いずれも二次的な状態での出土であることから出土地点については触れず、遺物の紹介のみにする。

1～5は内外面を二枚貝条痕で調整し、特に外面のそれを斜格子文風とする轟A式の土器。胎土は概ね良好といってよく、外面は灰褐色、内面は暗褐色であるが、黒変・赤変するものがある。6～15はミミズ腫れ状の不整な突帯を巡らせる轟B式土器で、これらも胎土は概ね良好。6・7は口縁部から下がった位置に1条の低く不整な突帯が巡っている。両者ともに口端部に水平な面を付す。8は口縁部の直ぐ下に二条の突帯を付す。これは口端部に小さい内傾する面を付し、その面に小さな刻みを入れている。9は口縁部を丸く收め、その直ぐ下から6条の突帯を巡らせる。10は口縁部を欠くが、5条の突帯を連続して巡らせている。11・12は低い突帯1条が残存、13は4条が残る。14・15は通常の横位の突帯の上に、14では2条、15では4条のやはり低い不整な突帯を縦位に付す。これらは外面に煤が付着するものが多く、また、内面も横位の二枚貝条痕を施すものが多い。16は口端部に刻みを付し、内外面を横位優勢な二枚貝条痕で調整する小片で、外面に煤が付着。胎土は粗い。

17は通常の籠描ではなく片切彫りのように施文する土器片で、外面はよくわからないが内面は巻貝のような条痕が見える。胎土は概ね良好で、器表は暗褐色系となる。18も胎土良好で、内外面ともに灰黄褐色となる。右の弧線は浅く、左側の直線は太くしっかりと刻む。これらは後期前葉に属する。19は体部が内弯し、口縁部が内傾する面をもつ椀形の小片。図で口縁上端とした部分が破面のようにも見える。内外面ともに粗い条痕が残り、本来は暗茶褐色であるが多くが黒色化する。20



第141図 縄文土器実測図2（後・晚期、1/3）

は晩期の黒色磨研土器。胎土精良で、器肉が灰赤色～灰褐色、内外の器表が暗茶褐色といった色となる。全体が丁寧に籠磨きされる。21は肉厚無文の鉢形土器で、内外面が灰黄褐色となるが、内面は口縁部下まで大部分に焦げが付着する。内面には浅い条痕が見えるが、口縁部内面から外面にかけては稚拙な感のある籠磨きで仕上げるようである。22は上げ底となる底部片で、胎土は良好、内面に条痕が見える。23は肉厚となる底部片で、内面は全て剥離する。

(4) 小 結

上伊良原高木神社は、祓川とそこに流れ込む支流によって切り離された丘陵の北端西側に位置し、第7図で見るように、社殿は丘陵を一部削り込んで造営されている。

今回の調査では、縄文前期・後期前半の土器類が出土したが、量的には少なく、石器はほとんどないといってよい。一時的なキャンプ地として使用された程度であろう。

出土遺物の中で特筆すべきは1トレンチ出土の須恵器壺底部である。体部に比して高台が非常に華奢であることから、この種の須恵器として末期に近いと考えてよいであろう。『彦山流記』に依拠したものと思われるが、社伝では弘仁年中（810～824）の創始と伝わり、この須恵器はそれに相応しい遺物である。この須恵器が最初に掘削したトレンチから出土したために出土状態の詳細を記録していないが、出土地点に近接して焼土や炭層が見られた。その直ぐ東には決して巨石というものではないが、自然石が立っていて、この岩の前で一度ならず「火を用いた祀り」が行われたことは間違いないであろう。神社開創に関して、「彦山開基第四世羅運」が彦山神領内に大行事社48社を置いたと伝わるが、少なくともこの上伊良原高木神社に関しては、社殿が整った形でなくとも、このパワースポット的な場所で祭祀が開始されたと見てよいであろう。

北区から多く出土した土師器皿の中、①体部が急角度で立ち上がり、②外面特にその下位に水挽き痕をよく残し、かつ体部下端の形状が乱れ、③内面見込外周に弱い圈線が残るものがある一群について、既に刊行されている「伊良原I～III」では柱穴や包含層といった資料に類似するものが散見されるが、まとまった遺物としての出土は見られない。

③の特徴については、北九州市を中心に古代・中世の土器を精力的に研究・発表されている佐藤浩司氏によれば、15世紀後半に比定する茶屋原遺跡3号火葬墓出土資料に見られるという。^{註1} ただ、器形的には北区61～68に図示したような、小さな底部から浅く大きく直線的に開く形態のもので、ここで問題とする土器群とは異なる。先の①～③の特徴を合わせもつ土師器皿は中近世城館・近世墓の調査例が豊富な北九州市内の遺跡でも例がほとんど見られず、古代から近世初頭までの各種遺構が調査された行橋市延永ヤヨミ園遺跡でも皆無に近い状況である。ただ、豊津町（現みやこ町）徳政宮ノ上遺跡1号土坑から出土した100点を超える土師器皿の中に10点ほどが客体として存在する。^{註2} 内面見込の圈線については触れられていないが、口径12～13cm、器高3cmの法量で、外面の水挽き痕が顕著であり、よく似ている。ただ、見込外周の圈線が新しい要素であるならば、本遺跡例が後出するとすべきであろう。徳政宮ノ上遺跡例は形骸化した高台あるいは無高台の瓦器碗が供伴していることから14世紀前半頃に位置付けられていて、本遺跡例は14世紀中葉以降に位置づけられよう。北九州市園田浦城跡は旧筑前国に位置する中世山城で、小底径大口径で見込に圈線をもつ土師器杯が出土し、供伴する陶磁器から14世紀後半～15世紀前半に位置付けられていて、見込圈線は佐藤氏の指摘の後により早く出現することが判明している。^{註3} 北区出土遺物は層位的にも出土状態を見ても一括性の根拠がないが、よく似た形の土師器皿が多く出土しているという点ではある程度の

一括性は認めてよいであろう。問題にしている土器と異なるが、61に示した土師器が中世後期から近世にかけて豊前地方で主流となる器形であり、佐藤氏の論考に照らせば14世紀後半から15世紀前半に相当するものと思われる。

上伊良原高木神社の記録によれば、永享3年（1431）に彦山座主有依が社殿を再建したとある。この信憑性は如何ともしがたいが、大量の土師器が再建を祝った酒食に用いられたことは十分可能性のあることで、これら二つの異なるタイプの土器群の年代を15世紀前半代としておきたい。また、ここで主体的な存在である土器が他の遺跡での出土例が乏しいことは、この谷の中でほぼ生産と消費が完結していた可能性を考えられよう。先の徳政宮ノ上遺跡は祓川に近く、かつ豊前国分寺・国分尼寺に近接する。宗教的な色彩を指摘することも可能であるが、いずれにしてもより類例が判明することを期待しよう。

拝殿周辺の下層で検出した石列・石垣についてはその構築時期の推定が困難である。現在境内地を画する石垣5については、昭和27年（1952）の幣殿・拝殿の改築に併せて整備されたことがビール瓶の出土から見て間違いないであろう。石垣7は前面（北側）下層に堆積した黒色土上から出土した唐津焼青緑釉皿が1690～1780年代に比定されている。この層は石垣7が露出して機能している時期に自然堆積したと考えられる層である。これに相応しい記録は寛延元年（1748）の「拝殿建立」であろう。拝殿建立に併せて境内地を整備したものと思われる。

石垣6の構築は石垣7を埋めていることから、ほぼ1800年以降に構築されたと考えられる。記録から拾えば天保11年（1840）の本殿改築に相当しようか。大型の石材も使用して、直線的なしっかりとした石垣を築いていて、現境内地の基礎となった石垣である。石垣8・9については石垣7以前としかいいようがない。また、石垣・石列構築のすべてが社殿の建築や改築だけを契機とするとは限らないが、遺構の性格上時期比定が困難で、出土品も同様である。どうしても記録・伝承に引きずられる嫌いがあることはやむを得ないところがある。

註

- 1 佐藤浩司「北九州市域の15～16世紀の土師器」（『大宰府陶磁器研究－森田勉氏追悼論文集一』1995）
- 2 福岡県教育委員会「徳政宮ノ上遺跡」（『福岡県文化財調査報告書』第166集、2002）
- 3 （財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室「園田浦城跡」（『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第232集、1999）

5 上伊良原善治遺跡

1) はじめに

上伊良原高木神社の南西山麓に祓川の清流を引き込む河川プールが設置されている。そこへの進入路が伊良原中学校前の「善治橋」で、この善治橋付近から河川プールにかけては二段の田畠が耕作されていた。この部分の用地取得が終了したとの連絡を受けて、平成26年5月23日、上伊良原高木神社の調査中に重機を使用して試掘調査を行った。ここで上伊良原善治遺跡とした地点は、その際に地表下1.5mで「茶褐色土上に青灰色土の落ち込み」を確認したということで調査対象としたものである。結果的に「落ち込み」は後述する1トレンチの3・4層目の境の凹凸であったよう、遺構ではなかった。また、石垣は昭和50年代に埋没したものと判断して、詳細を記録していない。

発掘調査は同年10月8日～12月22日の間に、高木神社の作業員の一部を動員して実施した。調査面積は約200m²。

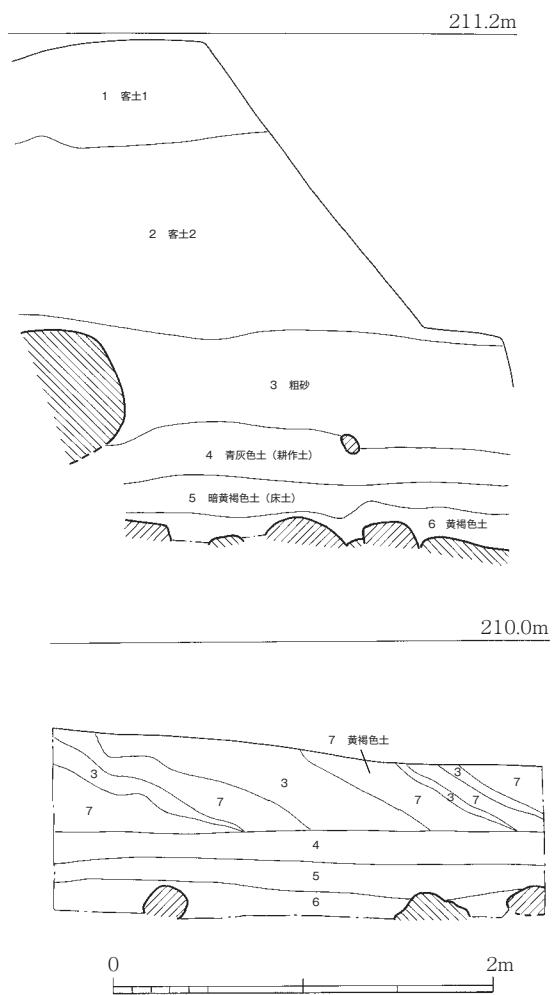
2) 層序

1トレンチ（図版79、第141図） 石垣の前面に開けたトレンチの北壁である。0.4～0.5mの厚さの最上層・客土1は明らかに客土された土である。厚さ0.8～1.2mほどの客土2は上方に灰褐色土が、中・下位では青灰色土・細砂が斜位に互層となっていた。その下は黄褐色の粗砂層で、トレンチ北端では巨岩が混入している。さらに下位が青灰色土で、この上面は標高209.0～209.1mの付近である。その下は暗黄褐色土、そして灰色の砂礫層となる。下位の青灰色土が旧耕作土、その下位が床土であろう。トレンチの南壁となる石垣の頂部の標高は209.58m付近、基底部はトレンチ床面より若干高く、床土に相当する。

2トレンチ（図版79、第141図） 1トレンチ北に設定した。トレンチの上面は重機で掘り下げた1トレンチ4層黄褐色粗砂層に相当するもので、ここでは黄褐色土と粗砂が西側から東側にかけて傾斜する互層となっていた。その下は暗灰色土で、この上面は標高209.1m付近である。これは1トレンチで旧耕作土とした層と同じもので、ここでも下位が暗黄褐色土（旧床土）、そして砂礫層となる。

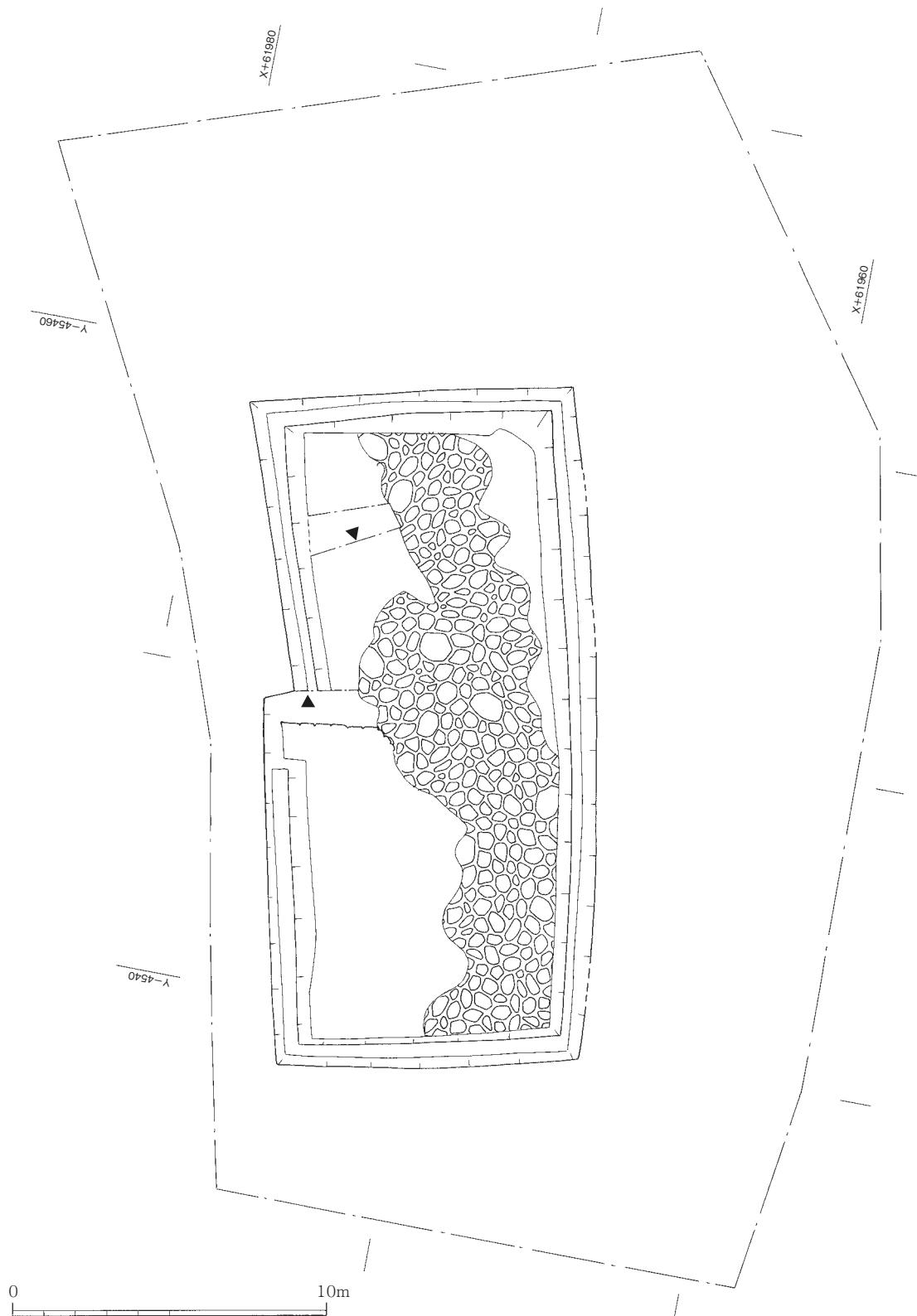
3) 小結

調査対象地の中央付近に、3～6mの幅をもって巨岩を含む大小の礫が帶状に集中していた。その方



第142図 土層実測図 (1/40)

向は祓川の流れとほぼ同様である。1トレンチで検出した石垣も巨岩によって一部が覆われていた。以前は水田として使用されていたようであるが、巨岩が累積する状況となり、岩の除去を諦めて客土を行い、耕作地を復旧したものと思われる。巨岩の間にはビニール類、コーヒーの空き缶などが入っていた。福岡県HPによれば、昭和55年8月の豪雨によって全壊流出1戸、半壊1戸、浸水家屋34戸、浸水農地75haの大被害を被ったという。現在祓川にかかる善治橋には「昭和59年完成」のプレートが付されていて、今回現れた巨岩類はこの時の水害の痕跡であるものと思われる。



第143図 遺構配置図 (1/200)

IV おわりに

以上が今回の調査の内容である。

下伊良原高木神社は貞応元年（1222）に「宮園」から現在地に遷座したという伝承があり、年代的に相応しい土師器鍋が多く出土した。ヒトの営みを認めることができたとはいえ、祭祀の痕跡や特殊遺物といったものは確認できなかった。また、土師器鍋が際立つという意味は、酒食が行われたということであろうか。上伊良原高木神社では見られない状況である。

15世紀前半～中頃になって漸く土器や銅錢を用いた祭りの痕跡を確認できるが、社殿などといった構造物は判然としない。焼土塊や石列を思わせる川原石、また大型柱穴や「不自然な土層」なども位置的に見て先の土器群と一連のものである可能性が考えられ、神社構造物の一部を構成していたことは推測してよからう。

複数の石垣の全ての構築時期を特定することは困難であるが、最も大規模な東端石垣について、「江戸後期」との指摘を得ている。そうであれば、下伊良原高木神社の社殿が整う時期も江戸後期まで下る可能性がある。もちろん、元和4年（1618）に拝殿再建の記録（棟札銘控え）が残ることから、江戸初期に社殿は造営されていたのだろうが、我々がイメージするものより小規模なものであったと思われる。

下伊良原庄屋敷跡は江戸前期に手永（大庄屋）を、後に庄屋を勤めた白川家の住宅跡である。白川家は豊前宇都宮家最後の当主鎮房（天正16年：1588、黒田父子により謀殺される）から伊良原などを所領として与えられて伊良原に居住し、宇都宮氏滅亡後は一時筑前へ出たがやがて伊良原に戻り、元和8年（1622）までには再び惣庄屋に任命されている。今回の調査では、1トレンチで検出した埋没石垣の周辺の客土や柱穴から17世紀前半に比定可能な陶磁器が出土していて、白川氏の伊良原再移住後の居住地として整備されたらしいことが窺われ、記録と符合する。「18世紀後期に遡る可能性が高い」と評価された家屋が位置した調査地の南端付近での造成が最初になされたようであるが、その範囲は確認できていない。その後、敷地は造成を重ね、最終的に南北80m以上、高さ4mの巨大な石垣が出来上がったのは5・6トレンチの客土中出土の土器から見て18世紀後半の頃であろう。建物の推定建造時期と整合する。

下伊良原宮園遺跡でもやはり複数の石垣が検出された。最古の石垣は15～16世紀の頃であろうか。その後、数度にわたって拡張されていた。「宮園」は、下伊良原高木神社の旧社地という伝承があるが、「宮園」地区で遺構を確認した地点はここだけである。後世の地形改変等によって失われたことも十分考えられるし、今回の調査区自体、北端付近が北東の谷からの土石流で破壊されていた。出土遺物で最も古いものは12～13世紀に属する輸入磁器の小片である。社伝でいう「弘仁年間（810～824）」に相応しい遺物はなく、後世の祭祀の痕跡もまったく認められなかった。地形改変あるいは土石流によって失われたものであろうか。

「宮園」の地名と、下伊良原高木神社の伝承からこの付近が旧社地であったと想定したのであるが、上伊良原高木神社のような地形的な特徴がなく、祭祀を窺わせる証拠も得られなかった。

上伊良原高木神社跡も下伊良原高木神社跡と同様、「弘仁年間」に彦山神領内に置かれた神社の一つと伝える。下伊良原高木神社が下伊良原で最も開けた地区の北限でかつ視界が開けた地形に占地するのに対し、この高木神社は上伊良原地区の北端近くに位置し、かつ東西から山が迫って隘路となり、さらに流路が曲線を描いて視界が遮られた地形に位置する。加えて、眼前の祓川には淵があって、今でいうパワースポットである。

ここでは拝殿跡下層、地山の砂層上で焼土塊・炭などを検出、炭層は地山中の巨岩の表面に添つ

て西へ続いていた。焼土塊の直ぐ東には、決して巨岩とは呼べないが岩が立っていて、これを神籬、依代として火を用いた祀りが行われたのであろう。また、卑近な位置から9世紀前半に比定できる須恵器壺片が出土し、伝承の一部が裏付けられたといえる。この伝承の元は、『彦山流記』である。「建保元年（1213）癸酉七月八日」の紀年があるが、建保元年の改元は「建暦三年十二月六日」であり、本来存在しない日付をもつことなどから成立時期に疑義がもたれている。ただ、英彦山及びその周辺に高木神社と称する旧大行事社が多数存在することは事実であり、それらの創始を解明することはとても困難なことである中、上伊良原高木神社で伝承の一部が裏付けられたことは意義深いことと考える。

附記 上伊良原高木神社前、祓川の種字岩について

みやこ町歴史民俗博物館 木村達美

原田昭一氏の調査・研究により、磨崖種字が北部九州域における修驗文化の遺産として特異・象徴的な造形物であることが明らかにされたが、伊良原地区には現物を確認できるものが2件、伝承物件が1件、想定される事案が1件ある。

①弘法堂下磨崖種字（現存／金剛界大日） ②大井堰下（想定） ③日焼井堰下磨崖種字（伝承地／主尊不詳） ④音無淵磨崖種字（現存／一字金輪仏）

以上は、川べりの淵や瀬を望む露岩に、薬研彫りで単独の種字が、最大で縦30cmほどの規模で刻まれるという共通した環境と傾向があり、同時あるいは短日時に同一の目的を以て造立されたことを窺わせている。

現地では、享保飢饉の餓死者供養に英彦山の山伏が刻んだとの伝承があるが、現存種字の所在地、弘法堂の伝統行事・弘法相撲の解釈に付会したもののように、確たる根拠のある伝承ではなさそうである。技法や造形を基にした原田氏の考察では14世紀前半頃の造立と見られているが、現時点では最も妥当性の高い見解である。

伊良原地区に所在する磨崖種字について、同系統とみられる種字が集中する背景が気になるが、現時点で想定される有力な背景と思しき歴史的環境を紹介しておきたい。以下単純に「当地には○○の歴史的背景がある」といった標記で紹介する。

①当地は豊前地方の巨大建造物の材料供給地としての歴史を持つ（近世以降は行橋市淨喜寺・宇佐市四日市別院・みやこ町豊津藩庁の造営材を供給した）。古くはみやこ町豊前国府に関する事、中世においては宇佐宮一の御殿の杣山「神原杣」の構成地であった可能性が高い。

③当地は英彦山以外にも磨崖仏造立の願主・檀那たりうる地域権力や靈場が至近に在る。城井（鎮西宇都宮氏／西大寺律宗末寺「常福寺」）、蔵持山（彦山末山）、豊前国分寺など

上記の環境と想定されている造立時期を踏まえた時、これらの種字は、14世紀半ば前後における宇佐宮の式年造営に際し、用材の確保を担った彦山や律宗教団が、堰流しや碎石等による河川改修によって用材を確保する際、搬出の安全祈願や產土神への寛恕を乞う等の理由で造立されたものと考えることができないであろうか。これは原田氏の教示に基づいた推測にすぎないが、想定しうる背景の一つとして紹介しておきたい。

註 原田昭一「九州・山口の磨崖梵字について」（『石造文化研究』第31・32巻、2015）

V 上伊良原榎遺跡出土縄文土器の¹⁴C年代測定

遠部 慎（北海道大学埋蔵文化財調査室）

1 概要

福岡県上伊良原榎遺跡から出土した炭化物の年代測定を行ったので、その結果を報告する。試料の採取は遠部慎が採取した。試料の前処理は国立歴史民俗博物館およびパレオ・ラボで行い、測定は東京大学（MTC）によるものである。測定結果は計測値（補正）とともに、実年代の確率を示す較正年代値を示した。また、その根拠となった較正曲線を示した。これまで、九州で測定例の少ない縄文時代早期（稻荷山式）・前期土器（轟式）に付着した炭化物の分析例である。

（1）測定資料と観察所見

測定対象とした資料は、遠部が採取した土器付着物4点のうち、測定可能であった3点（3個体）である。1は楕円押型文土器で内外面に施されており、稻荷山式に比定される。2は胴部でナデ調整の器形に、やや細いナデ調整の隆帯を貼りつけた高橋信武氏のいう轟5式（高橋 1989）。4は轟4式と呼ばれるものに該当する。1は、外面胴部上半に付着した炭化物、2・3も外面に付着した煤と考えられる付着物である（第145図）。試料番号FUKYである。

（2）炭化物の処理

炭化物試料については、註1に記した手順で試料処理を行った。本試料はバインダー処理等による汚染が懸念されたため、アセトンによる処理を入念に繰り返し、溶解がなくなったことを確認したうえで試料処理を行った（第146図）。ガス化率、グラファイト化率とも十分な炭素量が得られた。（1）（2）（3）の作業のうち、（1）は国立歴史民俗博物館で遠部が行い、（2）パレオ・ラボ社に委託し、測定は東京大学大学院工学系研究科タンデム加速器研究施設（機関番号MALT）で行った。

（3）測定結果と暦年較正

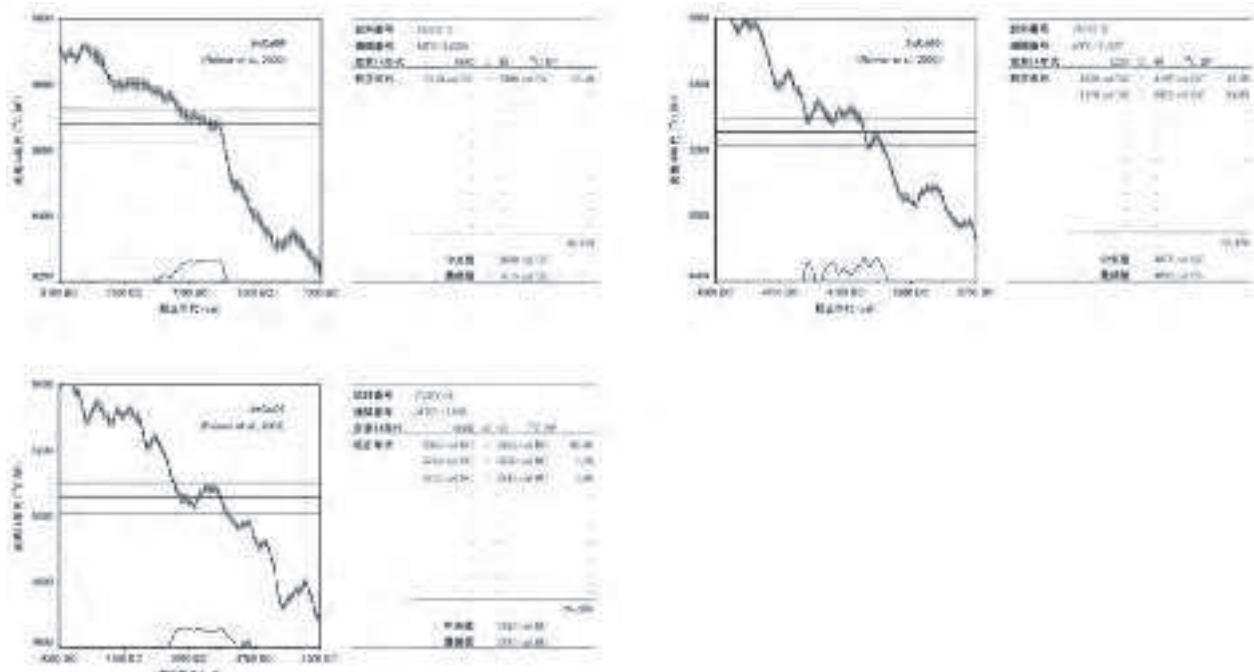
測定結果は、注2に示す方法で、同位体効果を補正し¹⁴C年代、較正年代を算出した。年代測定結果は、表に示す。測定した機関番号はMTC-11326、11327、11328である。これを暦年較正した結果を図1表1に示す。 $\delta^{13}\text{C}$ 値の測定は加速器の数値で参考値であるが、FUKY-1がやや低い値を示すものの異常は認められない。

（4）測定結果について

これまで縄文早期・前期土器についての年代測定は数が多いわけではないが（小林 2007、西本編 2009）、本遺跡内での前後関係は型式学的観点および年代測定は矛盾しないものと判断される。その前提のうえで、これまで得ているデータとの関係を検討する。

表2 測定した試料の¹⁴C炭素年代(BP)と曆年較正年代(Cal BC)

試料番号	測定機関番号	¹⁴ C炭素年代			曆年較正年代	
		$\delta^{13}\text{C}$ (%)	(BP)		(Cal BC)	確率分布(%)
FUKY-1	MTC-11326	(-21.8 ± 1.4)	8680	± 45	7815–7590	95.4%
FUKY-2	MTC-11327	(-26.1 ± 2.0)	5255	± 40	4230–4195	12.9%
					4170–3975	82.6%
FUKY-4	MTC-11328	(-34.2 ± 1.3)	5055	± 45	3960–3760	92.4%
					3740–3730	1.20%
					3725–3715	1.8%



第144図 測定資料の較正年代

縄文時代早期押型文土器では、稻荷山式の測定値が得られ、本州域でこれまで蓄積している測定値とも大きく矛盾しない。縄文前期については大分県二日市洞穴で轟4式の測定があるが、 $5160 \pm 20\text{BP}$ （遠部 2007）である。また西唐津式は鹿児島県湯屋原遺跡で $5450 \pm 45\text{BP}$ という測定値が得られており（遠部・宮田 2008）、轟式の後半段階はある程度の幅で曾畠式と併存する可能性が指摘されている（桑畠 2013）。今後、さらなる測定を蓄積する必要はあるが、北部九州で基点となる重要なデータが蓄積されたと考えたい。

本稿の測定結果は平成16–20年度科学研究費補助金（学術創成研究）「弥生農耕の起源と東アジア炭素年代測定による高精度編年体系の構築一」（研究代表 西本豊弘 課題番号 16GS0118）、「先史時代における貝塚出現期の年代学的研究」（19800058）の成果の一部を用いている。

曆年較正については今村峯雄、坂本稔の方法に従った。本実験にあたり、には資料調査から分析まで、吉田東明氏には、さまざまご配慮をいただいた。また、国立歴史民俗博物館・学術創成研究グループ、北海道大学埋蔵文化財調査室、犬島貝塚調査保護プロジェクトチーム、の諸先生、大坪芳典・桑畠光博・小林謙一・相美伊久雄・宮田佳樹の諸氏には資料調査や位置づけについて、ご教示、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げたい。

補注1 土器付着物については下記の方法で処理した。

(1) 前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄

AAA 処理に先立ち、土器付着物については、顕微鏡等で確認し、不純物を除去した。さらに、アセトンに浸け振とうし、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した（2回）。AAA 処理として、80°C、各1時間で、希塩酸溶液（1N-HCl）で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去（2回）し、さらにアルカリ溶液（NaOH、1回目 0.1N、3回目以降 1N）でフミン酸等を除去した。アルカリ溶液による処理は、5回以上行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに酸処理2回（1N-HCl 1時間）を行いアルカリ分を除いた後、純水により洗浄した（4回）。

(2) 二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を燃焼（二酸化炭素化）、真空ラインを用いて不純物を除去。

AAA 処理の済んだ乾燥試料を、500mg の酸化銅とともに石英ガラス管に投じ、真空に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で、850°C で 3 時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス製真空ラインを用いてこれを分離・精製した。

(3) グラファイト化：鉄触媒のもとで水素還元し、二酸化炭素をグラファイト炭素に転換。アルミニウムカソードに充填。

1.5mg の炭素量を目標に二酸化炭素を分取し、水素ガスとともに石英ガラス管に封じた。これを電気炉で、およそ 600°C で 12 時間加熱してグラファイトを得た。ガラス管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合させた後、穴径 1 mm のアルミニウムカソードに 600N の圧力で充填した。

補注2 測定値について、以下の方法で較正年代を算出した。

年代データの ^{14}C BP という表示は、西暦 1950 年を基点にして計算した ^{14}C 年代（モデル年代）であることを示す。 ^{14}C 年代を算出する際の半減期は、5,568 年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差（1標準偏差、68%信頼限界）である。

AMS では、グラファイト炭素試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比により、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比に対する同位体効果を調べ補正する。 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比は、標準体（古生物 belemnite 化石の炭酸カルシウムの $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比）に対する千分率偏差 $\delta^{13}\text{C}$ （パーミル、‰）で示され、この値を -25‰ に規格化して得られる $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比によって補正する。補正した $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、 ^{14}C 年代値（モデル年代）が得られる。加速器による測定は同位体補正効果のためであり、必ずしも $^{14}\text{C}/^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を正確に反映しないこともあるため、パレオ・ラボ測定分については、加速器による測定を参考として付す。

測定値を較正曲線 IntCal04 (^{14}C 年代を暦年代に修正するためのデータベース、2004 年版) (Reimer et al 2004) と比較することによって暦年代（実年代）を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは、国立歴史民俗博物館で作成したプログラム RHCAL (OxCal Program に準じた方法) を用いている。統計誤差は 2 標準偏差に相当する、95% 信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦 cal BC で示す。（ ）内は推定確率である。

《参考文献》

- 遠部 慎 2006c 「北・東部九州における縄文時代草創期末～早期前半の諸様相－大分県九重町二日市洞穴の年代測定－」『九州縄文時代早期研究ノート』第4号、pp.19-25、九州縄文時代早期研究会
- 遠部 慎・宮田佳樹 2008 「宮崎県における土器付着炭化物の炭素14年代測定」『宮崎考古』第21号、pp.41-54、宮崎考古学会
- 遠部 慎・宮田佳樹 2008 「鹿児島市湯屋原遺跡の土器付着炭化物の炭素14年代測定」(未刊)
- 桑畠光博 2013 「気界アカホヤテフラ (k-Ah) の年代と九州縄文土器編年との対応関係」『第四紀研究』52-4、pp.111-125、第四紀学会
- 小林謙一編 2007 『AMS炭素14年代測定を利用した東日本縄文時代前半期の実年代の研究 (課題番号: 17520529) 平成17～18年度科学研究費補助金基盤研究(C)(1)研究成果報告書』国立歴史民俗博物館
- 高橋信武 1989 「轟式土器再考」『考古学雑誌』75-1、pp.1-39、日本考古学会
- 西本豊弘編 2009 『弥生農耕の起源と東アジア』 国立歴史民俗博物館
- Stuiver,M., Reimer,P.J., Bard,E., Beck,J.W., Burr,G.S., Hughen,K.A., Kromer,B., McCormac,F.G., v.d.Plicht,J., and Spurk,M. (1998): INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon,40(1), 1041-1083.

本稿は「伊良原Ⅱ」(『福岡県文化財調査報告書』第229集、2011)で報告された「上伊良原榎遺跡」出土縄文土器に付着した煤を資料とした放射性炭素年代測定結果である。上記報告に掲載する予定であったが、諸般の理由で公表できずにいた。今回、同様の縄文土器が比較的まとまって出土した伊良原地区の遺跡を報告する機会となったことから、掲載することとした。分析・報告を戴いた遠部慎氏には、公表が遅れたことをお詫びするとともに、記して謝意を表します。



FUKY-1



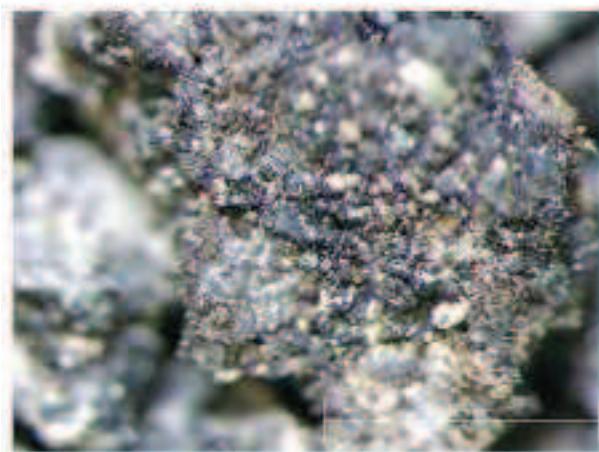
FUKY-2



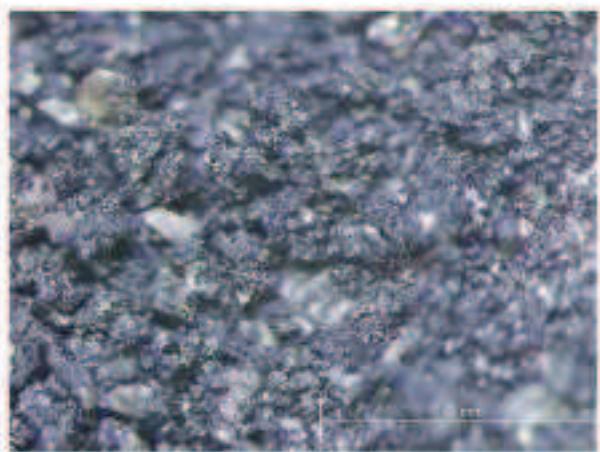
FUKY-4



第 145 図 採取土器及び付着状況（カラーデジタル）



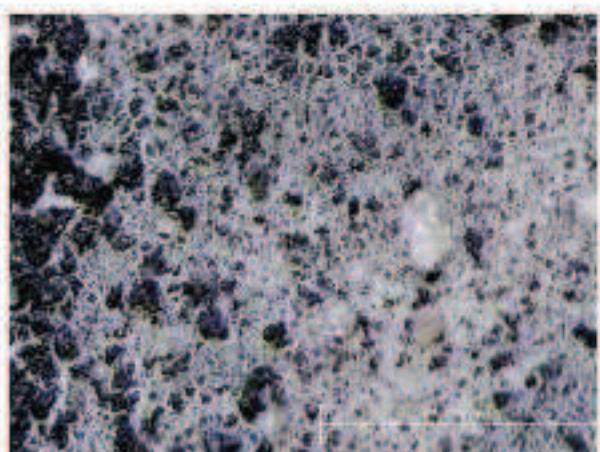
FUKY-1 AAA 前



FUKY-1 AAA 後



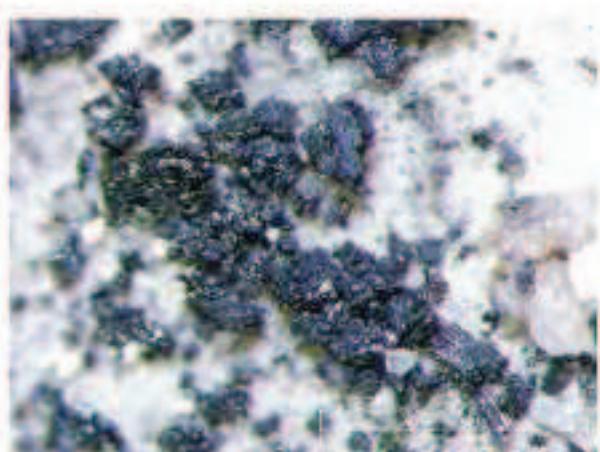
FUKY-2AAA 前



FUKY-2AAA 後



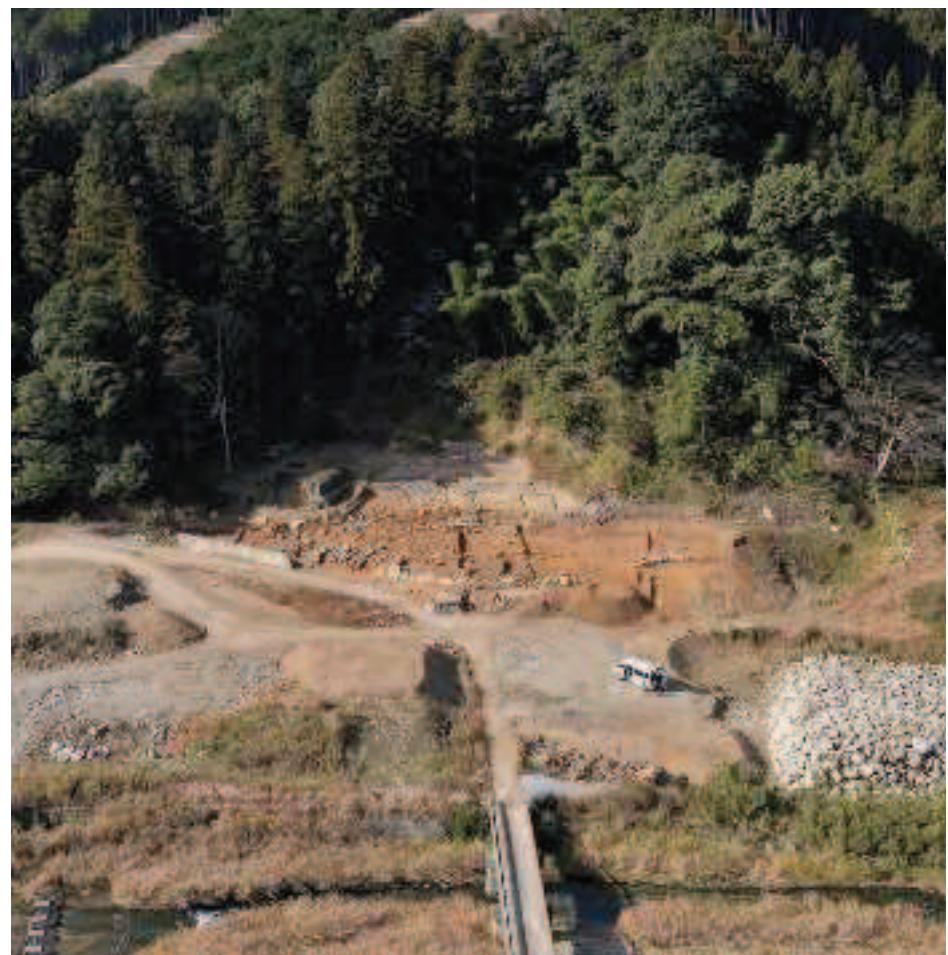
FUKY-4AAA 前



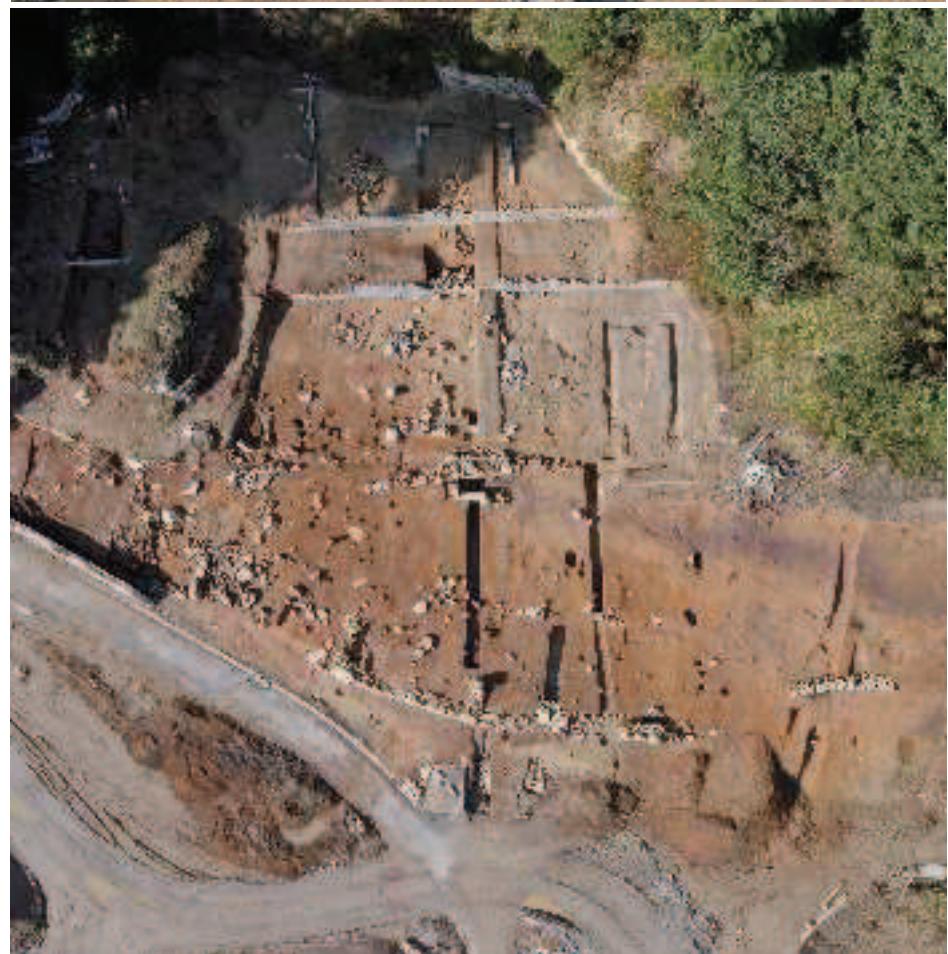
FUKY-4AAA 後

第 146 図 前処理状況（カラーデジタル）

図 版



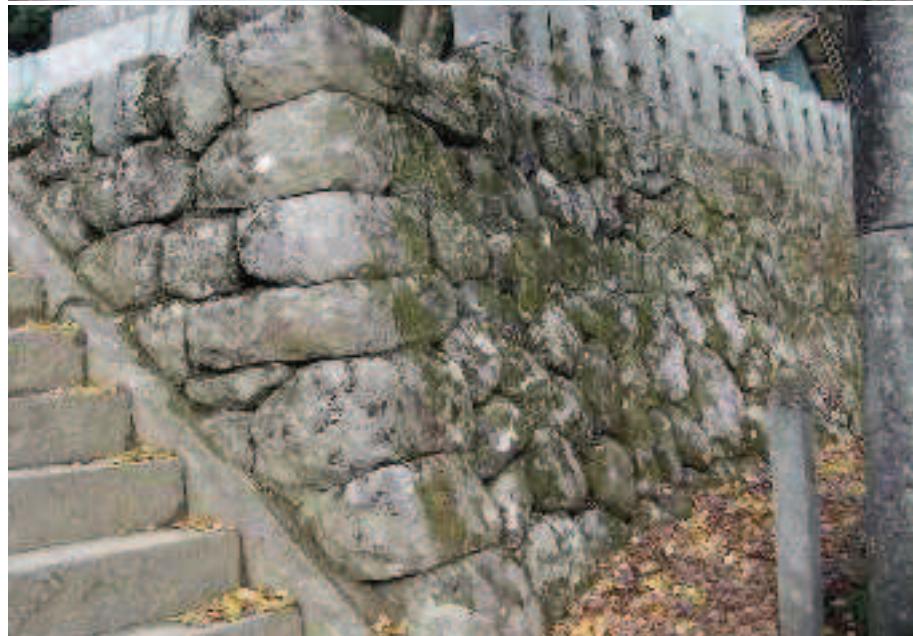
1 調査中全景（東から）



2 調査中全景（上空から）



1 社殿解体前（東から）

2 社殿解体前前庭東石垣
(南東から)3 社殿解体前拝殿近景
(北東から)



1 本殿跡（南から）



2 本殿南の破碎礫（南から）



3 幣殿・拝殿跡（南から）



1 1 トレンチ拝殿東端土層
(南東から)



2 1 トレンチ前庭土層 1
(南西から)



3 1 トレンチ前庭土層 2
(南東から)



1 1 トレンチ前庭土層 3
(南東から)



2 2 トレンチ西半土層
(北東から)



3 2 トレンチ中央付近土層
(北東から)

図版6

下伊良原高木神社跡



1 2 トレンチ東端土層
(北東から)



2 3 トレンチ土層 (南から)



3 4 トレンチ土層 (南東から)





1 石垣 1～3 (南東から)



2 石垣 1～3 (南から)

3 石垣 1 石段・石垣 2
(北東から)



1 石垣 1～3（北から）



2 石垣2背面の銅錢（北西から）



3 石垣2抜取り跡のサイダービン（北東から）



1 調査中全景（東上空から）



2 石垣群（上空から）



3 調査中全景（東から）



4 東端石垣南半（北東から）



1 東端石垣南半（北東から）



2 東端石垣石段土層（南東から）



3 東端石垣石段（東から）



1 東端石垣石段北付近(南から)



2 東端石垣2トレンチ付近
(東から)



3 東端石垣北端上層(南東から)



1 東端石垣北端下層(南東から)



2 東端石垣北端下層(北東から)



3 東端石垣石段南の矢跡
(東上から)



1 北端石垣（南東から）



2 北端石垣（南東から）



3 南石垣付近（上空から）

1 南端石垣南東西土層
(南東から)



2 南端石垣南南北土層
(南東から)



3 南端石垣 (南東から)





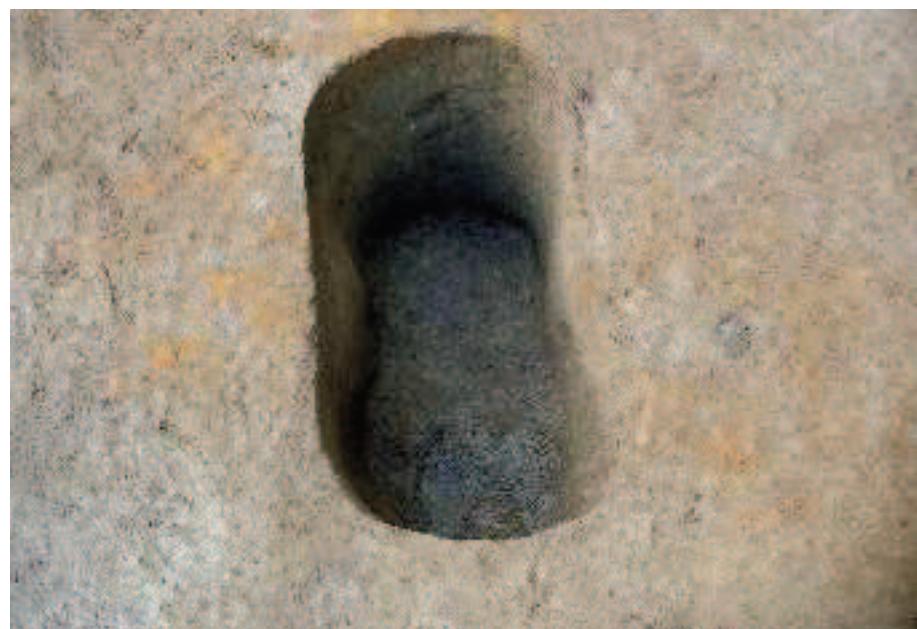
1 石組1 (北から)



2 石組2 (東から)



3 土坑1 (南東から)



1 土坑2（北東から）



2 土坑3（南から）



3 左：土坑4（東から）
右：土坑5（北東から）

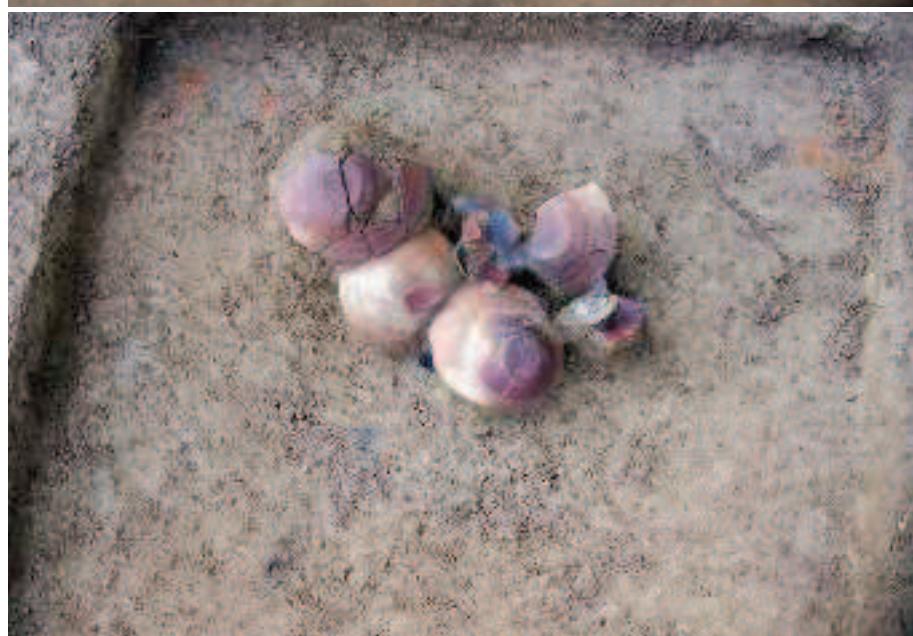




1 前庭1・2トレンチ間
(東上空から)



2 同上礫と焼土 (東から)



3 土器群出土状態 (東から)

1 土器群周辺銅錢出土状態
(南東から)



2 鳥居跡と東端石垣
(東上空から)



3 鳥居跡と東端石垣 (東から)





1 鳥居跡礎石（東から）



2 鳥居跡南側土坑（南から）



3 鳥居跡北側土坑（南から）

1 集石 1 (東から)



2 集石 2 (東から)



3 集石 3 (北から)





1 集石 4 (南東から)



2 集石 4 下層 (南東から)



3 集石 5 (北から)



1 アカホヤ火山灰層(南西から)



2 アカホヤ火山灰層(北西から)



3 アカホヤ火山灰層(南西から)



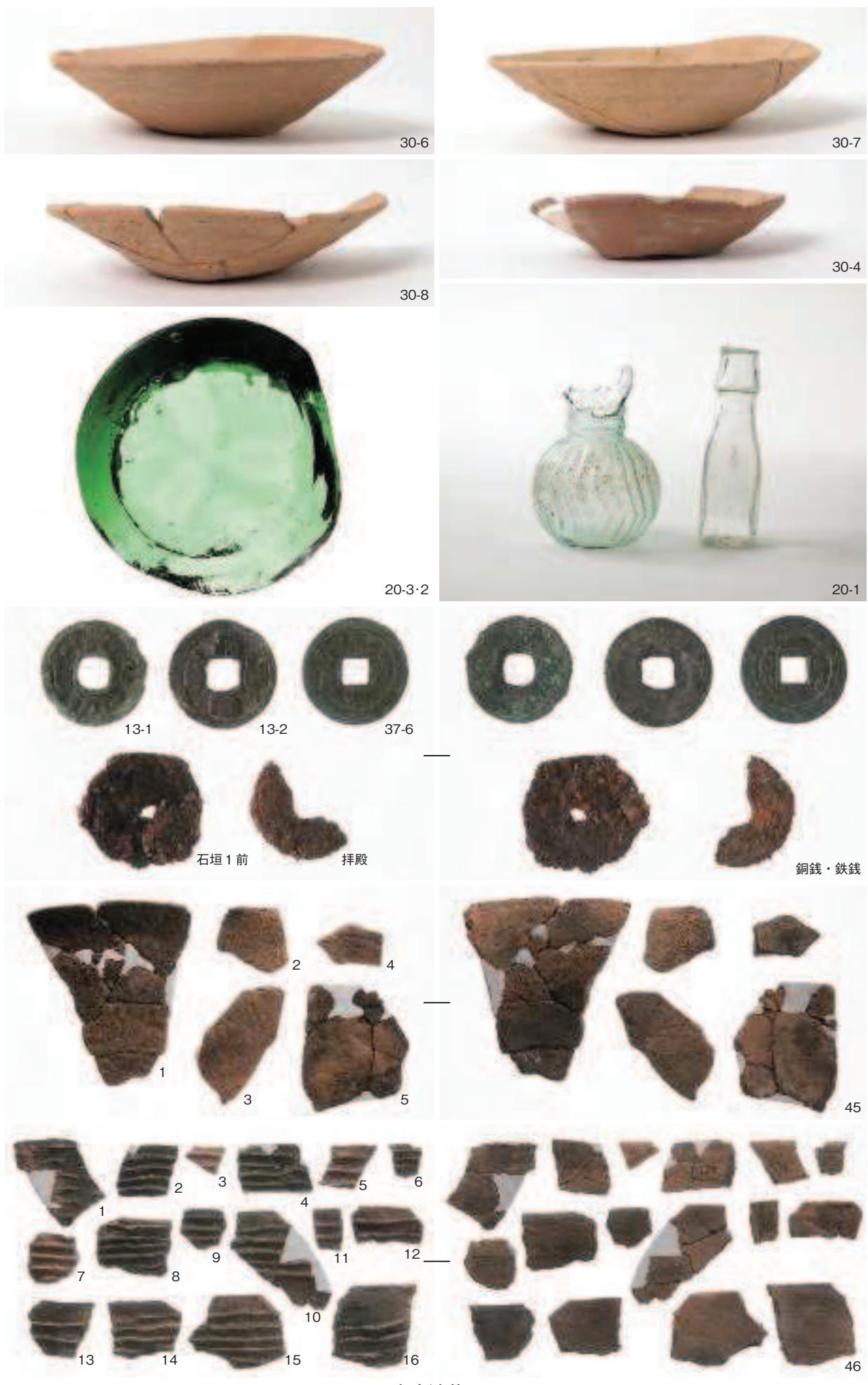
1 アカホヤ火山灰層(南東から)



2 石垣1東側の南北土層
(北東から)



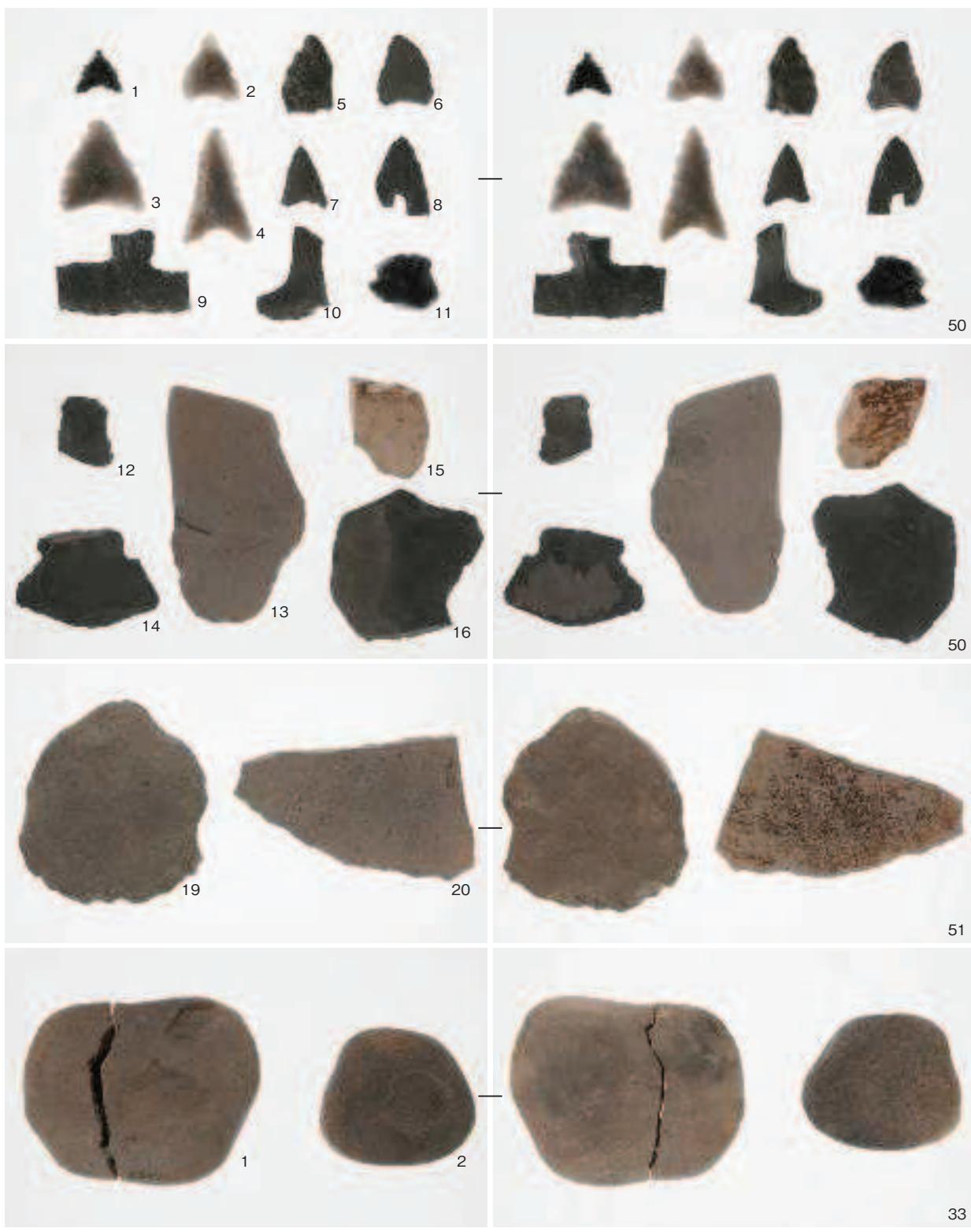
3 石斧出土状態
(左：南東から、右：東から)



出土遺物 1



出土遺物2



出土遺物3



1 全景（上空から）



2 全景（西上空から）



1 西辺石垣オルソ画像（西から）



1 1 トレンチ中央付近
(南東から)



2 1 トレンチ西端 (南東から)



3 1 トレンチ西端南壁
(北西から)



1 2 トレンチ西端付近(北から)



2 3 トレンチ西半(北西から)



3 4 トレンチ東端付近
(北西から)



1 4 トレンチ西半（北東から）



2 4 トレンチ西端付近
(北東から)



3 5 トレンチ東端付近
(北西から)



1 5トレンチ東端（北西から）



2 5トレンチ中央付近
(北西から)



3 5トレンチ中央付近
(南西から)



1 6 トレンチ（北東から）



2 石組土坑検出状況 1（南から）



3 石組土坑検出状況 2（西から）





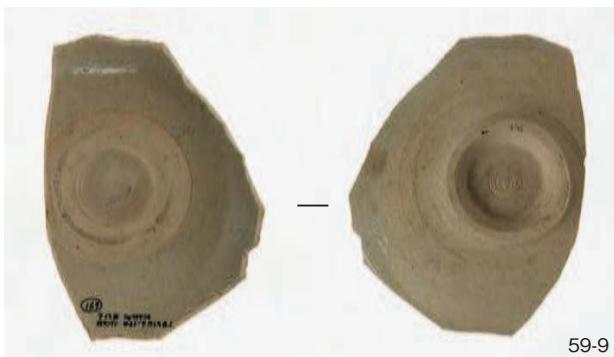
1 P 1 (南西から)



2 P 2 (西から)



3 埋甕検出状況 (北から)



図版38

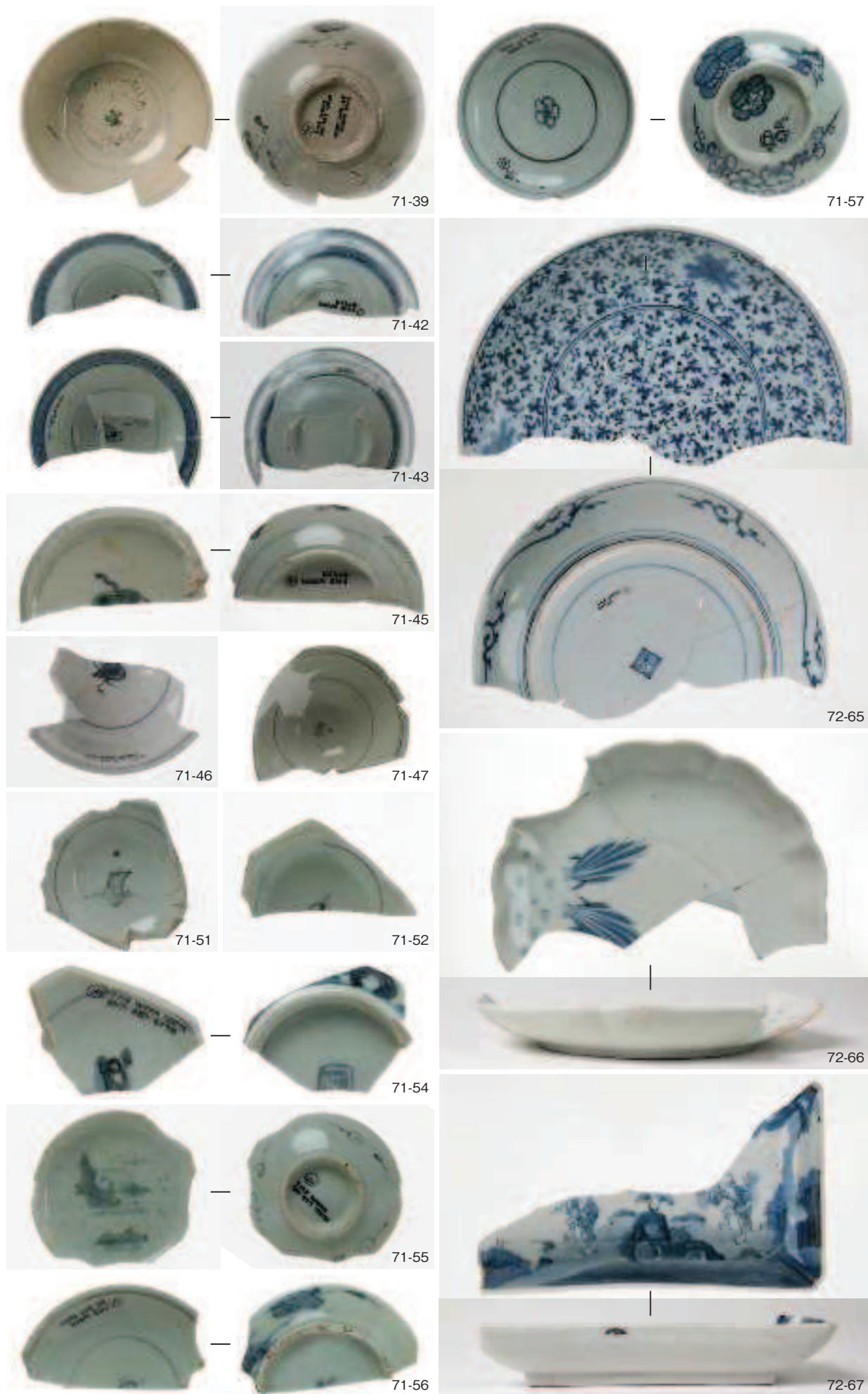
下伊良原庄屋敷跡



出土遺物2



出土遺物 3





出土遺物 5

図版42

下伊良原庄屋屋敷跡



出土遺物 6



1 遠景（南西上空から）



2 遠景（北西上空から）



3 遠景（西上空から）



1 全景（上空から）



2 全景（南西上空から）



3 石垣1（南から）



1 平成 26 年度の調査
(南東から)



2 1 トレンチ東端 (南西から)



3 1 トレンチ西半 (南から)



1 石垣3北端付近（奥は4トレンチ北壁、南西から）



2 3トレンチ東端（北西から）



3 石垣1張出南東端（西から）



1 石垣1張出検出状況
(南東から)



2 石垣2北端付近（南から）



3 石垣2（北から）



1 調査区南西隅付近(南西から、
畔は2トレンチ北畔)



2 石垣2北端(南から)



3 石垣2・3断割り状況
(北から)



1 石垣3 露出前（南から）



2 石垣3 露出前



3 2 トレンチ付近の礫群
(北西から)



1 石垣3屈曲部付近（北から）



2 石垣3北端（北西から）

3 石垣3南端断割り状況
(南西から)





1 石垣4（北から）



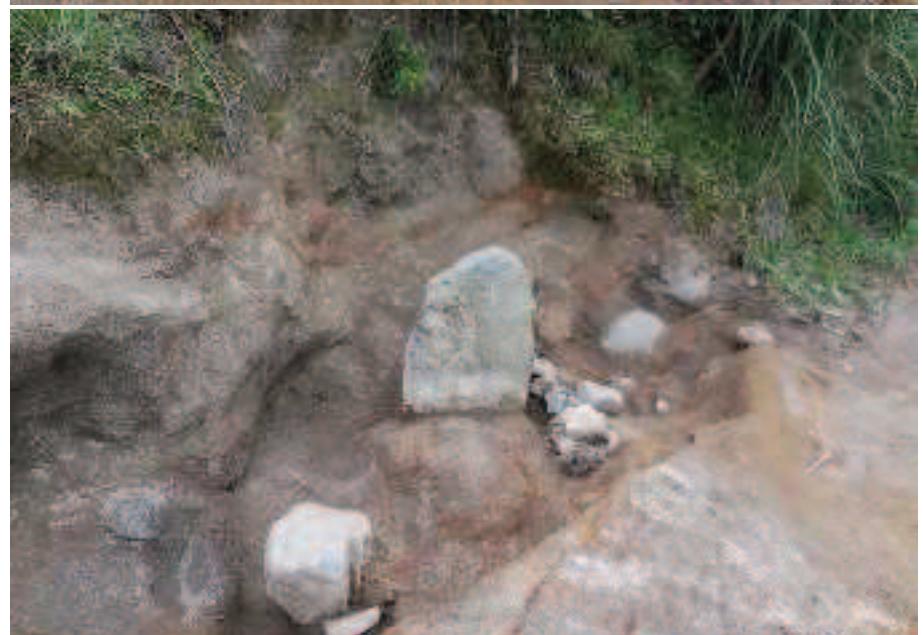
2 石垣4（南西から）



3 土坑2半截状況（南から）



1 立石（南西から）



2 立石（北西から）



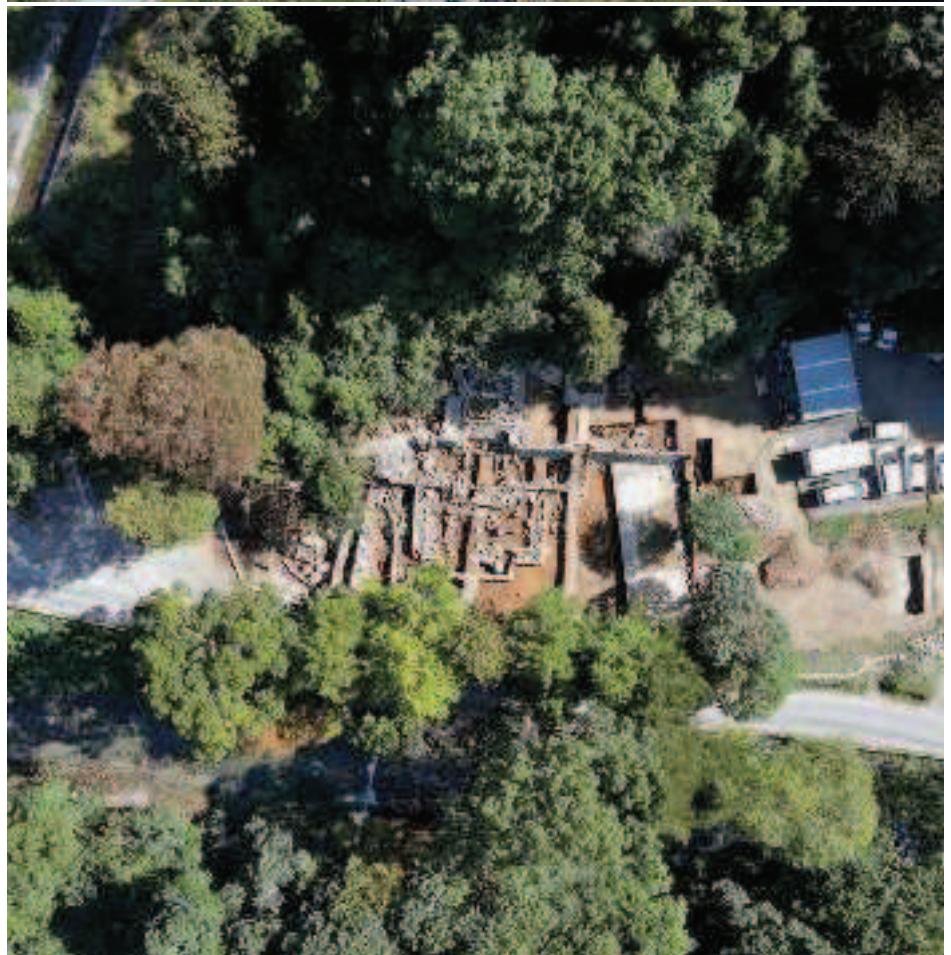
3 石垣3背面天目椀出土状況
(北から)



出土遺物



1 遠景（上空南から）



2 全景（西上空から）



1 全景（北西上空から）

2 本殿・合祀社跡調査前
(北から)3 本殿・合祀社跡清掃後
(北から)

1 拝殿跡調査前（北東から）



2 拝殿跡客土除去後（北東から）



3 拝殿跡調査後（北東から）





1 1 トレンチ東端付近
(北西から)



2 1 トレンチ石垣3・4間
(北から)



3 1 トレンチ石垣4西(北から)

1 1 トレンチ石垣 4 西
(北西から)



2 1 トレンチ西端 (北西から)

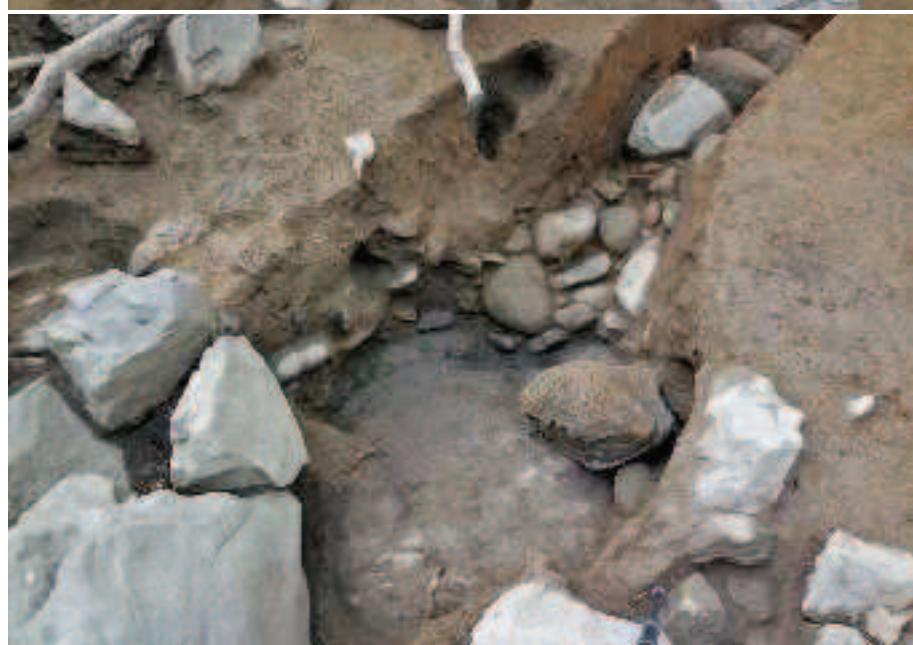


3 焼土・炭検出状況 (南西から)





1 焼土・炭除去後（南西から）



2 炭層の状況（北東から）



3 2トレンチ西壁（北東から）



1 石垣 1～4・9（西上空から）



2 石垣 1～4（西から）



3 石垣 5・6 東端付近（東から）



1 石垣5～7（東から）



2 石垣6北辺（北西から）



3 石垣6・7背面（南から）

1 石垣5・6間ビール瓶出土状況（北東から）



2 石垣6北西隅付近（北から）



3 石垣6西辺北側（北東から）





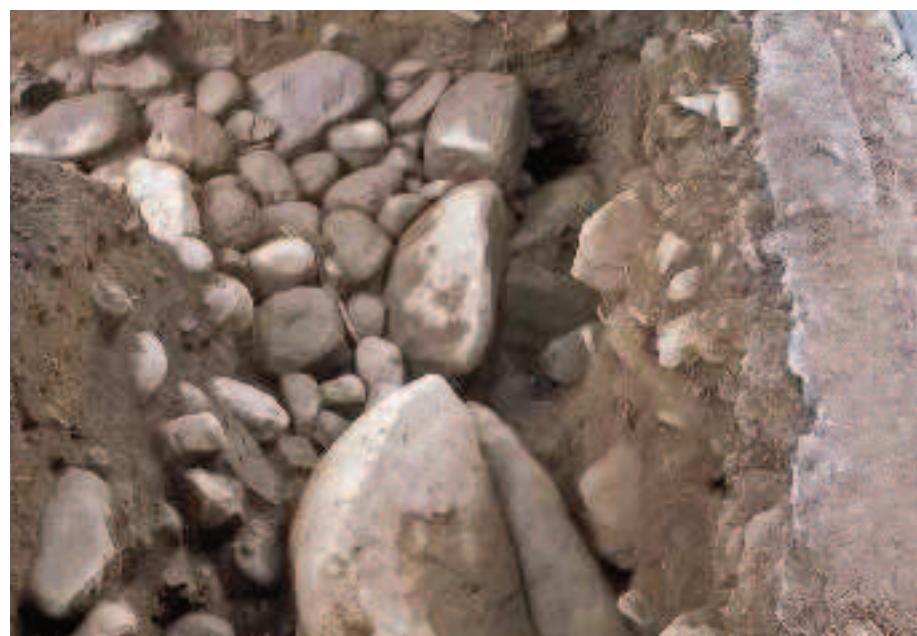
1 石垣6 西辺北側（北東から）



2 石垣6 西辺南側（北西から）



3 石垣6 西辺南端付近
(南西から)



1 石垣 6 西辺南端付近(北から)



2 石垣 6 南端付近背面土層
(北東から)



3 石垣 6 南西隅付近 (北から)



1 石垣6南辺西端付近
(南東から)



2 石垣6南辺西端付近(南から)



3 石垣7(北西から)



1 石垣7前面堆積層（西から）



2 石垣7前面遺物出土状況
(北西から)



3 石垣8（西から）



1 石垣8（東から）



2 石垣9（南東から）



3 石垣10南側土層（南西から）





1 石組基礎（南東から）



2 石組全景（北東から）



3 末社跡トレンチ土層
(南東から)

1 北区西半・石垣 11 上層
(南から)



2 北区道路跡・石垣 11 下層
(南から)



3 北区東半 (南西から)

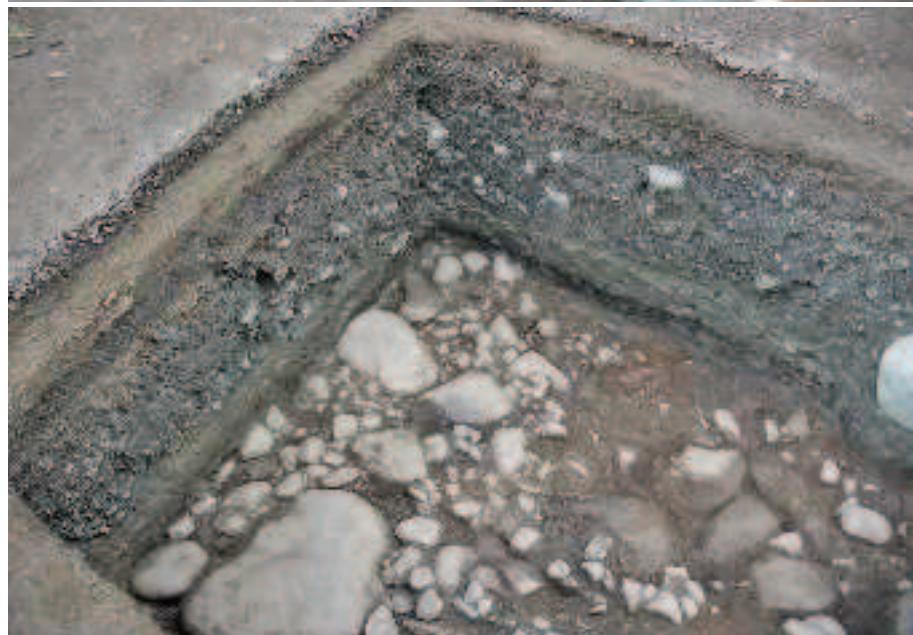




1 北区中央付近（北から）



2 北区土器出土状況（南西から）

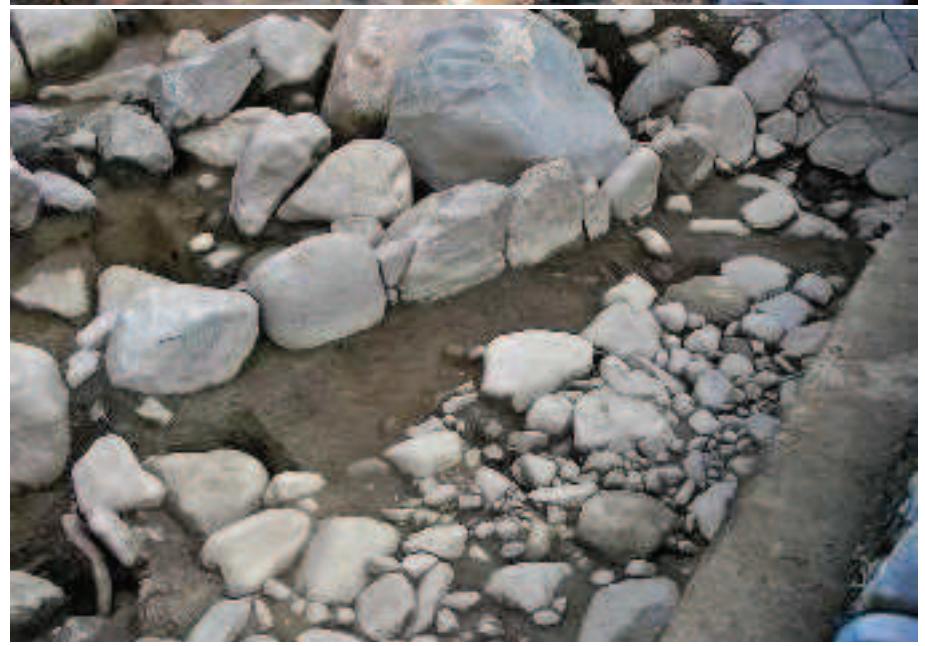


3 道路上の堆積層（南西から）

1 北区道路跡・石垣 11 上層
(北から)



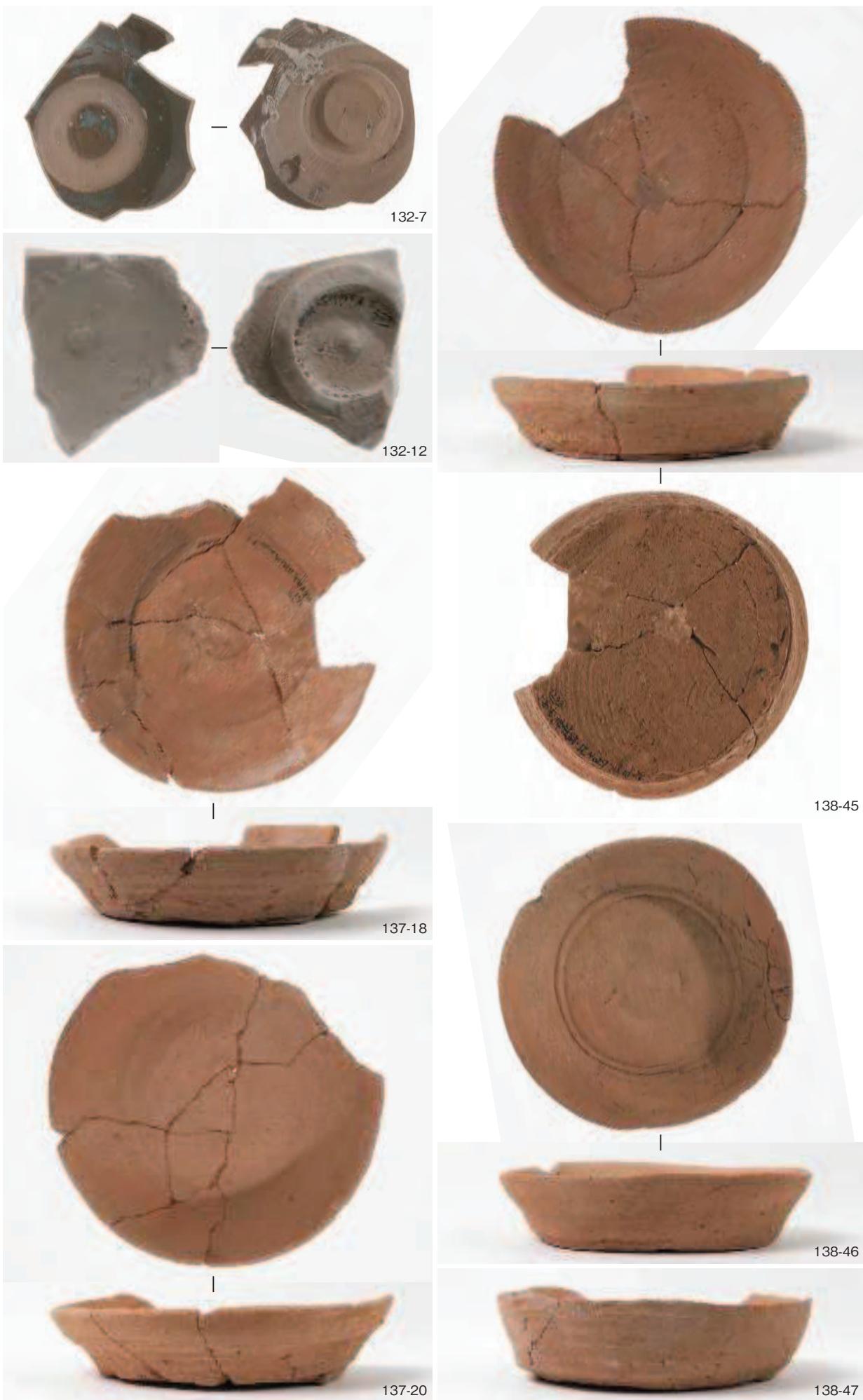
2 北区道路跡・石垣 11 下層
(北西から)



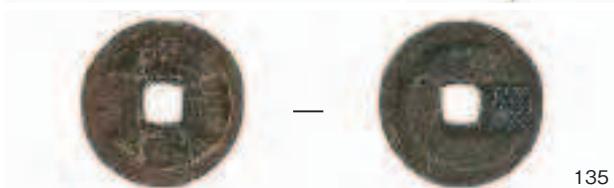
3 解体前の北参道 (北西から)







出土遺物2



出土遺物3



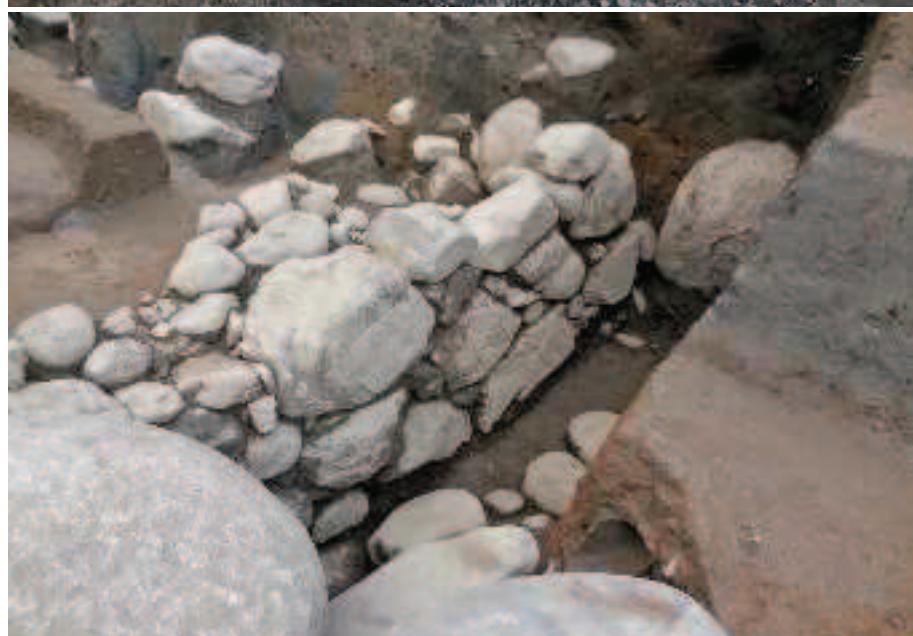
出土遺物 4



1 調査後全景（北東から）



2 調査後全景（南西から）



3 石垣（東から）



1 石垣と巨岩（南東から）



2 1トレンチ北壁土層
(南西から)



3 2トレンチ北壁土層
(南西から)



1 下伊良原高木神社本殿
(北東から)



2 上伊良原高木神社本殿
(南から)



3 上伊良原高木神社おとなし渕
の梵字岩 (北東から)

報告書抄録

ふりがな	いはらご
書名	伊良原V
副書名	
卷次	
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第256集
編著者名	飛野博文(編) 杉原敏之 木村達美
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3 ☎0942-75-9575
発行年月日	西暦2017年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもいはらたかぎじんじゃあと 下伊良原高木神社跡	ふくおかんみやこぐんみやこまち 福岡県京都郡みやこ町 さいがわしもいはら 犀川下伊良原1594ほか	40214	910137	33度 34分 41秒	130度 56分 54秒	2013.6.18 ～ 2014.3.19	3,000m ²	県営伊良 原ダム建 設事業
しもいはらしょうややしきあと 下伊良原庄屋敷跡	ふくおかんみやこぐんみやこまち 福岡県京都郡みやこ町 さいがわしもいはら 犀川下伊良原515-1ほか		910129	33度 34分 41秒	130度 57分 4秒	2013.5.8 ～ 2013.8.2	3,000m ²	
しもいはらみやぞのいせき 下伊良原宮園遺跡	ふくおかんみやこぐんみやこまち 福岡県京都郡みやこ町 さいがわしもいはら 犀川下伊良原			33度 34分 32秒	130度 57分 6秒	2015.1.13 ～ 2015.7.7	500m ²	
かみいはらたかぎじんじゃあと 上伊良原高木神社跡	ふくおかんみやこぐんみやこまち 福岡県京都郡みやこ町 さいがわかみいはら 犀川上伊良原308-1		910078	33度 33分 40秒	130度 57分 9秒	2014.4.14 ～ 2014.11.26	3,000m ²	
かみいはらぜんじいせき 上伊良原善治遺跡	ふくおかんみやこぐんみやこまち 福岡県京都郡みやこ町 さいがわかみいはら 犀川上伊良原2052-1			33度 33分 31秒	130度 57分 7秒	2014.10.8 ～ 2014.12.22	200m ²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下伊良原高木神社跡	社寺跡	中世～近現代	石垣・石列、土坑等	縄文土器・石製品・土器・陶磁器	彦山神領に置かれた大行事社48社の一つ。
下伊良原庄屋敷跡	集落跡 (近世庄屋居館跡)	近世～近代	石垣・石組土坑等	土器・陶磁器	江戸時代大庄屋(庄屋)の居館跡
下伊良原宮園遺跡	集落跡	中世～近現代	石垣・石列等	土器・陶磁器	伝下伊良原高木神社旧社地
上伊良原高木神社跡	社寺跡	古代～近現代	石垣・石列等	縄文土器・石製品・土器・陶磁器	彦山神領に置かれた大行事社48社の一つ。
上伊良原善治遺跡	生産遺跡	現代	石垣・水田	なし	大水害の後に復旧した水田跡

遺跡の概要

下伊良原高木神社跡 弘仁10年(820)開創、貞応元年(1222)に「宮園」から遷座したと伝わる。13世紀に比定できる土師器鍋片が一定程度出土し、伝承の一端を証拠付けるが、祭祀行為と思われる痕跡は15世紀代に初めて現れる。遺構として複数の石垣が築かれるが、各々の時期比定は困難である。ただ、最新の石垣3は石垣2を抜いて造られていて、石垣2抜き取り穴から三つ矢サイダー瓶が出土、記録と照合して大正11年の拝殿建て替えに伴うものと思われる。

下伊良原庄屋敷跡 江戸時代には手永(大庄屋)や庄屋を勤めた屋敷跡である。最も古い構造物は17世紀代のものと思われ、埋められた石垣や柱穴を検出したが、建物跡は不明。その後、18世紀後半に長さ80m以上、高さ4mほどの大規模な石垣が築かれ、この度の移転によって解体された住宅が建立された。この住宅は「江戸期の上層民家」の遺構として貴重なものと評価されている。

下伊良原宮園遺跡 下伊良原高木神社の旧社地という伝承があったが、古い時期の遺構・遺物はない。中世後期に遡ると思われる石垣が確認され、それ以外では若干の柱穴が中世に遡ると思われるが、その他大部分の遺構・遺物は江戸期以降であろう。北端付近に土石流の痕跡を留める。

上伊良原高木神社跡 パワースポット的な位置にある。これも弘仁年間に創始されたと伝わるが、それに相応しい須恵器壺が立石の前の焼土塊・炭層などの近くから出土した。その後は遺物は少なく遺構も不明であるが、ここでも15世紀に大量の土師器が遺棄されていて、その頃から活発な行為が見て取れる。江戸期に石垣を拡張して境内地を広げたようで、現状の石垣は裏込めに「サクラビール」瓶が遺棄されていて、戦後間もない時期の構築物と確認された。

上伊良原善治遺跡 調査の結果、昭和55年の大水害で砂礫に埋もれた水田を客土で復旧したものであると判断された。

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2133051
登録年度 28	登録番号 3

